

筑後北部地区遺跡群 II

福岡県筑後市大字熊野・蔵敷所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第70集

2006

筑後市教育委員会

ちくごほくぶちくいせきぐん
筑後北部地区遺跡群 II

筑後市熊野・蔵数所在遺跡の埋蔵文化財調査

くまのはせまち
熊野榎町遺跡

くらかずしまのもと
蔵数島ノ本遺跡

くらかずほこて
蔵数保古手遺跡

くらかずさぶらうまる
蔵数三郎丸遺跡

くらかずながせまち
蔵数長敵町遺跡

2006

筑後市教育委員会

序

筑紫平野を彩る当市一帯では現在までに数多くの歴史的産物が生み出され、福岡県南部を代表する歴史的・文化的地域として発展しております。

今回報告する筑後北部地区遺跡群は平成16年度から継続して行われております「県営ほ場整備事業筑後北部地区」に伴う緊急の埋蔵文化財発掘調査の記録です。この大規模な農地の整備により、土の中に眠っていた先人たちの足跡が消滅する危機を回避するため、更には地域の歴史・文化財を記録に残し、後世に伝え残すために発掘調査を行いました。

調査された遺跡からは様々な時代の暮らしが復元され、当市一帯の歴史像を解明する資料が蓄積される事となりました。

本書を消滅する遺跡の名残りとして捉えるのではなく、未来を想像できる一つの学術的資料、若しくは地域を考えるための生涯学習の一資料として活用していかねばなりません。

調査に際しましては、各工事関係者、各関係機関には多大なるご協力とご支援をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

平成18年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例言

- 1.本書は平成17年度に行った県営ほ場整備事業（担い手育成型）筑後北部地区事業の実施に伴った埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第1章に記している。
- 3.本書に使用した図面の遺構図は小林勇作、上村英士、阿比留士朗が作成し、遺物の実測、浄書は横井理絵、佐々木寿代、仲文恵、丸山裕見子が行った。遺跡の全体図に關しての航空測量はアジア航測株式会社へ委託した。
- 4.本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は別記する各調査現場担当者が行った。
- 5.今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第11座標系(日本測地系2000)を基準としている。
- 6.本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市に「おぼろ蔵文化財」の取り扱いについて：2002に準拠している）。
SD-溝 SK-土塀 SP-ピット SX-不明遺構・流路・河川・溜まり状遺構
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
- 7.本書の執筆はⅢ.調査成果を各調査担当者が行い（目次に記している）、Ⅰ.Ⅱ.Ⅳと編集は上村が行った。

目次

Ⅰ.調査経過と組織	1
Ⅱ.位置と環境	2
Ⅲ.調査成果	5
熊野榎町遺跡（小林勇作）	5
蔵教島ノ本遺跡（阿比留士朗）	17
蔵教保古手遺跡第2次調査（A区）（上村英士）	23
蔵教保古手遺跡第2次調査（B区）（小林勇作）	39
蔵教保古手遺跡第2次調査（C区）（阿比留士朗）	51
蔵教三郎丸遺跡（小林勇作）	61
蔵教長畝町遺跡（A区）（小林勇作）	64
蔵教長畝町遺跡（B区）（阿比留士朗）	68
Ⅳ.考察	75

1. 調査経過と組織

筑後北部地区遺跡群は筑後市大字集野・歳敷に所在する。この地域は平成15年度より県営ほ場整備事業による大規模な農地の改良工事を行っている。

平成16年10月4日に原因者である福岡県筑後川水系農地開発事務所より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を平成16年10月25日から11月9日まで実施した。試掘調査の結果、計画地における各水路新設予定地の8ヶ所について、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。計画地における各水路新設予定地の8ヶ所については遺構が破壊を受けるため本調査を実施しなければならぬ旨を伝え、平成17年4月13日に「県営ほ場整備事業担い手育成型筑後北部地区に係る埋蔵文化財調査」として協定を締結し、埋蔵文化財発掘事務所が負担し、20%を国・県・市・地元で負担している。平成17年4月18日から平成17年10月31日まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成18年3月20日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1) 平成16年度 (事前審査等)

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
	社会教育課長	田中 健一
	文化スポーツ係長	成清 平和
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作 (事前審査)
		上村 英士
		阿比留土期
		立石 真二

1) 平成17年度 (調査、報告書作成)

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
	社会教育課長	田中 健一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作 (調査担当)
		上村 英士 (調査担当)
		阿比留土期 (調査担当)

3) 発掘調査参加者

石橋香代美	井上むつ子	今山美咲子	植田勝子	内野康隆	江崎未廣	江崎トシ子	加藤礼子
河添幸子	吉賀明美	下川義文	城崎マヌヨ	角里子	田島好江	田島ヤス子	辻名草
辻勝	富安美子	中村富男	中村三男	馬場千鶴子	馬場浩	原清隆	松尾喜代美
瀧川香代子	渡辺泰子	愛川一枝	三瀬美樹子	藤田雅代	近藤一昭	斉藤和代	

4) 整理作業参加者

整理補助員	仲 文恵	横井 理絵	佐々木 寿代
整理作業員	野口 明彦	山 裕見子	

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。
(順不同、敬称略)

本本雅康 (長崎外国語短期大学)、山村信榮 (太宰府市教育委員会)、小藤野亮 (筑紫野市教育委員会)、立石真二 (瀬高町教育委員会)

II. 位置と環境

・地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田圃地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

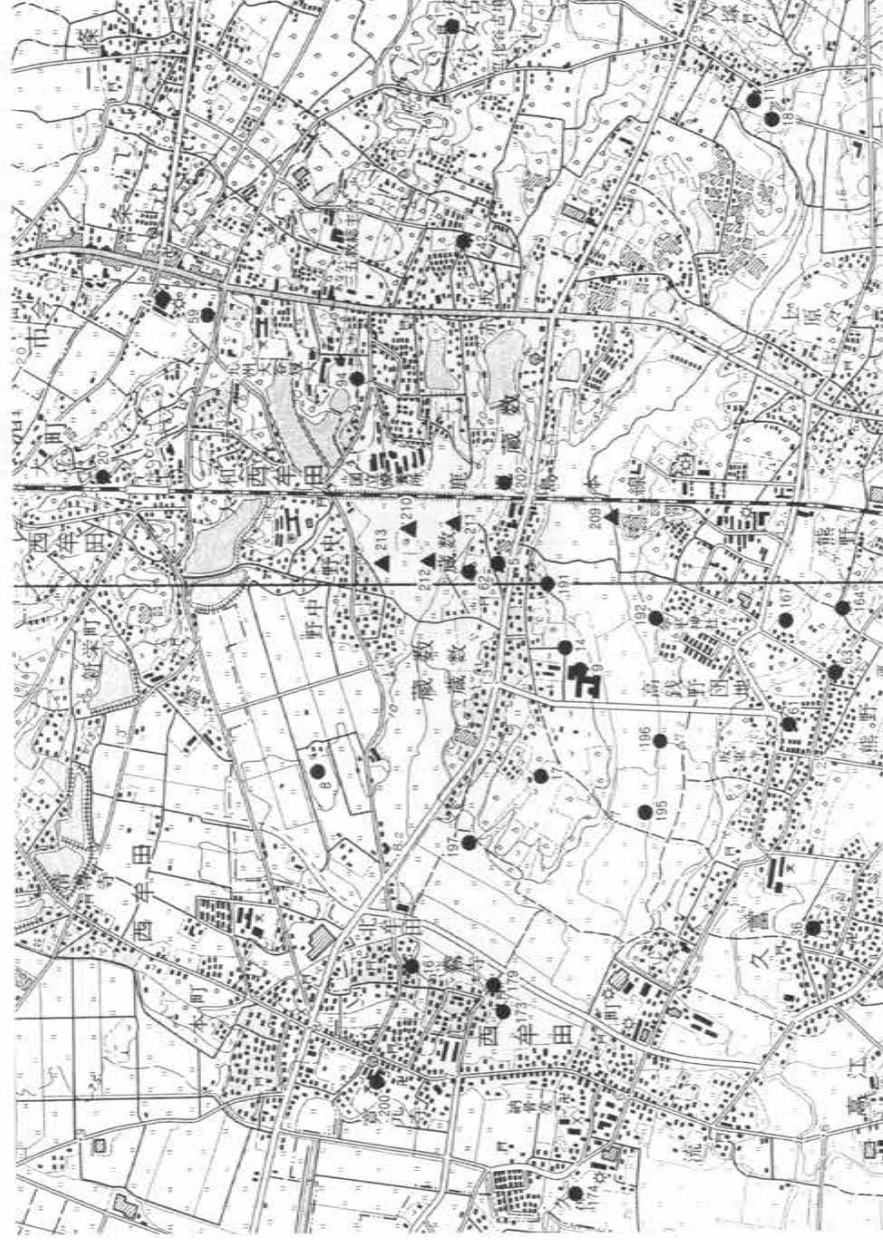


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/5000)

- 1. 石人山古墳
- 4. 瑞王寺古墳
- 5. 蔵敷東屋敷遺跡第1次
- 8. 田佛遺跡
- 9. 蔵敷森ノ木遺跡第1次
- 11. 穴塚古墳
- 14. 蔵敷森ノ木遺跡第2次
- 16. 西牟田鷲寺遺跡
- 17. 蔵敷坂口遺跡
- 18. 前津塚山遺跡
- 36. 久富島屋敷遺跡
- 42. 蔵敷赤坂遺跡
- 59. 西牟田清徳浦遺跡
- 61. 熊野屋敷遺跡

- 62. 蔵敷東ノ屋敷遺跡第2次
- 63. 熊野屋敷遺跡第2次
- 94. 蔵敷長原山遺跡
- 164. 熊野塚根遺跡
- 167. 熊野山ノ前遺跡
- 173. 西牟田小次郎丸遺跡
- 174. 西牟田上京手遺跡
- 179. 西牟田鷲寺東遺跡
- 191. 熊野水町遺跡
- 192. 熊野松ノ下遺跡
- 195. 熊野五反田遺跡
- 196. 熊野宮ノ後遺跡
- 197. 蔵敷島崎田遺跡
- 200. 西牟田寛元寺遺跡

- 202. 蔵敷保吉手遺跡第1次
- 207. 西牟田鏡魚遺跡
- 209. 熊野町町本遺跡
- 210. 蔵敷島ノ本遺跡
- 211. 蔵敷保吉手遺跡第2次
- 212. 蔵敷三郎丸遺跡
- 213. 蔵敷長崎町遺跡

※番号は当市の発掘調査番号

・蔵敷地区の歴史的環境

蔵敷地区には旧石器時代から現代まで様々な文化財が残されており、歴史的環境について時代を追って概観する。

蔵敷字坂口では後期旧石器時代と考えられる角錐状石器が出土している。伊万里市腰岳産の黒曜石を使用した横刺ぎの刺片を素材とする断面三角形の未製品である。市内ではこの石器の他に大字鶴田地区で4点の旧石器遺物が出土しているが、明確な旧石器時代包層からの出土ではない。しかしながら、遺物の存在は市内の旧石器時代を物語る資料として貴重である。

縄文時代になると熊野・蔵敷地区の遺跡からは遺構・遺物の報告例が殆どない。市南部の大字常用地区や大字志地区などでは早期の集落遺構や遺物を纏まって出土する例が認められるが、蔵敷地区では蔵敷森ノ木遺跡で落とし穴状遺構が3基検出されているに過ぎず、続く弥生時代に縄文式集落が形成される様相とは対照的である。

弥生時代になると、熊野・蔵敷地区一帯の八女丘陵裾部に大集落が形成される。現在までに明確な前期の遺構は確認されていないが、中期以降になると倉目川北側の丘陵部に展開する蔵敷森ノ木遺跡で多くの竪穴住居・掘立柱建物が形成され、これらの住居群は古墳時代まで連続と生活痕跡を残している様子が確認されている。遺物も豊富であり、数多くの土器・石器類が出土している筑後地方を代表する遺跡である。また、蔵敷東野屋敷遺跡では中期の埴輪墓、土塚墓が計8基検出されている。当該期の墓域の変遷や集落との関わりを窺う資料である。

古墳時代にかけても蔵敷地区一帯（倉目川北側丘陵上）では集落が営まれる。先述した蔵敷森ノ木遺跡からは子持勾玉を出土しており、大集落の発展過程が看取できる。当地区から北西約1kmに田柳遺跡もあり、弥生時代から古墳時代にかけての集落が検出されている。

熊野・蔵敷地区と大字西牟田地区の字境である大字西牟田字松尾に5世紀中頃と考えられる瑞王寺古墳が遺構さ。扒取丘陵に延々と築かれる八女古墳群の中で東の石人山古墳と西の久留米市三瀬町十連寺古墳の間は位置しており、現在は消滅して面影もないう。竪穴系横口式石室をもつ直径約26mの円墳である。主な遺物は珠文鏡、臂・鏡などの鉄製馬具、形象埴輪、須恵器、有孔円板、白玉などがある。

当市では古代西海道が南北に縦断することが解っており、大字前津・山ノ井・鶴田地区などでは道路遺構が検出されている。蔵敷地区では国道209号とほぼ同じラインで推定されているが、現在までに道路遺構は検出されおらず、奈良時代から平安時代にかけての集落についても検出されていない。西海道を幹線とするならば、蔵敷地区は三瀬郡と下妻郡の界境に近い下妻郡に存在する。

中世になると蔵敷地区は上妻郡広川荘として坂東寺熊野神社による支配となる。鎌倉初期の広川荘名別当領では143町と広川荘最大の面積を誇っていたようである。また、永和4年（1378年）に源朝臣光顕が京都の大徳寺塔頭瑞雲庵の東林西堂和尚に広川荘・倉地伍段・屋敷在茶園百坪一人を永代寄進しており、権中納言佐五官した人物が蔵敷地区に田島茶園を有していたとされている。発掘調査では坂東寺北側の熊野宮ノ後遺跡、熊野五反田遺跡から当該期の貿易陶磁器や生活雑器を中心に多数出土しており、坂東寺熊野神社の栄枯を偲ぶ遺跡である。室町時代には広川荘と水田荘との境界争いなどを起こし、戦国期での荘の崩壊へと続いていく。

近世になると、田中吉政が筑後国の領主となり、先に述べた坂東寺の再興や土木工事を行い、農地開発に尽力したとされる。田中家断絶後、当市は久留米藩城として有馬氏による統治となる。有馬氏により赤坂城や坂東寺焼が起った。また、当地区では漕艘用溜池の造成が盛んに行われ、田地開発に關しても17世紀には整備されていたと考えられている。近世の当市での発掘調査事例は多く、その中でも水利関係（溜や水路など）の遺構検出が多く、現在の蔵敷地区の姿はこの前期の農地開発や集落形成による名残が数多く残る地域である。

【参考文献】

『筑後市史』 筑後市史編纂委員会・編 1995

『瑞王寺古墳』 筑後市文化財調査報告書第3集 1984

『蔵敷遺跡群』 筑後市史財調査報告書第6集 1990

『田柳遺跡』 筑後市文化財調査報告書第5集 1988

『筑後北部地区遺跡群1』 筑後市文化財調査報告書第61集 2005

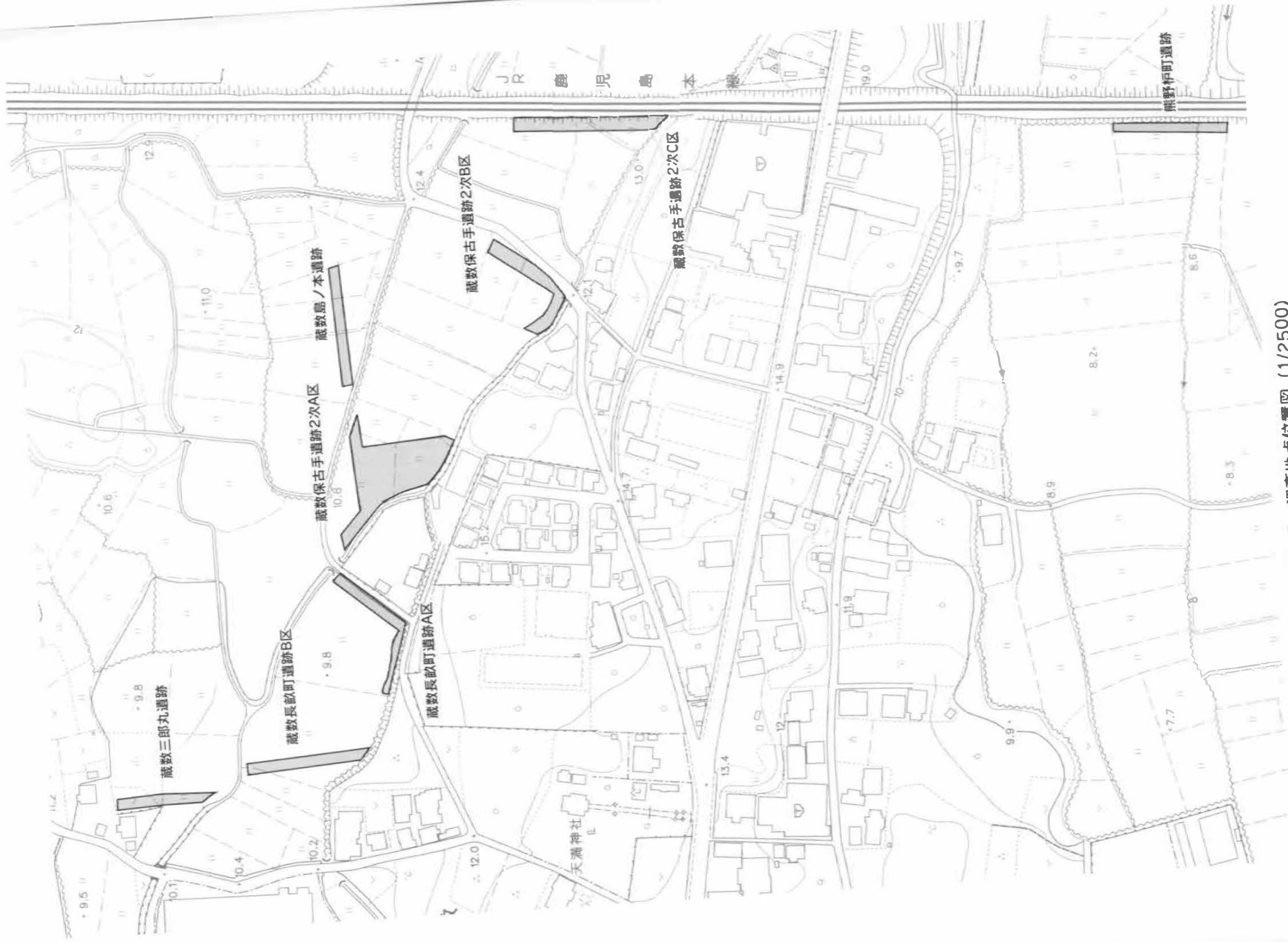


Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

1. 熊野村町遺跡第1次調査

(1) はじめに

当遺跡は八女丘陵南麓部にあたる標高8～9m位の低地(谷地)とした筑後市大字熊野字村町330-1、408-1(以下「村」)に在する。筑後北部地区県営ほ場整備事業(担い手育成型)筑後北部地区の平成17年度工事に係る発掘調査(以下「調査」)で、新設される水路によって破壊を受ける約308mを調査対象範囲として発掘調査を実施した。調査区はJR鹿兒島本線(西側)に沿って南北に細長く、途中、東西方向に走る水路によって南北に分離される。このうち、便宜上南部をA区、北部をB区と称した。

発掘調査は小林勇作が担当し、平成17年4月18日から同年6月1日の約2ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を現場で行い、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で随時行った。なお、直機による表土剥ぎは(有)船島重機へ、航空測量業務はアジア航測(株)へ委託した。調査の結果、溝等の遺構が確認され、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

A区 溝

1SD04 (Fig.3)

A区の北部で検出した南北方向の溝である。北部は現代の東西水路によって破壊されており、南方へ2.45m分を検出したところで終息する。幅0.60～0.90m、深さ0.13mを測り、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。堆積土がうは土師器(片)を僅かに認めた。B区南端で検出された1SD07に接続する可能性が考えられる。

土坑

1SK05 (Fig.3)

A区北部1SD04の西側で検出した。平面プランは概円形状を呈し、遺構西側は現代の擾乱を受ける。長軸1.03m、短軸0.83m、深さ0.27mを測り、埋土は黒色土を基調とする。土師器(片)が僅かに出土した。

溜まり状遺構

1SX01 (Fig.3)

A区南部に位置した遺構であり、調査区外へ展開するまでに全体プランは確認できていない。遺構内部において東側は浅く、西側は深くなっており、東側の深さは最大0.17m、西側の深さは最大0.30mを測る。西側北岸部にテラスを認め、底部はやや凹凸面を残す。埋土は黒灰色砂や黒褐色砂質土等が混入した自然堆積を呈し、遺物は弥生土器(釜)、土師器(坏・甕・片)、瓦器(塊)、白磁(皿)等が出土した。

1SX02 (Fig.3・Tab.2)

1SX01の北部に隣接した遺構であり、東部は調査区外へ展開する。遺構内部は南部から北部にかけて一段深くなっており、深さは0.15～0.36mを測る。黒灰色砂や黒褐色砂質土等が混入した自然に堆積する。出土遺物は皆無であった。

1SX03 (Fig.3)

1SX01の北部に隣接した遺構であり、幅2.05m、深さ0.19mを測る。黒灰色砂や褐色砂質土等が混入した埋土が自然に堆積し、1SX01と同様の埋土を呈することなどから同一遺構である可能性が考えられる。なお、出土遺物は皆無であった。

B区

溝

1SD07 (Fig.4・Tab.2)

B区南端で検出した東西方向の溝であり、1SX14を切る。途中は南方へ分岐し、A区で検出された1SD04へと接続するものと思われる。東西溝は幅1.80m、深さ0.28m、南北溝は幅0.63m、深さ0.05mを測る。埋土は南方からの流入土が見られ、僅かながら砂層が発達しており、流水があったものと思われる。遺物は弥生土器（片）、土師器（片）が僅かに出土した。

1SD09 (Fig.4・Tab.3)

B区南部で検出した東西方向の溝である。溝の北岸にテラスを認め、断面形は逆台形状を呈する。幅1.55~3.08m、深さ0.44mを測る。埋土は砂層が厚く堆積し、かなりの流水があったものと思われる。出土遺物はない。

1SD10 (Fig.4・Tab.3)

B区南部に位置し、1SD09の北部で検出した。東西方向の溝で幅1.05~1.30mを測る。溝底部はピット状の窪みが著しく、深さは最大で0.28mを測る。埋土は砂層が厚く堆積しており、埋土中から土師器（高杯）が出土している。

1SD11 (Fig.4・Tab.4)

B区中央部で検出した。平面状では多岐に分離しており、南部に位置する1SD10との切り合いは不明である。遺構内の状況から概ね東西方向に走るものと思われるが、底部はピット状或いは土坑状の凹凸、窪みが特に目立った状態で確認された。土層観察では複雑に砂層が混入し、発達していることからかなりの流水に伴って埋没したものと考えられる。埋土中からは土師器（片・小皿・杯）が認められた。

1SD12 (Fig.5・Tab.5)

B区北部で検出した遺構であり、南部の1SD13及び北部の1SD15を切る。遺構内は東側を中心に挿鉢状を呈し、埋土の上半部は黒茶色粘土、下半部は砂層が厚く堆積した状態であった。当溝と重複するかのよう現代の水路が東西方向に設置されており、調査中はここから流れ込んでくる流水に悩まされた。流水を遮断するためのコンクリート製堤防が部分的に設置されており、現在もなお激しい流水があることを物語っている。この状況より以前からも水が集中する場所であったことが考えられ、この東方からの流水によって当遺構内西部は大きく抉られた状態になったと推測される。出土遺物は須恵器（鉢・片）、青磁（碗）が認められた。

1SD13 (Fig.5・Tab.5・6)

B区北部で検出した東西溝であり、先述した1SD12に切られる。溝の断面形は概ねU字状を呈するものと思われ、南岸にはテラスを認める。幅1.50m以上、検出面からの深さ0.54mを測り、埋土は南方から灰色砂及び黒色粘土が流れ込みが強い。遺物は僅かながら第10層より土師器（甕）を1点出土した。

1SD15 (Fig.6・Tab.7)

B区北端部で検出した遺構であり、南部の1SD13に切られる。遺構内は先述した1SD13と同様な挿鉢状を呈する。埋土の上半部は黒茶色粘土、下半部は砂層が厚く堆積した状態であり、東方からの流水によって当遺構内西部が大きく抉られたものと推測される。出土遺物は土師器（小皿）、黒曜石（剥片）が僅かに認められた。

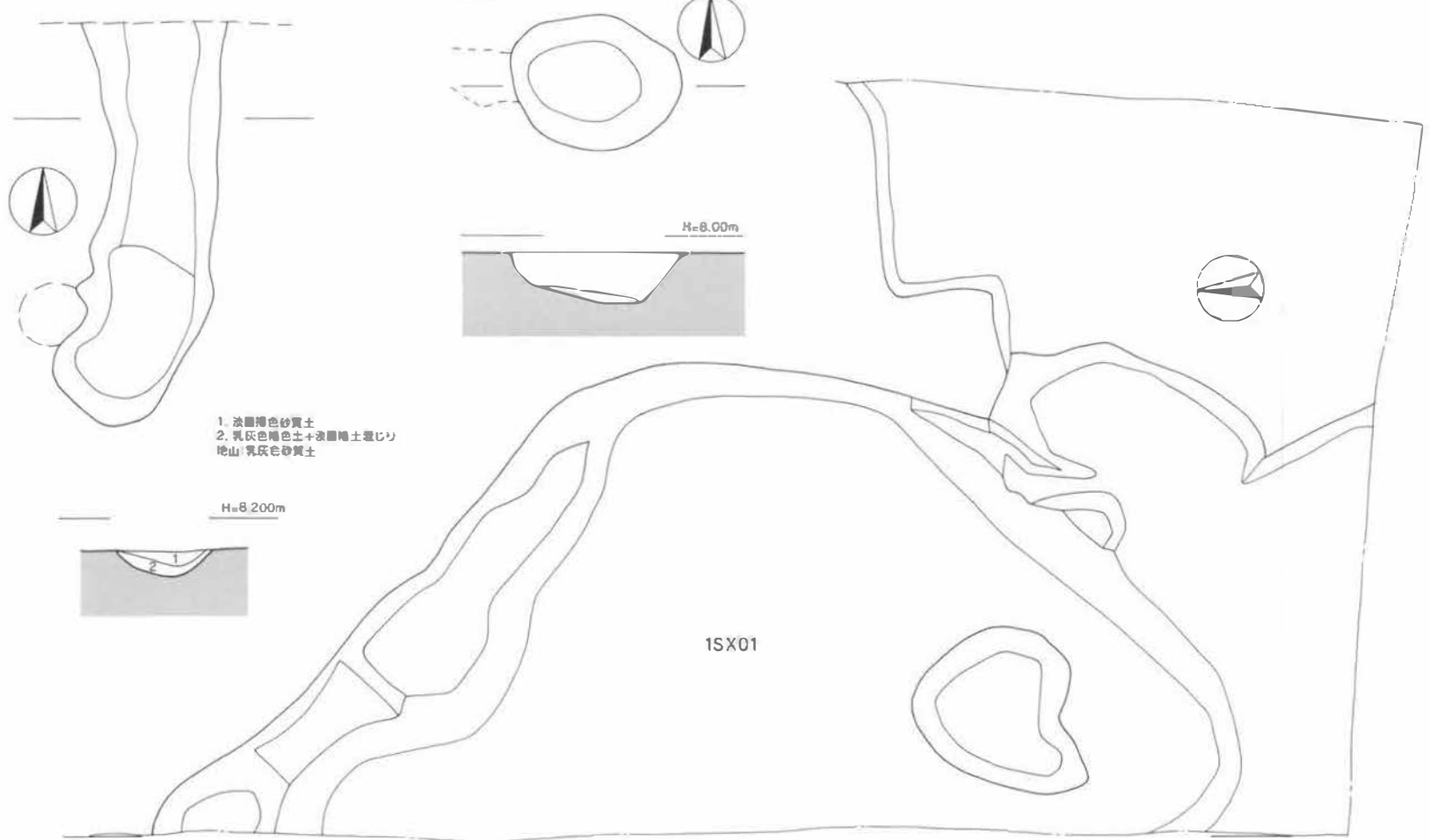
溜まり状遺構

1SX14 (Fig.6・Tab.6)

B区南端部に位置し、上半は1SD07に切られる。平面プランは半円状を呈し、遺構西部は調査区外へ展開する。幅3.10m、1SD07底部からの深さは0.35mを測る。埋土は黒灰色粘土が厚く堆積し、遺物は皆無であった。

1SD04

1SK05



- 1. 淡褐色砂質土
- 2. 乳灰色褐色土+淡褐色土遺し
- 地山: 乳灰色砂質土

H=8.200m

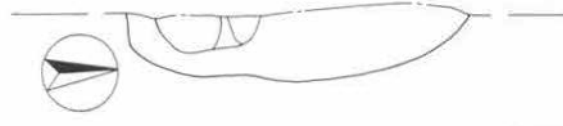
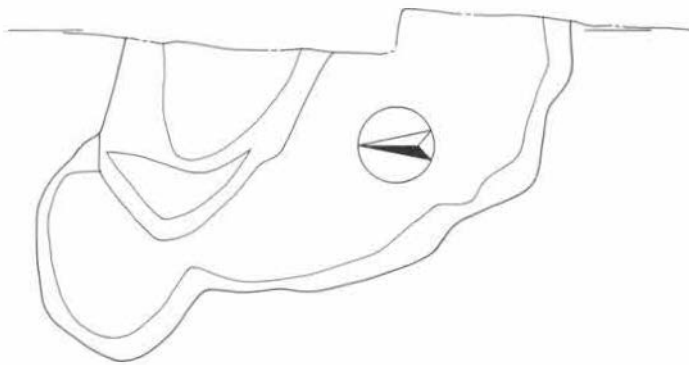


H=8.100m



1SX02

1SX03



H=8.100m



南面土層

- 1. 明瞭灰色砂(5~10m/m位の小石を多く含む)
- 2. 淡黒褐色砂質土
- 3. 暗褐色粘質土
- (やや粘性あり、茶色粒子を多く含む)
- 地山: 乳灰色砂質土

H=8.200m

北面土層

- 1. 明瞭灰色砂(5~10m/m位の小石を多く含む)
- 2. 暗褐色粘質土(砂粒を多く含む)
- 3. 暗褐色粘質土(灰層ブロック多量)
- 地山A: 乳灰色粘質土
- B: 茶褐色砂質土

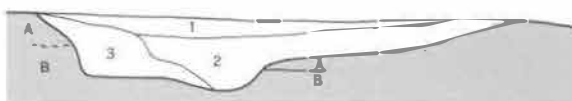
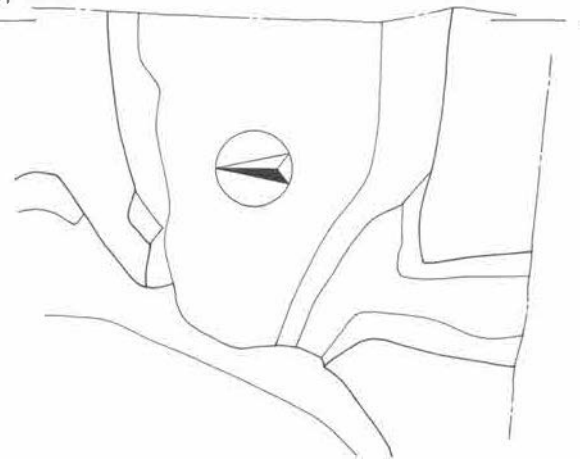


Fig.3 A区 溝(1SD04)・土坑(1SK05)・溜まり状遺構(1SX01~03)実測図(1/40)

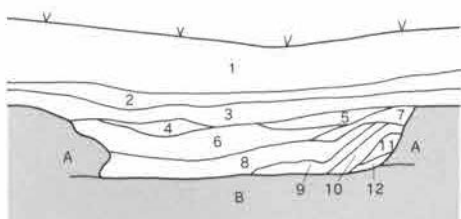
1SD07



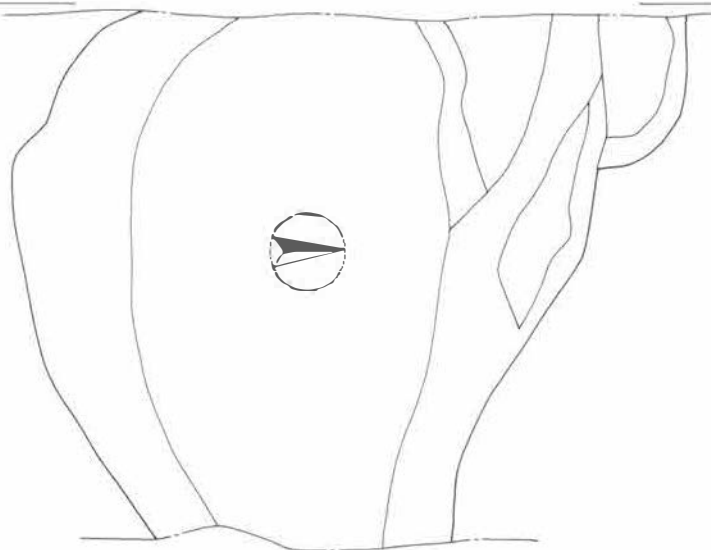
H=8700m

東壁面土層

- 1. 灰色土(表土)
- 2. 黄灰補土(床土)
- 3. 灰黄色土(包含層)
- 4. 暗灰色砂質土
- 5. 4と同じ
- 6. 淡黄茶色砂質土
- 7. 灰白色砂
- 8. 暗黒灰色粘土
- 9. 7と同じ
- 10. 暗黒灰色粘土(白磁ブロック少量)
- 11. 白色粘土
- 12. 7と同じ
- 地山A 灰白色砂質土
- B. 灰色砂料



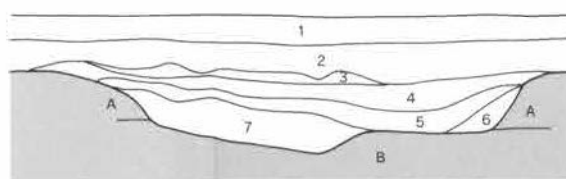
1SD09



H=8500m

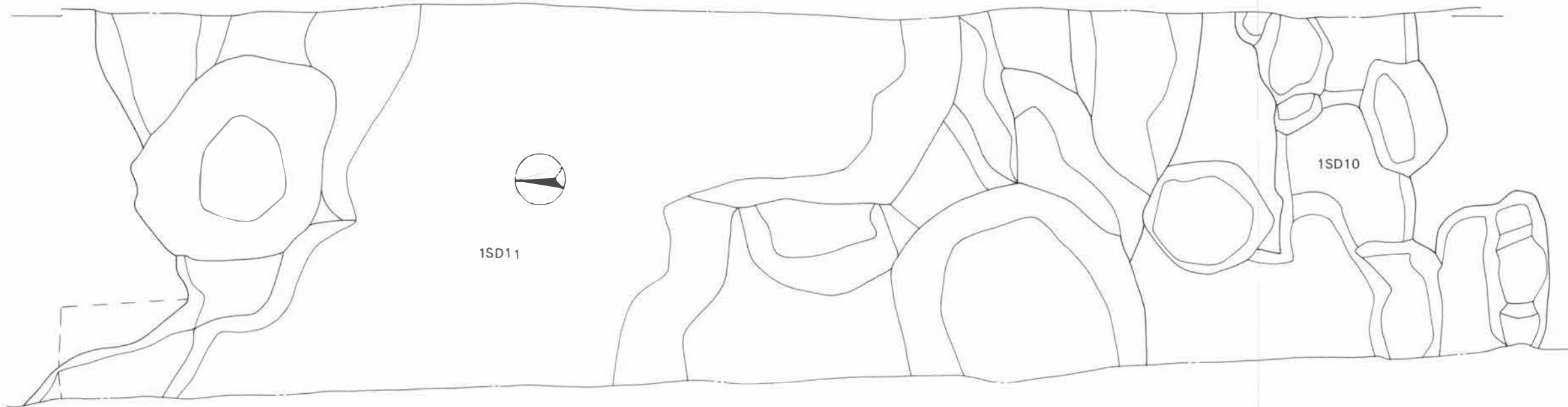
西壁面土層

- 1. 灰黄色土(包含層)
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 灰色砂+淡黄茶色砂質土
- 4. 淡黄茶色砂質土
- 5. 暗黒茶色粘土
- 6. 淡灰色砂
- 7. 暗灰色砂料
- 地山A 灰白色砂質土
- B. 灰色砂料



東壁面土層

- 1. 灰色土(表土)
- 2. 黄灰補土(床土)
- 3. 灰黄色土(包含層)
- 4. 淡灰補砂質土(砂および砂料を多く含む)
- 5. 淡灰補砂質土
- 6. 5と同じ(灰色砂を多く含む)
- 7. 暗黒補砂質土
- 8. 暗黒補砂質土
- 9. 暗黒色粘土土(灰色砂を多く含む)
- 10. 灰色砂
- 11. 10と同じ
- 12. 7と同じ
- 13. 灰色粗砂
- 14. 4と同じ(※)
- 15. 10と同じ
- 16. 7と同じ
- 17. 13と同じ
- 18. 7と同じ
- 19. 暗黒補砂質土+灰白色砂少量
- 20. 13と同じ
- 21. 淡黄茶色砂質土
- 22. 黄茶色粗砂
- 23. 8と同じ
- 24. 淡灰補色砂(粗砂を少し含む)
- 25. 21と同じ
- 26. 21と10差じり
- 27. 13と同じ
- 28. 8と同じ
- 29. 暗黒灰色粘土
- 30. 8と同じ
- 31. 13と同じ
- 32. 13と同じ(1S-10埋土)
- 地山A 灰白色砂質土
- B. 灰色砂料



H=8600m

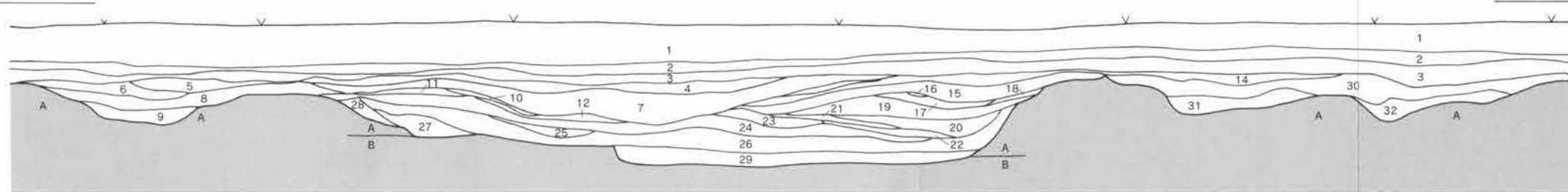


Fig.4 B区 溝 (1SD07・09~11) 実測図 (1/40)

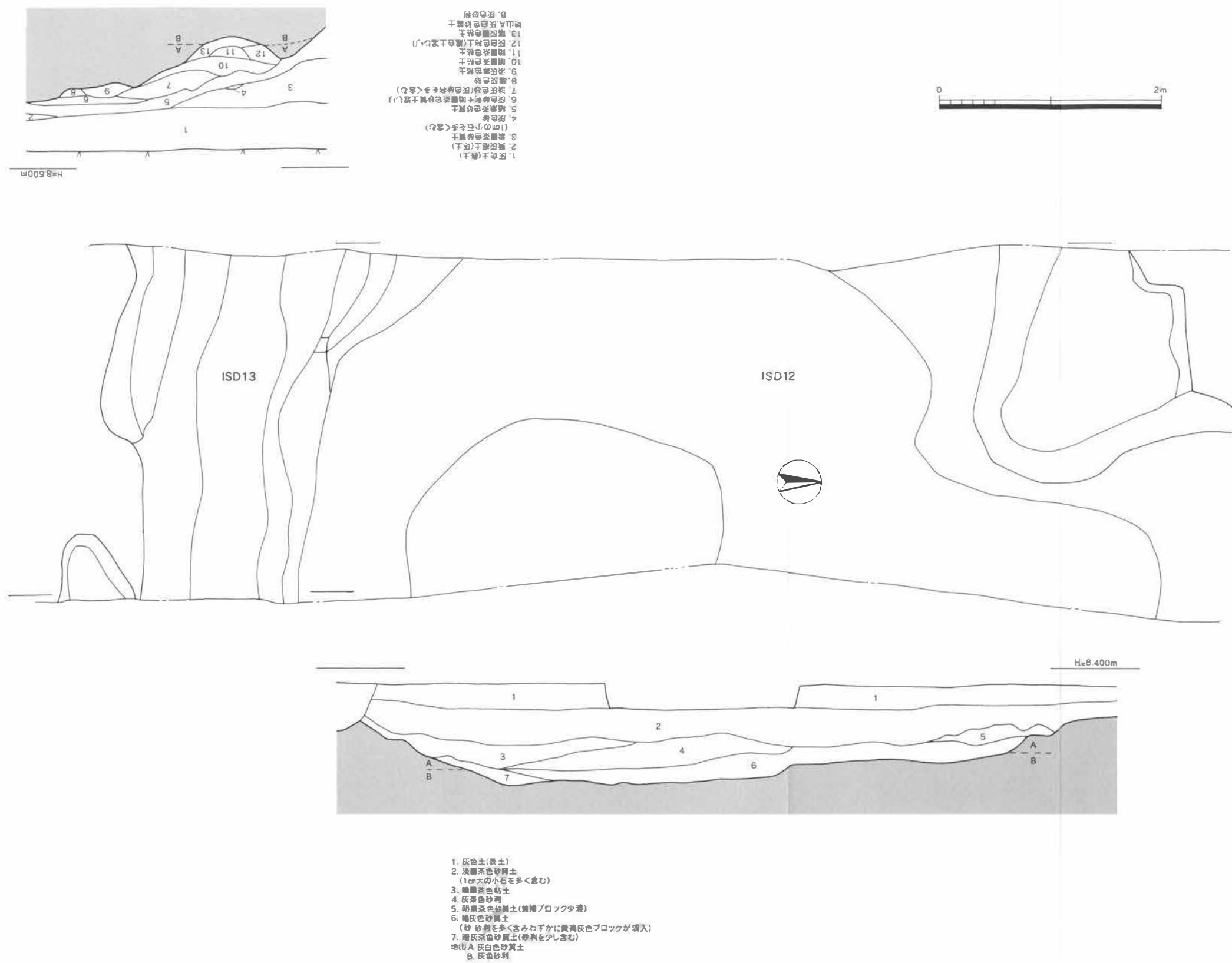
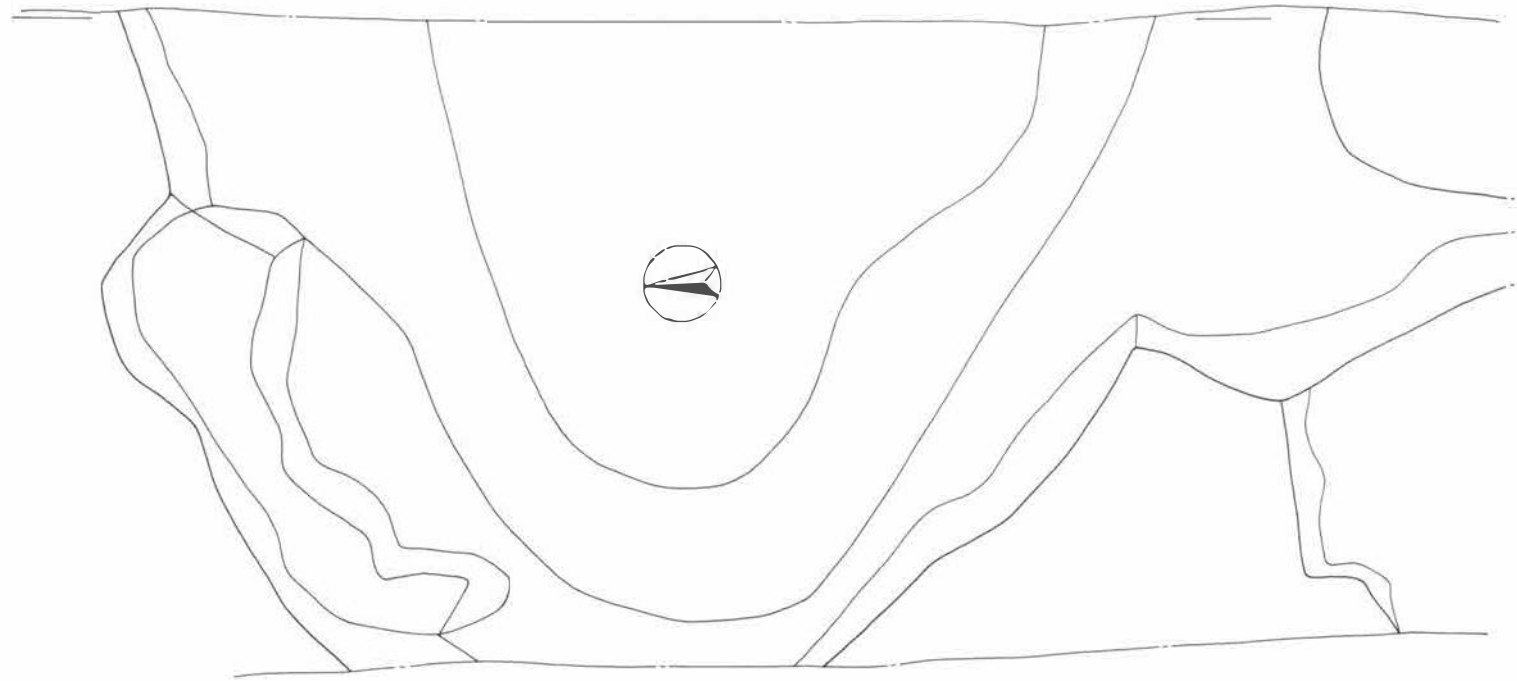
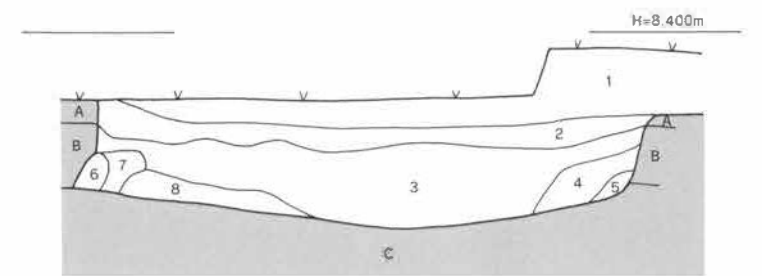
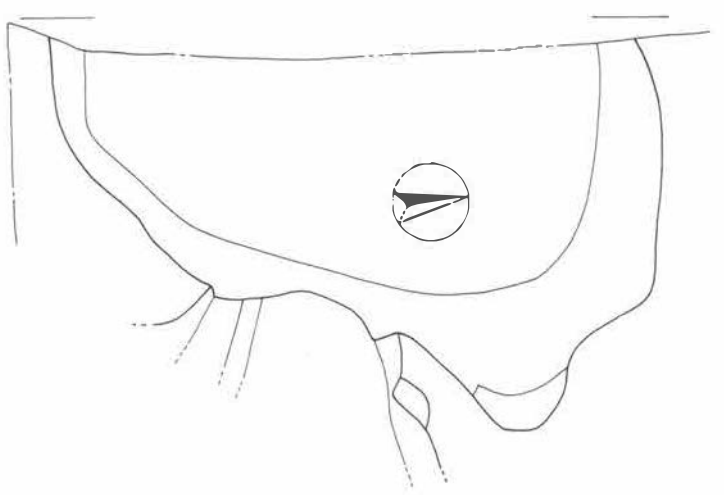


Fig.5 B区 溝 (1SD12・13) 実測図 (1/40)

1SD15

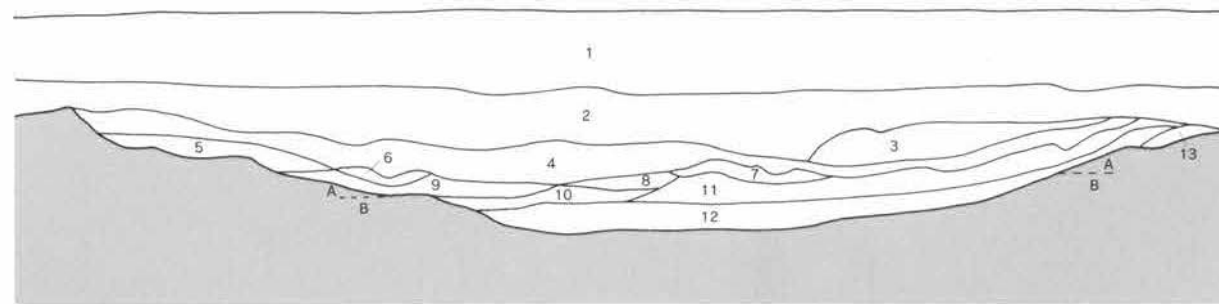


1SX14



- 1. 灰褐色土(包含層)
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 暗黒灰色粘土
- 4. 暗黒灰色粘土+灰色砂混じり
- 5. 黄白色粘土
- 6. 黄灰色砂利
- 7. 5と同じ
- 8. 灰色粗砂
- 地山A. 灰白色砂質土
- B. 灰色砂
- C. 灰色砂利

H=8.600m



- | | |
|------------------------------------|-----------------------|
| 1. 灰色土(表土) | 8. 赤灰茶色砂利 |
| 2. 淡黒茶色砂質土
(1m次の小石を多く含む) | 9. 暗黒灰色粘質土 |
| 3. 灰茶色砂
(灰色砂・赤茶色砂利・黒茶色砂質土を多く含む) | 10. 9と同じ(砂利を多く含む) |
| 4. 暗黒茶色粘土 | 11. 8と同じ |
| 5. 明赤茶色砂質土 | 12. 暗黒灰色粘土 |
| 6. 灰白色砂質土 | 13. 灰粗砂 |
| 7. 暗灰茶色砂質土 | 地山A. 灰白色砂質土
B. 灰色砂 |



Fig.6 B区 溝(1SD15)・溜まり状遺構(1SX14)実測図(1/40)

(3) 出土遺物

A区

溜まり状遺構

1SX01 (Fig.7・Tab.8)

弥生土器

大甕 (1) 底部破片で平底を呈する。底径11.2cmを測り、体部にかけてはやや丸みを帯びながら立ち上がる。磨耗が著しく調整は不明である。

土師器

坏 (2) 口縁部細片で僅かに外反する。磨耗のため調整不明で、胎土は微砂粒・石英・角閃石を僅かに含む。

甕 (3) 底部細片で底径7.2cmを復元する。小型品と思われ、底部は平底を呈する。磨耗のため調整不明で、胎土は微砂粒・石英・角閃石を僅かに含む。

瓦器

碗 (4) 口縁部細片で僅かに外反する。内面端部に重ね焼き痕跡が認められる。

白磁

皿 (5) 口縁部細片で端部は口禿げとなる。淡灰白色の素地に淡灰白色釉を施釉する。大宰府編年Ⅸ類。

B区

溝

1SD10 (Fig.7・Tab.8)

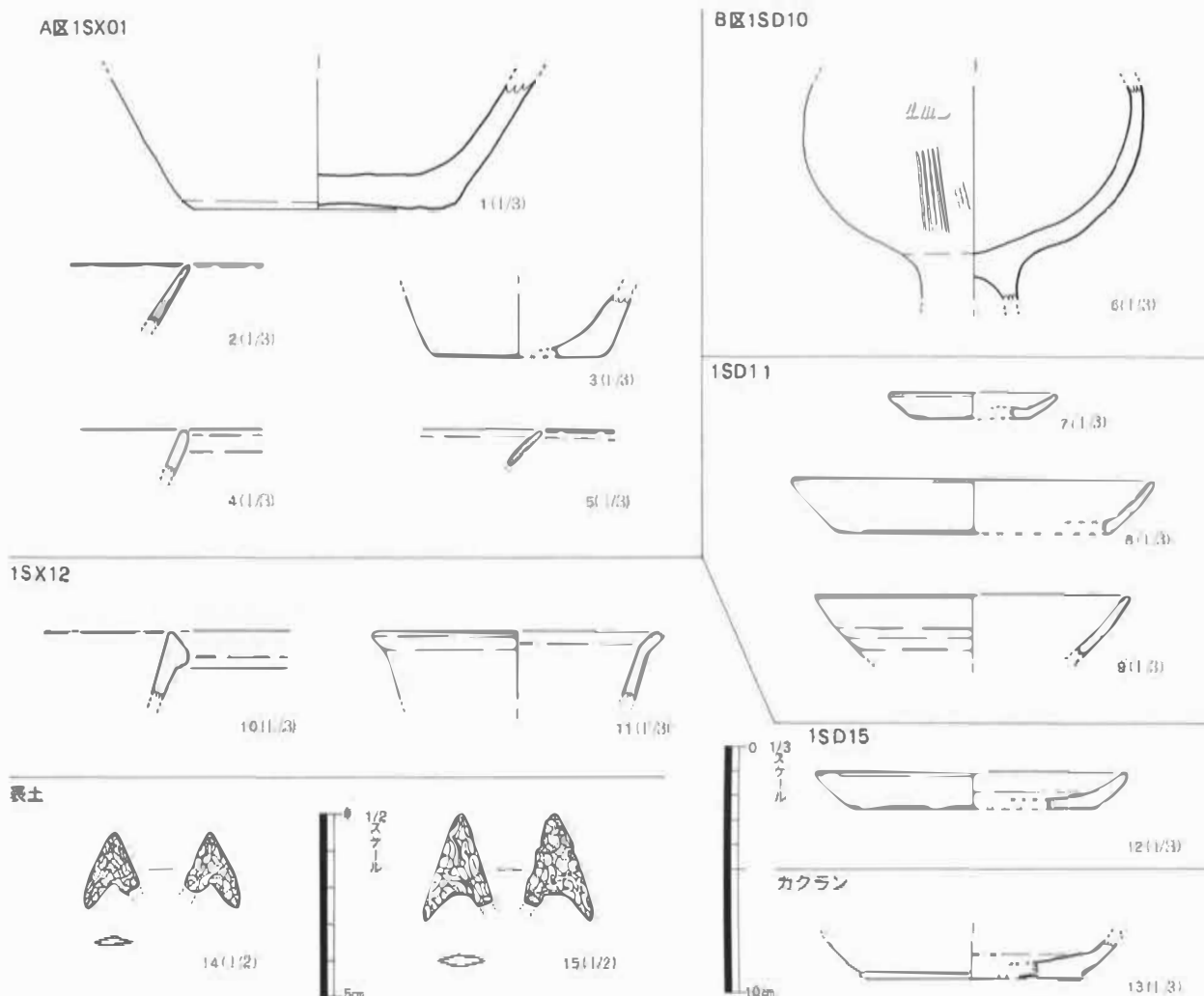


Fig.7 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

土師器

高坏 (6) 坏部の口縁端部及び脚部を欠損し、坏部の最大径は14.0cmを測る。外面の一部で僅かに刷毛目痕を認め、胎土は微砂粒・石英・角閃石を含む。

1SD11 (Fig.7・Tab.8)

土師器

小皿 (7) 口径7.0cm、底径4.7cm、器高1.05cmを復元する。底部外面は糸切りで磨耗のため調整不明。

皿 (8) 口径14.9cm、底径11.2cm、器高2.2cmを復元する。底部外面は糸切りで体部はやや丸みを帯びる。磨耗のため調整不明である。

坏 (9) 口縁部細片で口径13.0cmを復元する。体部と口縁部の境で稜線を認め、口縁部はごく僅かに外反する。磨耗のため調整は不明である。

1SD12 (Fig.7・Tab.8)

須恵器

鉢 (10) 口縁部は玉縁状を呈する。焼成不良で色調は淡茶白色を呈する。胎土は1~2mm程度の砂粒及び石英を多く含む。

青磁

坏 (11) 口縁部細片で口径12.0cmを復元する。濃灰白色の素地に淡茶緑色の透明釉をかけ、内外面に貫入を認める。大宰府編年Ⅲ-1類と思われる。

1SD15 (Fig.7・Tab.8)

土師器

小皿 (12) 口径12.9cm、底径10.0cm、器高1.5cmを復元する。表面磨耗のためわかりにくいだが底部外面は糸切りと思われる。

攪乱・表土 (Fig.7・Tab.8)

土師器

坏 (13) 底部細片で底径9.1cmを復元する。表面磨耗のため調整不明。

石器

石鏃 (14・15) 共に凹基式の二等辺三角形を呈する石鏃であり、石材はサヌカイト製である。右脚部を欠損し、側面に細かくリタッチを加える。14は表面の風化が著しい。

(4) 小結

当地は、東部から展開する八女丘陵南袖部にあり、西流する倉目川の北岸に立地する。調査区のほぼ全面にまたがって検出された溝及び溜まり状遺構は、当地がこれらの地形的な制約を受けているためのもと考えられ、かねてから相当分の流水が集中する地域であったことが予測される。検出された全ての遺構が不安定なプランを呈し、堆積土中に多くの砂や礫層が認められたのはこのためと思われる。また、遺物において弥生時代から中世に至るまでの土器、石器を出土したが、何れも表面が著しく磨耗していることから、土砂に混入した遺物が激しいローリングを繰り返すことによって生じたものと察することができよう。今回出土した遺物は上流にあたる東部に展開する集落からの流入品と思われ、その存在を窺える資料となった。

2. 蔵敷島ノ本遺跡（1次調査）

(1) はじめに

当遺跡は筑後市蔵敷島ノ本に所在しており、標高10.9mの低地に立地している。調査区は水路新設予定地のため南北4.5m、東西70mの東西に細長く設定し、平成17年4月26日より表土を除去を（有）福島重機に委託し、調査を開始した。7月21日の空中写真撮影を（有）空中写真企画に委託し7月26日に（株）アジア航測に委託した航空測量をもって調査は終了となった。

(2) 検出遺構

溝

SD01 (Fig.11・Pla.9・10)

調査区東側で検出された南北に走る溝である。検出段階では幅15m～27mと東に裾広がりを見せ、大溝であったが、掘り進めると自然流路であることと、数回の流路の変化があることが分かった。SD01の最終的な形態はY字状を呈し分流していたものと思われる。また、中洲状に残っている箇所も地山とは異なり前段階に堆積した堆積土である。

SD02 (Fig.11・Pla.9・10)

SD01の東側で検出された南北方向に走る溝である。幅約1.7m、深さは検出面より約0.5mを測る。この溝はSD01を切っている。

SD08 (付図)

調査区南西隅で検出された幅約0.2m、深さ0.1mを測る。断面形態はJ字状を呈し、北西方向に走る溝である。

土坑

SK03 (Fig.8)

SD01の西側に深さ3cm～10cmの浅い窪地状が不定形に広がっており、その中央部に幅約1.0m、深さ約0.1mを測り、不定形を呈する土坑である。土師器の細片が数点出土したが図化出来るレベルではなかった。

SK04 (Fig.8)

SD01の西側に位置している、長軸0.95m、短軸0.65m、深さ0.1mを測る。不定形を呈する土坑であり、出土遺物は土師器が数点出土したが図化出来るレベルではなかった。

SK07 (Fig.9)

調査区中央より西よりで検出し、北側の調査区外に延びている土坑である。幅1.4m、深さ0.2mを測る凹形を呈すると思われる。土師器を数点出土したが図化出来るレベルではない。

SX05・06 (付図)

植物痕と思われる非常に浅い凹形から遺物が出土したために遺構番号を使用した。レベル自体は地山面と変わらずに不定形に広がっており、範囲も曖昧なために航空測量で図化されなかった。SK04とSK07の間がおおよそその範囲であり、細かい凹凸面になっている。

3) 出土遺物 (Fig.10・Pla.13)

SK03



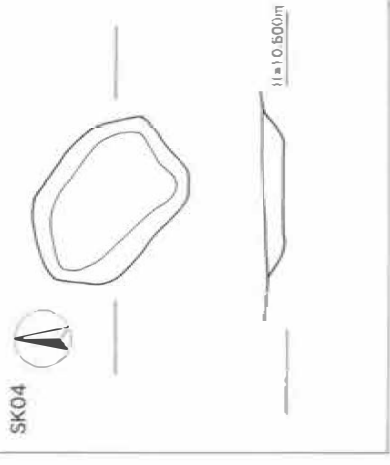
Fig.8 SK03・SK04遺構実測図 (1/40)

SD01
土御器

1・2は甕の口縁部片である。1は復元口径19.0cmを測る。口縁部内外面をナデによる調整を行い、口縁下内面はケズリを施す。2は口縁外面はナデ、内面はハケ目調整を施す。3は高杯の脚部である。杯との接合には充填法を用いる。磨耗が激しく調整痕は見られない。4は内面に丁寧な磨きを施した杯である。外面にも磨きを施しているようだが磨耗によって取れない。5・6はミニチュアの手握ね土器で、口縁部を内傾するタイプと対称的に内湾するタイプが出土したが磨耗が激しく器壁が剥落している。7は貼り付け高台の杯である。切り離し痕も看取されないほど磨耗している。

SD02
土御器

8～11まで甕の口縁部である。8・10は短く直線的に立ち上がり、9は外側に強く屈曲している。11は緩やかに屈曲しながら立ち上がる。8以外は調整痕が磨耗により看取出来ない状態である。8も外面の縦方向のハケ目調整が施されているのが見える程度である。



H=10,000m



SD01
土御器

1・2は甕の口縁部片である。1は復元口径19.0cmを測る。口縁部内外面をナデによる調整を行い、口縁下内面はケズリを施す。2は口縁外面はナデ、内面はハケ目調整を施す。3は高杯の脚部である。杯との接合には充填法を用いる。磨耗が激しく調整痕は見られない。4は内面に丁寧な磨きを施した杯である。外面にも磨きを施しているようだが磨耗によって取れない。5・6はミニチュアの手握ね土器で、口縁部を内傾するタイプと対称的に内湾するタイプが出土したが磨耗が激しく器壁が剥落している。7は貼り付け高台の杯である。切り離し痕も看取されないほど磨耗している。

SD02
土御器

8～11まで甕の口縁部である。8・10は短く直線的に立ち上がり、9は外側に強く屈曲している。11は緩やかに屈曲しながら立ち上がる。8以外は調整痕が磨耗により看取出来ない状態である。8も外面の縦方向のハケ目調整が施されているのが見える程度である。

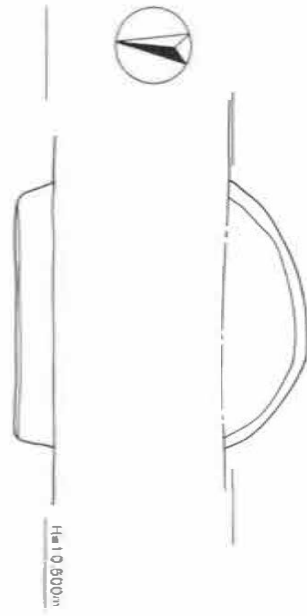


Fig.9 SK07遺構実測図 (1/40)

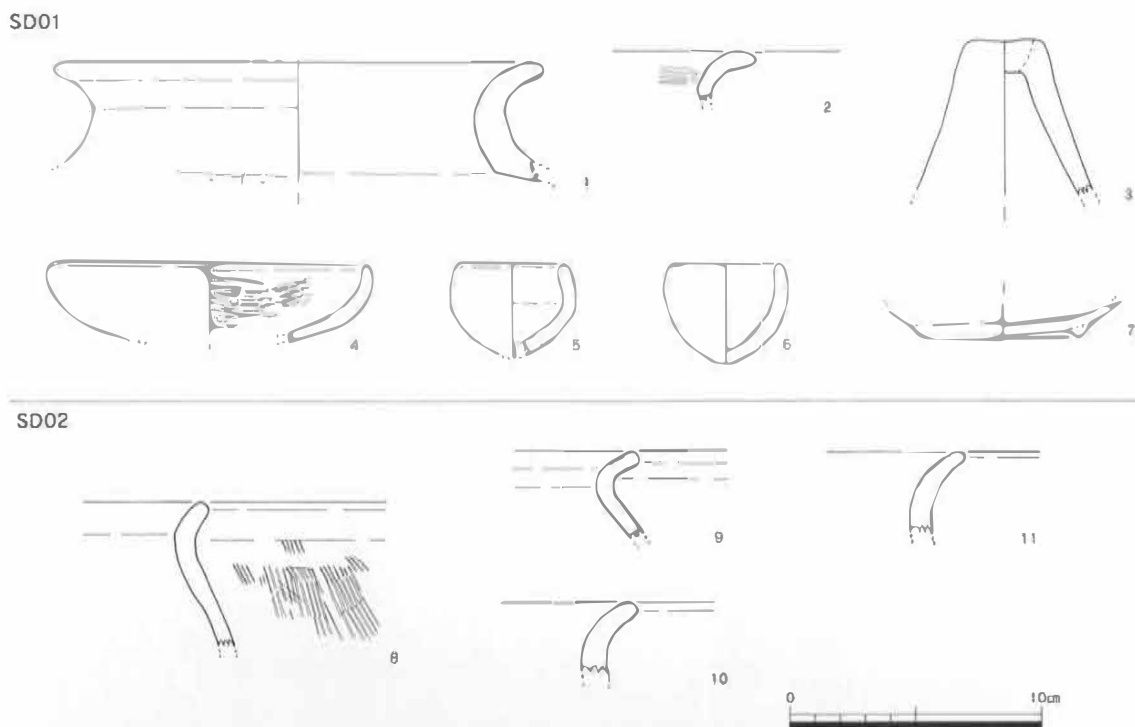


Fig.10 SD01・SD02出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	色調
1	土師器甕	(19.4)	—	—	口縁部1/2	淡灰茶色
2	土師器甕	—	—	—	口縁部1/4	淡茶褐色
3	土師器高杯	—	—	—	脚部1/3	淡橙色
4	土師器杯	(12.8)	—	—	1/3	暗茶褐色
5	土師器ミニチュア	(4.6)	—	3.7	1/3	淡茶灰色
6	土師器ミニチュア	(4.2)	—	4.0	1/2	淡茶灰色
7	土師器杯	—	(6.3)	—	1/4	淡茶白色
8	土師器甕	—	—	—	1/4	淡灰茶色
9	土師器甕	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色
10	土師器甕	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色
11	土師器甕	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色

※()内は 復元による数値

Tab.1 出土遺物観察表

(4) 小結

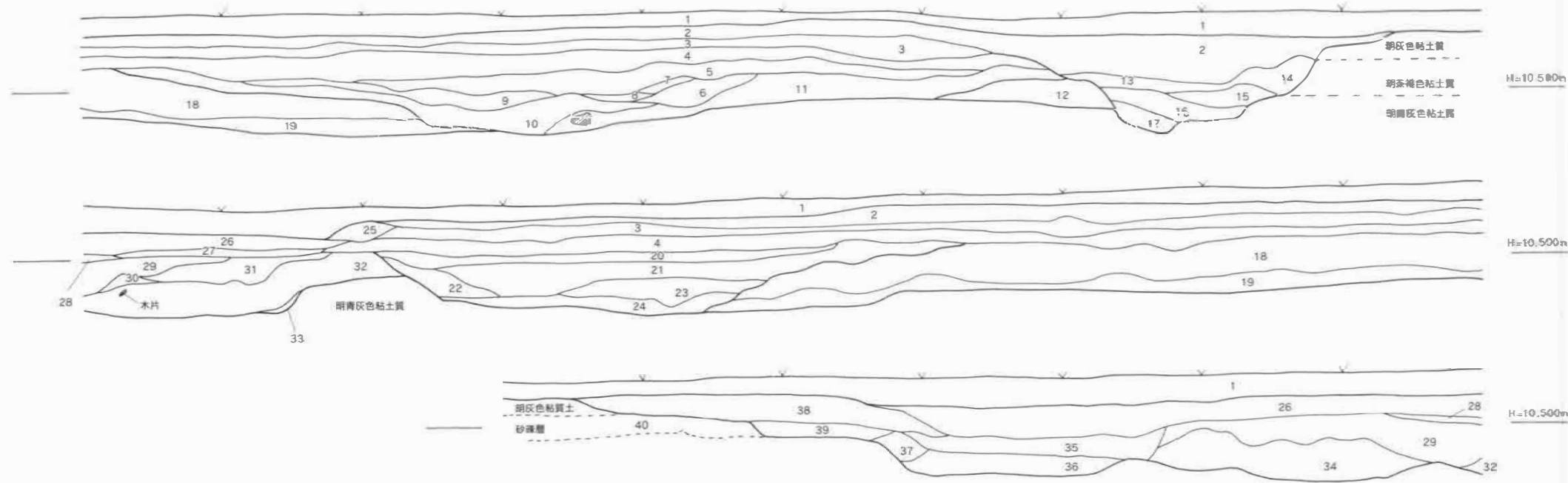
今回発掘した本遺跡は東西方向に長細い調査区であり、その調査区内で遺物を多く含む遺構は少なかった。その中で溝状遺構では少量ながら遺物を出土したのだがSD01は自然流路であった。本遺跡の立地する場所は八女丘陵西端部より鋸歯状に張り出した丘陵間の谷部から低地部に移行する箇所に立地しているために西側に向かって標高が低くなっており、水の流れは東西方向になると思われる。しかし、SD01は南北方向に走っているために、低地部では谷部から流れた水はかなり蛇行しながら流れていたと思われる。

【参考文献】

- 筑後市教育委員会 「畿数遺跡群（森ノ木遺跡）」 1990 筑後市文化財調査報告書第6集
 筑後市史編纂委員会 「筑後市史」 1998 筑後市史編纂委員会

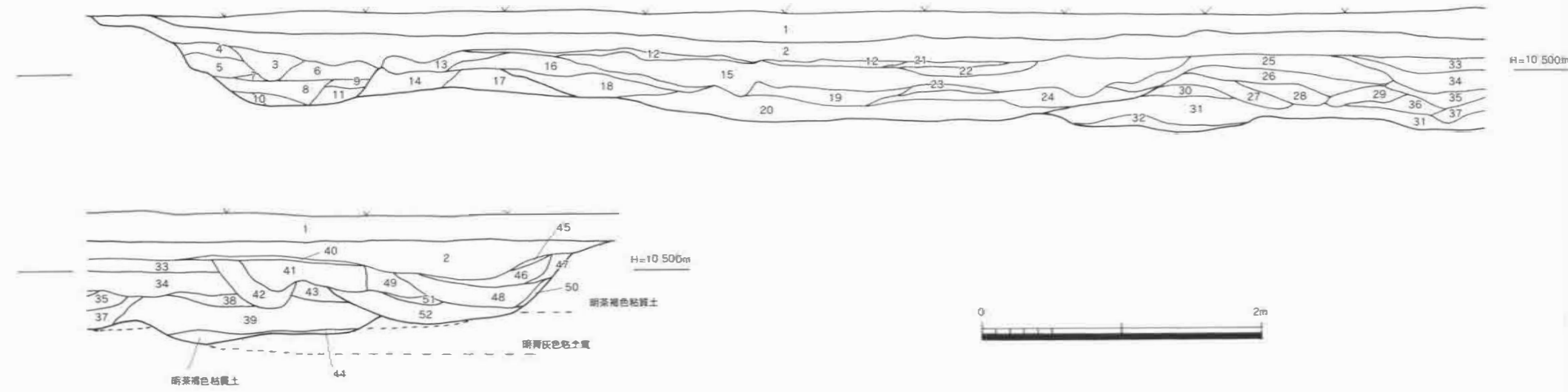


調査終了後 現地状況



SD01.SD02北壁土層図

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. 暗茶灰色土 | 21. 暗灰色粘質土 |
| 2. 暗茶褐色土 | 22. 暗灰色砂土 |
| 3. 暗茶褐色土
(黄褐色土ブロック型) | 23. 暗灰色粘質土
(暗灰色土ブロック型) |
| 4. 暗灰色土 | 24. 暗茶褐色粘砂土 |
| 5. 暗灰色粘砂土 | 25. 暗茶褐色粘砂土 |
| 6. 暗茶褐色粘砂土 | 26. 暗茶褐色土 |
| 7. 暗灰色土 | 27. 暗灰色土 |
| 8. 暗灰色粘質土 | 28. 暗灰色粘砂土 |
| 9. 暗灰色粘砂質 | 29. 暗灰色粘砂土
(25層と同じ) |
| 10. 暗灰色粘質土 | 30. 黄褐色粘質土 |
| 11. 暗灰色粘砂土 | 31. 暗茶褐色粘質土 |
| 12. 暗茶褐色粘砂土 | 32. 暗灰色粘砂土 |
| 13. 暗灰色土
(細い砂土型) | 33. 暗茶褐色粘砂土 |
| 14. 暗茶褐色粘質土 | 34. 暗灰色粘砂土 |
| 15. 暗灰色土
(暗灰色土ブロック型) | 35. 暗茶褐色粘質土 |
| 16. 暗灰色土
(灰白色粘土ブロック型) | 36. 黄褐色粘質土 |
| 17. 暗灰色粘質土 | 37. 暗灰色粘質土 |
| 18. 暗灰色粘砂土 | 38. 明黄褐色土 |
| 19. 暗灰色粘砂土 | 39. 暗茶褐色粘砂土 |
| 20. 暗茶褐色粘砂土 | |



SD01.SD02南壁土層図

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. 暗茶灰色土 | 24. 暗灰色粘質土 |
| 2. 暗茶褐色土 | 25. 暗茶褐色粘砂質土 |
| 3. 暗茶褐色土
(灰白色粘質ブロック型) | 26. 暗茶褐色粘砂土 |
| 4. 暗茶褐色土
(暗灰色土ブロック型) | 27. 暗茶褐色粘砂土 |
| 5. 暗灰色粘砂土 | 28. 暗灰色土 |
| 6. 暗茶褐色粘質土 | 29. 暗茶褐色粘砂土 |
| 7. 暗灰色土 | 30. 暗灰色粘砂土 |
| 8. 暗灰色粘砂土
(黄褐色土ブロック型) | 31. 暗灰色粘砂土 |
| 9. 暗灰色粘砂土
(3-4mmの細かい砂層) | 32. 暗灰色粘砂土 |
| 10. 暗茶褐色粘質土
(地山ブロック) | 33. 暗茶褐色粘質土
(暗灰色粘質土ブロック型) |
| 11. 暗灰色粘砂土(粘性あり) | 34. 暗灰色粘質土 |
| 12. 暗茶褐色粘砂土
(砂粒が細かい) | 35. 暗灰色粘砂土 |
| 13. 暗灰色粘質土
(砂粒が細かい) | 36. 暗灰色粘砂土 |
| 14. 暗茶褐色粘質土
(明茶褐色土ブロック型) | 37. 暗灰色土 |
| 15. 暗茶褐色粘質土(粘性あり) | 38. 暗灰色粘砂土 |
| 16. 暗灰色粘質土 | 39. 暗灰色粘砂土 |
| 17. 暗灰色粘砂土 | 40. 暗茶褐色シルト |
| 18. 暗灰色粘砂土 | 41. 暗茶褐色粘砂質土 |
| 19. 暗灰色粘質土 | 42. 暗灰色粘砂土 |
| 20. 暗灰色粘砂土 | 43. 暗茶褐色粘砂土 |
| 21. 暗灰色粘質土 | 44. 暗灰色粘砂土 |
| 22. 暗茶褐色粘質土
(細い砂粒入る) | 45. 暗茶褐色シルト |
| 23. 暗灰色シルト | 46. 暗茶褐色土 |
| | 47. 暗茶褐色土
(暗灰色土ブロック型) |
| | 48. 暗灰色粘砂土 |
| | 49. 暗灰色土 |
| | 50. 暗灰色粘質土 |
| | 51. 暗灰色粘砂土 |
| | 52. 暗茶褐色粘砂土 |

Fig.11 B区 蔵数島ノ本SD01・SD02土層図 (1/40)

3. 蔵数保古手遺跡 第2次調査 (A区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字蔵数保古手225外に所在する。標高約9m～10mの低地に立地し、調査区北側と南側は八女丘陵船部の標高約15mの台地を形成するため、調査区一帯は谷状の地形を呈する。試掘調査は平成16年度に行い、新設水路及びポンプ場建設範囲を調査対象とした。調査面積は1458㎡、調査期間は平成17年5月25日から7月29日。調査に際しては重機による表土剥きを(行)フクシで重機、基準点・水準点設置作業、航空測量による遺構全体図作成をアジア航測(株)、遺構全体写真撮影を(行)空中写真企画に委託した。発掘調査は上村英士が担当した。

基本土層

調査前は水田として使用されており、標高約10mを測る。耕作土が約25cm、その下に約5cm～10cmの表土を確認し、床土を除去した黄白色粘土(一部シルト系が有り)および茶色粘土の地山に遺構が切り込む。遺構埋土は黒色系粘質土と茶色系粘質土及び砂質系に分かれる。

(2) 検出遺構

土壌

2SK05 (Fig.12)

調査区西端の現況水路北側で検出し、調査区外へ延びると考えられる土壌である。検出最大長軸約8.8m、検出最大幅約3.25m、最大深さ約0.57mを測る。埋土は茶色系で下層は砂質土である。遺物は須恵器甕片、土師器坏片、小皿片、土鍋片、甕片、磁器片、陶器片、瓦片、黒曜石剥片、サヌカイ卜剥片を出土している。

2SK13 (Fig.15、Pla.15)

調査区中央で2SD10に切られる不定形な土壌である。検出長軸約5.2m、検出短軸約2.5m、最大深さ約0.72mを測る。埋土は黒色系の粘質土が基本で下層で砂質土が混じる。遺物は磁器片を出土。

溝

2SD09 (Fig.14、Pla.15・16)

調査区を南北に蛇行して走る溝で、低地に存在するため埋濫原として扱うほうが妥当である。調査はA・B・Cトレンチを設定し掘削している。検出最大幅約13m、最大深さはAトレンチで1.7mを測る。埋土は基本的に黒色系の粘質土で一部砂層が混じる。地山は黄色粘土層下の小礫層となり湧水がある。遺物は土師器甕片、甕片、坏片、瓦片を出土している。

2SD10 (Fig.14、Pla.17)

調査区中央を東西に蛇行して走り、2SD09・2SK05を切る溝である。東端で2SX12に接続するような形状をとる。検出長約20m、検出最大幅約2.3m、最大深さ約0.33mを測る。埋土は上層が茶色系の砂質土、下層が黒色系である。遺物は上層で須恵器甕片、土師器坏片、小皿片、土鍋片、甕片、瓦器腕片、磁器片、瓦片を、下層からは須恵器甕片、土師器坏片、甕片、土鍋片を出土している。

不明遺構

2SX12 (Fig.16)

調査区中央東端で検出した不定形な遺構で2SD10と合流している。検出長軸約9.55m、検出短軸約6.5mを測る。深さについては谷底を過掘しており一部残存部で0.48mを測る。埋土は茶色系の粘質土である。遺物は土師器甕片、高坏片、土鍋片、茶釜片、瓦器腕片、磁器片、陶器甕片、甕片、瓦片、石製品を出土している。

2SX14 (Fig.17)

2SK13東隣で検出した不定形な遺構である。一部にテラスを設け、検出長軸約3.7m、検出短軸約1.75m、最大深さ約0.33mを測る。塘底は安定しておらず、雨水による崩壊で図上では復元できないうかが塘底には約10cm前後の小ピットを多数確認している。遺構全体の埋土は茶色系である。遺物は土師器坏×皿片、甍片、土鍋片、瓦器椀片、磁器片を出土している。

2SX23 (Fig.13)

調査区南側で検出した不定形な遺構である。このような不定形な遺構は当調査区では数多く確認しており、上層の現況耕作や旧耕作時の痕跡、若しくは粘土等の上取り場ではないかと考えられる。検出長軸約9.3m、最大深さ約0.06mを測る。遺物は土師器片、磁器片、陶器片、黒曜石刺片を出土している。

2SX26 (Fig.13)

調査区中央で検出した不定形な遺構であるが2SD09を避けるように配置している。埋土は茶色系と黒色系が混じる粘質土であり、塘底は北側が低くなる。遺物は須恵器甍片、土師器坏×皿片、土鍋片、磁器片、瓦質すり鉢片、瓦片を出土している。

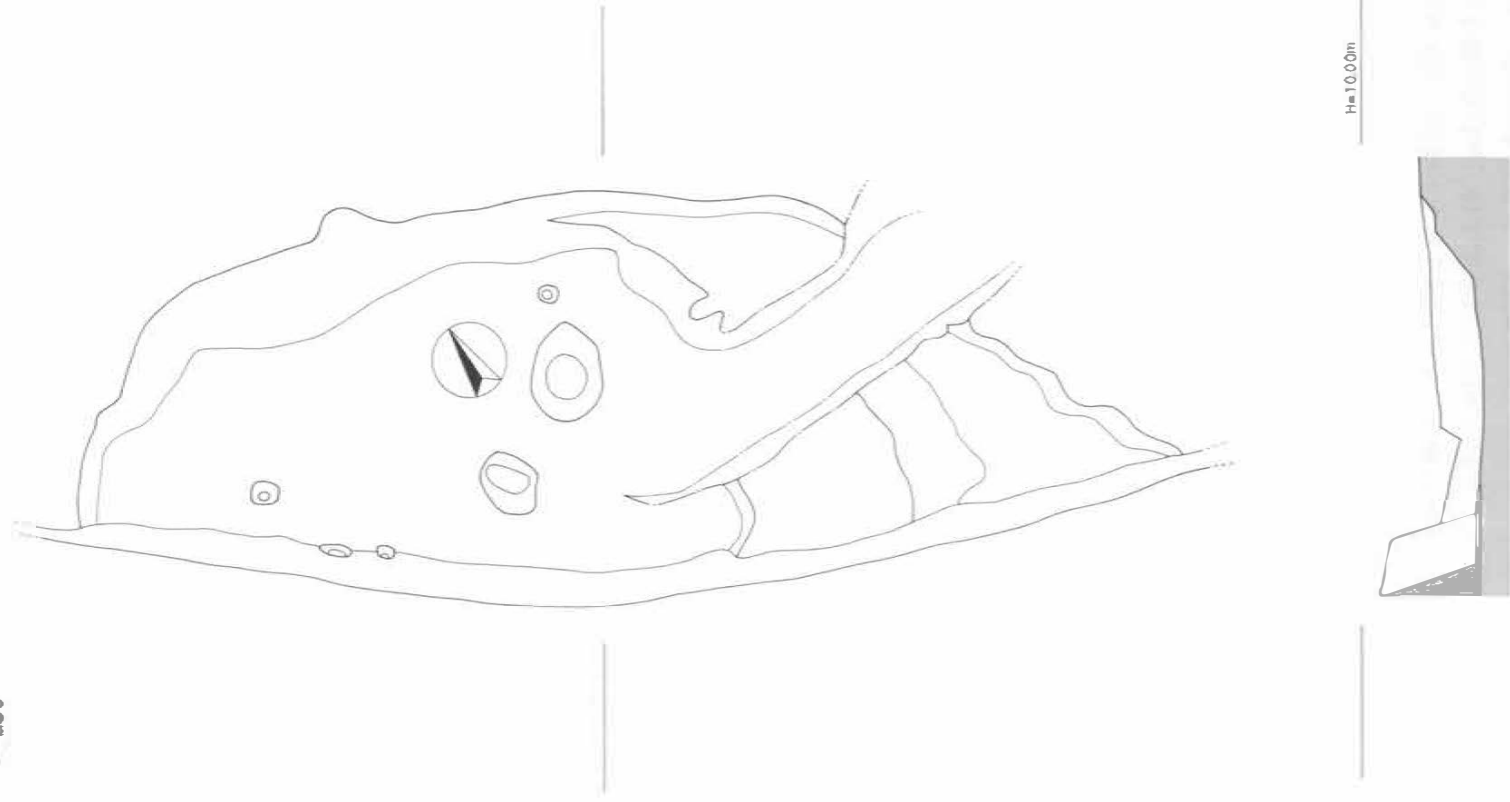
波板状連続土壇

2SX18 (Fig.18,19, Pla.17~20)



Fig.12 2SK05実測図 (1/60)

一部不定形な形状をとる。土壇群の主軸は南北から若干東に振れ、二股に分岐している。土壇規模は長軸で約0.24m~0.90m、短軸約0.18m~0.49m、深さは最大で0.13mを測る。土壇間隔は西側列の南北で0.40m~0.45m(立上り部間隔)、東列の南北で0.40m~0.50mを測る。埋土は単一層で、淡黒色土に地山近似的な黄色土が頻りに混入している。埋土は締まっており堅固である。遺物は土師器小片のみである。



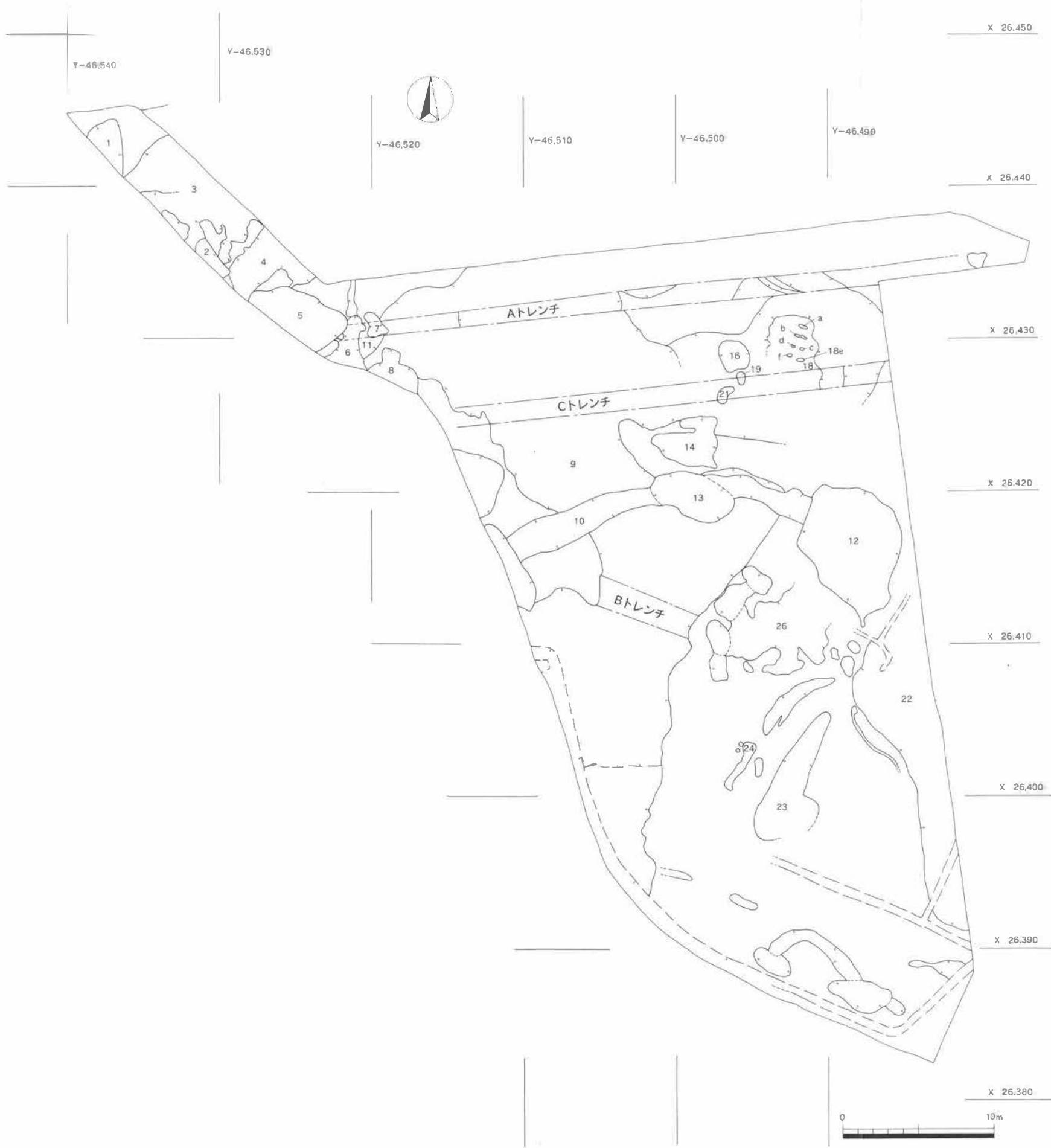
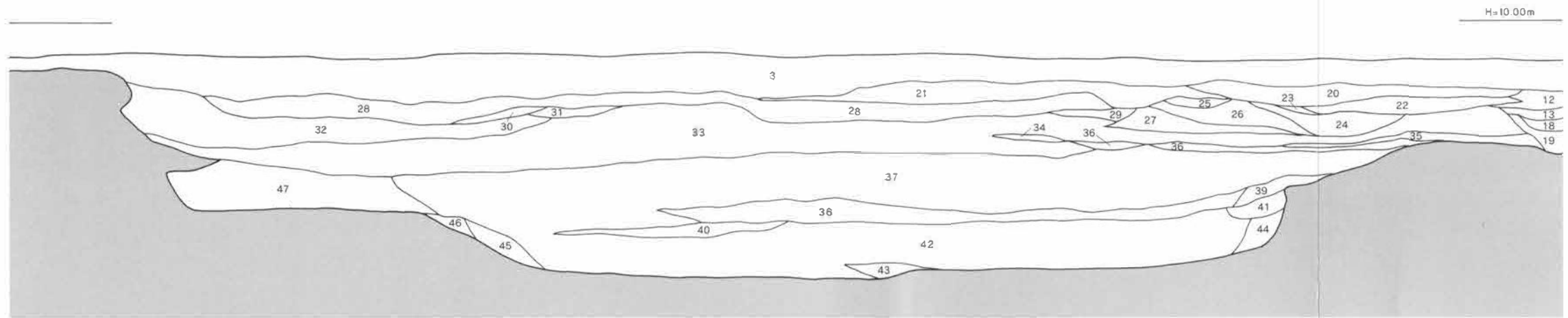
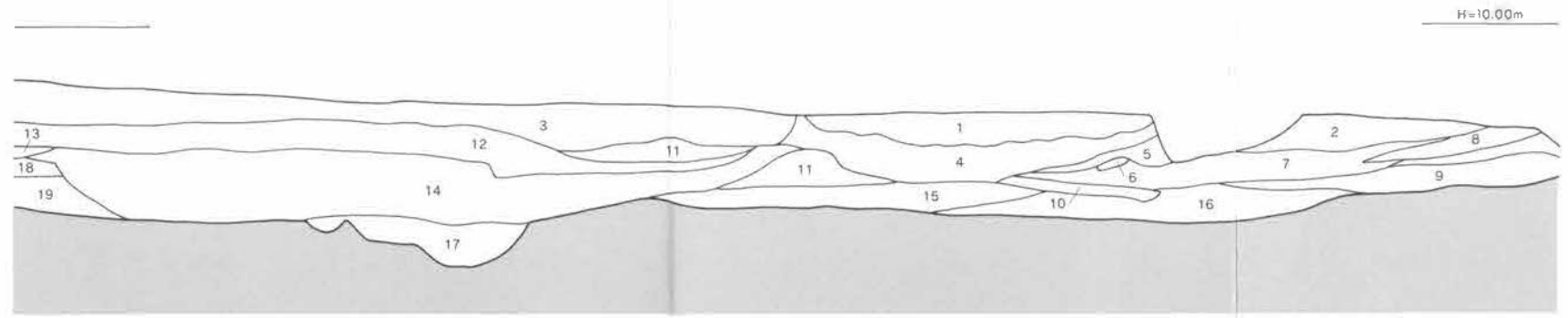


Fig.13 蔵数保古手遺跡第2次調査 (A区) 遺構略測図 (1/300)

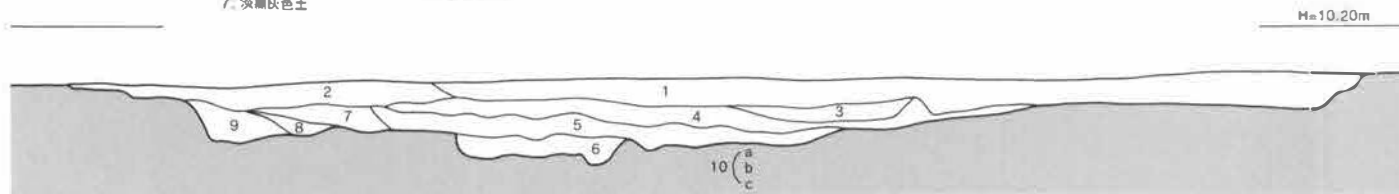
2SD09(Aトレンチ)

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 黄褐色土 | 25. 暗灰色砂(シルト系) |
| 2. 黄白色砂質土 | 26. 淡黄灰色砂(シルト系) |
| 3. 淡灰褐色粘質土 | 27. 白灰土(シルト系) |
| 4. 淡灰褐色粘質土(少し粗い砂) | 28. 暗褐色粘(12に近似) |
| 5. 淡灰色質土(粗い砂) | 29. 淡灰色粘(若干砂質) |
| 6. 黄褐色粘質土 | 30. 黄白色砂 |
| 7. 暗褐色粘 | 31. 淡黄灰色粘(29に近似) |
| 8. 黄褐色粘質土 | 32. 暗褐色粘(28に近似) |
| 9. 淡灰褐色粘質土(少し粗い) | 33. 茶褐色粘(大小砂質) |
| 10. 淡灰褐色粘質土(砂質) | 34. 暗褐色粘 |
| 11. 灰褐色粘質土(砂質) | 35. 黄褐色粘(砂質) |
| 12. 灰褐色粘質土(砂質) | 36. 淡茶粘(砂質) |
| 13. 淡黄褐色粘質土 | 37. 暗褐色粘(砂質) |
| 14. 灰色砂質土(小砂と小石混) | 38. 暗褐色粘(砂質) |
| 15. 暗褐色粘質土 | 39. 灰白砂 |
| 16. 黄褐色粘質土 | 40. 淡黄褐色粘(砂質) |
| 17. 暗褐色粘(砂質) | 41. 暗褐色粘(砂質) |
| 18. 灰褐色粘(砂質) | 42. 灰褐色粘(砂質) |
| 19. 茶褐色粘(粗い砂) | 43. 暗褐色粘 |
| 20. 黒色粘 | 44. 黄褐色粘 |
| 21. 灰白砂 | 45. 淡茶粘 |
| 22. 灰褐色粘 | 46. 淡茶粘 |
| 23. 黒色粘 | 47. 暗褐色粘 |
| 24. 灰色粘(粗い砂) | |



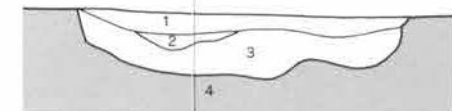
2SD09(Bトレンチ)

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 淡黄褐色粘質土 | 8. 灰色砂質土 |
| 2. ♪(若干茶色土混) | 9. 茶褐色土 |
| 3. 灰褐色土(粘質砂質混) | 10. 砂層(大きい礫入る) |
| 4. 茶褐色砂質土 | a. 黄褐色砂質土 |
| 5. 灰褐色♪ | b. 黄褐色砂質土 |
| 6. 淡黄褐色♪ | c. 黄白色粘質土 |
| 7. 淡黄褐色土 | |



2SD10

H=10.00m

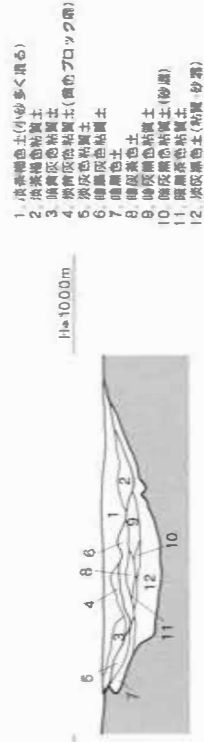
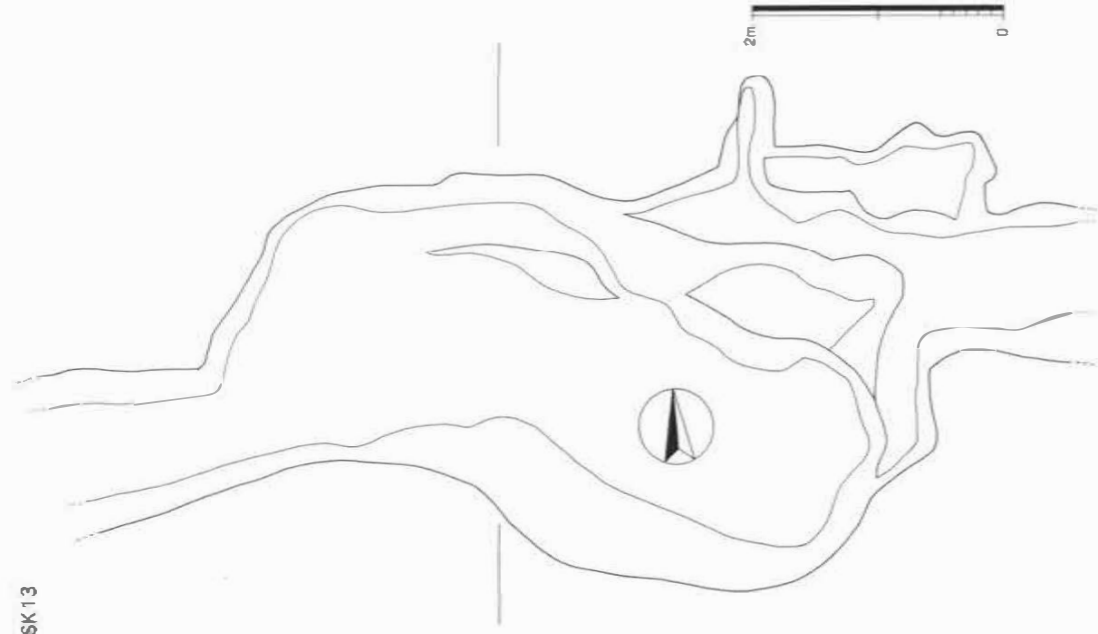


- | |
|----------------|
| 1. 淡黄褐色土(小石砂混) |
| 2. 淡黄褐色土 |
| 3. 淡黄褐色土 |
| 4. 地山礫層 |



Fig.14 2SD09・10土層図 (1/40)

2SK13



1. 赤褐色土(小砂多く混る)
2. 赤褐色粘質土
3. 赤褐色粘質土
4. 赤褐色粘質土(黄砂ブロック混)
5. 赤褐色粘質土
6. 赤褐色粘質土
7. 赤褐色土
8. 埋戻茶色土
9. 埋戻赤褐色粘質土
10. 埋戻赤褐色粘質土(砂混)
11. 埋戻赤褐色粘質土
12. 埋戻赤褐色土(粘質・砂混)

Fig.15 2SK13発掘図 (1/60)

2SX22 (Fig.20、Pla.20・21)

調査区中央東側で検出し調査区外へ延びると考えられる不定形な遺構である。検出長軸約15m、最大深さ約0.16mを測る。茶色砂系の埋土を掘削すると、礫底は0.10m程度の小ピットが無数に存在している(図上は雨水による崩壊で残存部のみの図化で、検出時は小ピットが密集している。)遺物は須恵器甕片、上抽器環×皿片、高坏片、土鍋片、甕片、鉢片、瓦器碗片、磁器片、陶器片、瓦質土器片、瓦片、土製品、石製品が出土している。

2SX27 (Fig.21、Pla.20・21)

2SX18南側で検出した小ピットが群集する遺構である。SX12との切り合い関係は不明であり、これらの小ピットの分布範囲も不安定でSX18を切るものもある。埋土は茶色系の砂質土と粘質土が混ざっており、各ピットの断面は不定形である。遺物は出土していない。

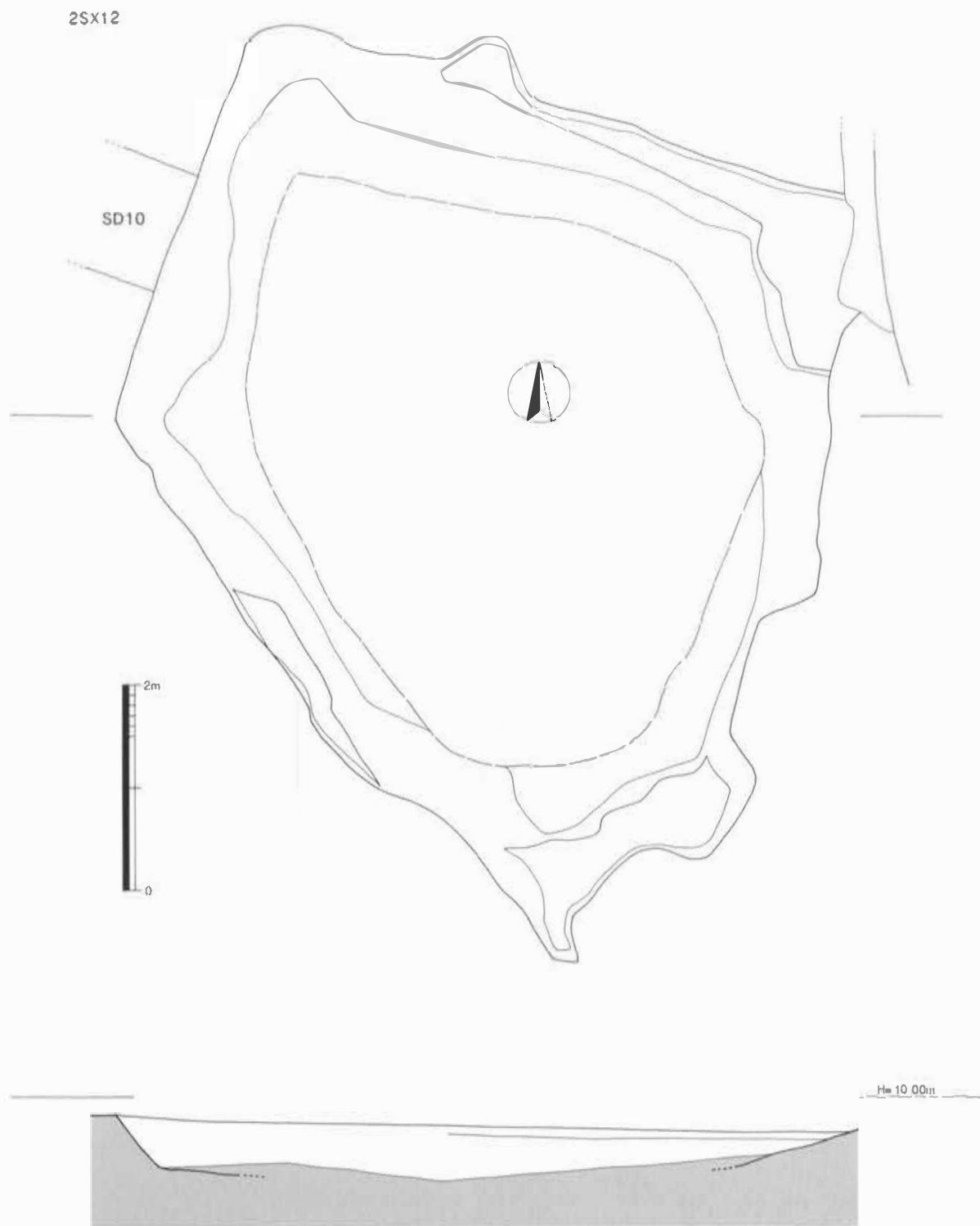


Fig.16 2SX12実測図 (1/60)

(3) 出土遺物

土壩

2SK05 (Fig.22、Pla.23)

土師器

小皿(1) 口径7.0cm、器高1.8cm、底径5.6cmを測る。底部糸切りで口縁部に油煙が残る。

磁器

白磁

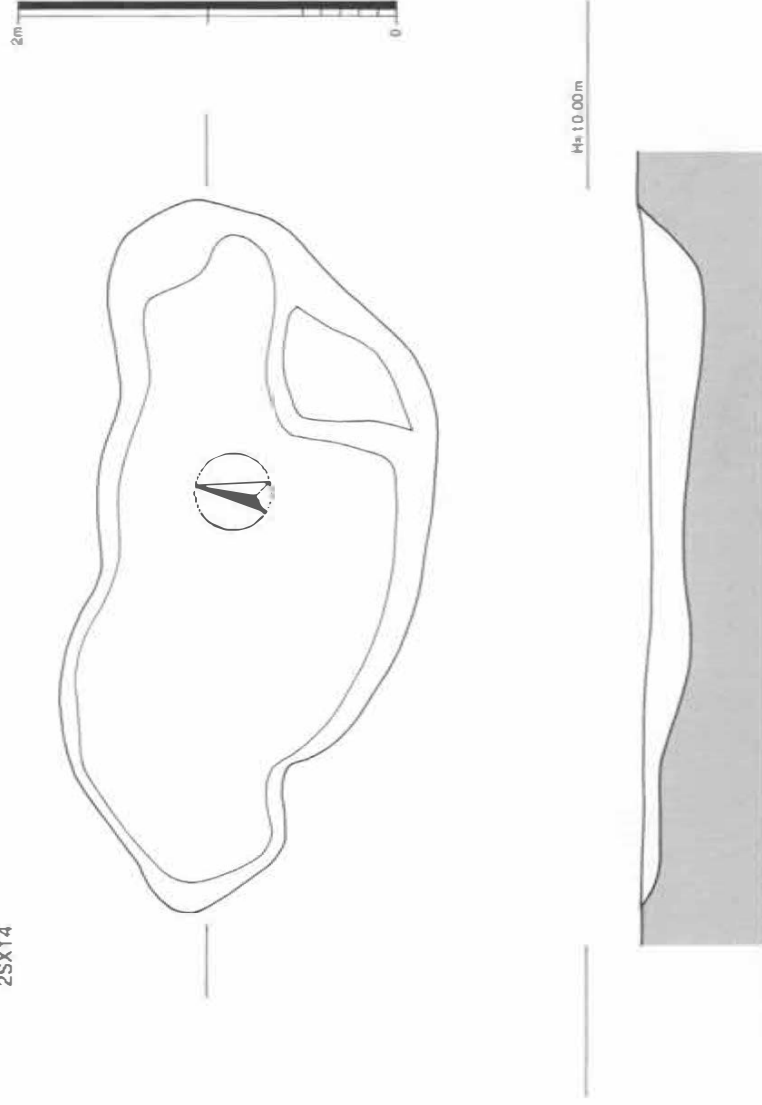


Fig.17 2SX14実測図 (1/40)

碗 (2) 底径5.1cmを測る。高台接地面のみ露出で、見込みに目跡が4ヶ所残る。若干貫入が見られ、内面にはピンホールが残る。

皿 (3) 口縁部片で端部が若干外反する。残存器高1.2cmを測る。

染付

碗 (4) 口縁部から体部片で口縁外面に圈線、体部下位に梅花文を施す。

2SK13 (Fig.22、Pla.23)

磁器

白磁

碗×皿 (5) 口縁端部片で唇部を外反させ上端部を水平に仕上げる。

滑

2SD09 (Fig.22、Pla.23)

土師器

坏 (6) 体部から口縁部にかけて内湾し、丸底になると考えられる坏片である。調整は磨耗のため不明。銀(7・8)7は口縁部片で内面頸部下から横方向のケ。次、口縁部内外面をヨコナデ調整。8は口縁部内外面にヨコナデ後の斜方向ハケ目が残る。

2SD10茶砂土 (Fig.22、Pla.23)

土師器

土鍋 (9・10) 共に口縁部片で端部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。調整は磨耗のため不明、焼成不良である。

磁器

白磁

皿 (11) 口縁部細片で端部を外反させる。現存器高1.4cmを測る。

2SD10茶粘 (Fig.22、Pla.23)

土師器

土鍋 (12) 口縁部から1部上位片で、口縁部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。体部外面に指頭痕が残る。

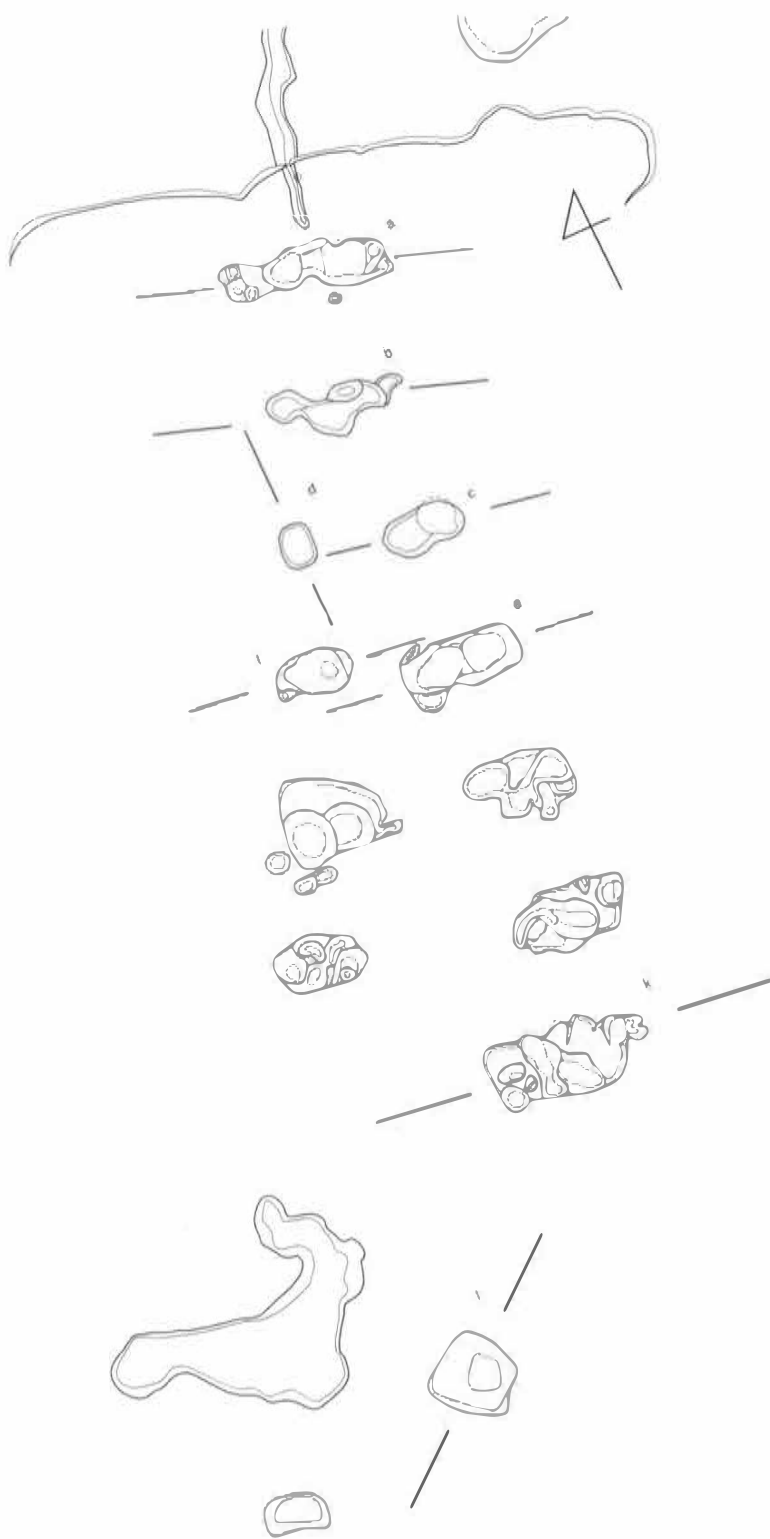


Fig.18 2SX18実測図 (1/40)

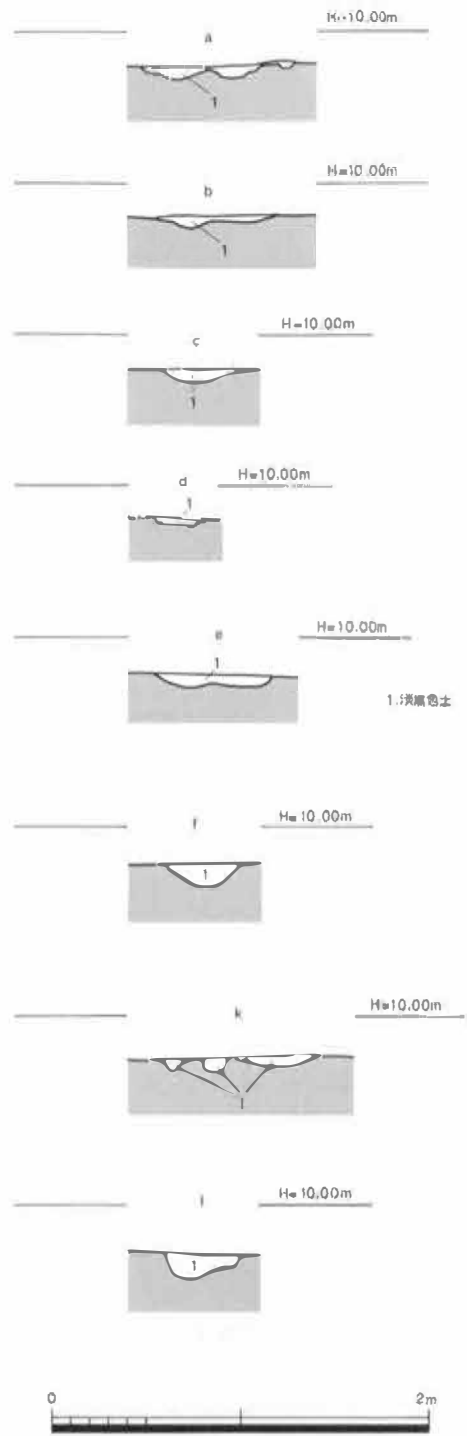


Fig.19 2SX18土層図 (1/40)

2SD10 (Fig.22、Pla.23・24)

類恵器

壺 (13) 口縁端部片で調整はヨコナデ、外面屈曲下に自然釉がかかる。焼成還元良好で暗青灰色。

土師器

小皿 (14) 口径10.7cm、器高1.4cm、底径8.0cmを測る。底部糸切り、内外面は磨耗のため調整不明。

すり鉢 (15) 底部片で底径8.0cmを測る。内面にすり目を施す。焼成不良。

瓦器

椀 (16) 口縁部片で調整はヨコナデ。焼成不良で口縁部内外面淡黒灰色、淡茶灰色を呈する。

磁器

白磁



Fig.20 2SX22実測図 (1/50)

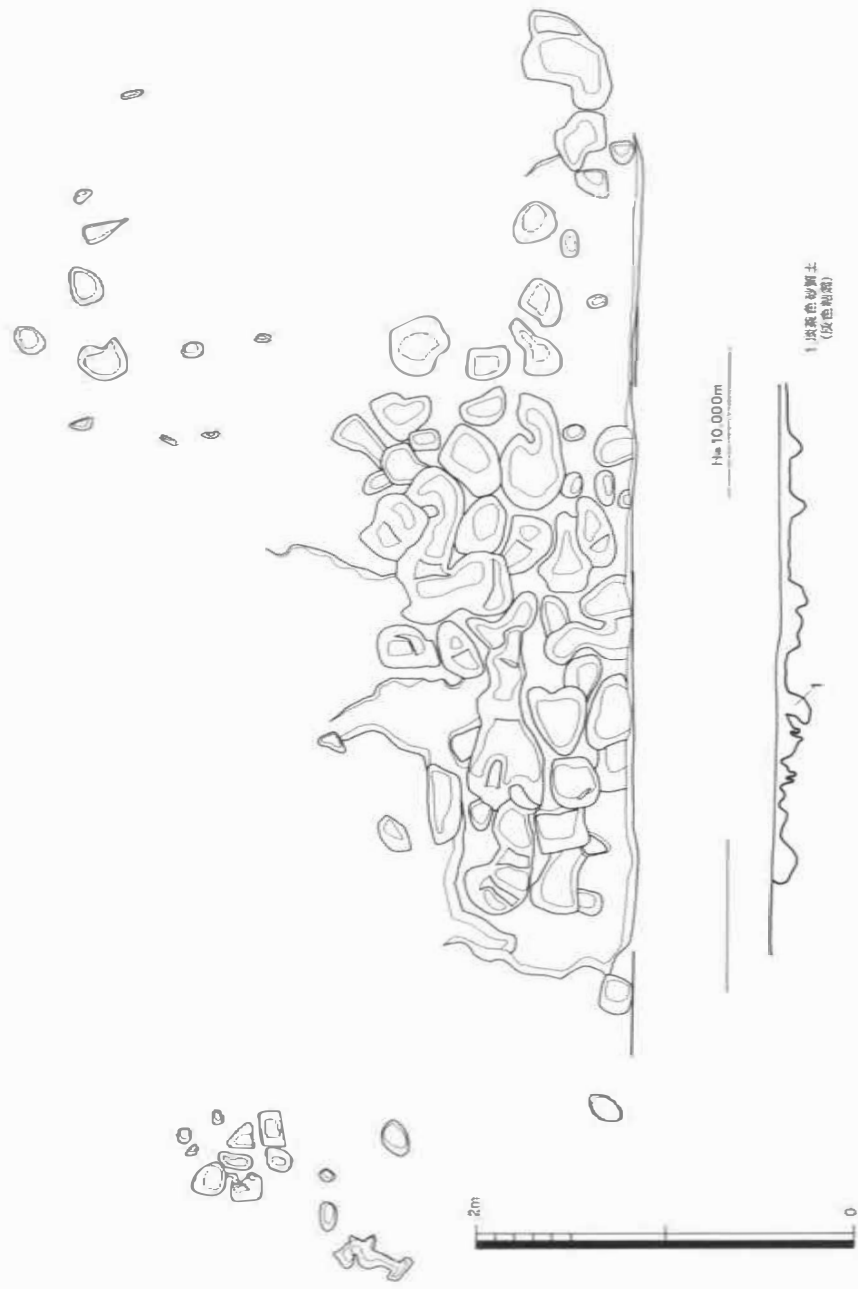


Fig.21 2SX27実測図 (1/40)

皿 (17) 口縁から体部片で口禿げの皿である。残存器高2.15cmを測る。
 碗 (18) 口縁部片で全面施釉である。口縁端部を若干外反させる。

青磁

碗 (19) 竜泉窯系青磁で外面に連弁を施す。

土製品

平瓦 (20) 胎土は石英や角閃石を含み比較的精選されている。丁寧に面取りし、布目痕が残る。

不明遺構

2SX12 (Fig.22、Pla.24・25)

土師器

土鍋 (21) 口縁端部を玉縁状に仕上げ、内面は横方向のハケ目、外面は指頭痕と縦方向のハケ目が残る。

壺×釜 (22) 穿孔した耳の部分である。胎土は精選されており赤色粒子が見られる。

瓦器

枕 (23) 口縁部片で調整は磨耗のため不明。内外面淡茶灰色を呈し、焼成不良である。

磁器

青磁

碗 (24) 体部片で外面に縦方向の櫛目を施す。同安窯系青磁。

陶器

壺 (25) 底部片で内外面に鉄釉を施す。高台部は露胎。素地は淡茶灰色、淡褐色を呈する。

石製品

不明製品 (26) 長さ22.5cm、厚さ4.8cmを測り、側面が破損している。中央に直径5cm程度、深さ2.0cm程度の窪みが見られる。花崗岩製。

2SX14 (Fig.22、Pla.25)

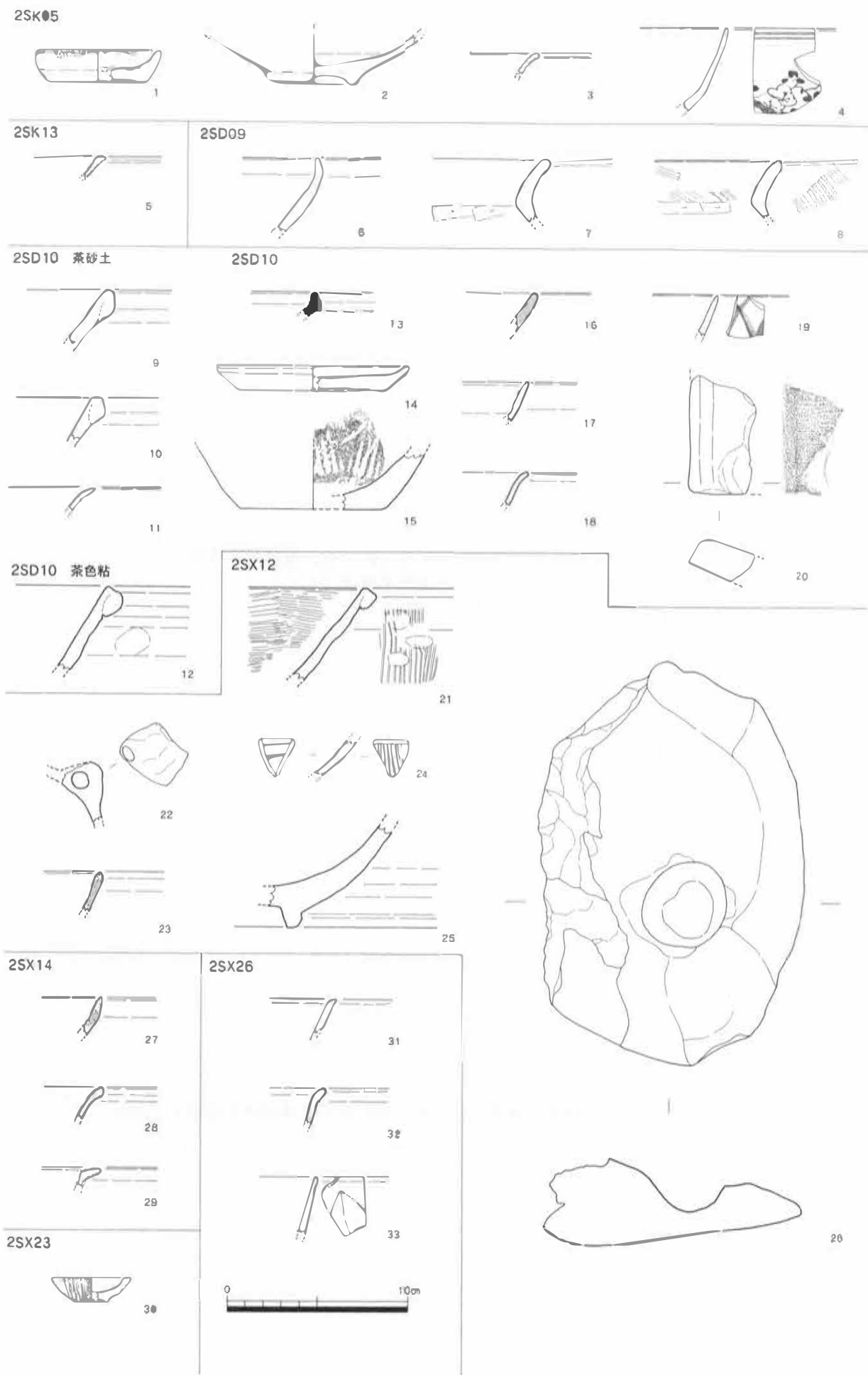


Fig.22 出土遺物① (1/3)

2SX22

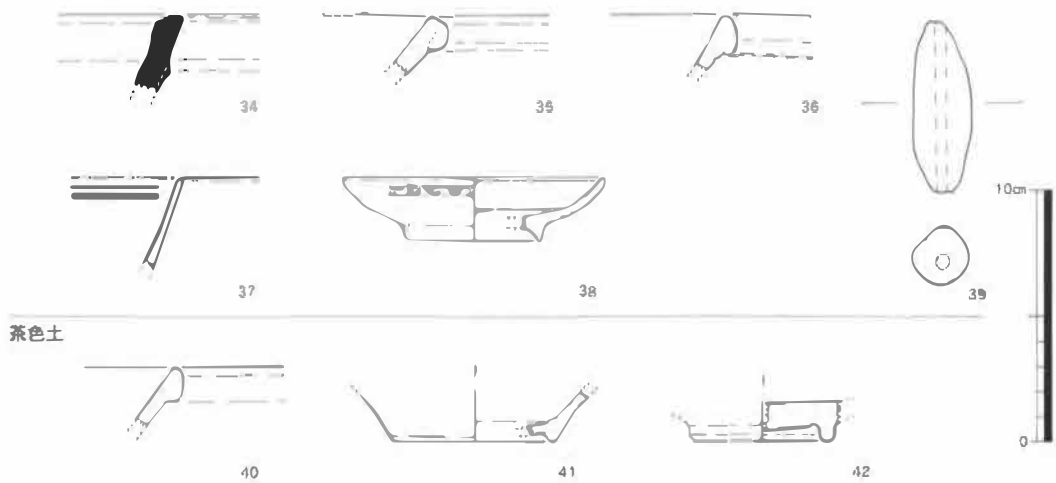


Fig.23 出土遺物② (1/3)

瓦器

碗 (27) 口縁部片で端部が若干内湾する。口縁外面は重ね焼き痕が残り黒色化している。

磁器

青磁

碗 (28) 口縁部片で端部が若干丸みを帯びる。釉が厚く掛かる。竜泉窯系青磁。

鉢 (29) 口縁端部を屈曲させ平らに仕上げる。竜泉窯系青磁。

2SX23 (Fig.22、Pla.25)

磁器

白磁

紅皿 (30) 口径4.5cm、器高1.35cm、高台径1.8cmを測る。外面を貝殻上に型押しする。

2SX26 (Fig.22、Pla.25)

磁器

白磁

碗 (31) 口縁部片で端部が若干外反する。素地は淡茶白色、釉調は淡黄白色。

青磁

碗 (32・33) 32は小碗で口縁部を外反させる。33は外面に連弁を施す。共に竜泉窯系青磁。

2SX22 (Fig.23、Pla.25・26)

須恵器

鉢 (34) 口縁部片で外面に浅い断面三角形の突帯が付く。調整はヨコナデ、自然釉が掛かる。

土師器

土鍋 (35) 口縁部片で端部を玉縁状に仕上げる。調整は磨耗のため不明。

磁器

白磁

碗 (36) 口縁部を玉縁状に仕上げる。外面にピンホールが残り、淡黄茶色を呈して焼成不良。

青磁

碗 (37) 口縁部内面に三本の沈線が見られる。竜泉窯系青磁。

染付

皿 (38) 口径10.5cm、器高2.5cm、高台径5.4cmを測る。見込みを蛇の目状に釉のカキ取る。

土製品

土錘 (39) 長さ6.8cm、幅2.35cm、厚さ2.3cmを測る。約6mmの孔を穿つ。

茶色土 (包含層)

磁器

2SX26 (Fig.23、Pla.25・26)

白磁

碗 (40・41) 40は口縁部を玉縁状に仕上げける。釉調は淡灰白色を呈し、焼成良好。41は高台径6.5cmを測り、高台部露胎で葺筒底に仕上げける。

青磁

碗 (42) 底部片で高台径5.8cmを測る。高台部は露胎。

(4) 小結

今次調査では面的な調査範囲により数々の遺構が検出されており、これらの中で幾つかの特徴的な遺構・遺物について概観していく。

大溝

2SD09については、北側検出地点でかなり遺構は深く粘土層と砂層の混合している状況から、かなりの流水があったと考えられ、遺構側面のオーバーハングの状況からも判断できる。しかし、中央部や南側では粘土層が浅く堆積しているのみとなり、調査区南端では地山である砂礫層が北側の検出面より高い位置で確認されている。この事から2SD09は蛇行しながら調査区を東西に淀む、若しくは雨水により激しい流水があった事を物語っている。調査区一帯が標高10m以下の低地であり、北側と南側が低位丘陵端部となる谷地形のため、大溝と言うより、むしろ自然河川及び溜水の痕跡とも考えられる。水には事欠かない地域である事は調査区の雨水による水没等により明らかである。また、出土遺物から見るとAトレンチである北側からは古墳時代までの遺物しか確認されず、南側であるCトレンチから中世の遺物を検出している事から、地形的な問題により様々な時代に何度も氾濫が繰り返されている様が見受けられる。しかし、大溝や溝以外に様々な遺構が検出されており、旧地で営まれた遺構の意義について考えなければならぬ。

波板状連続土墩および不明遺構

2SX18については、現在までに様々な研究成果から遺構認定や性格の推定が行われている。今次調査の遺構については、遺構配置状況と2SX22・27から、ある程度想定できうる性格について言及しておく。遺構は2SX18が南北方向に配置され、北から南側へ二段に分岐する。分岐した最南端の連続土墩2SX18-1周辺から2SX27の小ピット群が切り込む形で検出される。更に南側では2SX22が溝状に検出され、下層で膨大な小ピット群を形成する。これらの一連の遺構については、埋土が黒色系(2SX18)と茶色系(2SX22・27)に分かれるが、共に締まっており、平面的には埋土がマーブル状に入ることが共通している。

波板状連続土墩については昨今の研究で遺構の性格付けが行われているが、その中で「牛馬歩行道」が近年の成果で明らかになっている。牛馬の歩行により連続した土墩が形成される過程が復元されており、一概には言えないが今次調査の2SX18から2SX22・27へと続く痕跡はこれらを推定する手がかりとなる。調査地で農家の方の聞き取り調査を行ったところ、30年～40前までは馬等による水田耕作を行っていたようで、遺構が表土(耕作土・床土)直下から検出される点も考慮すると可能性は高い。しかし、連続土墩が検出されたのは2SX8のみであり、小ピット群も範圍は調査区全体から見ると極端に狭いため疑問は残る。当市では熊野宮ノ後遺跡等でも同様に不定形な沈み込み(ピット)状に展開する)が集中的に検出されており、今後の調査事例の増加に期待したい。

出土遺物

各遺構からは遺物が出土しているが遺構の時期を明確に示す遺物に恵まれなかった。その中で、2SD10出土の平瓦が時異な遺物として挙げられる。当市では古代・中世を通じて瓦を出土する遺構及び遺物自体の出土が殆どない。近世・近代では水田焼の素焼きの上管を作る過程で作成された平瓦が見受けられる。今次調査の平瓦については水田焼の平瓦に比べ厚く、胎土も若干異なる。近隣で古代の遺跡は確認されておらず、中世には坂東寺熊野神社(鎌倉時代)の荘園地として築えていたことから関連を窺わせる遺物である。

遺構	S-番号	Tir.	番号	R番号	名称	器種	口径(長さ)	器高(仰高)	底径 (重さ・厚)	残存	備考
2SK05	5	22	1	1	土師器	小皿	(7.0)	1.8	重,直	3/4	
2SK05	5	22	2	3	白磁	碗		2.8*	直,1	高台	
2SK05	5	22	3	2	白磁	皿		1.2*		小片	
2SK05	5	22	4	4	染付付	碗		4.75*		小片	
2SK13	13(5-12層)	22	5	1	白磁	碗		1.2*		小片	
2SD09	9	22	6	3	土師器	坏		4.1*		小片	
2SD09	9	22	7	2	土師器	甕		3.55*		小片	
2SD09	9	22	8	1	土師器	甕		3.2*		小片	
2SD10	10茶砂上	22	9	9	土師器	土鍋		3.15*		小片	
2SD10	10茶砂上	22	10	10	土師器	土鍋		2.4*		小片	
2SD10	10茶砂上	22	11	11	白磁	皿		1.4*		小片	
2SD10	10茶砂上	22	12	12	土師器	土鍋		4.7*		小片	
2SD10	10茶粘	22	13	4	須恵器	甕		1.4*		小片	
2SD10	10	22	14	1	土師器	小皿	(10.7)	1.4	(8.0)	1/4	
2SD10	10	22	15	2	土師器	すり鉢		3.25*	(8.0)	1/4	
2SD10	10	22	16	3	瓦器	柄		2.25*		小片	
2SD10	10	22	17	6	白磁	皿		2.15*		小片	口飛び
2SD10	10	22	18	5	白磁	碗		1.85*		小片	
2SD10	10	22	19	7	青磁	碗		2.35*		小片	竜泉窯系
2SD10	10	22	20	8	瓦	平瓦	6.5*	3.65*	1.85	小片	
2SX12	12	22	21	1	土師器	土鍋		5.2*		小片	
2SX12	12	22	22	4	土師器	茶釜		3.4*		小片	
2SX12	12	22	23	2	瓦器	柄		2.2*		小片	
2SX12	12	22	24	3	青磁	碗		2.1*		小片	同安窯系
2SX12	12	22	25	5	陶器	甕×甕		5.8*		小片	
2SX14	14	22	27	3	瓦器	柄		2.2*		小片	
2SX14	14	22	28	2	青磁	碗		1.85*		小片	
2SX14	14	22	29	1	青磁	鉢		1.2*		小片	
2SX23	23	23	30	1	白磁	紅皿	(4.5)	1.35	1.8	1/3	
2SX26	26	23	31	3	白磁	碗		2.0*		小片	
2SX26	26	23	32	1	青磁	小碗		2.15*		小片	竜泉窯系
2SX26	26	23	33	2	青磁	碗		3.25*		小片	竜泉窯系
2SX22	22	23	34	2	須恵器	甕		3.1*		小片	
2SX22	22	23	35	1	土師器	土鍋		2.45*		小片	
2SX22	22	23	36	3	白磁	碗		2.3*		小片	
2SX22	22	23	37	4	青磁	碗		3.7*		小片	竜泉窯系
2SX22	22	23	38	5	染付付	皿	(10.5)	2.5	(5.4)	1/8	
2SX22	22	23	39	6	土製品	土鉢	6.8	2.35*	2.3・29.5	ほぼ圆形	
茶色土	茶色土	23	40	1	白磁	碗		2.45*		小片	
茶色土	茶色土	23	41	2	白磁	小碗		2.05*	(6.5)	1/8	
茶色土	茶色土	23	42	3	青磁	碗		1.65*	(6.8)	1/9	

() は復元値、*は残存長

Tab.2 葦数保古手遺跡第2次調査A区 遺物観察表

4. 蔵敷保古手遺跡 第2次調査 (B区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字蔵敷保古手238-1に所在する。東方より八手状に広がる八女丘陵の谷部にあたり、標高10.8m位の低地に立地する。筑後北部地区県営ほ場整備事業（担い手育成型）筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、調査区は同小字内において2箇所を設置することとなったために西側調査区をA区、東側調査区をB区と称した。A区は上村英士、B区は小林勇作が調査を担当した。当調査区（B区）は、永久構造物となる道路の拡張部分と遺跡確認範囲の約411㎡を対象範囲としてし字状に設定し、発掘調査は平成17年6月6日から同年9月5日の約3ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で随時行った。なお、重機による表土剥ぎは（有）福島重機へ、航空測量業務はアジア航測（株）へ委託した。調査の結果、溝・土坑・道路状遺構等の遺構が確認され、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

溝

2SD1 (Fig.25・Tab.28・29)

調査区北部に位置した東西方向の溝であり、途中、土坑状に拡張する箇所を確認した。溝の長さは15.0m、幅0.60~1.03m、深さ0.33mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、溝底はほぼ平坦な状態を呈する。上位層は黒茶色粘質土、下位層は灰色砂がレンズ状に堆積し、一定の流水を伴っていた可能性が考えられる。もう一方で検出した土坑状に拡張した部分は、長軸2.62m、短軸1.83m、深さ0.83mを測り、溝より下位の壁坑はオーバーハング気味に抉られていた。遺構内下半の壁面は灰色砂利を呈する地山で脆く、流水に伴って崩落したためと考えられる。遺構の機能としては一般的に流水路(2SD1)を利用した溜枮的施設であったことが推測されるが、この他の様々な要因も考えられよう。2SD1から弥生土器（甕・片）を認めている。

流路

2SX2 (Fig.25・Tab.30・31)

調査区中央部で検出した東西方向の溝である。南部の溝（2SX3）及び下位の道路状遺構（2SF5）を切るように確認され、幅約5.40m、遺構検出面からの深さ0.32~0.90mを復元する。土層観察では上位層に比較的安定した粘質土が堆積していたが、下位層においては砂や砂利が混入した砂質土の発達層が見られた。また、溝底では筋状にはしる溝状遺構が認められるなど荒れた状態を呈していたことから上流からの多量の流水があったものと推測される。溝底は北部側が一段と深くなっており、レベル差異は概ね0.60m前後を測る。遺物では上位層の黒色粘土で弥生土器（甕）、須恵器（坏・甕・片）、土師器（坏・高坏・甕・壺・片）、瓦器（塊）、白磁（片）を認め、下位層の灰色砂では弥生土器（高坏・器台）、土師器（丸底坏・甕）が出土した。

2SX3 (Fig.25・Tab.30)

調査区南部で検出し、北部は溝（2SX2）に切られる。幅15.0m以上、遺構検出面からの深さは0.22~1.09mを測り、調査区南端部で溝南岸の立上りを確認する。土層観察では比較的安定した粘質土が上位層を覆い、下位層で砂質土層の発達を認めたと、溝底付近の一部では乳青灰色の沈殿層も認められた。溝底は筋状にはしる溝状遺構やピット状遺構を認めるなどの凹凸が著しい。2SX2と同様に上流から多くの流水が繰り返されていたものと思われる。遺物では上位層の黒茶色粘土で弥生土器（甕・片）、土師器（高坏・片）を認め、下位層の砂層では弥生土器（片）、土師器（片）が出土した。

不明遺構

2SX5 (Fig.26・Tab.33~38)

当遺構は調査区中央部で検出した流路 (2SX2及び2SX3北岸部) の下位で確認し、S-6~9で構成される。まず遺構の状況について述べる。遺構内北部にあるやや幅広の溝状遺構 (S-6) は、S字状に蛇行しながら流路 (2SX2) とほぼ同位を示すように東西方向へと走る。断面形は緩やかなU字状を呈するものであるが、遺構の幅や深さについては著しく変化がみられるなど不規則な状態である。S-7は遺構内東側に位置した溝状遺構であり、南部は遺構内の途中で終息する。調査区境に存在しており、終息するのではなく方向を転換することも予測される。溝状遺構 (S-8) は東西方向に走り、東から西にかけて溝幅は細く、溝底は浅くなる。S-9はこれらの溝状遺構 (S-6~8) に挟まれた空間全体を示し、当遺構の埋土はFig.26に示すように複雑な堆積状況を呈する。埋土は移相コテが刺さらないほど表面が固い面で覆われており、部分的に硬化した状況も窺えた。この埋土の性質によるものなのか、上位からの強い圧力によるものなのかなど様々な要因は考えられるが土層断面からは言及することはできないう。埋土を除去了た遺構底面では、南西部から多くの小ピット状並びに土坑状の痕跡を著しく認め、更に西部においては小石や礫が軟弱な地盤 (乳白色粘土) に対して著しく突き刺さった状態も確認された。遺構レベルは一連の溝状遺構と同じく西高東低を呈する。出土遺物はS-6から僅かに弥生土器 (片) を認めただのみである。

(3) 出土遺物

流路

2SX2検出面採集 (Fig.24・Tab.39)

弥生土器

鏝(1~4) 1は断面形が鋤先形口縁を呈する。2は上底を呈する底部細片で、底径6.0cmを測る。3は底径9.0cmを復元する。底部はやや糸切気味で上底を呈する。4は平底を呈した口縁部細片で底径8.0cmを復元する。底部から胴部にかけては湾曲気味に立ち上がる。

釥 (5) 底部細片で底径6.0cmを復元する。底部は平底を呈し、胴部へはクマ形、で立ち上がる。土師器

環 (6~9) 6~9は丸底環の口縁部細片で何れも前面磨耗のため調整不明である。6は口径12.0cmを復元し、口縁端部はやや摘み上げる。7は器肉が厚く、口径は12.9cmを復元する。9は口縁部がやや内傾する。

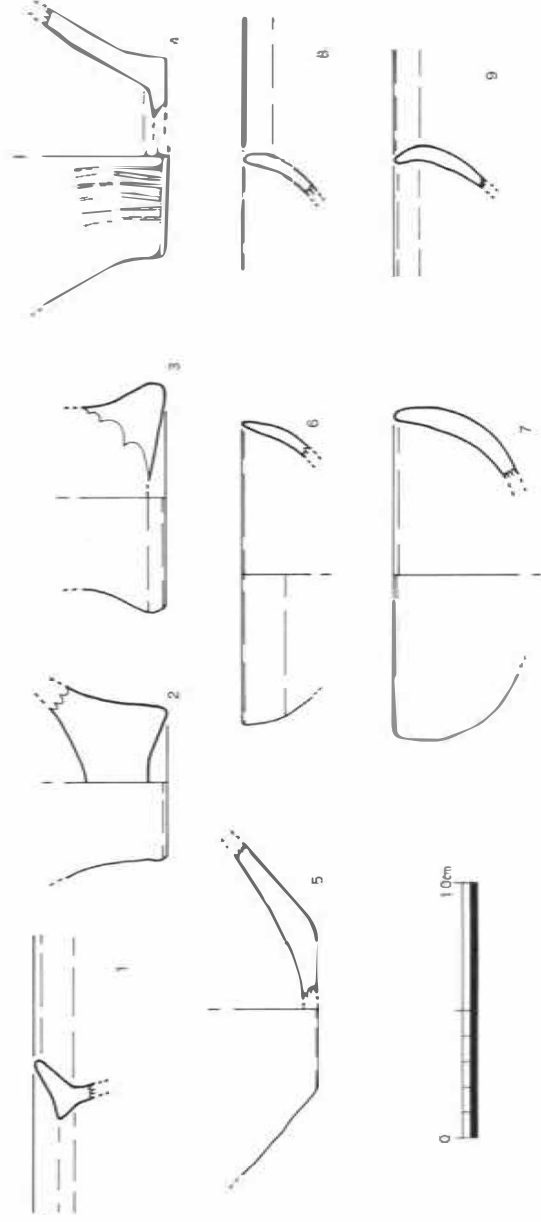
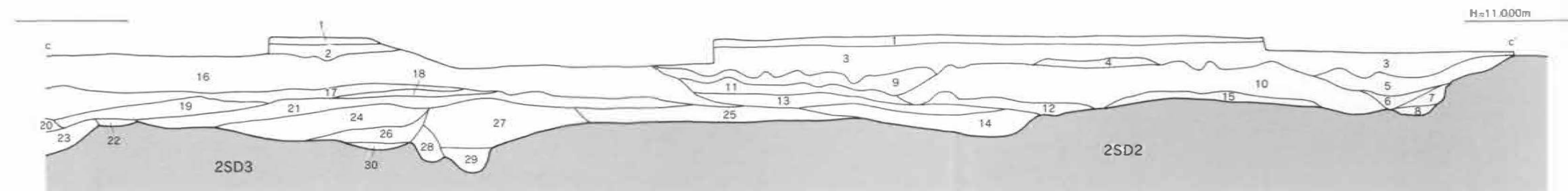
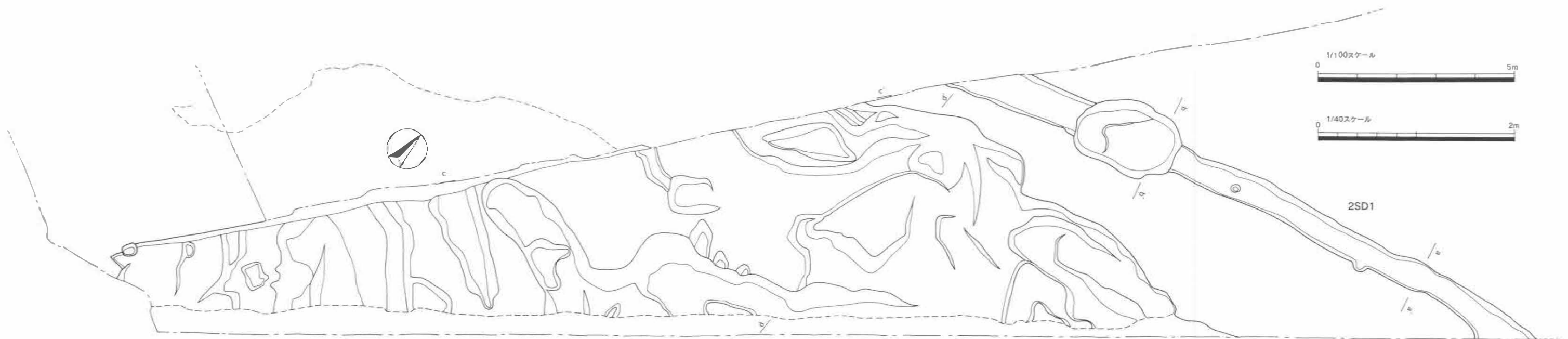
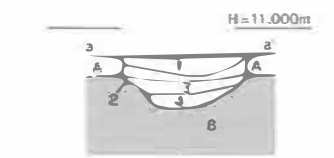


Fig.24 流路 (2SX2検出面採集) 出土遺物実測図 (1/3)



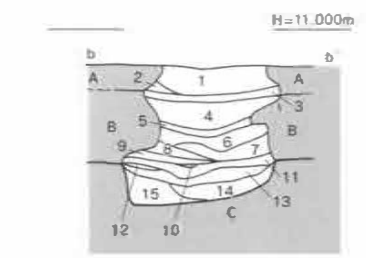
2SD2-2SD3

- | | | | |
|----------------------|-------------|-------------|--------------------|
| 1. 新黄褐色粘土(床土) | 10. 黒茶色粘質土 | 17. 黒黄灰色粘質土 | 23. 20と同じ |
| 2. 明茶色粘質土(赤土層) | (黄色粒子を多く含む) | (灰色砂を多く含む) | (灰色砂、砂利、黄色粒子を少し含む) |
| 3. 淡灰色粘質土 | 11. 黄灰色粘質土 | 18. 淡黄灰色粘質土 | 24. 黄褐色粘質土 |
| 黄色粘質土(赤土層)を多く含む | (灰色砂を多く含む) | 19. 黄褐色粘質土 | (多くの砂利を多く含む) |
| 4. 黄褐色粘質土 | 12. 黄褐色粘質土 | 20. 黄褐色粘質土 | 25. 24と同じ |
| (わずかに黄色粘土を含む) | (砂を多く含む) | 21. 黄褐色粘質土 | (砂を多く含む) |
| 5. 黄褐色粘質土(黄色粒子少量) | 13. 黄褐色粘質土 | 22. 黄褐色粘質土 | (茶灰色砂利を多く含む) |
| 6. 黄褐色粘質土(やや粘性あり) | 14. 黄褐色粘質土 | 28. 黄褐色粘質土 | 29. 黄褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粘質土 | 15. 12と同じ | 29. 黄褐色粘質土 | 30. 28と同じ(※) |
| 8. 7と同じ(茶色粘土ブロックを含む) | 16. 黄褐色粘質土 | | |
| 9. 黄褐色粘質土 | (黄色粒子を少し含む) | | |
| (黄色茶色粒子を少し含む) | | | |



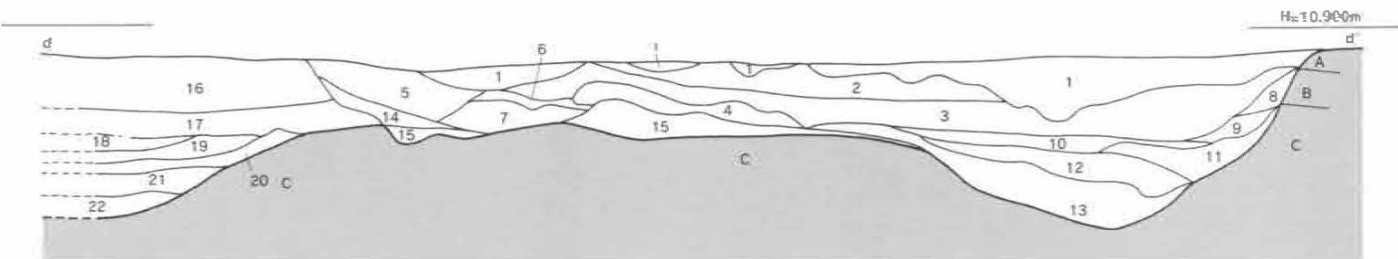
2SD1 北ベルト

1. 黒茶色粘質土
 2. 黒茶色粘質土(黄色粒子を少し含む)
 3. 灰色砂(砂利を多く含む)
 4. 黄褐色粘質土(黄色粒子を多く含む)
- 地山 A. 黄褐色粘質土
B. 黄褐色粘質土



2SD1 南ベルト

1. 黒茶色粘質土
 2. 淡茶色粘質土
 3. 黄褐色粘質土
 4. 黄褐色粘質土(黄色粒子多量)
 5. 黄褐色粘質土(砂利を多く含む)
 6. 黄褐色粘質土(茶色粒子を多く含む)
 7. 5と同等
 8. 6と同じ(白色ブロック多量)
 9. 白色粘土(黄褐色粘質土)
 10. 黄褐色粘質土
 11. 9と同じ
 12. 10と同じ
 13. 黄褐色粘質土(砂利を多く含む)
 14. 淡黄灰色粘質土+粘質土
 15. 黄褐色粘質土
- 地山 A. 黄褐色粘質土
B. 黄褐色粘質土
C. 灰色砂利



2SD2(1~15)-2SD3(16~22)

- | | | | |
|-------------------|------------------|----------------|-------------|
| 1. 淡黄灰色粘質土 | 8. 黄褐色粘質土 | 15. 黄褐色粘質土 | 地山A. 黄褐色粘質土 |
| (茶色、黄色粘土の砂利を多く含む) | (砂利を少し含む) | (表面は硬い) | B. 灰色砂利 |
| 2. 黄褐色粘質土 | 9. 黄褐色粘質土 | (黄褐色粘質土+灰色砂利) | C. 黄褐色粘質土 |
| 3. 黄褐色粘質土 | (黄色粒子を多く含む) | 16. 淡黄灰色粘質土 | |
| 4. 淡黄灰色粘質土 | 10. 7と同じ | 17. 3と同じ | |
| (黄褐色粘質土を少し含む) | 11. 黄褐色粘質土+白色粘土層 | 18. 黄褐色粘質土 | |
| 5. 灰色砂利 | 12. 黄褐色粘質土 | 19. 黄褐色粘質土 | |
| (黒色粘質土を少し含む) | (黒カブ粘土を少し含む) | (黄褐色粘質土+底白色砂利) | |
| 6. 黄褐色粘質土 | 13. 黄褐色粘質土 | 20. 黄褐色粘質土 | |
| (わずかに黄色粘土を含む) | (黄褐色粘質土を少し含む) | (黄褐色粘質土) | |
| 7. 黄褐色粘質土 | 14. 灰色砂利 | 21. 19と同じ | |
| (黄色砂を多く含む) | | 22. 黄褐色粘質土+砂利層 | |

Fig.25 溝(2SD1)、流路(2SX2・3)実測図(1/40・1/100)

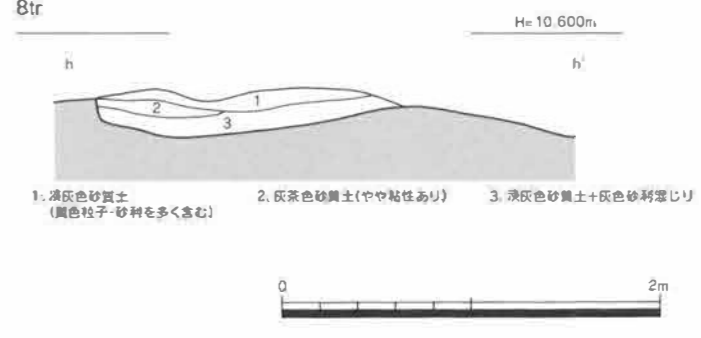
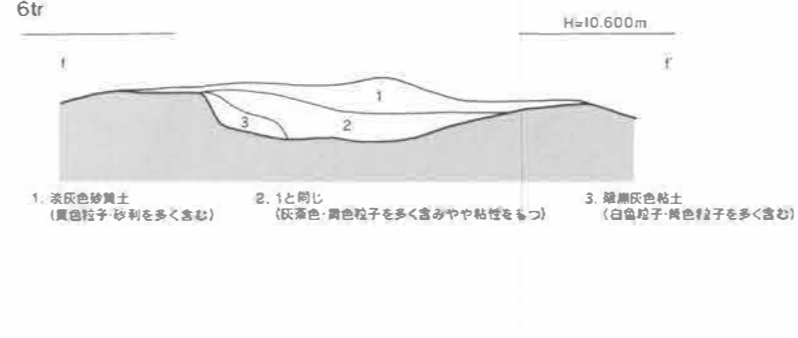
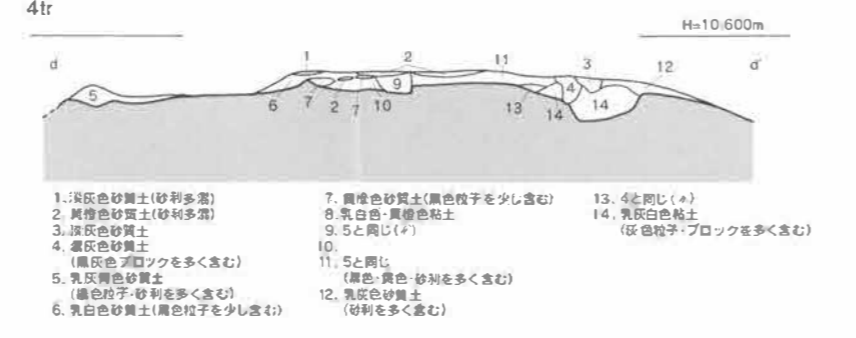
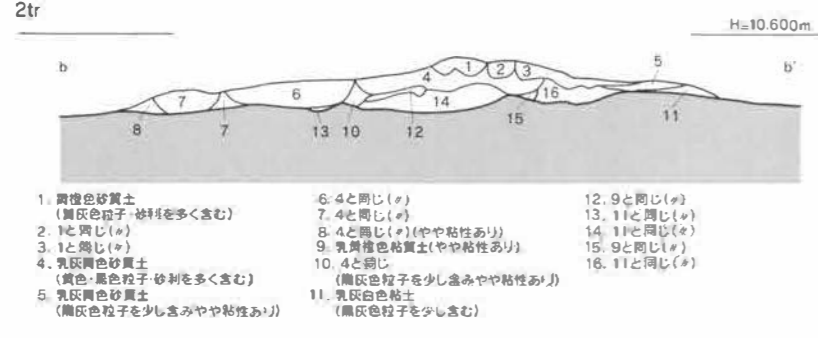
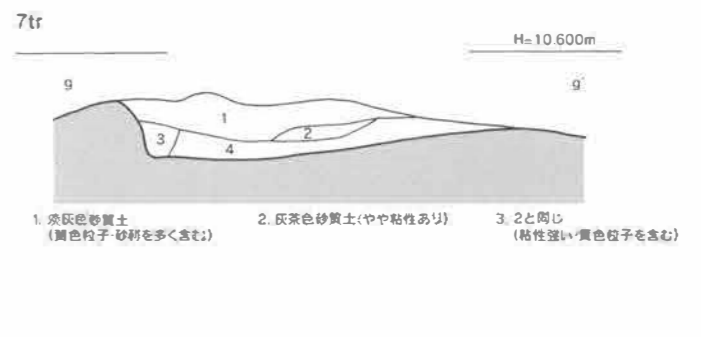
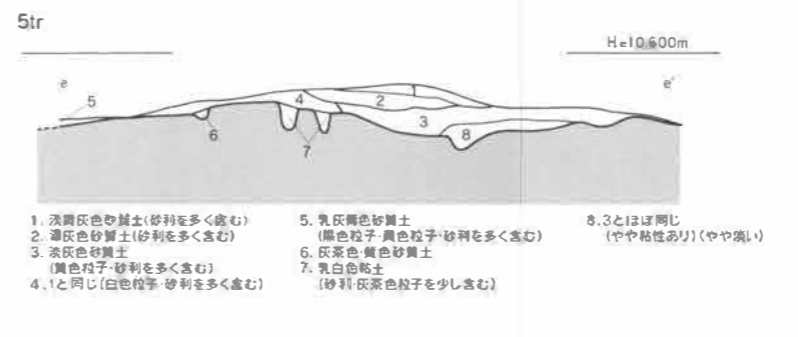
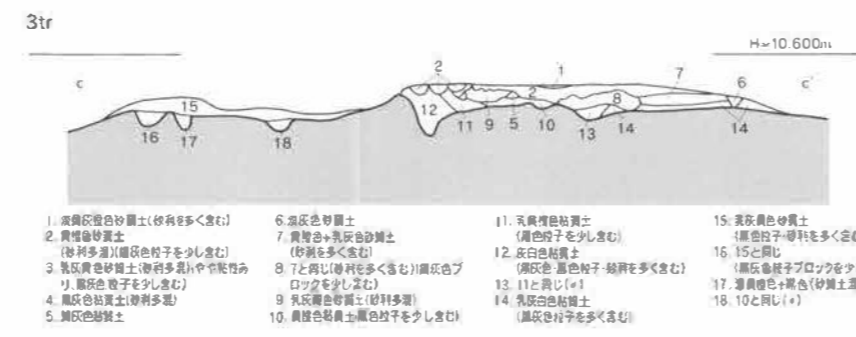
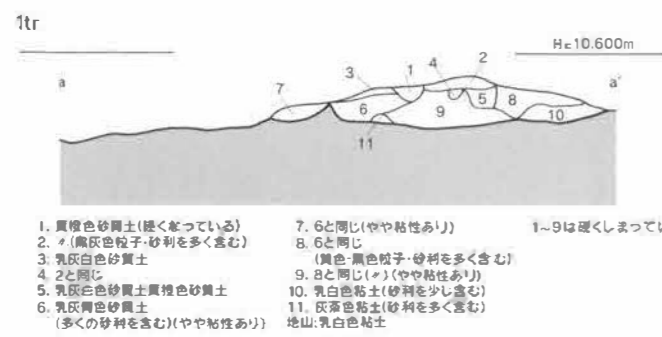
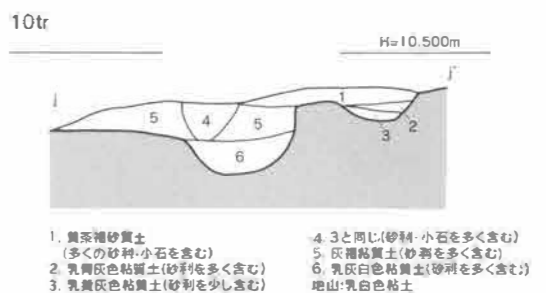
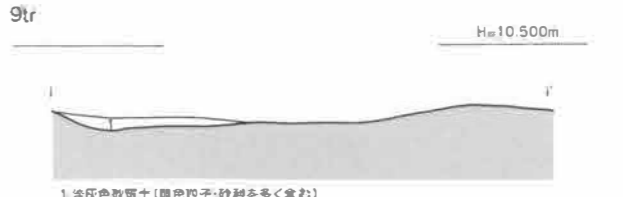
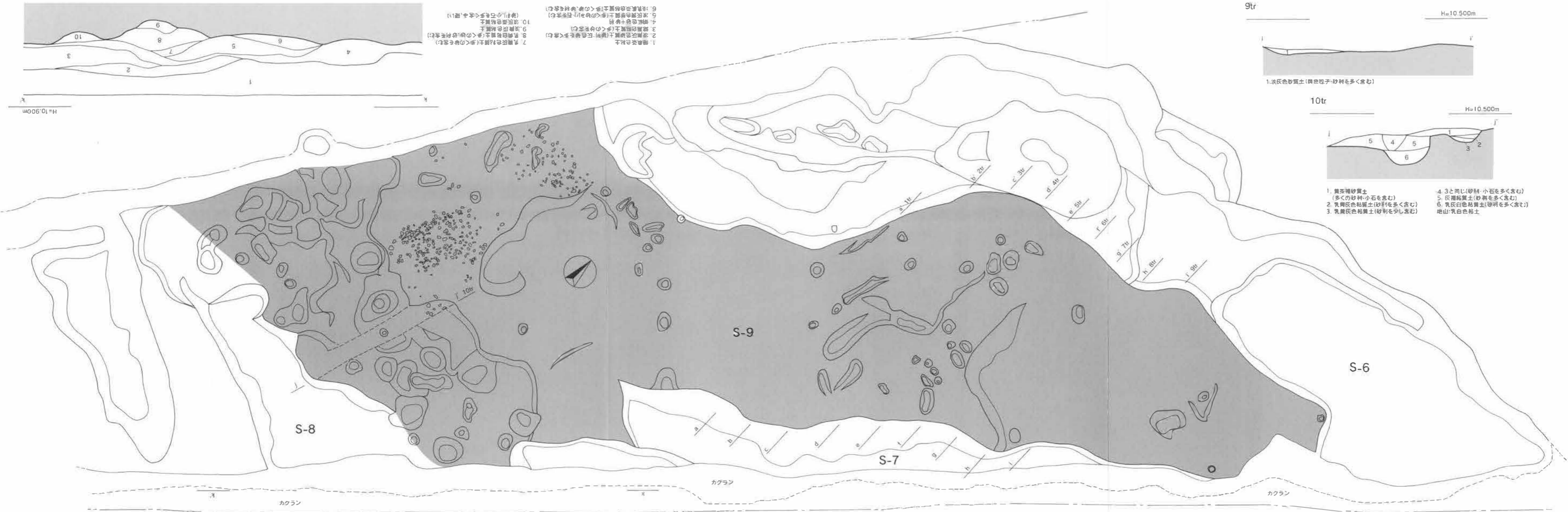


Fig.26 不明遺構 (2SX5) 実測図 (1/40)

2SX2黒色粘土 (Fig.27・Tab.39~41)

弥生土器

甕 (10~12) 10・11は「く字状」口縁を呈し、11は口径9.9cmを復元する。12は平底を呈する底部細片で底径10.0cmを復元する。

須恵器

坏 (13) 底部細片で底径7.6cmを復元する。外底部は回転ヘラケズリ、内面はナデである。

甕 (14) 肩部の細片で、外面に平行叩き文、内面上位にヨコナデ、下位に同心円文を施す。

土師器

坏 (15~22) すべて丸底坏である。著しく磨耗した破片が多く、調整痕は判別できた範囲で記す。15は手握ね土器で口径3.2cm、器高2.1cmを測る。16は口縁部の一部が歪んでおり、口径は最大で14.0cmを復元する。器肉は厚く、やや深めの坏で器高は7.1cmを測る。底部は手持ちヘラケズリ後ミガキを施す。17はやや内傾した口縁部を呈し、口径14.0cmを復元する。口縁部外面はヨコナデを施す。18はやや深みのある坏で口径14.8cm、器高6.0cmを復元する。口縁端部は僅かに内傾する。19は口径15.0cm、器高5.75cmを復元する。底部外面は手持ちヘラケズリ、口縁部外面及び内面はミガキを施す。20は厚手でやや内湾した口縁部を呈し、口径16.2cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。21は口径16.9cmを復元する。内面及び底部外面上位は丁寧なミガキ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面下位は手持ちヘラケズリを施す。22はやや内傾した口縁部を呈し、口径17.1cmを復元する。

甕 (23) 口径15.4cmを復元する。口縁部は緩やかに外反し、口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面は横方向の刷毛目、肩部内面はケズリを施す。

壺 (24~26) 24は外方へ湾曲した口縁部を呈し、内外面はミガキを施す。口径は12.0cmを復元する。25はラッパ状に立上がる口縁部を呈し、口径9.6cmを復元する。内外面はミガキを施す。26は胴部細片で胴部最大径は16.3cmを復元する。内面はケズリ、外面は刷毛目を施す。

高坏 (27~31) 27は坏部の細片で坏部は丸みを帯びる。著しく磨耗しており、調整不明。28~31は脚部破片であり、28は脚部径8.9cm、29は脚部径9.2cm、30は脚部径9.5cm、31は脚部径11.2cmを測る。何れも器面磨耗のため調整不明である。

甕 (32) 把手部はナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデの調整を施す。

瓦器

碗 (33) 底部細片で高台径7.3cmを復元する。胎土は微砂粒を多く含み、表面は磨耗のため調整不明である。

白磁

碗 (34) 体部細片で淡灰白色の素地に淡灰白色釉を内面に施す。外面は露胎でケズリの調整。

2SX2灰色砂 (Fig.28・Tab.41・42)

弥生土器

甕 (35・36) 35は外方へ湾曲した口縁部を呈し、口径12.4cmを復元する。36は「く字状」を呈する口縁部破片で口径14.0cmを復元する。共に磨耗のため調整不明である。

土師器

坏 (37~42) 37~41は丸底坏である。38は口径14.4cmを復元し、口縁端部はやや肥厚する。39は口径14.5cmを復元し、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。40は口径15.0cmを復元し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は丁寧なミガキ、体部外面は手持ちヘラケズリ後一部ミガキを施す。41はやや内傾した口縁部を呈し、口径16.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は不定方向のナデ、体部外面は手持ちヘラケズリを施す。42は口径15.6cm、底径8.8cm、器高4.0cmを測る。口縁部内外面及び体部外面はヨコナデ、体部内面は不定方向のナデ、底部外面は糸切り後ナデを施す。

甕 (43・44) 43は「く字状」に屈曲した口縁部を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はケズ

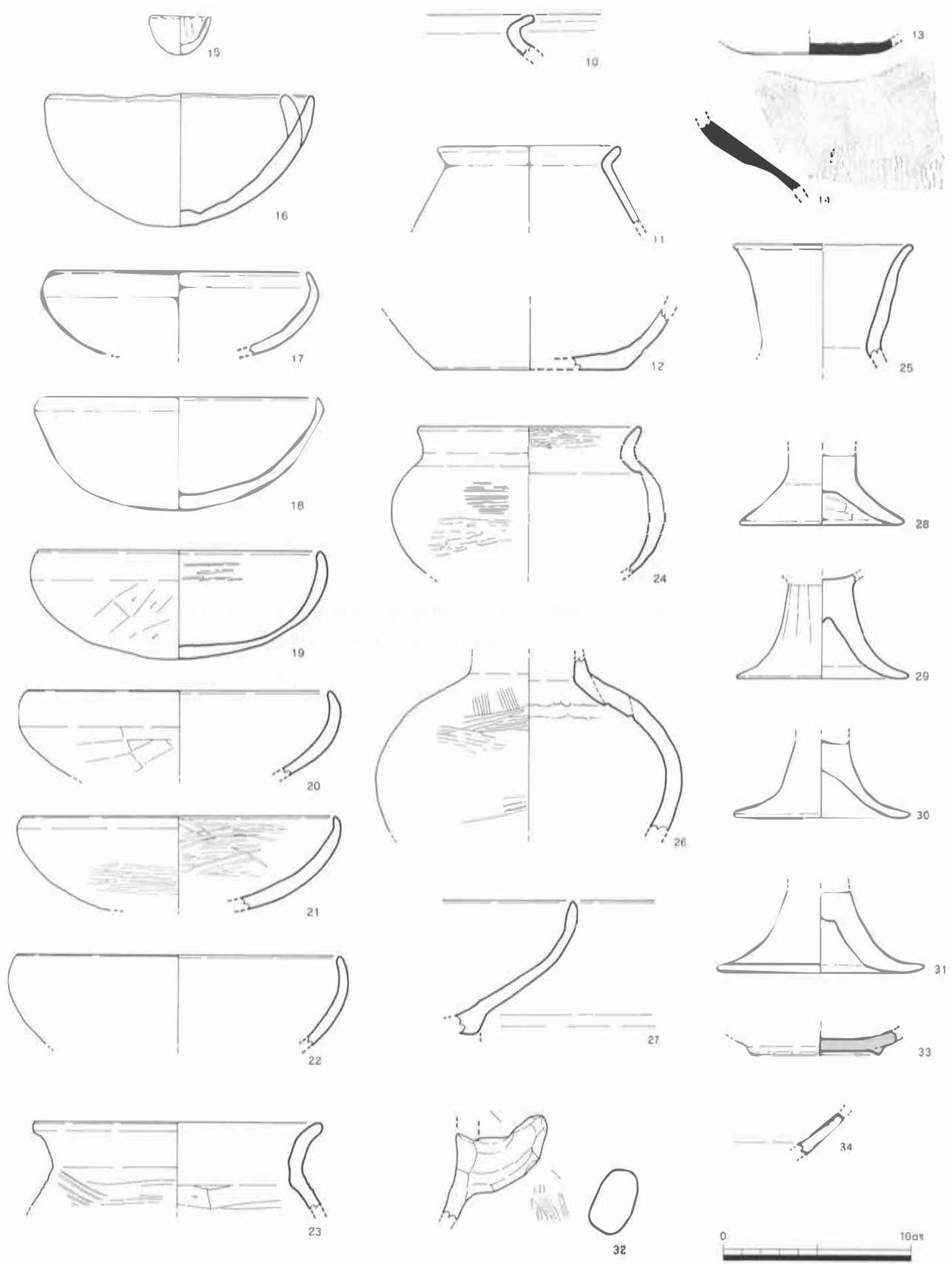


Fig.27 流路 (2SX2黑色粘土) 出土遺物実測図 (1/3)

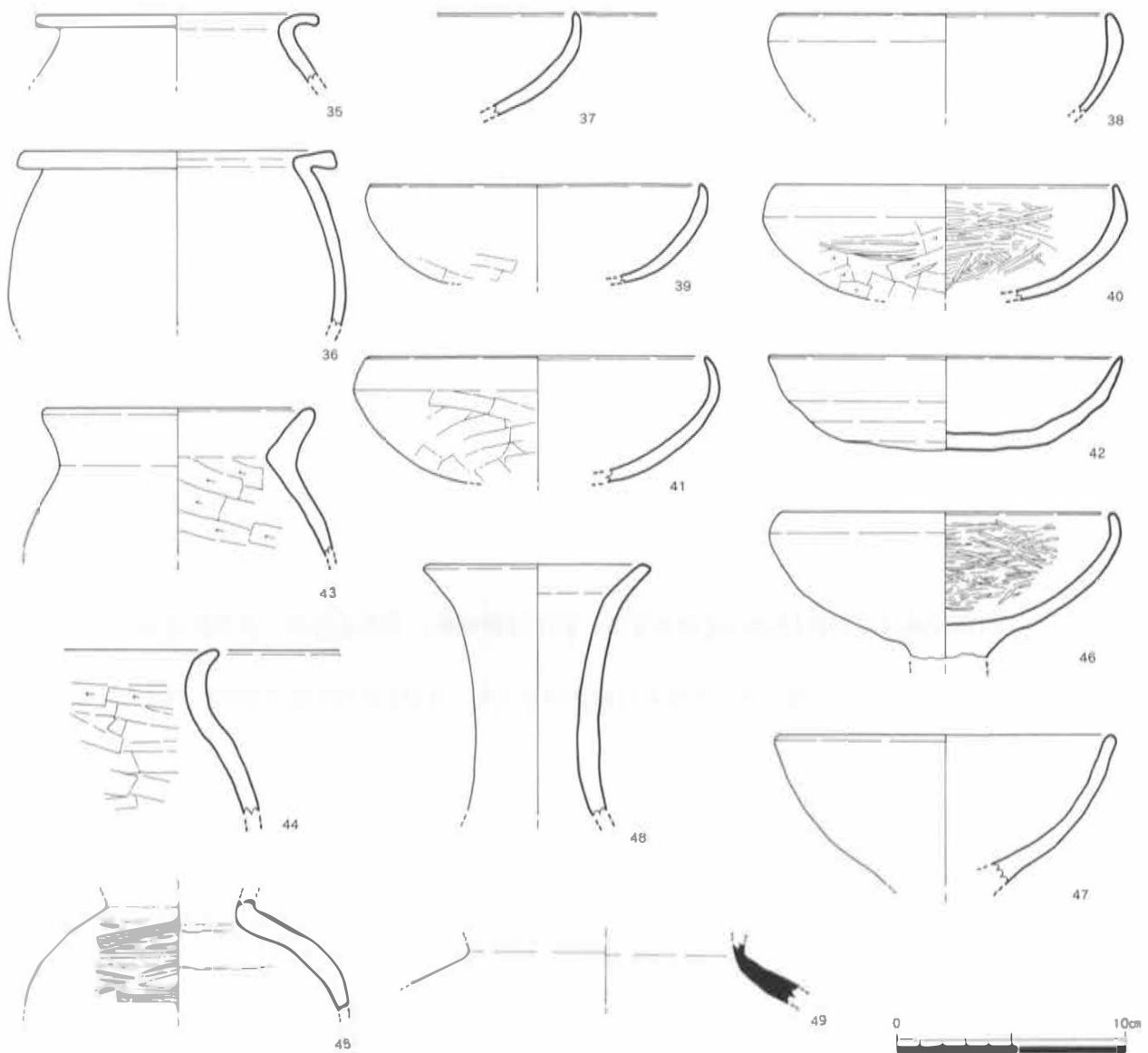


Fig.28 流路 (2SX2灰色砂) 出土遺物実測図 (1/3)

リを施す。体部外面は磨耗のため調整不明。44は緩やかに外反する口縁部を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はケズリ、体部外面はナデの調整を施す。

壺 (45) 肩部の細片で外面は横方向の刷毛目を施す。内面は粘土接合痕跡を認めるが磨耗のため調整は不明である。

高坏 (46・47) 共に丸みを帯びた坏部の破片である。46は口径14.65cmを測り、内面には丁寧なミガキ痕が残る。外面は磨耗のため調整不明。47は口径15.0cmを復元する。胎土に微砂粒、石英、角閃石、雲母を含む。磨耗のため調整不明。

器台 (48) 口径10.0cmを測る。磨耗のため調整不明で胎土は微砂粒、石英、角閃石を含む。

須恵器

甕 (49) 肩部細片で外面に自然釉がかかる。胎土は微砂粒を多く含み、色調は淡灰色を呈する。

2SX3 (Fig.29・Tab.42)

弥生土器

甕 (50・51) 50は上底を呈する底部細片で底径4.4cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデを施す。51は平底を呈する。表面磨耗のため調整不明。

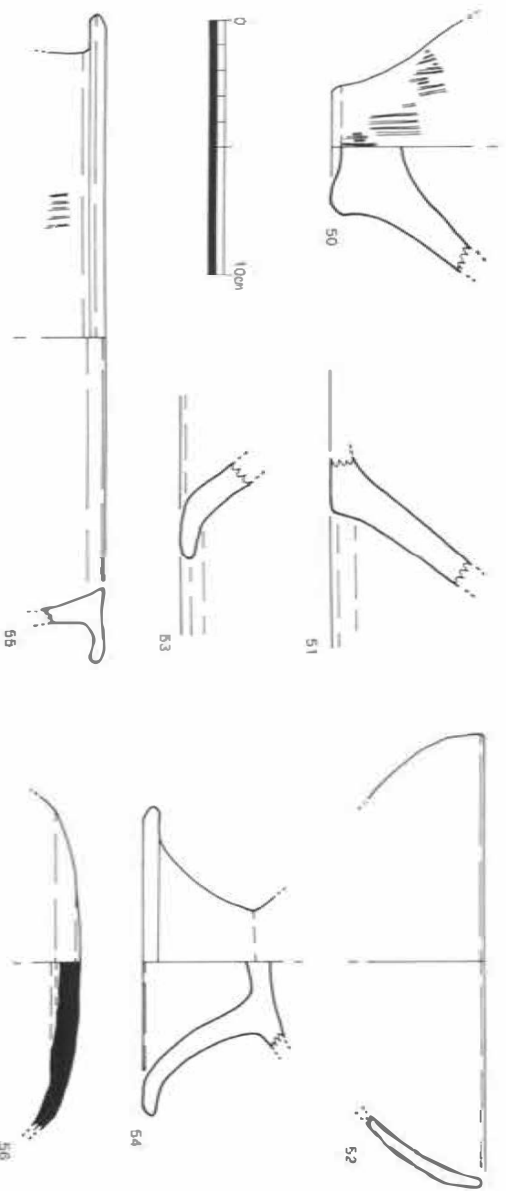


Fig.29 流路 (2SX3)、カクラン、表土出土遺物実測図 (1/3)

土師器

坏 (52) 口縁部細片で口径18.0cmを復元する。胎土は微砂粒、石英を含み、表面は磨耗のため調整不明である。

高坏 (53・54) 53は脚端部の細片、胎土は微砂粒を含む。54は脚部の長さか短いナイフで脚部径は12.2cmを測る。表面磨耗のため調整不明。

カクラン (Fig.29・Tab.42)

弥生土器

甕 (55) 口縁部細片で鋤先形口縁を呈する。口径25.6cmを測る。

表土 (Fig.29・Tab.42)

須恵器

坏 (56) 天井部細片で外面は回転ヘラケスリ、内面はヨコナデである。

(4) 小結

今回は狭小の調査区設定にもかかわらず溝1条、流路2条などの遺構に加え、弥生時代から古墳時代、中世の遺物を得ることができた。

調査区北部で確認された溝 (2SD1) と流路 (2SX2・3) は、東西方向に走るものである。調査中、付近に住む男性が現場へ立ち寄り、「雨期になるとこのあたり (現場周辺) は昔から水路が氾濫して一気に水没してしまうほど水が集中する場所だよ」と語られていた。当地は北部並びに南部に展開する八女丘陵に挟まれた谷部にあたる。先の語から予てよりこの地形的作用を多分に受けて自然派生した遺構であることが窺い、如ることででき、検出された一連の流水路は地形的作用を多分に受けて自然派生した遺構であることが窺いられる (当調査区西側にあたる歳数保古手遺跡1次並びに2次C区の調査区からも同様の溝・流路を検出している)。流路 (2SX2・3) 下層からは5C後半を主体とする遺物を出しており、当該期を遺構形成時期下限としておきたい。上層では瓦器、白磁等の遺物を含んでおり、埋没に至るまでには相当の期間があったものと思われる。

流路下位より検出した2SX5は、遺構の残存状態から流路とは関係のない別の遺構としての見方を強めて調査を進めたところであったが、遺構の機能や性質を判断することができず今回は不明遺構として報告するに留まった。しかし、当遺構を構成する溝状遺構 (S-6~8) 並びにこの遺構に挟まれた空間 (S-9) を含む各パーツを同一時期の所産で意図的に構築された遺構であったと想定すると、道路状遺構に類似するところ認められる。2SX5と道路状遺構との接点について、少々乱暴ではあるが当遺構

を道路状遺構のパーツに当てはめた場合、「①遺構全体 (S-6~9) = 切り通し、②溝状遺構 (S-6~8) = 側溝、③硬化した埋土及びその空冊 (S-9) = 路面」と置き換えることができる。道路の認定とタイプについては山村氏著書の「大宰府周辺の道路状遺構 (註1)」が著名であるが、その充分条件として「1.路面と認定できる状況、切り通しにみられる道路状遺構に舗装や硬化面を伴うこと 2.切り通し、土塁 (土橋)、橋梁や側溝などの関連施設を伴うこと 3.轍跡などの通行を示す痕跡を伴うもの 4.一定距離をおいて2地点以上で存在が確認できること」をあげている。当遺構はこの充分条件に対して1及び2に関しては概ね満たされているものと考えるが、以下の2項目の内容については立証できていないのが現状である。当遺構を流路が形成される段階から埋没過程に至るまでの痕跡である可能性も否定できないために道路状遺構として判断するにはより一層の条件提示が必要であると考え。今後の調査事例が期待される。

(引用文献)

註1 山村信榮 「大宰府周辺の道路状遺構」 泉州考古学第46号 鹿山園 (1994)

5. 蔵敷保古手遺跡 第2次調査 (C区)

1) はじめに

当遺跡は筑後市蔵敷保古手に所在して、調査区は水路新設予定地のために南北75m、東西46mと南北に細長く、J 飛渡児島本線の西側に隣接平行して位置し、標高11.3m～11.5mの低地に立地している。調査区中央には水路が走っているためにそれを境に北側調査区、南側調査区と本文では表記している。平成17年6月27日より(有)福島重機に表土を除去を委託し調査を開始した。その際にJR沿線の隣接地のために重機が動く間、列車の安全と事故防止として監視員を(株)にしけいに委託した。また、同一理由によりラジコンを使用して行う航空測量をとりやめ、手測りによる平面図作成を(株)アジア航測に委託した。同年8月31日に(有)空中写真企画に委託した空中写真撮影をもって調査は終了となった。

2) 検出遺構 溝

2SD01 (Fig.31・Pla.43)

北側調査区北端で検出された若干カーブを描きながら東西方向に走る溝である。規模は幅0.6m、深さ0.2mで断面は緩やかなU字状を呈する。土師器の細片が出土したが図化出来るレベルではなく、また時期不明である。

2SD05・2SD06 (Fig.31・Pla.44)

北側調査区で検出された東西南方向に走る溝である。調査区東側では地山を挟んで北側の幅10mと南側の幅8mで検出したのだが、西側部分ではそれらが合流しており明確に分けることが出来なかった。北側の幅10mの方を2SD05、南側の幅8mの方を2SD06とそれぞれ遺構番号をつけたのだが土層図(Fig.31)を見ると粗い砂粒やシルトなどが堆積しているために自然流路であることが分かる。またそれれぞれが判りありついたり、堆積を繰り返していたり、査地点周辺は西側に陥っており標高が低くなるために東側より流れがSD05、SD06を通り調査区内で合流したのたろう。また、2SD05内で幅1.5mの調査区外に延びているため溝が土坑か不明な遺構を2SD05a、幅1mの細い溝が2SD05bと細分して表記してある。

2SD08 (Fig.31・Pla.46)

南側調査区北端で「く」字状に検出された。幅約2m、検出面よりの深さ0.8mを測る。遺構内の中位がオーバーハンクしており(Fig.31)流路であった事が伺える。遺物は土師器の細片が出土したが図化出来るレベルではなかった。

土坑

2SK03 (Fig.30・Pla.43)

北側調査区で検出し東側調査区外に延びていく。長さが約2.2m、検出面よりの深さが0.15mと浅い土坑である。遺物は土師器の細片が出土したが図化出来るレベルではなかった。

2SK04 (Fig.30・Pla.44)

北側調査区SK03より南側で検出された幅約2.0m、検出面よりの深さが0.4mを測る。長楕円形を呈する土坑であるが南側を攪乱により削平されている。断面形態はすり鉢状を呈しているが、中心部で一部下がっている。

2SK07 (Fig.32・Pla.46)

南側調査区の北端で検出された不定形を呈する大型の土坑である。一部は西側調査区外に延びており、深さは検出面より0.2mを測る。また、この土坑は2SD08を切っている。

2SK09 (Fig.32)

南側調査区で検出し東側調査区外に延びていく。長さが約2.1m、検出面よりの深さが0.5mを測る土坑である。遺物は土師器の細片が出土したが図化出来るレベルではなかった。

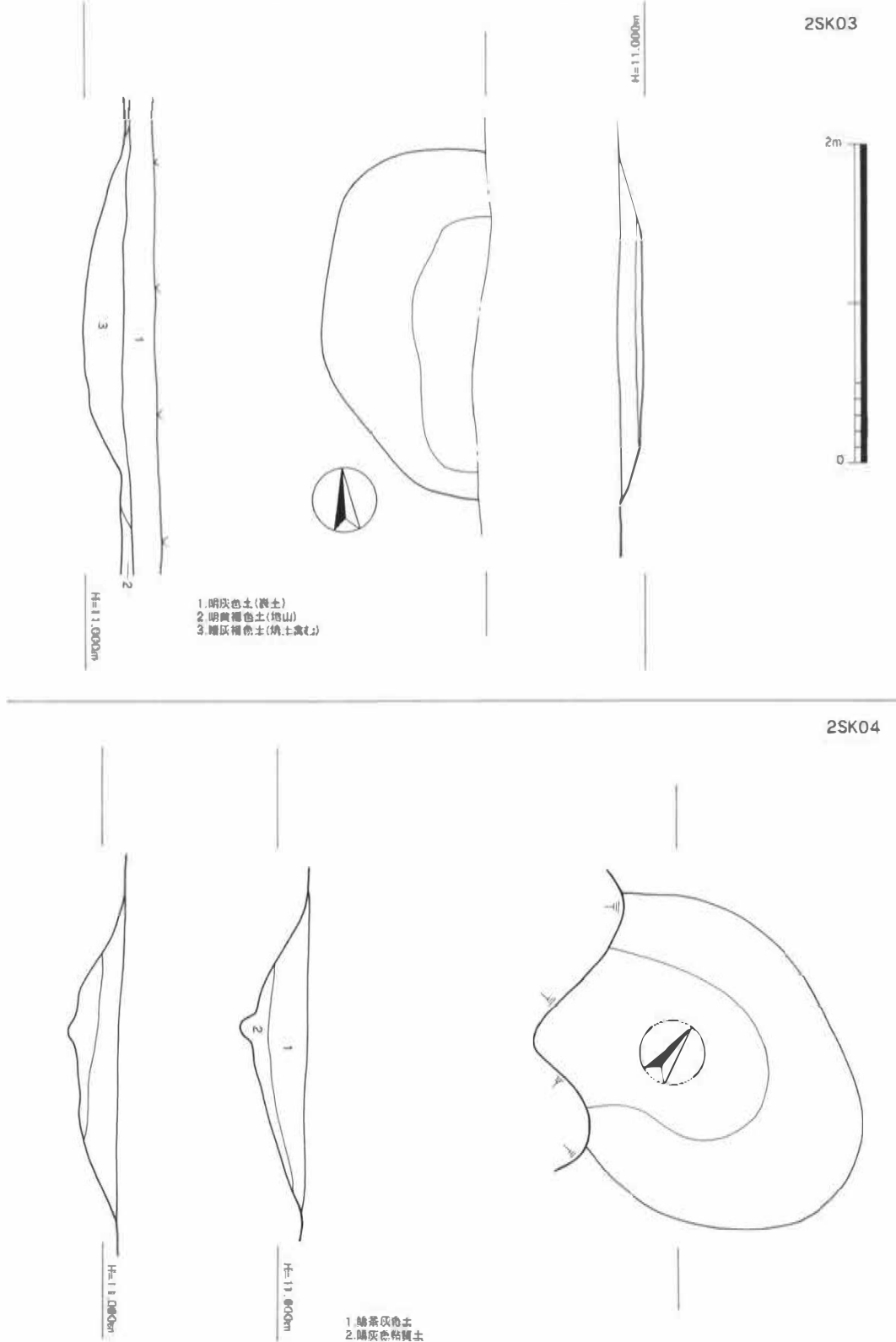
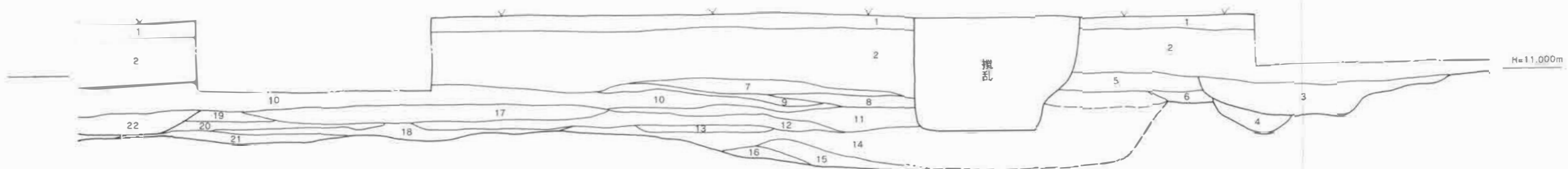
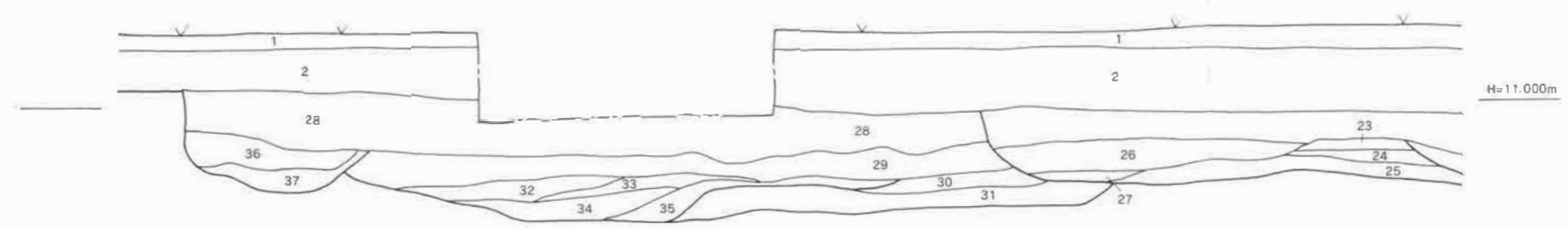


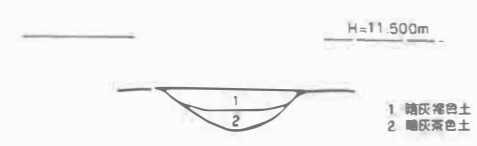
Fig.30 2SK03・2SK04 遺構実測図 (1/40)



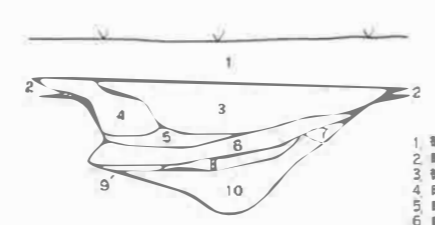
1. 暗灰色土(表土)
2. 暗茶褐色土
3. 暗灰色土
4. 明灰色砂質土(S-56)
5. 明茶褐色砂質土
6. 明灰色砂質土
7. 明灰色砂質土
8. 暗灰色砂質土(粘土ブロック混)
9. 暗茶褐色砂質土
10. 暗灰色粘土質
11. 暗茶褐色砂質土(シルトがうすく互層にたいせき)
12. 暗灰色粘質土
13. 明灰色砂質土
14. 明茶褐色砂質土(粘質ブロック・シルトなど互層になる)
15. 暗茶褐色粘質土
16. 暗茶褐色砂質土(相い)
17. 暗灰色粘質土
18. 暗茶褐色砂質土(相い)
19. 暗茶褐色砂質土
20. 暗茶褐色砂質土(粘質ブロック多く混じる)
21. 暗茶褐色砂質土
22. 暗灰色土
23. 暗灰色砂質土
24. 暗灰色砂質土
25. 暗灰色砂質土(相い)
26. 暗茶褐色粘質土
27. 暗茶褐色砂質土(相い)
28. 暗茶褐色土(酸化マンガンを)
29. 暗茶褐色粘質土
30. 暗茶褐色砂質土
31. 暗茶褐色砂質土(相い)
32. 暗茶褐色砂質土
33. 暗灰色粘質土
34. 暗茶褐色砂質土
35. 暗茶褐色粘質土
36. 暗茶褐色粘質土
37. 暗灰色粘質土



2SD05 土層図

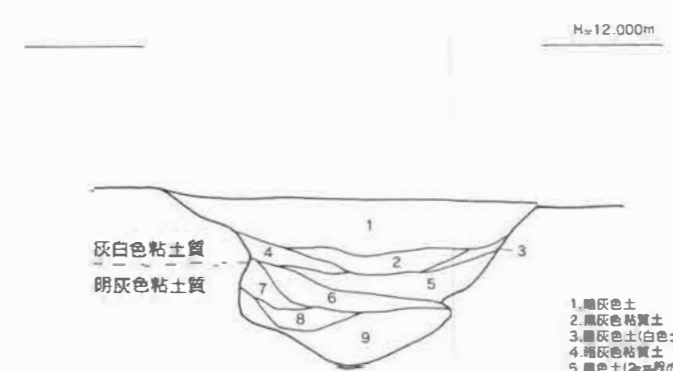


2SD01 東壁土層図



2SD08 東壁土層図

1. 暗茶褐色土
2. 暗茶褐色土(地山)
3. 暗灰色土
4. 暗灰色土
5. 暗茶褐色粘質土
6. 暗茶褐色粘質土
7. 暗灰色土(黄褐色ブロック混)
8. 黒色土(2mm程の小礫多く混じる)
9. 暗灰色土
10. 暗茶褐色砂質土



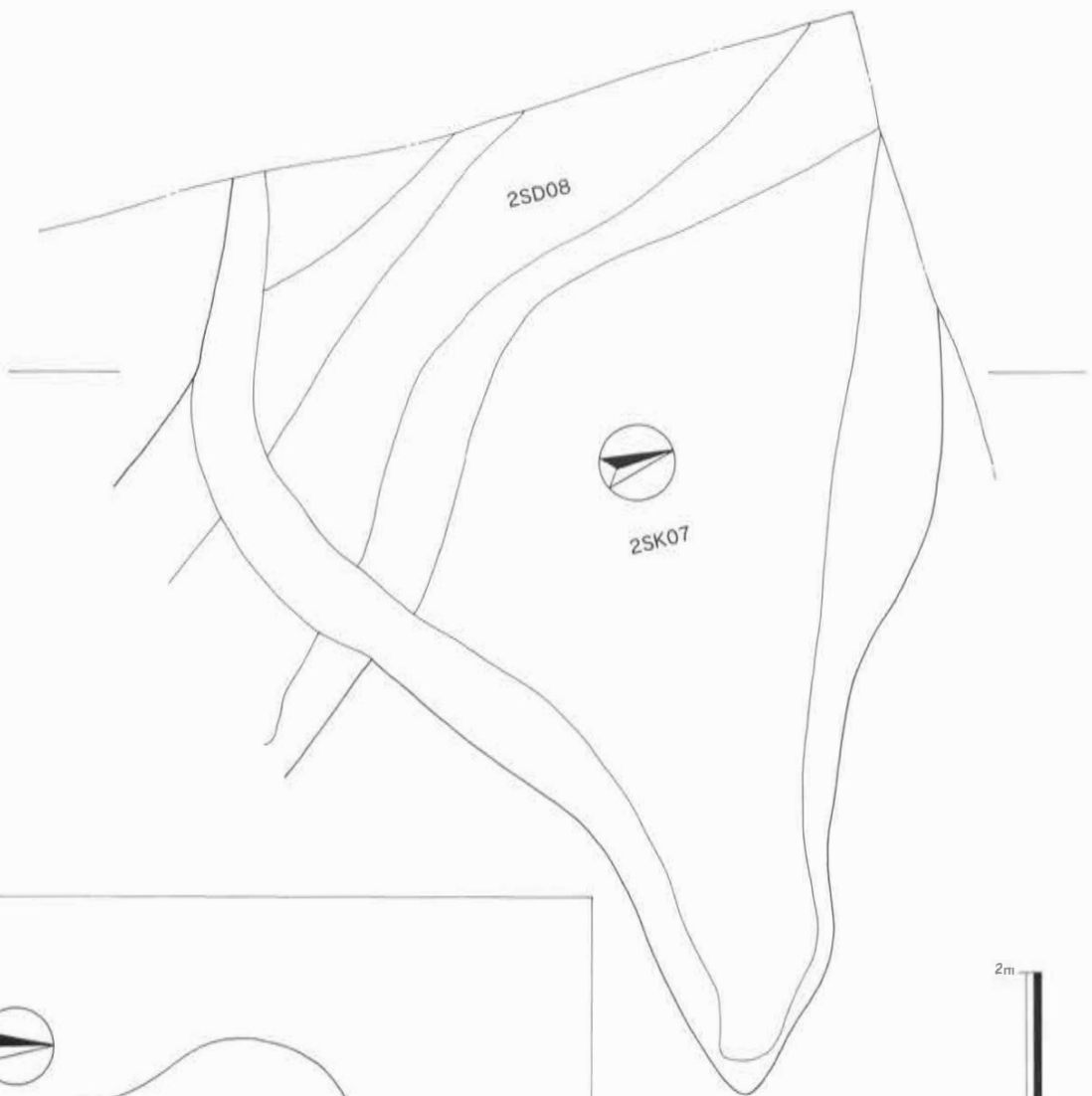
2SD08 ヘルト土層図

1. 暗灰色土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰色土(白色土ブロック混)
4. 暗灰色粘質土
5. 黒色土(2mm程の小礫多く混じる)
6. 暗茶褐色砂質土
7. 暗茶褐色砂質土
8. 暗茶褐色砂質土
9. 暗灰色粘質土



Fig.31 保古手2C土層図

2SK07



2SK09

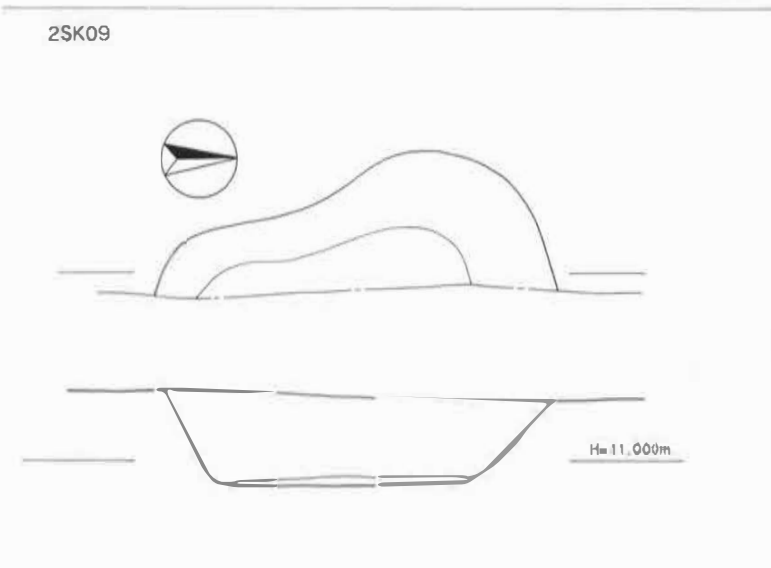


Fig.31 2SK07・2SK09遺構実測図 (1/40)

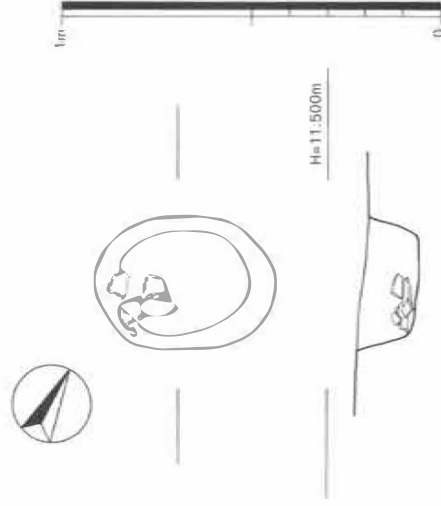
ピット

2SP02 (付図)

2SD01を切っている幅0.3mを測る円形ピットである。出土遺物は土師器の細片が一点出土しただけであり時期などは不明である。

2SP11 (Fig.33・Pla.47)

南側調査区に位置し長軸0.5m、短軸0.35m、深さは検出面より0.15mを測る。平面はやや楕円形を呈している。遺構底面に遺物が良好な状態で出土していたが復元すると甕の口縁と高杯の脚部であった。



不明遺構

2SX10 (付図・Pla.48・49)

南側調査区内で遺構全体図(付図)に破線で囲まれている範囲内に細かい凹凸面があり、そこから遺物が出土したため遺構番号をつけたのだが凹凸の深さは非常に浅く不定形に広がっているためにおおよその範囲だけを破線で囲って図化した。

3) 出土遺物 (Fig.34・35・Pla.50・51)

2SD05 (1)

甕もしくは鉢の底部である。磨耗が激しく調整痕が見えない。

2SK04 (2・3)

2は土師器の杯である。外面中に強いヨコナデを施し外側に開きながら立ち上がる。3は白磁の碗である。体部外面下半が露胎を呈してあぶみ部分には沈線が施されている。

2SK07 (4~7)

4は土師器の杯と思われる。復元による口底縁は14.0cmと大型であまり外面には細い工具を使用したと思われる回転ケズリ痕が段になって残る。底部切り離しは糸切りによる。5は甕である。鋤先口縁を呈しているがローリングによる磨耗ひどく、SD08に帰属する遺物だと思われ。6は白磁の皿である。体部外面下半が露胎を呈している。7は権鉢である。内外面は暗茶褐色を呈する。1単位10本の摺り目を施す。

2SX10 (8・9)

8・9どちらも蛇ノ目刺きを施し、体部外面の高台脇から下半が露胎を呈している白磁碗である。8は9よりも量付け部分が薄く、復元底径が大きいため8・9は別個体である。

2SP11 (10・11)

10は甕である。体部は外面に縦方向のハバ調整、内面は斜め方向にケズリを施す。口縁部は外側に直線的に開き、全体的に器壁は薄く、シャープである。11は高杯の脚部である。脚部上端部は割れ口ではなく成型状態で残存しているために杯との接合は杯の底部をソケット状に施し接合したと思われる。しかし、杯部分は出土しておらず、杯との接合部分部分が剥離していたのだろう。

表採 (12~18)

12~14は甕の口縁部片である。磨耗が激しく調整痕は看取されない。15は甕の底部である。底部中央を窪ませているが、磨耗が激しく調整痕看取されない。16は白磁の底部である。高台脇から高台内面は露胎であり見込みには貫入が入る。17は三星もしくは4足のハマか？中央が円孔してあり足の端部にはガラス状黒釉が付着する。18 (Fig.35) は明青色を呈する鉛ガラス製の管玉である。

Fig.33 2SP11 出土状況 (1/20)

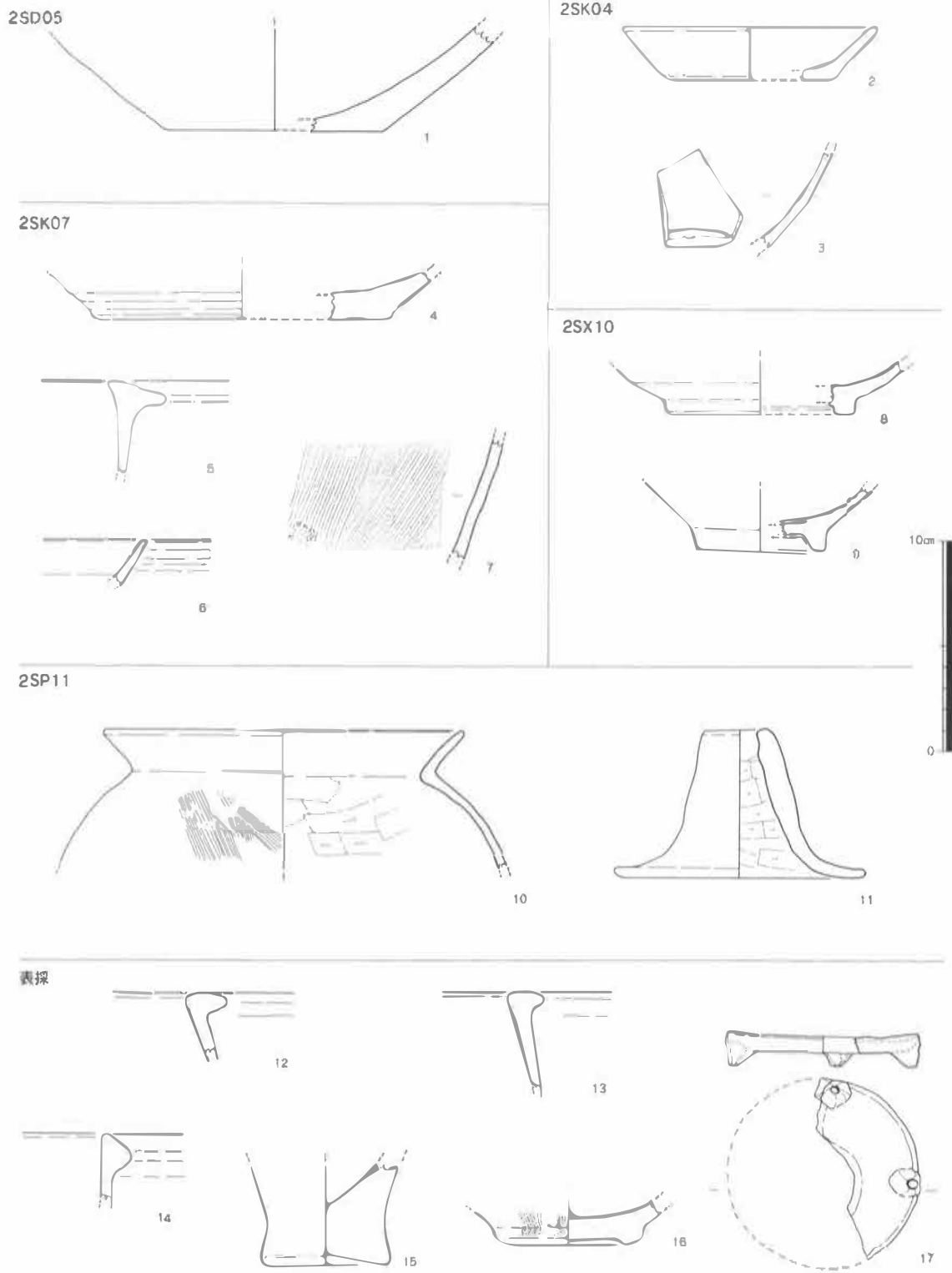


Fig.34 蔵数保古手2次C出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	色調
1	土師器鉢	—	(10.0)	—	底部1/2	淡灰茶色
2	土師器杯	(12.1)	(7.5)	2.4	1/3	淡橙茶色
4	土師器杯	—	(14.0)	—	底部1/3	暗茶褐色
8	白磁碗	—	(9.0)	—	底部1/3	淡緑白色
9	白磁碗	—	(6.0)	—	底部1/2	淡灰白色
10	土師器甕	(17.0)	—	—	口縁部1/2	淡橙茶色
11	土師器高杯	—	11.8	—	脚部のみ完形	明茶色
16	白磁碗	—	(7.1)	—	底部のみ	灰白色
17	ハマ	—	(9.0)	1.5	1/2	淡灰茶色
ガラス製品		全長	幅	残存	色調	
18	管玉	2.45	0.9	完形	明青色	

※小片は省略 ()内は復元による数値

Tab.3 出土遺物一覧表

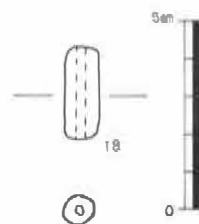


Fig.35 表探出土遺物 (1/2)

(4) 小結

今回調査をした本遺跡は、新幹線建設に伴い発掘調査を実施した歳数保吉手遺跡1次調査区の線路を挟んだ西側に位置している。1次調査区の続きと思われ、2次調査C区でも検出されたのでそれぞれ遺構の対応関係を見ても(Fig.36)、まず、1次調査区SD01の続きである溝は、今回遺物の出土がないため遺構番号を付けていないかかった。南端を東西に走る溝に続く。この溝も丘陵に沿って走っているためにSD01と状況が同じである。2SD08は第1次調査区図面を見るとSD10、SD15どちらから該当するものと思われのだが、遺物の出土状況、土層の堆積状況、オーバーハングしている溝の断面形状からSD15に該当すると思われ。古墳時代の遺物を多く含んだ自然流路であったSD10は2次調査区では検出しなかつたためにそのまま線路の下を「他」に抜けていたのだろう。また、2SD05、2SD06の自然流路は1次調査区の北側に破線で囲んだ範囲に該当するものと思われる。この破線で囲んだ範囲はSD15と埋没土色が同じであり自然流路と判断し未掘のまま範囲だけをおさえた箇所である。1次調査区では谷地形の一番低い場所にあたる。

今回の調査では遺物量が少なかったが、表土ながら管玉が出土しているし、1次調査では透かしの入る高木の脚部が出土している。このことから八女丘陵の高い位置からかなりの水量を伴って谷に流れていたものと思われる。

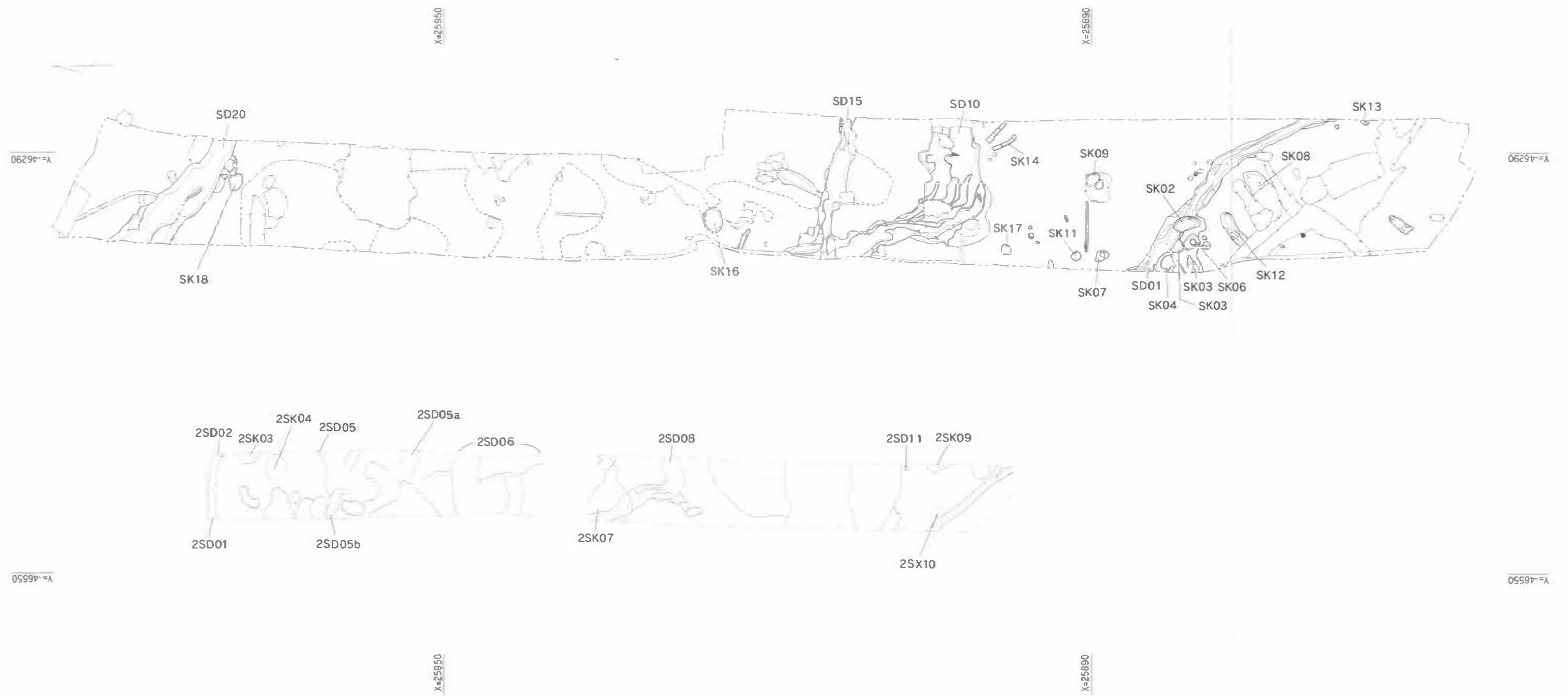


Fig.36 葺数保古手1次、2次遺構配置図 (1/400)

6. 歳数三郎丸遺跡 第1次調査

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字歳数字三郎丸404-2・408に所在する。当調査区の北部は標高9.1m前後、南部は8.8m前後と徐々に南部へ向かって下がって来、当地は東方より八手状に広がる八女丘陵南斜面にあたる谷部に近い場所に位置する。筑後北部地区東管ほ場整備事業（担い手育成型）筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、新設される水路によって破壊を受ける約661m²を調査対象範囲として発掘調査を実施し、小林勇作が担当した。

調査区は南北方向に細長く設定した。発掘調査は平成17年8月30日から同年9月16日の間実施し、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行った。重機による表土剥ぎは（有）福島重機へ、航空測量業務はアジア航測（株）へ委託し、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で随時行った。調査の結果、溝等の遺構の他に不明遺構（牛馬歩行痕跡?）が確認され、出土遺物では弥生土器・須恵器・土師器・土師器・磁器等を得た。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

溝

1SD1 (Fig.37・Tab.53)

調査区北部で検出した東西溝であり、長さ4.30m、幅0.53～0.87m、深さ0.15mを測る。溝の断面形は概ね緩やかなU字状を呈し、溝の北岸の一部が突出してテラス状を呈する。上層に淡灰茶色土、下層に暗灰茶色砂利が堆積することから一定の排水を伴っていたものと思われる。出土遺物は土師器（小皿）を認めており、中世に比定される。

1SD2 (Fig.37・Tab.53)

調査区南部で検出した東西溝である。溝の断面形はV字状を呈し、長さ4.43m、幅0.70～1.47m、深さ0.35mを測る。溝口の両岸部に多くのテラスを呈し、西部は東高西低で0.1mの差異を生じる。灰茶色砂質土を基調とする埋土が厚く堆積して、おむ一定の排水量があったものと思われる。出土遺物は弥生土器（片）、須恵器（鉢）を認めており、中世期の溝であったと考えられる。

1SD3 (Fig.37・Tab.54)

調査区南部で検出した南北溝で、南方へ向かって落ち込む。調査区南端部の落ち込みは歳数長畝町遺跡で検出された河川跡（ISX1）の北岸部にあり、水路として機能していた可能性が考えられる。長さ6.50m、幅0.55～0.75m、深さ0.08mを測り、埋土は淡黒茶色砂質土である。出土遺物に恵まれておらず、僅かに弥生土器片を認めただけで埋没時期については不明である。

不明遺構 (付図・Tab.54)

今回、不明遺構とした小ピット群は調査区北部で確認された。小ピットの径は10～15cm程度であり、形状は楕円形状・不整形・連環状などの変化に富み、底面は凹凸が著しいものや平坦であるなど規則性に欠ける。地山である乳黄白色土層を以て淡黒茶色粘質土が球状に混在した埋土を基調とするが土壌によって変化したものもある。群集となった範囲では小ピットが概ね北東-南-西方向に密集して筋状を呈している観があり、一定の規則性があったものと想定される。小ピット群からは土師器（土鍋・片）の遺物が出土しており、近世の所産であると思われる。

(3) 出土遺物

溝

1SD2 (Fig.38・Tab.55)

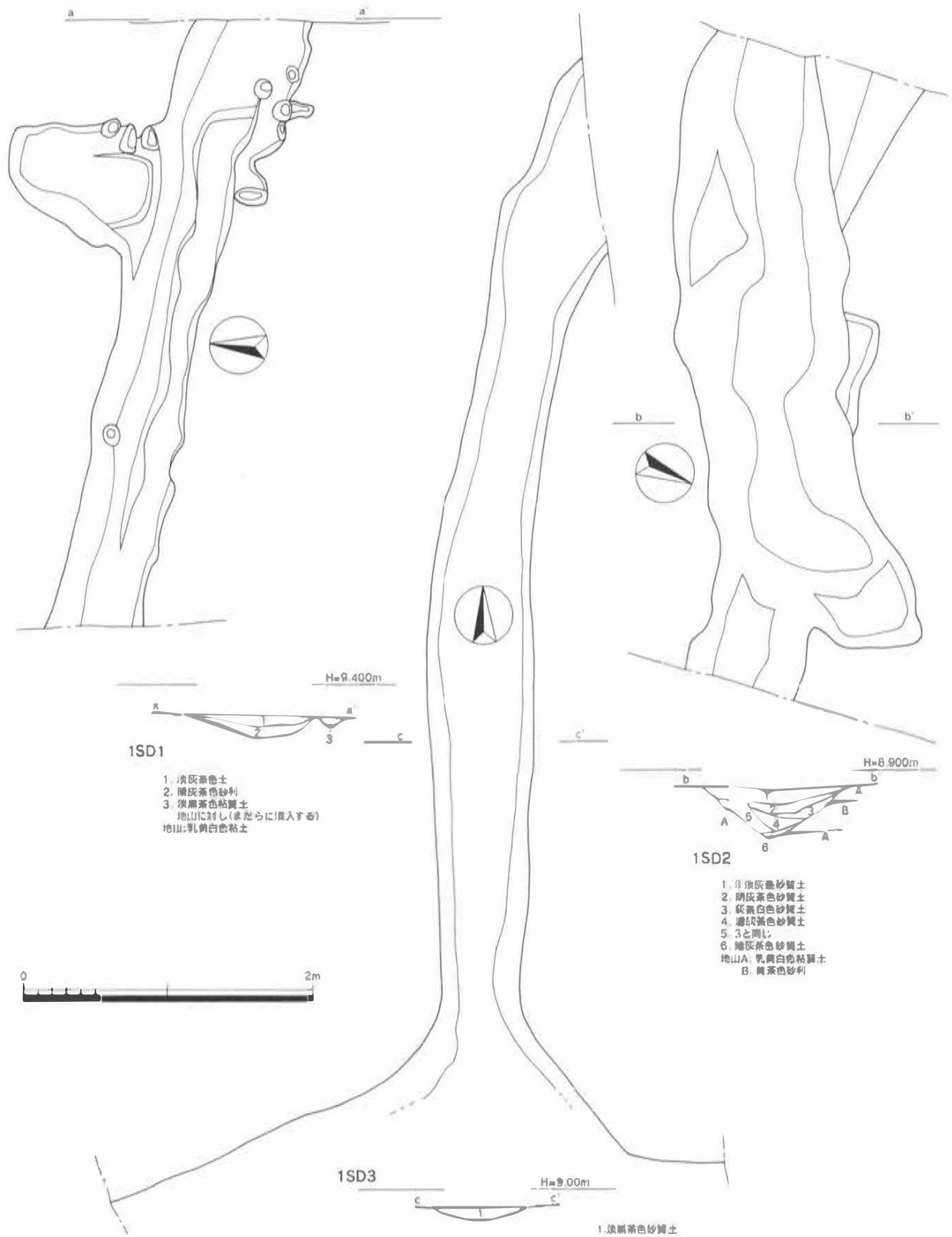


Fig.37 溝 (1SD1~3) 実測図 (1/40)

須恵器

鉢 (I) 玉縁状を呈した口縁部細片である。焼成不良で胎土に微砂粒・石英を含み、色調は淡茶灰色を呈する。

不明遺構 (Fig.38・Tab.55)

土師器

土鍋 (2・3) 共に口縁部細片で玉縁状口縁を呈する。3は口縁端部から外面にかけて煤が付着する。

表土 (Fig.38・Tab.55)

白磁

碗 (4) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。淡灰白色の素地に淡灰白色釉を内面及び外面に施刺するが高台部は露胎である。高台部は削り出しが浅く、器内も厚く、大宰府編年Ⅳ類に属するものと思われる。

(4) 小結

今回の調査で検出された遺構は、溝及び不明遺構であり、確かなら古代からの出土遺物を得られたことは成果であった。

先述したように溝 (ISD1・2) は中世に比定される東西溝であり、何れも埋上に砂を含む発達層が窺えたことから水路として機能していた可能性が考えられる。また、調査区南端部で検出された落ち込みは歳数長畝町遺跡で確認された旧河川跡と想定され、この落ち込みに対して接続するISD3についても排水を伴う水路として機能していたと思われる。なお、ISD2は断面形がV字状を呈することから区画溝としての可能性も考えられるので追記しておきたい。

調査区北部で検出した不明遺構は、径10～15cm程度を測る小じつが群集する遺構である。本文中でも報告したとおり、群集となつた範囲内においては筋状に集中している箇所があるなど一定の規則性が認められ、遺構の規模や形状・遺構残存状態等から想像すると水田の開墾や耕作時の際に牛や馬に鋤などを引かせる一連の作業によって生じた歩行痕跡と推測され、当地が耕作地として土地利用をされていたものと解される。牛馬等歩行痕跡については、昨年度実施した熊野宮ノ後遺跡においても確認されている。

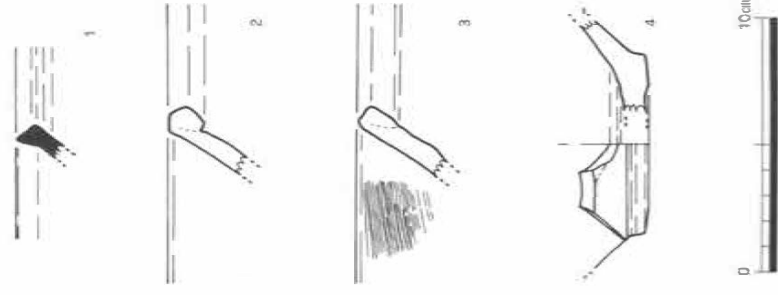


Fig.38 出土遺物実測図 (1/3)

7. 歳数長畝遺跡 第1次調査 (A区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市歳数長畝町に所在しており、標高10.9mの低地に立地している。調査区は水路新設予定地のため南北40m、東西5m及び南北3.5m、東西38mの「L」字に設定し、表土を除去を(行)船島重機に委託し、調査を開始した。10月20日の空中写真撮影を(行)空中写真企画に委託し、10月21日に(株)アジア航測に委託した航空測量をもって調査は終了となった。尚、本調査区は阿比留土剛が担当し、西側に位置している歳数長畝町遺跡第1次調査B区を小林勇作が担当した。

2) 検出遺構

河川跡

1SX01 (Fig.40・Pla.56)

この遺構は「L」字状調査区の南北に長い調査区北側で広く検出された遺構である。しかし、明らかな埋土の遡う溝が確認されたために1SX01を細分し1SX01a、1SX01bとした。1SX01aは幅1.25mの蛇行しながら東西方向に走る溝である。1SX01bは幅8mの東西に走る溝である。これらはすべて1SX01内に重複しており、また、1SX01を河川と判断した理由としては検出幅が14.5mと幅広く、西側の中洲状に地山が残っている幅部分を含めると17mを測る。また、幅広のために「T」字状にトレンチを入れ層序を観察すると砂や砂利、細砂粒が互層に堆積しているために河川跡と判断し完掘はしなかった。そのため未掘の部分には破線で表記している。B区で検出されたこの河川跡の総きくはSX0である。

自然流路

1SD02 (Fig.39・40・Pla.57・58)

1SX01の南側で検出した幅4mの東西に走る流路である。この流路を切つて竹製暗渠を検出した (Fig.39)。この暗渠は昭和の前半代に水田の排水施設として作られたもので調査区の中で数本確認された。この1SD02もB区の1SD02として検出されている。

土坑

1SK03 (付図)

1SK01aを切つている長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.04mを測る楕円形の浅い土坑である。

溝

1SD04 (付図)

東西に長い調査区で検出された浅い溝状遺構である。浅いため途中で切れている箇所もあるが、東西方向に走っており屈曲し北側の調査区外に抜けて行く。

出土遺物 (Fig.41・Pla.60)

1〜4は1SD02出土である。1は甕の口縁部で磨耗が激しく調整痕は不明である。2は甕もしくは鉢の口縁部である。3は鉢もしくは甕の底部である。4は甕の胴部であり三角形の突帯が貼り付けて

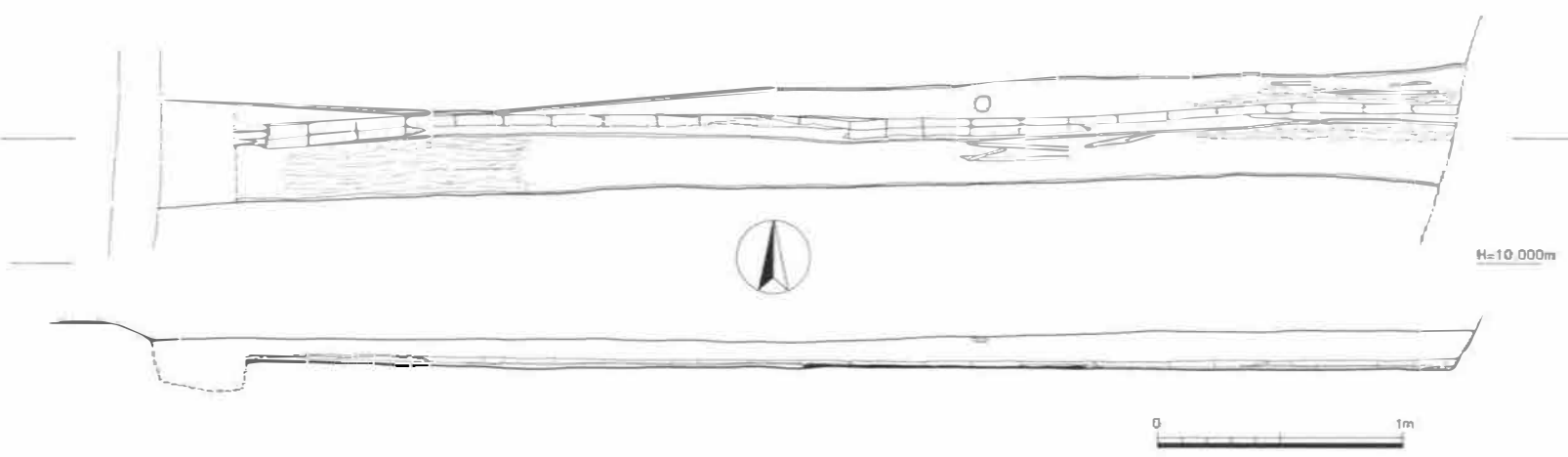
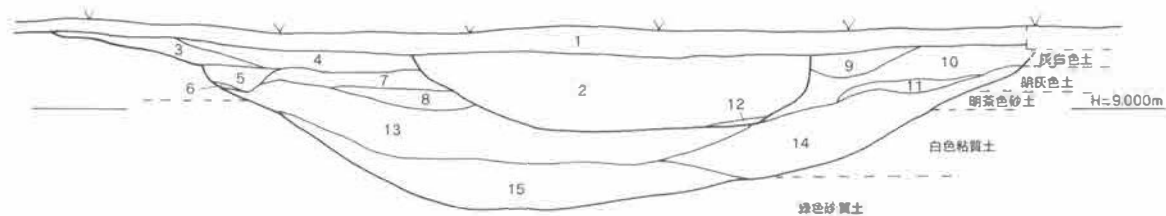
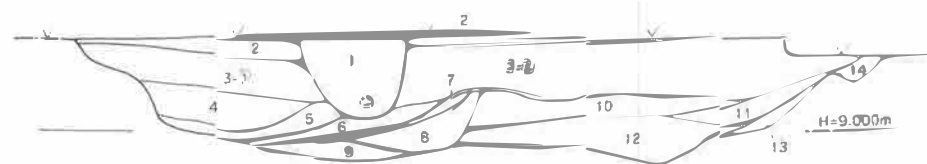


Fig.39 歳数長畝町A区SD02竹製暗渠 (1/30)



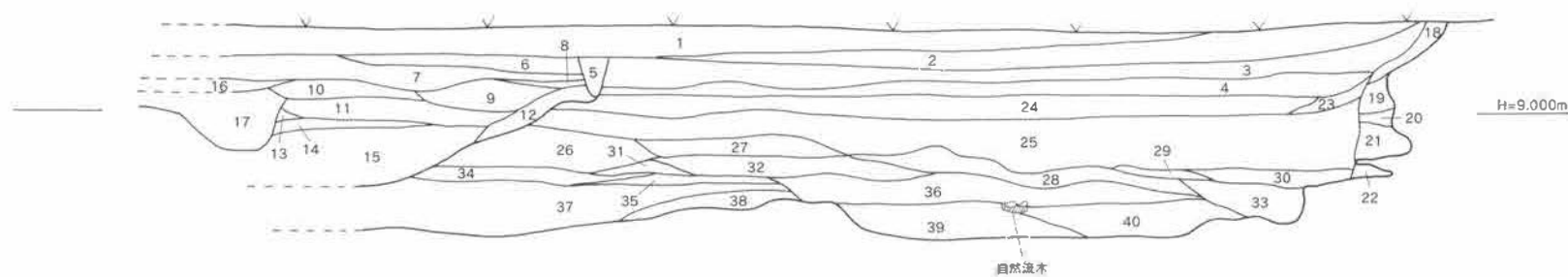
SX01 西壁土層図

1. 明茶褐色土
2. 暗黒灰色粘質土
3. 明灰色土
4. 明茶褐色砂質土
5. 暗灰色土
6. 明灰白色土
7. 暗灰色砂質土
8. 明茶褐色砂土(砂粒は細かい)
9. 明茶褐色土
10. 暗灰色砂質土
11. 暗灰色土(地山ブロッコ)
12. 明灰白砂土(砂粒は粗い)
13. 暗灰色土(シルト・粘土・砂粒が細かく互層に堆せ層)(水性たいせき)
14. 暗茶褐色粘質土
15. 暗灰色粘質土



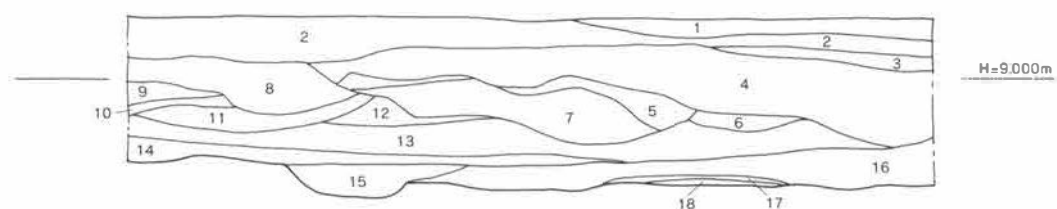
SD02 西壁土層図

1. 暗灰色土(茶褐色ブロッコ)
2. 暗茶褐色土(1mm~3mmの小礫が多く入る)
3. 暗黒灰色土(立ち上がりを1層に切られる)
4. 暗灰色土
5. 暗灰色粘質土
6. 暗黒灰色土(細かい砂粒を多く含む)
7. 暗灰色粘質土
8. 暗茶褐色砂土(砂粒が細かい)
9. 暗灰色砂土(砂粒が粗い)
10. 暗茶褐色砂土(砂粒が細かい)
11. 暗灰色土(茶褐色小ブロッコが多く混じる)
12. 暗灰色粘質土
13. 暗黒灰色土
14. 暗茶褐色土(pit)



SX01 南北トレンチ東壁土層図

1. 暗茶褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 暗灰色土
4. 暗茶褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 暗灰色土
8. 暗灰色土
9. 暗茶褐色砂土(粗い)
10. 暗茶褐色砂質土
11. 暗茶褐色砂土(粗い)
12. 暗灰色砂質土
13. 暗灰色土
14. 暗灰色砂土(暗灰色土ブロッコ)
15. 暗灰色砂土(粗い)
16. 暗茶褐色粘質土
17. 暗茶褐色土
18. 暗灰色土
19. 暗灰色土
20. 暗灰色土(黄褐色地山ブロッコ)
21. 暗茶褐色土
22. 暗灰色粘質土
23. 暗茶褐色土
24. 暗灰色粘質土
25. 暗茶褐色土
26. 暗茶褐色土
27. 暗灰色土
28. 暗灰色粘質土(シルト・粘質層)
29. 暗灰色粘質土
30. 暗茶褐色砂質土
31. 暗灰色粘質土
32. 暗茶褐色砂土(細かい)
33. 暗灰色砂土(粗い)
34. 暗茶褐色砂質土
35. 暗灰色砂土(細かい)
36. 暗茶褐色砂土(細かい)
37. 暗灰色砂土(粗く1mm~5mm程の小礫が多く入る)
38. 暗茶褐色粘質土
39. 暗茶褐色砂質土
40. 暗灰色砂土(1mm~3mmの小礫が多く入る)



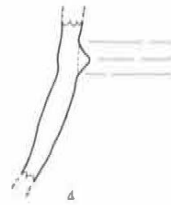
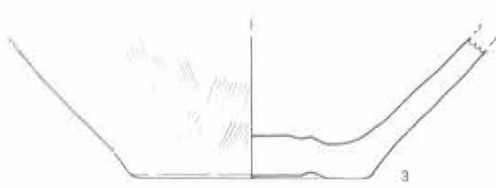
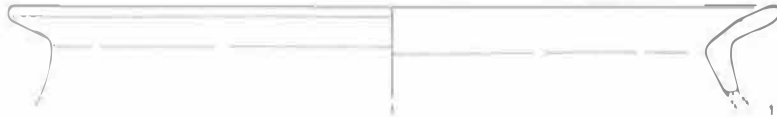
SX01 東西トレンチ北壁土層図

1. 暗茶褐色土(有酸化マンガン層)
2. 暗灰色土
3. 暗茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 暗灰色土(細かい砂粒を多く含む)
6. 暗茶褐色粘質土
7. 暗灰色砂土(砂粒が粗い)
8. 暗茶褐色土
9. 暗灰色砂土(砂粒が細かい)
10. 暗茶褐色土
11. 暗灰色砂土(砂粒が粗い)
12. 暗灰色粘質土
13. 暗茶褐色砂土
14. 暗灰色粘質土
15. 暗灰色砂土(砂粒が細かい)
16. 暗灰色砂土(3mm~5mmの小礫を多く含む)
17. 暗茶褐色粘質土
18. 暗茶褐色砂土



Fig.40 長畝町A区 土層図

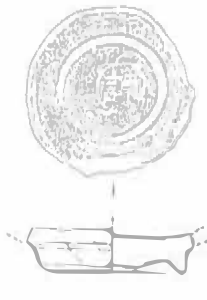
1SD02



1SK03



1SD02 暗渠



1SD04



表採



Fig.41 葦数長畝町A区出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	胎土色調	釉調
1	土師器甕	(30.6)	—	—	口縁部1/4	淡灰茶色	
2	土師器甕	—	—	—	口縁部1/5	淡橙茶色	
3	土師器鉢	—	(9.5)	—	底部1/2	暗茶褐色	
4	土師器甕	—	—	—	底部1/3	淡灰茶色	
5	青磁碗	—	5.9	—	底部のみ	灰白色	明緑色
6	須恵器杯身	—	—	—	口縁部1/5	明灰色	
7	陶器不明	—	—	—	底部1/4	赤褐色	
8	陶器鉢	—	—	—	口縁部1/5	明灰色	黄緑色
9	陶器鉢	—	—	—	口縁部1/5	暗灰色	黒褐色
10	紅皿	—	—	—	口縁部1/4	白色	白色
	石製品	全長	幅	残存	材質		
11	石鏃	1.65	1.4	完形	黒曜石		

※()内は復元による数値

Tab.4 出土遺物一覧表

いる。5は1SD02竹製暗渠から出土した青磁碗である。見込み部分は削刺ぎを施し無釉である。また、同じく見込みには文様を描き、その内側に「諫」の字を入れる。6は1SK03出土の須恵器の杯身である。焼成が悪く明灰色を呈している。7・8は1SK04から出土し、7は陶器の不明品で内面に若干釉が付着する。8は陶器の鉢だと思われる。灰釉を基調とし白釉を掛け流す。9～11は表採である。9は褐色釉を施した陶器鉢で、10は紅皿、11は石鏃である。

(4) 小結

今回の調査ではA区、B区とも一連の遺構が検出している。それら一連の遺構は自然流路や河川跡であるのだが両調査区だけではなく、この周辺は流路が多くある。また、その埋没年代も中世まで下るものもあり生活痕と思われる遺構は検出されていない。

8. 蔵敷長畝町遺跡 第1次調査 (B区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字蔵敷長畝町219、220に所在する。東方より八手状に広がる八女丘陵の谷部にあたり、標高は9～10m位を測る。筑後北部地区県営ほ場整備事業（担い手育成型）筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、新設される水路によって破壊を受ける約661㎡を調査対象範囲として発掘調査を実施した。調査区は同小字内において2箇所を設置することとなり便宜上、東側調査区をA区、西側調査区をB区と称し、A区は阿比留士朗、B区は小林勇作が調査を担当した。

B区は、南北方向に細長い調査区となり、発掘調査は平成17年9月5日から同年10月31日の約1ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、整理事業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で随時行った。なお、重機による表土剥ぎは（有）福島重機へ、航空測量業務はアジア航測（株）へ委託した。調査の結果、溝等の遺構が確認され、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

河川跡

1SX1 (Fig.42・Tab.62～64)

当遺構は調査区の北部から中央部にかけて広い範囲で検出した。遺構検出後、調査区に沿って確認のためのサブトレンチを西側に設置したところ、検出面下では複雑に堆積した流路であることが判明した。そこで、調査はトレンチ幅を拡張して土層観察を主として行い、遺構検出面から約1.6m程掘り下げたところで地山と思われる礫層を確認した。調査区東側壁で土層を確認したところ溝は少なくとも6条以上が存在していたことがわかった。上位層では黒茶色粘質土が厚く堆積し、比較的安定した状態であったが、下位層では砂や砂利、砂質土が激しく入り乱れ、混在した状態であったことから河川の氾濫源であったことが推測される。出土遺物は摩滅した縄文土器（片）、染付（片）、石器（剥片）等を極少量認めただけである。

流路

1SD2 (Fig.43・Tab.65・66)

八女丘陵北袖部の麓にあたる調査区南部で検出された流路であり、丘陵に沿うように南東～北西に方向をとるものである。流路は蛇行した状態で検出され、断面形は概ね緩やかなJ字状を呈する。溝底部は溝筋に沿って溝状に乱れており、部分的にピット状の凹凸痕を認める。上位層では安定した黒茶色粘質土が形成し、下位層では砂や砂利を多く含む砂層が発達していたことから相当な流量を伴った流路であったと考えられる。南岸西よりの溝底では自然流木を認め、遺物は弥生土器（甕・壺・片）、土師器（小皿・碗・甕・片）、瓦器（碗）、石器（石包丁・砥石）等を出土した。

(3) 出土遺物

河川跡

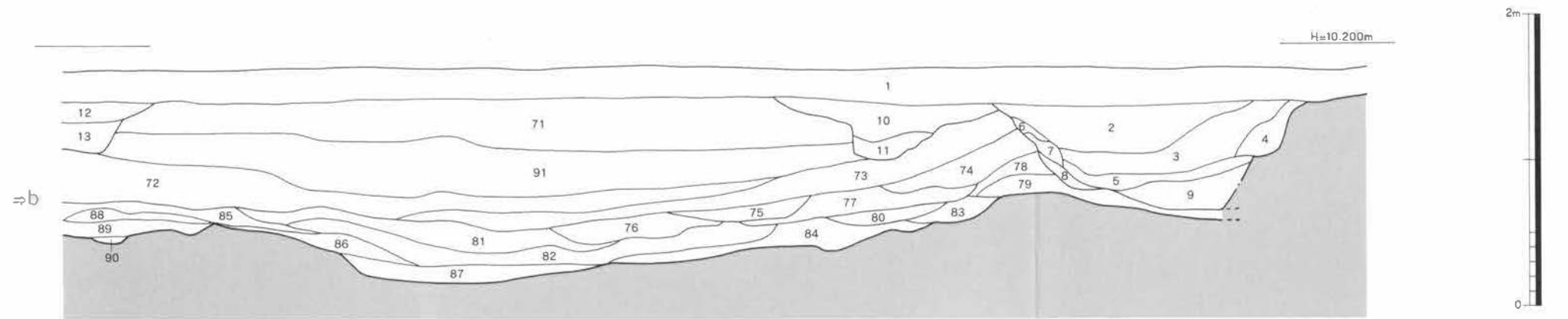
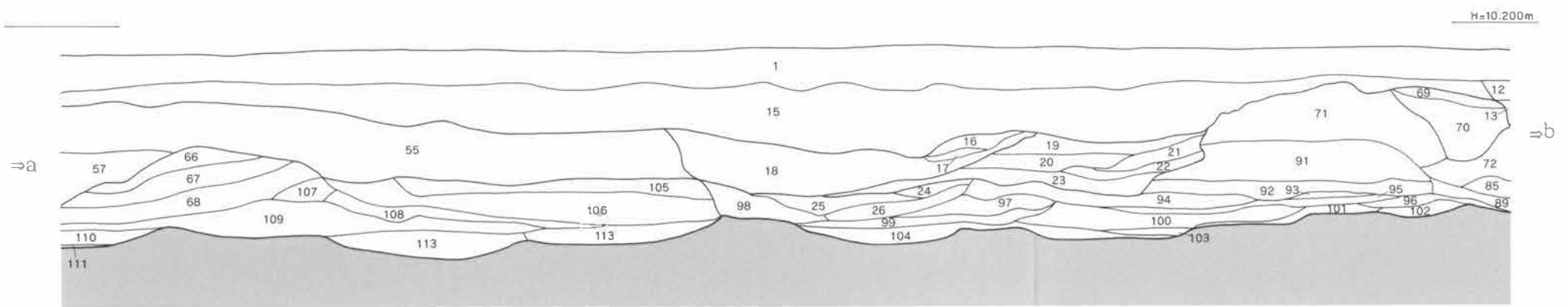
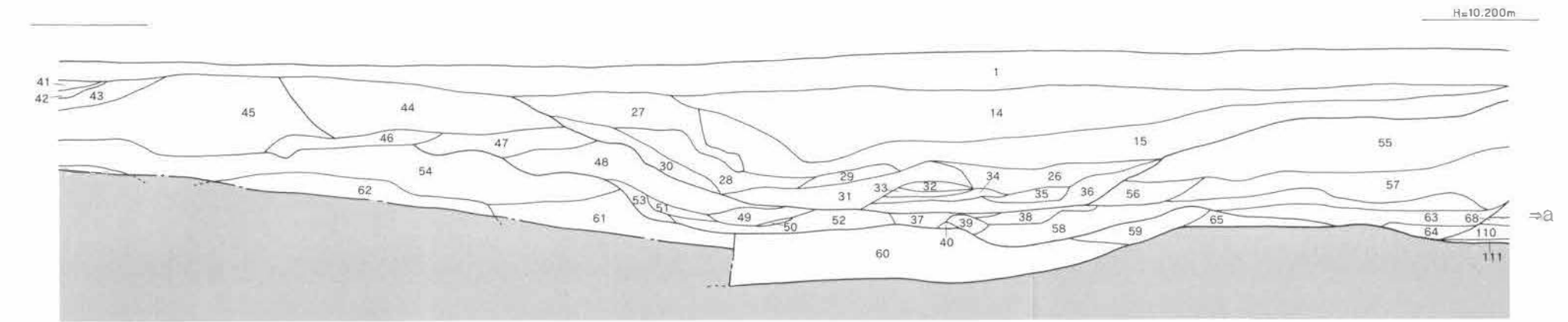
1SX1 (Fig.44・Tab.67)

縄文土器

片(1) 胎土に1～2mm程度の砂粒及び石英・金雲母を含む。風化が著しくわかりにくい、備かながら外面に貝殻条痕文を認める。

染付

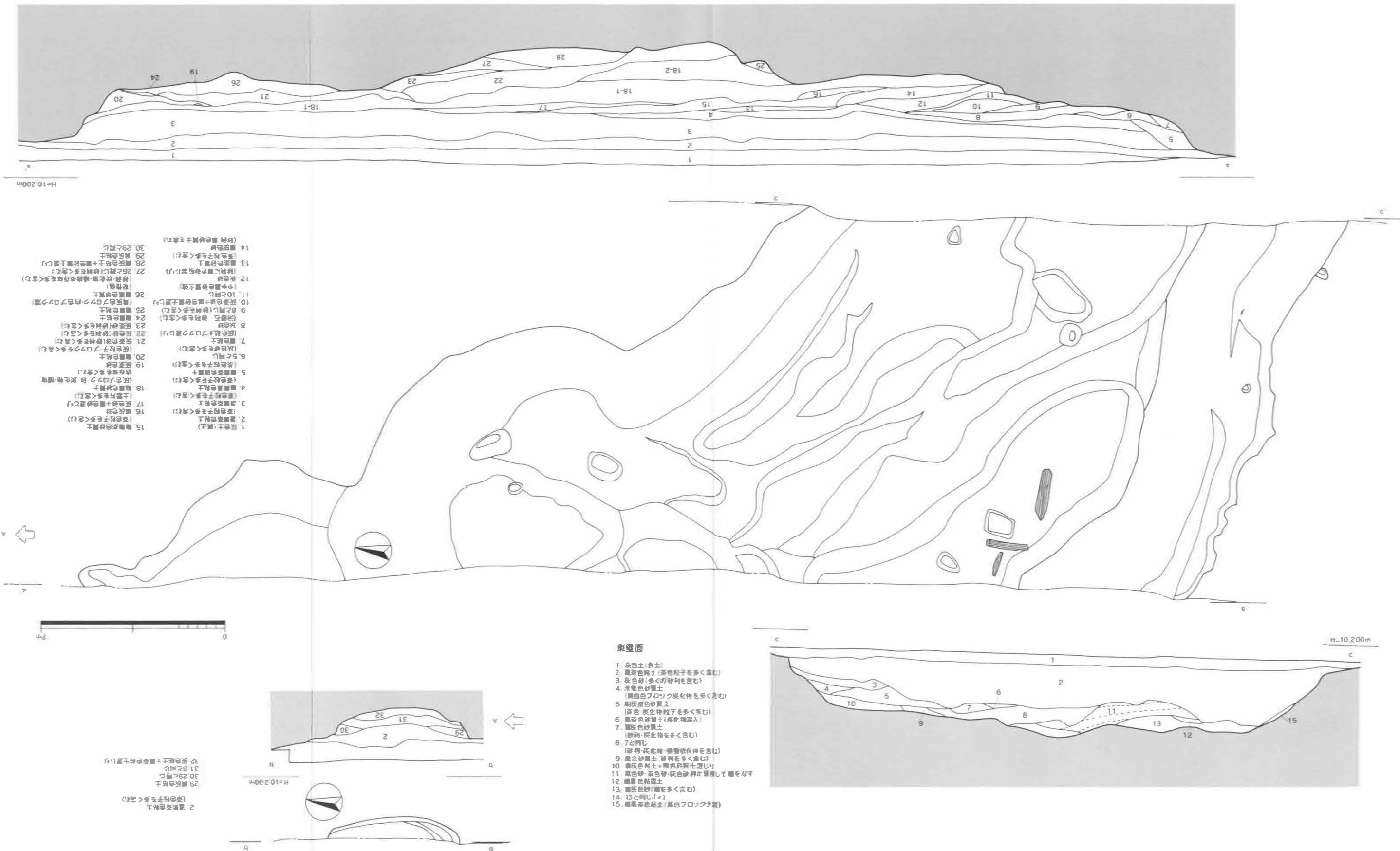
皿(2) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。淡灰白色の素地に青みがかった淡灰白色釉を畳付け以外に施釉する。



- | | | | | | | |
|------------------------|---------------------|---------------------------|-------------|---------------------------|------------------------|---------------------------|
| 1. 灰茶色土(表土) | 18. 暗黒色粘土
(砂を含む) | 36. 明黒灰砂 | 53. 黒茶色砂利 | 68. 暗茶色砂利
(黒茶色砂利を少し含む) | 86. 暗茶色砂利 | 103. 青灰色砂利 |
| 2. 淡黒茶色粘土 | 19. 淡黒灰色粘質土 | 37. 黒茶色砂利 | 54. 黄灰色シルト | 69. 明茶色粘質土 | 87. 暗灰色砂 | 104. 青灰色シルト |
| 3. 濃黒茶色粘土
(茶色粒子少量) | 20. 灰白砂 | 38. 淡黒灰色砂 | 55. 次灰黄色シルト | 70. 明黒灰色シルト | 88. 85と同じ | 105. 淡黒灰色シルト |
| 4. 黄茶色粘土 | 21. 濃黒灰色砂質土 | 39. 暗灰色+灰白色シルト混じり | 56. 暗灰色シルト | 71. 明黒灰色シルト | 89. 暗灰色+茶色砂利+灰白砂利混じり | 106. 灰白色砂利+砂混じり |
| 5. 暗黒色粘土 | 22. 灰色等+暗灰色粘質土混じり | 40. 黄灰色シルト | 57. 明黒灰色砂質土 | 72. 淡黒灰色シルト | 90. 灰白色粘土+黄色粘土混じり | 107. 黄灰色粘土 |
| 6. 白黄色粘土 | 23. 黄茶色砂利 | 41. 茶色粘質土 | 58. 茶灰色砂利 | 73. 濃黒灰色シルト | 91. 灰黄色粘土 | 108. 赤茶色砂利 |
| 7. 黒灰色砂+灰白色砂混 | 24. 茶色砂+暗灰色砂混じり | 42. 黄褐色粘質土 | 59. 黄灰色シルト | 74. 71と同じ | 92. 灰色砂利+茶褐色砂利混じり | 109. 黄灰色砂利
(茶色砂利を少し含む) |
| 8. 暗灰色+灰白+茶質砂混 | 25. 濃黒灰色砂質土 | 43. 暗茶色粘質土 | 60. 49と同じ | 75. 灰茶色砂 | 93. 灰色砂+乳白色砂混じり | 110. 濃黒灰色砂質土 |
| 9. 灰褐色シルト | 26. 灰白色砂+黄褐色砂混じり | 44. 黄褐色粘質土 | 61. 淡灰緑色砂 | 76. 75と同じ | 94. 暗灰色砂(乳白砂少量) | 111. 黄灰色砂利 |
| 10. 明茶色粘質土 | 27. 黄褐色粘土 | 45. 明褐色シルト | 62. 60と同じ | 77. 72と同じ | 95. 93と同じ | 112. 黄灰色粘土
(砂利多量) |
| 11. 暗灰色粘質土
(灰色砂混じり) | 28. 暗黒灰色砂質土 | 46. 淡灰黄褐色シルト
(砂利を少し含む) | 63. 濃灰茶色砂利 | 78. 淡灰色シルト | 96. 暗灰色粘質土 | 113. 濃茶色砂利 |
| 12. 明黒茶色粘質土 | 29. 濃黒灰色砂質土 | 47. 46と同じ | 64. 63と同じ | 79. 淡灰色シルト+茶色砂利混じり | 97. 茶色砂利 | |
| 13. 灰白色砂質土 | 30. 黄茶色砂利 | 48. 47と同じ | 65. 濃灰茶色砂 | 80. 淡灰色砂 | 98. 茶色砂利
(黒色砂混じり) | |
| 14. 明黒茶色粘質土 | 31. 灰白色シルト | 49. 暗黒色粘質土 | 66. 茶白色砂利 | 81. 淡灰色砂+灰白砂混じり | 99. 黄灰色砂 | |
| 15. 明黒茶灰色粘質土 | 32. 31と同じ | 50. 黄灰色粘土 | 67. 66と同じ | 82. 黄灰色+茶色砂+灰色砂混じり | 100. 黄灰色砂+灰白色砂利混 | |
| 16. 13と同じ | 33. 灰白色砂 | 51. 茶白色砂 | | 83. 暗灰色シルト | 101. 黄灰色砂 | |
| 17. 黄茶色砂質土 | 34. 33と同じ | 52. 49と同じ | | 84. 茶質色砂利+灰色砂利混じり | 102. 乳白色粘土
(灰色砂混じり) | |

Fig.42 河川跡(1SX1)実測図(1/40)

Fig. 43 添路 (1SD2) 美湖図 (1/40)



流路

1SD2 (砂利層) (Fig.44 · Tab.67 · 68)

弥生土器

甕 (3~7) 3は「逆L字状」から「く字状」へと移行する過渡的様相を呈した口縁部の形状を示し、

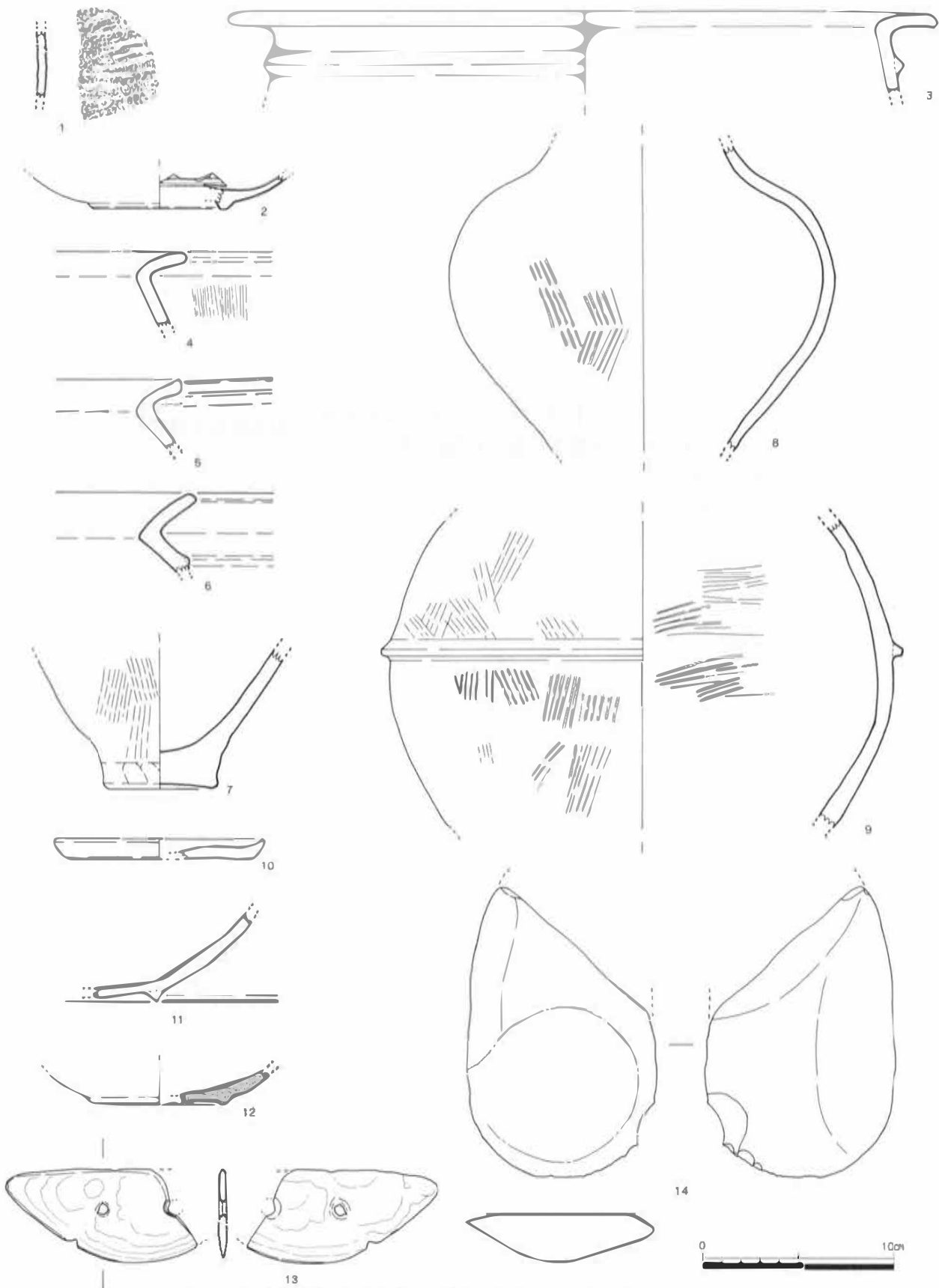


Fig.44 河川跡 (1SX1) · 流路 (1SD2) 出土遺物実測図 (1/3)

弥生時代中期末～後期初頭に属するものと思われる。口径37.5cmを復元し、外面に断面三角片の貼付突起帯を1条施す。4～6は「く字状」を呈した口縁部細片であり、4から6へしたがって屈曲が強くなる。7は底部破片で底径6.0cmを測る。底部は厚底を呈しながら若干土底気味である。

壺 (8・9) 8は胴部破片で胴部は球形ではなく、若干肩部の張った扁球形状を呈する。胴部の最大径は27.4cmを復元する。9は胴部破片で球形を呈する。胴部にやや下垂瓣状の突起帯を1条貼付けし、最大径は26.4cmを復元する。

土師器

皿 (10) 口径11.2cm、底径9.4cm、器高1.1cmを復元する。表面は磨耗のため調整不明である。外底は糸切りか？

碗 (11) 表面磨耗のため調整不明である。胎土は微砂粒を含む。

瓦器

碗 (12) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。表面は著しく磨耗しており、調整は不明である。

石器

石包丁 (13) 外湾刃半月形を呈した石包丁であり、石材は片岩製である。刃部は両刃で紐孔は凹形2孔を施す。長さ4.7cm、幅10.0cm、厚さ0.4cmを測る。著しく風化している。

砥石 (14) 石材は砂岩製で、表面下半を砥面として使用している。現存の長さ15.25cm、幅9.9cm、厚さ2.55cmを測る。

包含層 (Fig.45・Tab.68)

土師器

皿 (15) 底部細片で底部外面は糸切りである。胎土は微砂粒及び石英を含む。

瓦質土器

火鉢 (16) やや肥厚した口縁部を呈する。端部はヨコナデ、外面は指押さえ、内面は横方向の刷毛目を施す。

龍泉窯系青磁

碗 (17) 口縁部細片で外面に連弁を施す。

白磁

碗 (18) 底部細片で高台径5.4cmを測る。淡茶灰色の素地に淡灰白色釉を内外面に施釉するが、高台内は露胎である。大宰府編年IV類。

(4) 小結

当地は八手状に広がる八女丘陵に挟まれた谷部あたり、調査区で検出された河川跡 (2SX1) は、凹地形的制約を受けて生じた自然河川と思われる。土層観察では多くの砂や砂利を含む砂層と粘土層が重複しあった状態を呈していたことからかなりの流水量を伴っていたと考えられ、当地区は度重なる河川の氾濫に遭遇していたことが想定される。埋中からは古代の遺物を僅かに認めただけで埋没時期について言及することはできない。なお、当調査区の北隣にあたる蔵敷三郎丸遺跡調査区南端部では河川の北岸を確認し、更に当遺跡に隣接するA区では同一と思われる1SX1が検出されている。

一方、調査区南部、丘陵北袖部の麓に位置する流路 (1SD2) は、丘陵縁辺部に沿うように検出された。当流は、A区で検出された1SD2の延長と思われ、河川跡 (2SX1) から派生した自然流路と推測される。出土遺物から中世の所産であるとわかり、埋没時期は概ね13世紀代と考えられる。

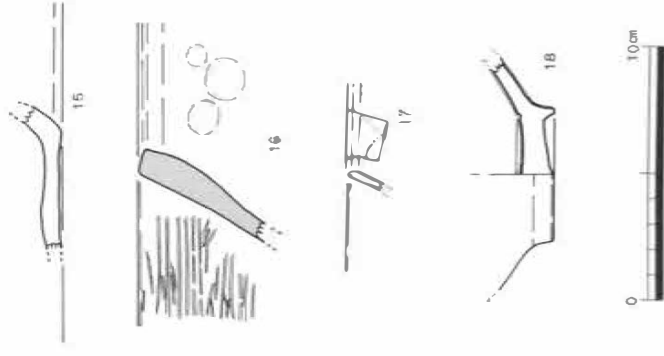


Fig.45

包含層出土遺物実測図 (1/3)

IV. 考察

・各遺跡の概要

今回は8ヶ所での調査を行い、各遺跡の成果について概略をまとめ今後の課題について考察する。

熊野町遺跡は今回の調査の中で唯一、熊野地区での調査である。地形的には南北の丘陵端部に挟まれた低地での調査であり、溝、溜まり状遺構など流水により形成された遺構が検出され、遺物も弥生時代から中世までと幅広い。熊野山ノ前遺跡などと同様に、隣に出来た低地（谷地形）部の遺構の存在や遺構の分布など、周知の文化財包蔵地外である調査地の近隣に新たな文化財包蔵地が存在する事を示唆する貴重な資料となった。

蔵敷島ノ本遺跡はSSD01（自然流路）が丘陵の展開する形状と同様に南東西に検出され、東から西へ若しくは大きく南北に蛇行しながら走っている様子が確認された。遺物は古墳時代のミニチュア土器が出土しており、これらも流路内でのローリングにより磨耗が激しく周辺に当該期に集落が形成されていたことを示唆する資料である。

蔵敷保古手遺跡第2次調査ではA区で蛇行する大溝を南北に検出している。時期については古墳時代から中世までと幅広く、氾濫原であったと推定される。また、波板状の連続土版や不定形小ピット群なども検出され遺構の性格が「牛馬歩行痕」であることを推測させる遺構を検出している。B区では流路検出の他に溝を検出している。溝と挟まれた空間に関して道路状遺構の可能性を示唆しており、低地における道路施工についての資料として、今後は調査で認識された諸問題を検証して「道路」遺構を考えなければならぬ。また、出土遺物に関してでは5世紀後半を中心とする遺物が見られ、調査地南西に展開する蔵敷森ノ本遺跡との関連も考えられる。C区では蔵敷保古手遺跡第1次調査地とJR在米線路を挟んで対する調査範囲をとり、遺構は流路を中心構成され埴原時代を中心とした遺物が出土している。蔵敷三郎丸遺跡は中世に比定される溝を検出している。また、蔵敷保古手第2次調査A区と同様に約10cm～15cm程の小ピットが群集する牛馬による歩行痕と看取できるような遺構を検出している。低地において水田耕作の様子を示唆する資料である。

蔵敷長政町遺跡A区では流路跡などが検出されている。各遺跡で流路跡が多く検出されており、当遺跡でも顕著である。中世を中心として遺構は展開するが、その生活痕跡である遺構の検出には至らず、南側丘陵上に存在することを窺わせる資料である。B区では埋没間を13世紀に求める河川跡が検出され、A区同様に中世の資料を確認している。

・蔵敷地区の低地での遺跡の展開と文化財包蔵地

先述したように、各遺跡からは「溝」「流路跡」「河川跡」「溜まり状遺構」などの「水」に関する遺構検出が大半を占めている。これは今回調査区が設定された範囲が南北の丘陵に挟まれた谷地形であることが大きな要因の一つである。谷地形の最深部でこれらの遺構が展開する時期については、出土遺物の量が広く積層的に年代を示す遺物が非常に少ないことから判断が困難であり、周辺遺跡の状況を加味して、面的に遺跡の性格や時期認定を行わなければならない。

今回調査が行われた範囲の南側（熊野町遺跡は北側）は全て低位丘陵端部（標高約15m前後）であり、過去の調査で弥生時代から古墳時代の大集落や墓地群が形成されていたことが確っている。これらの集落跡等の北側に位置する今回の各調査地点は標高約9m以下の低地であり、検出された溝等は「水」の利用、または生産（水田など）に関する遺構として捉えることができよう。その中で牛馬街による痕跡の可能性を示唆する遺構の検出は氾濫化し易い低地における良好な資料として、今後羽犬塚地区や鶴田地区などの低位丘陵地や台地上に展開する同様の遺構と比較検討しなければならぬ。また、谷地形最深部において文化財包蔵地の設定を再考する機会に恵まれたことは、今後の文化財包蔵地のあり方を考える上で貴重な資料となった。

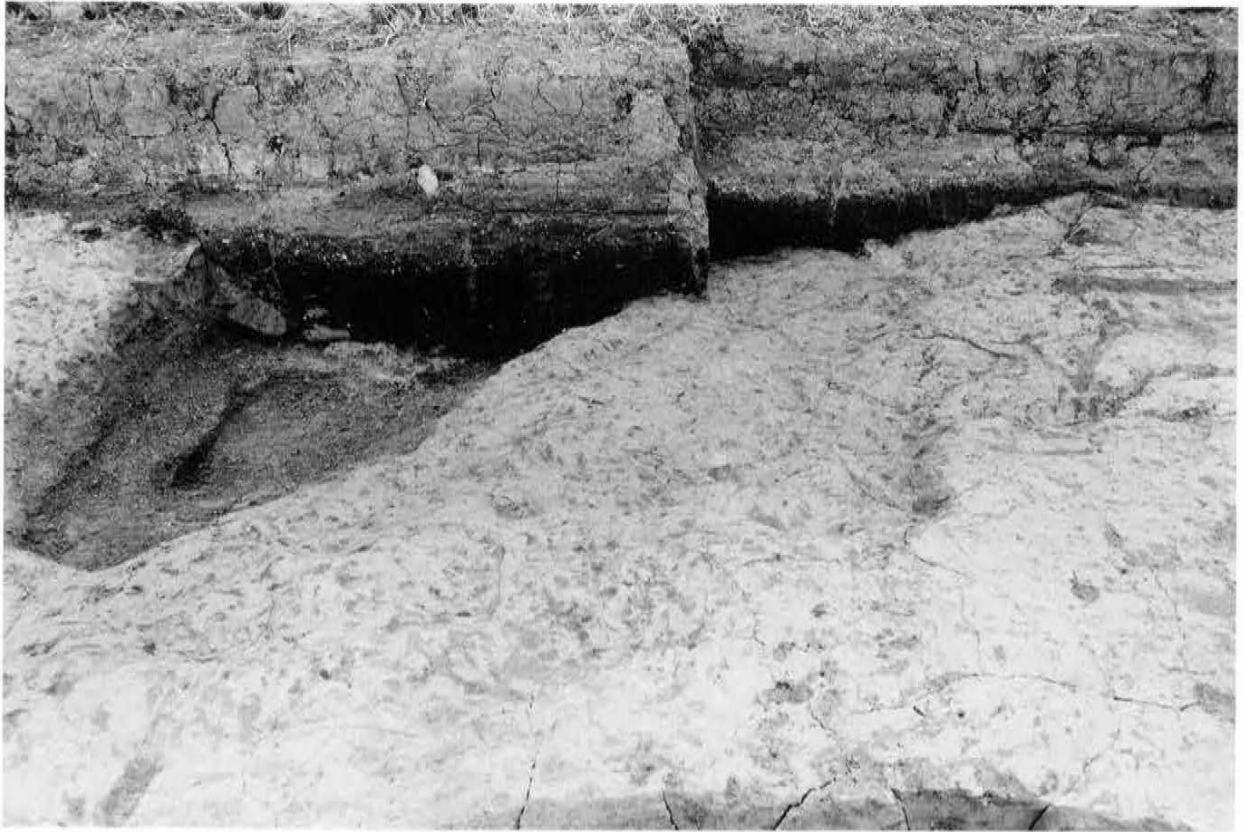
写真図版



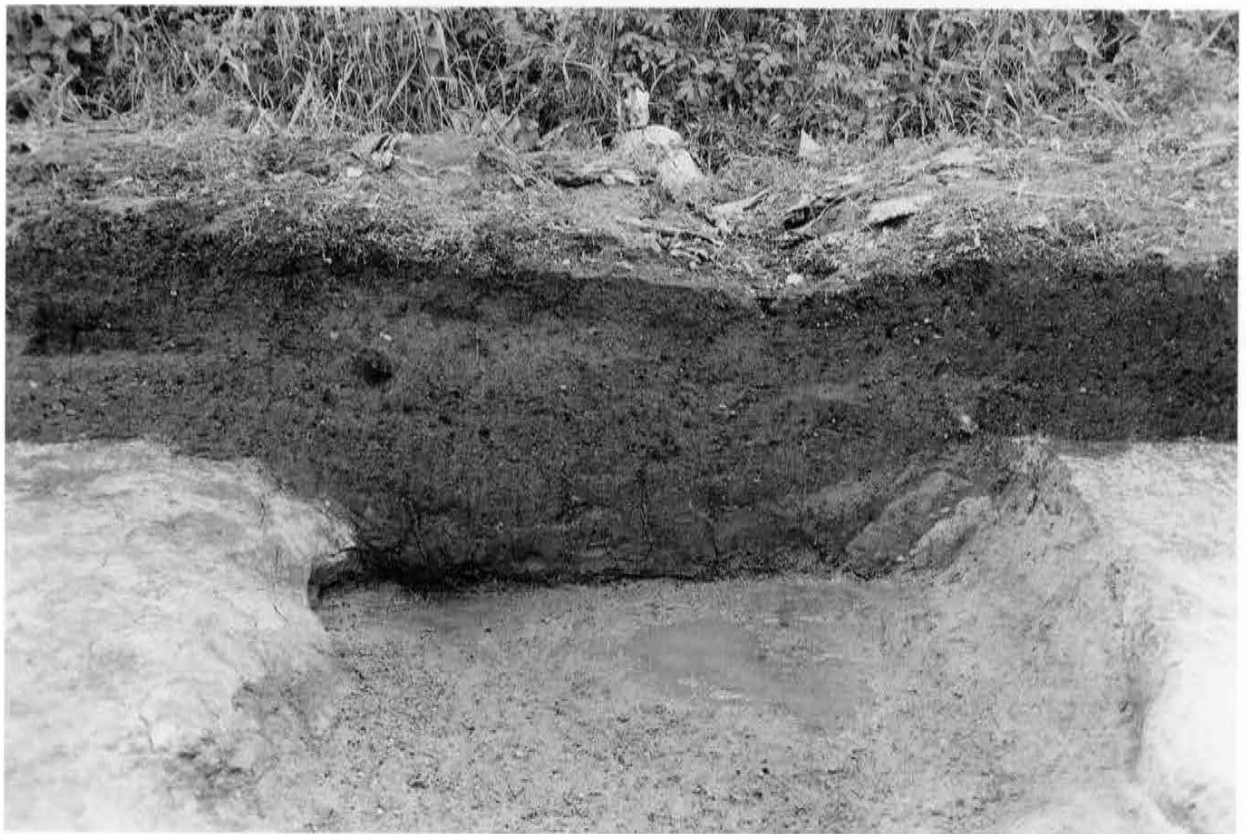
熊野榎町遺跡
全景
(空中写真：真上から)



熊野榎町遺跡
A区全景
(空中写真：真上から)

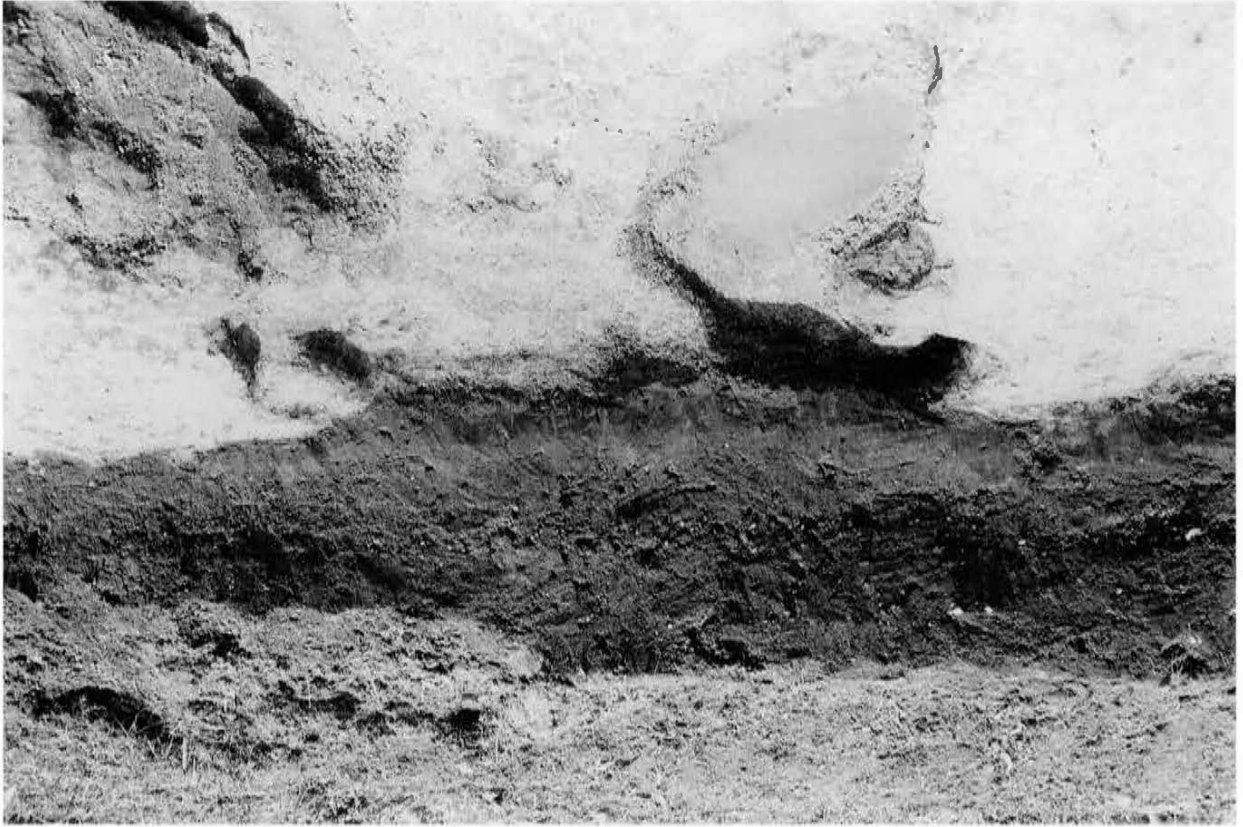


熊野村町遺跡A区1SX2土層観察状況（西から）



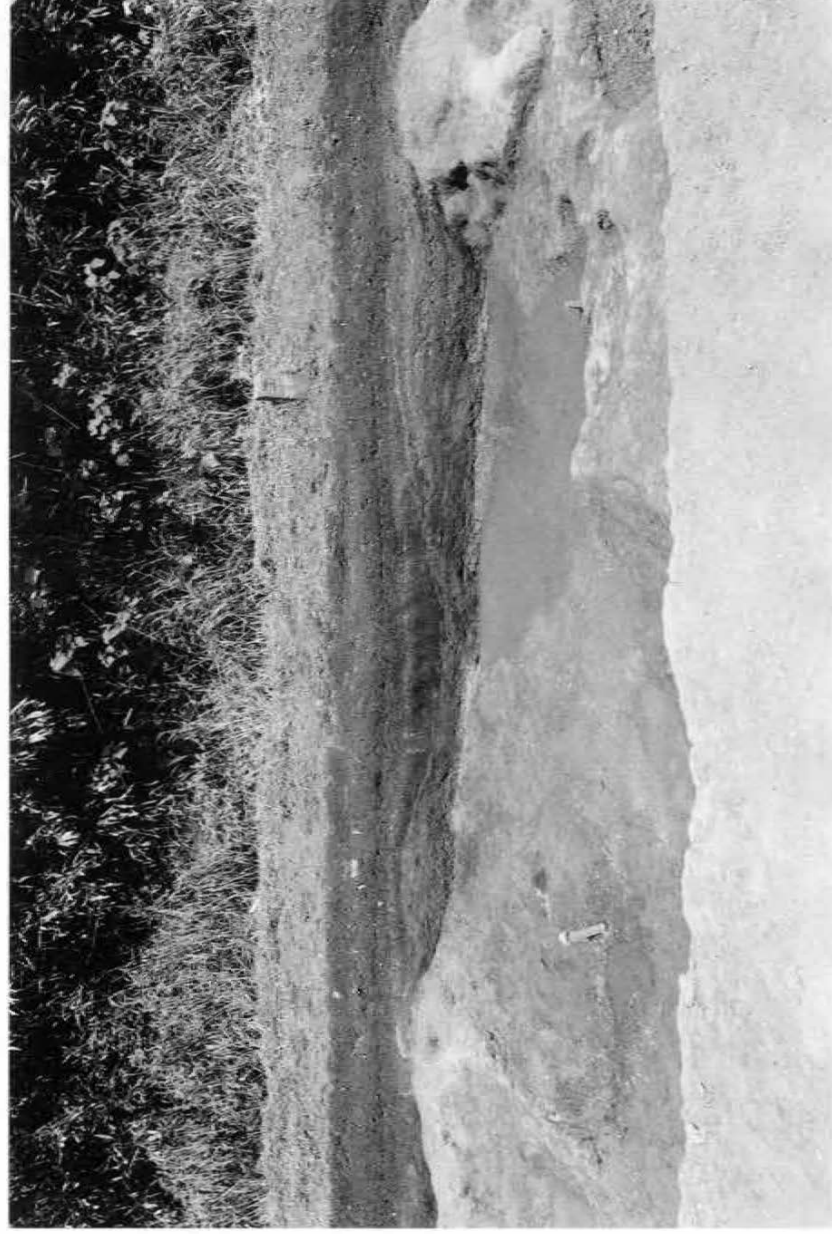
熊野村町遺跡B区1SD7土層観察状況（西から）

熊野町遺跡B区1SD10土層観察状況 (西カ5)



熊野町遺跡B区1SD9土層観察状況 (東カ5)

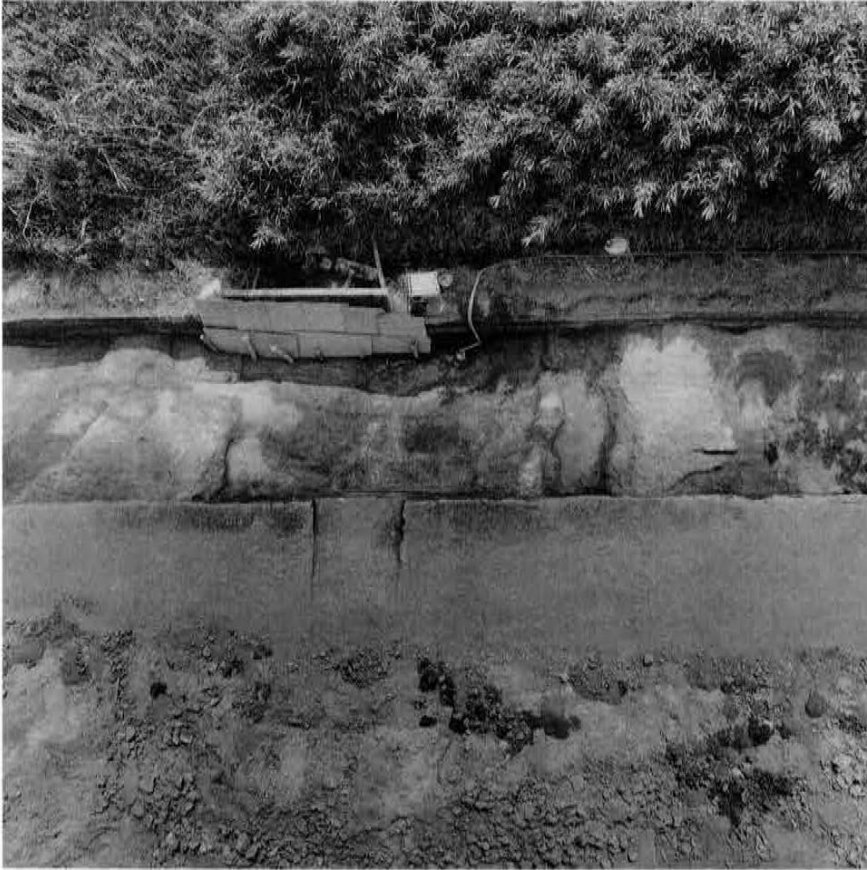




熊野町遺跡B区I SDI | 中央部土層観察状況 (西から)



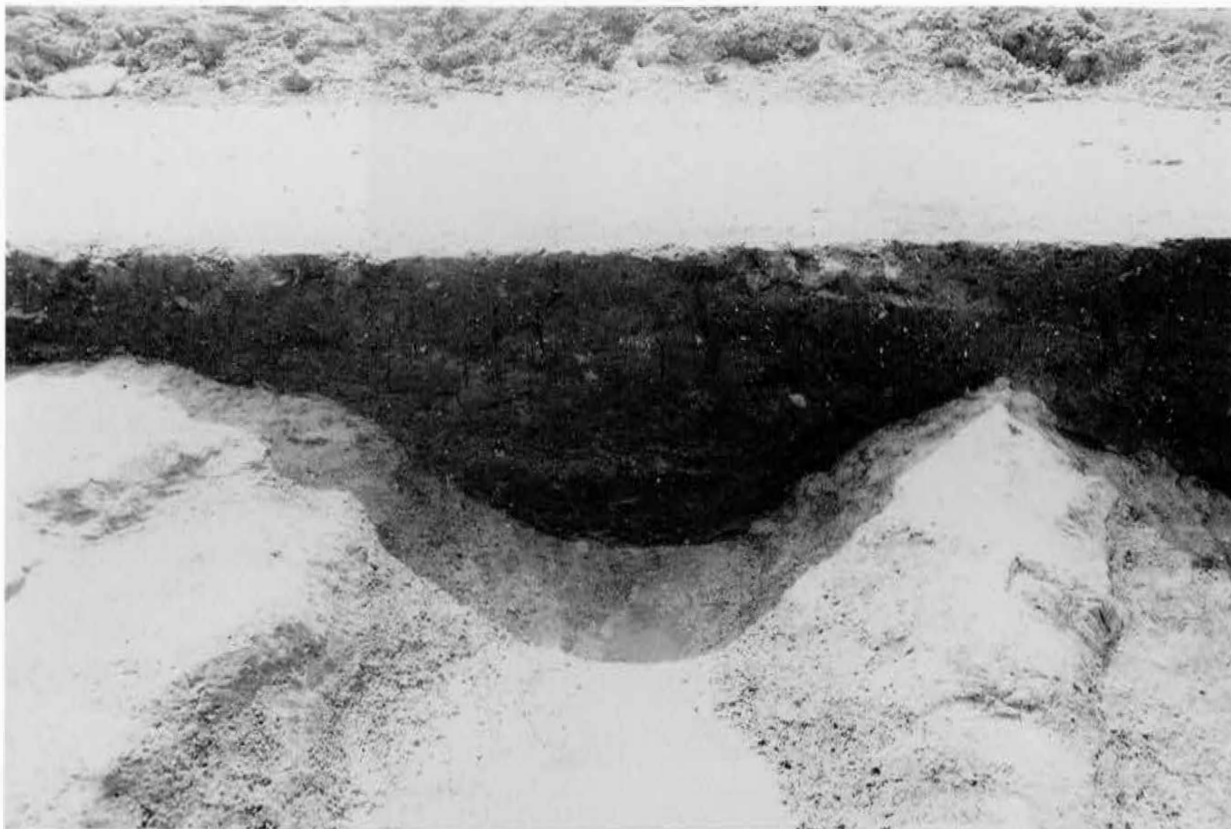
熊野町遺跡B区I SDI | 東部土層観察状況 (西から)



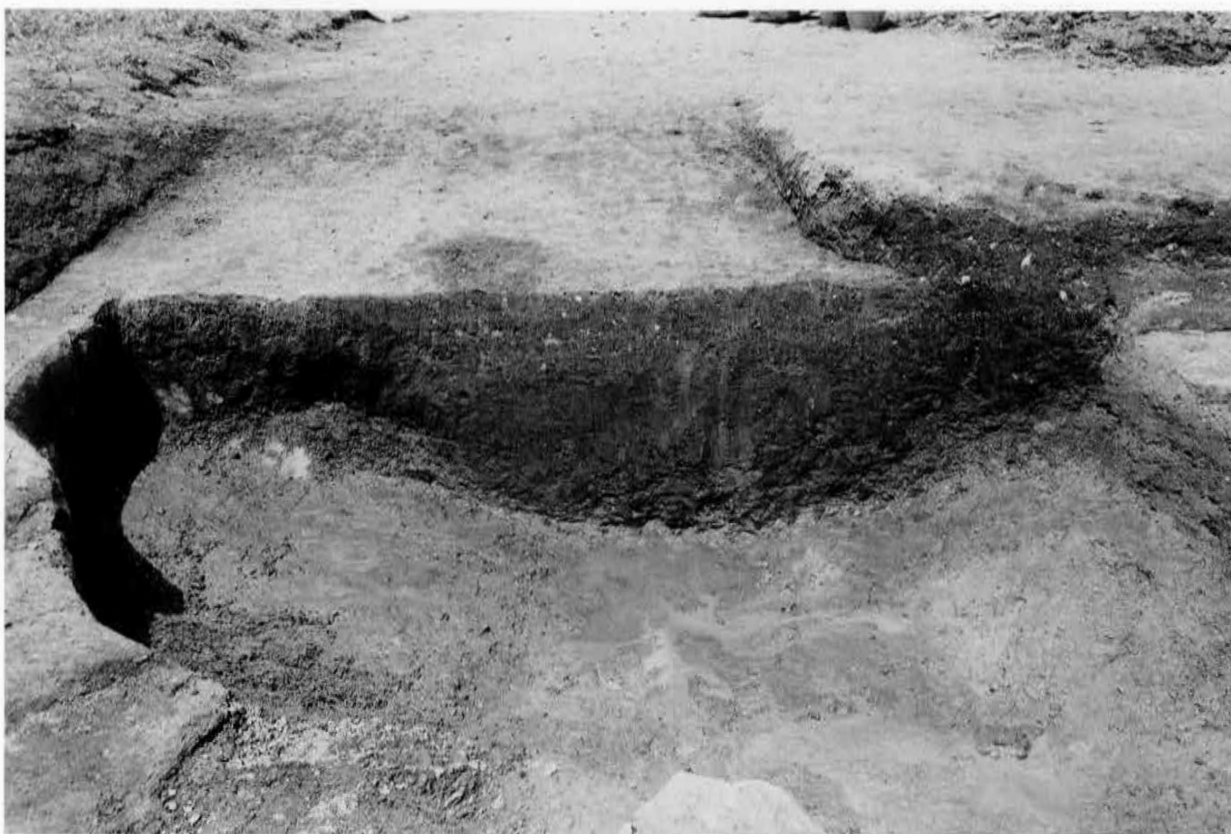
熊野榎町遺跡B区
ISD12・13
(空中写真：真上から)



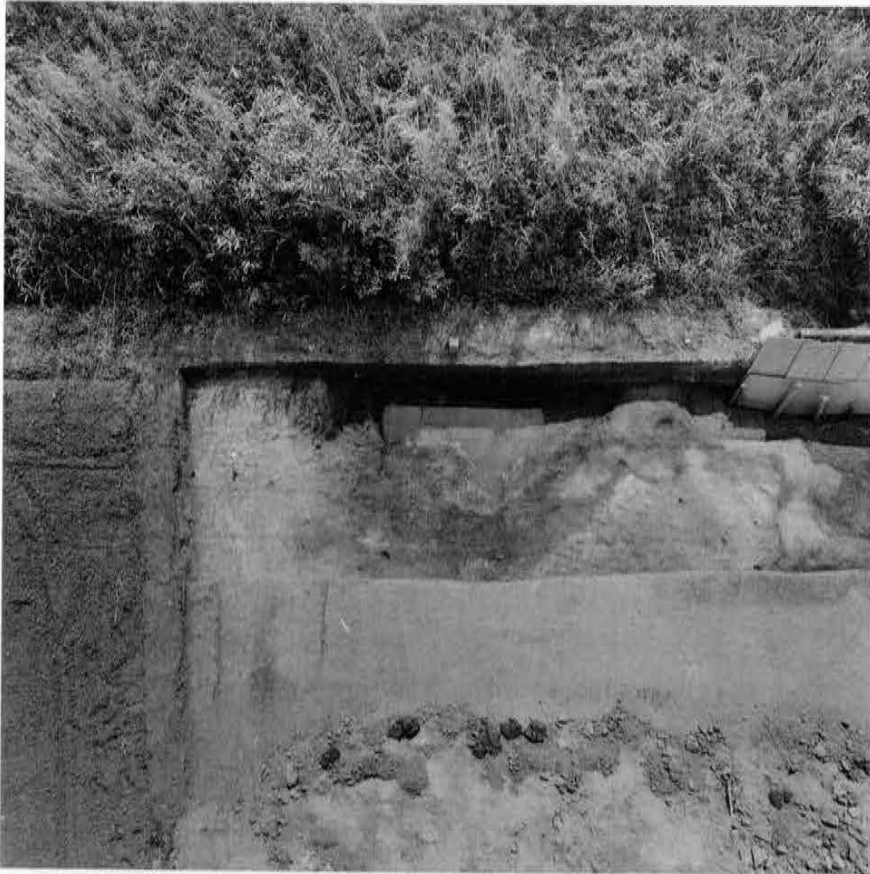
熊野榎町遺跡B区ISD12土層観察状況 (東から)



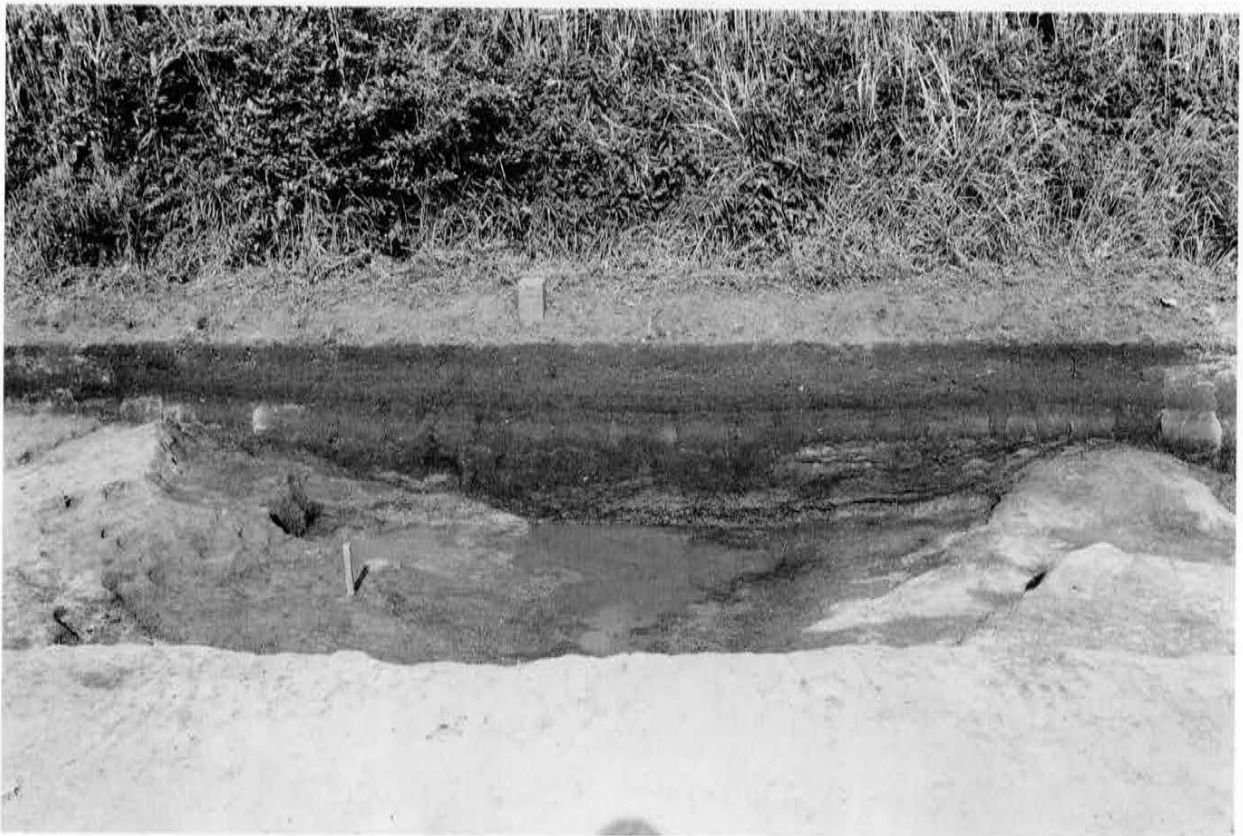
熊野村町遺跡B区ISD13土層観察状況（東から）



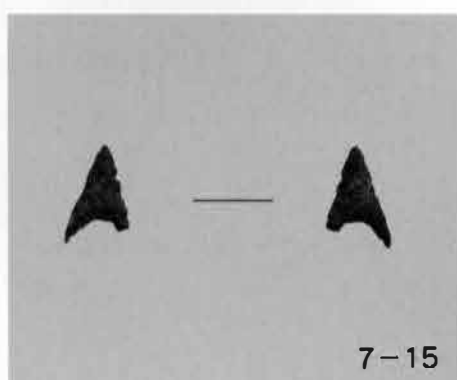
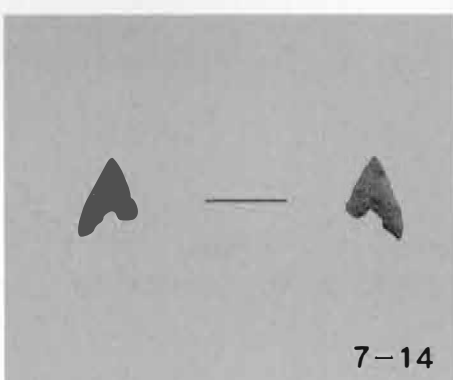
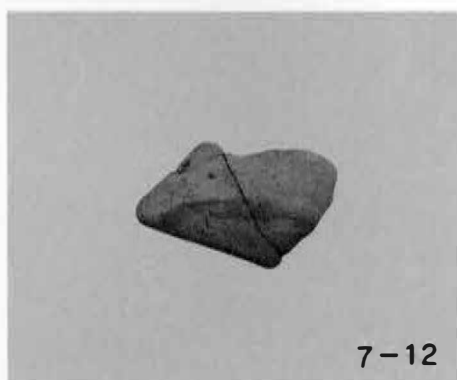
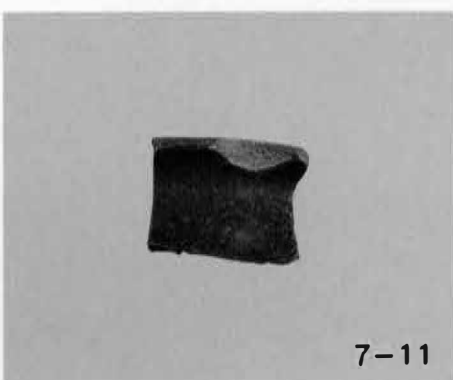
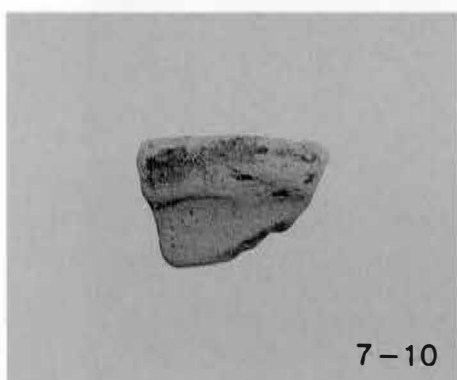
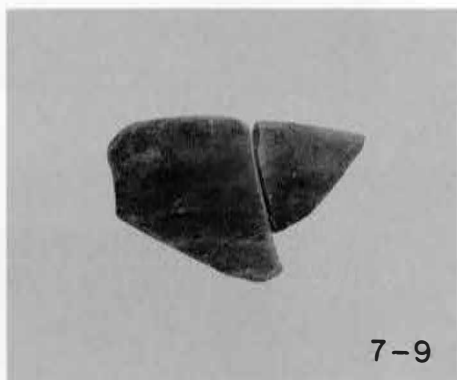
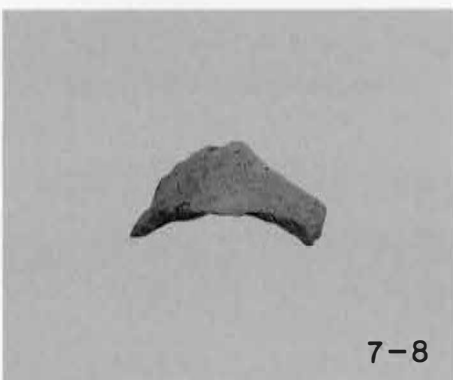
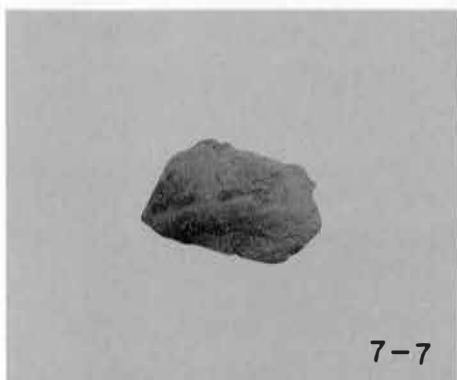
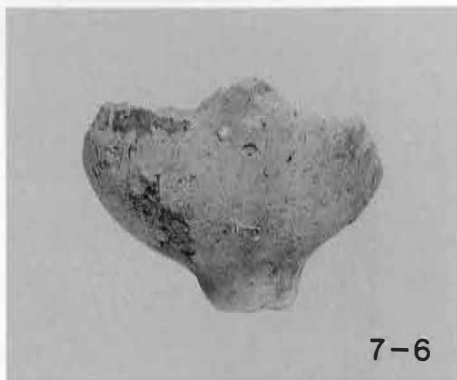
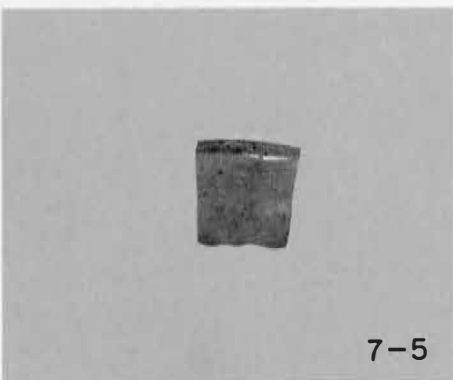
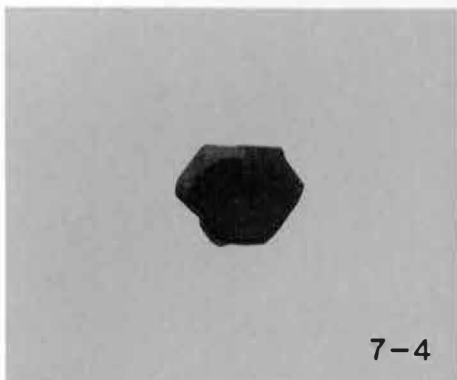
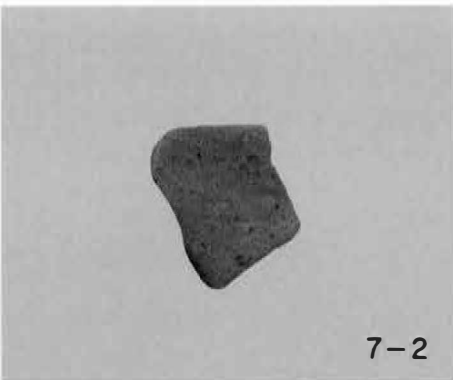
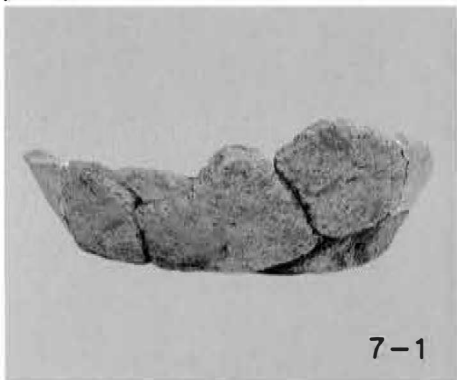
熊野村町遺跡B区ISX14土層観察状況（東から）



熊野榎町遺跡B区
ISD15
(空中写真：真上から)



熊野榎町遺跡B区ISD15土層観察状況（東から）





蔵数島ノ本SD01・SD02調査区北側土層



蔵数島ノ本SD01・SD02調査区南側土層



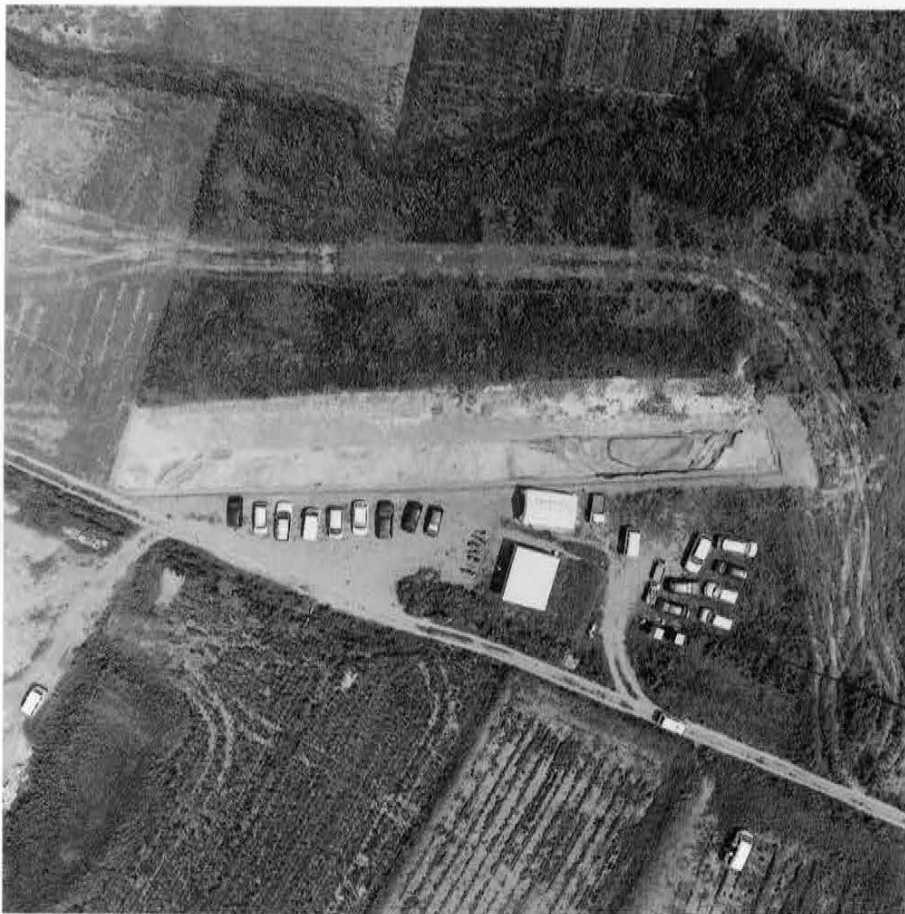
蔵数島ノ本SD01 (西から)



蔵数島ノ本SD02 (北から)



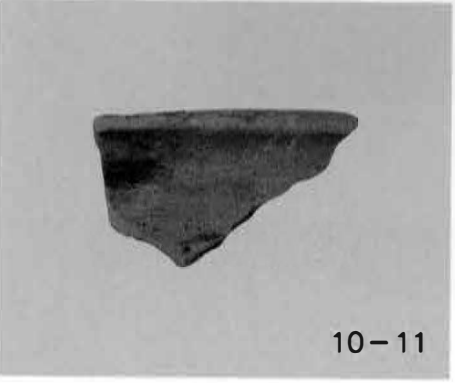
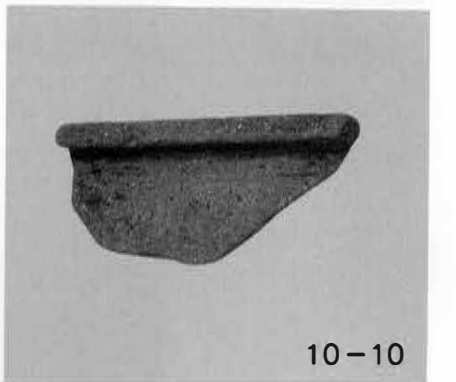
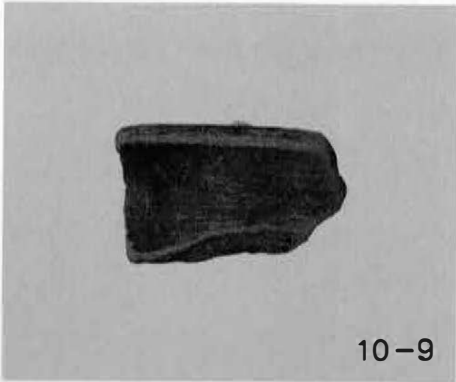
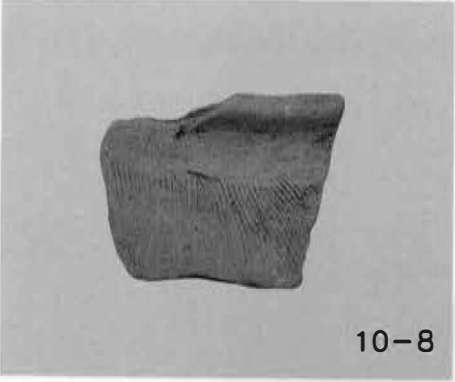
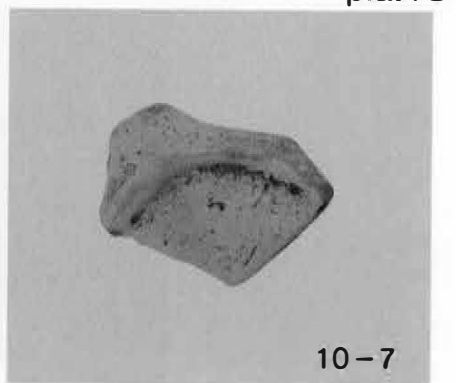
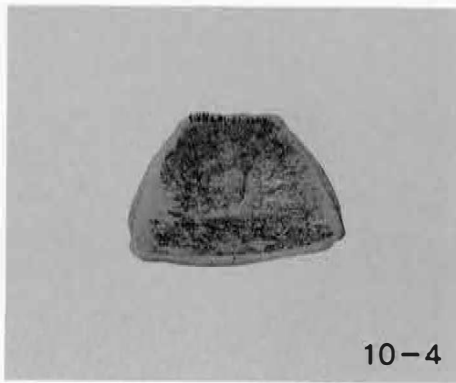
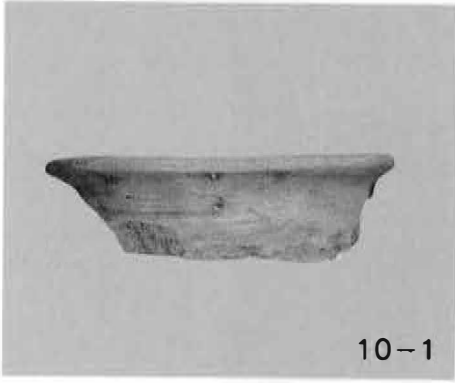
蔵数島ノ本調査区全景（東から）



蔵数島ノ本調査区全景（真上）



藏数島ノ本SD01・SD02 (真上)

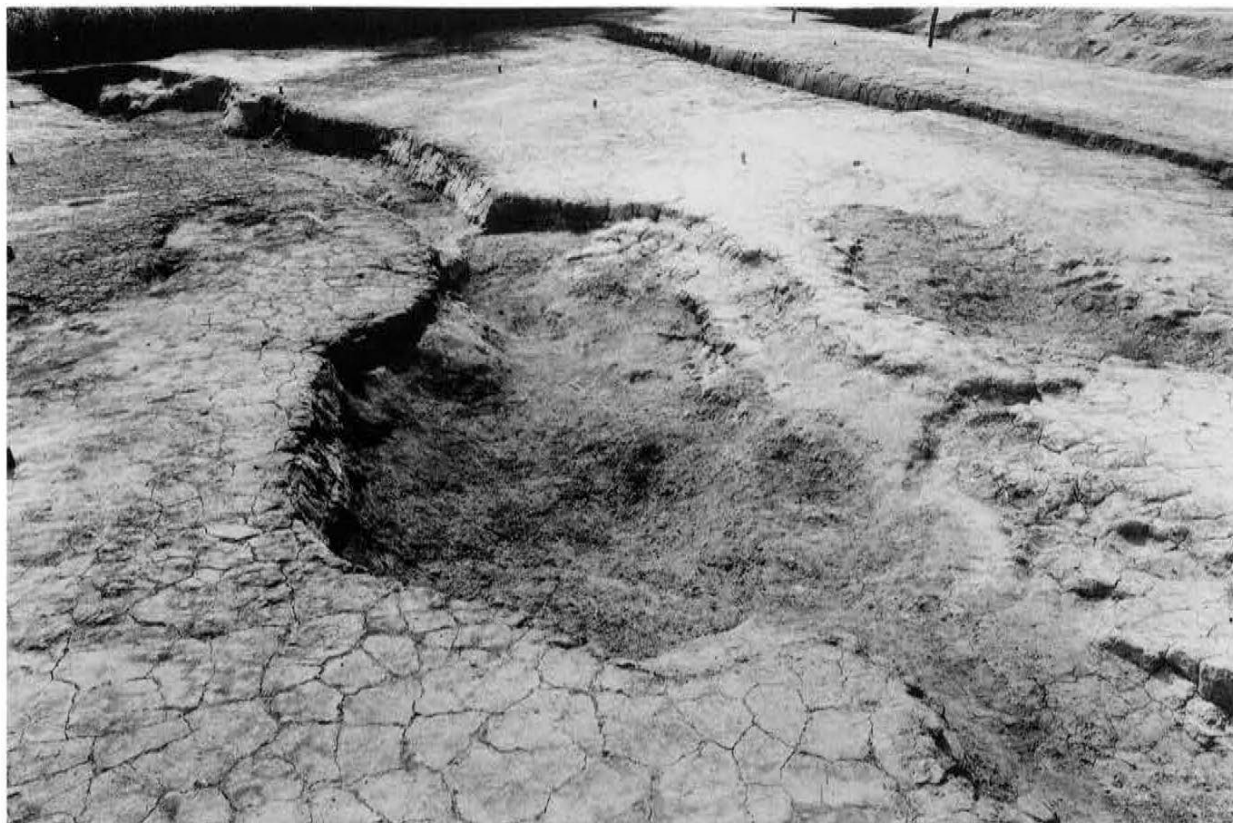




葦数保古手第2次調査A区
調査区全景（東から）



葦数保古手第2次調査A区
2SX13土層観察（東から）



蔵数保古手第2次調査A区
2SX13完掘状況(東から)



蔵数保古手第2次調査A区
2SD09土層・完掘状況(北東から)



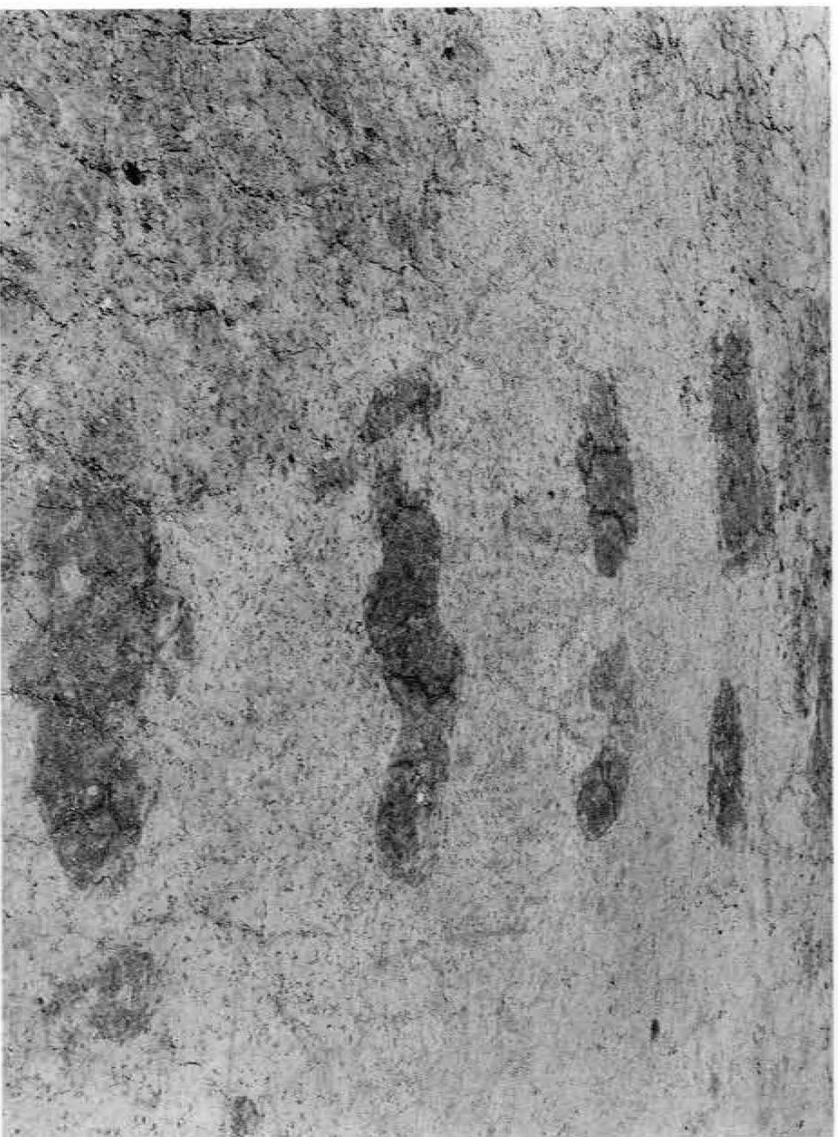
蔵数保古手第2次調査A区
2SD09土層・完掘状況（北西から）



蔵数保古手第2次調査A区
2SD09土層・完掘状況（北東から）



藏数保古手第2次調査A区
2SD10土層観察 (東カ・5)



藏数保古手第2次調査A区
2SX18検出状況 (北カ・5)



蔵数保古手第2次調査A区
2SX18検出状況（南から）



蔵数保古手第2次調査A区
2SX18完掘状況（北から）



葦数保古手第2次調査A区
2SX18土層視察（南東から）



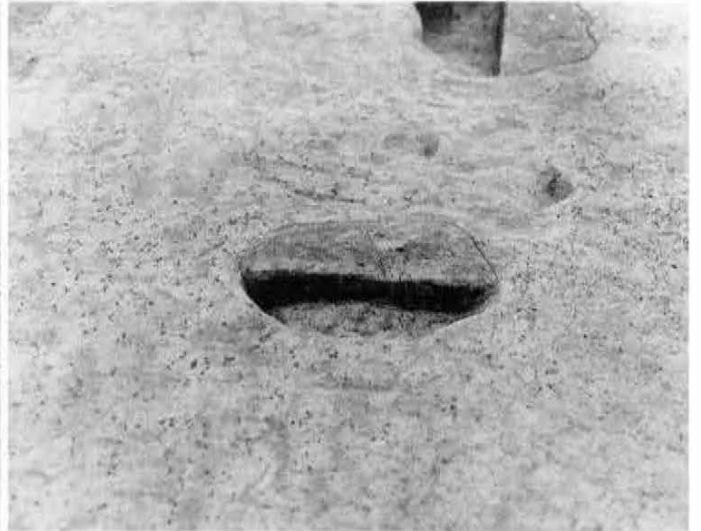
2SX18-a土層視察（北から）



2SX18-b土層視察（北から）



2SX18-c土層観察（北から）



2SX18-d土層観察（西から）



2SX18-e土層観察（南から）



2SX18-f土層観察（南から）



蔵数保古手第2次調査A区
2SX22完掘状況（北から）



蔵数保古手第2次調査A区
2SX22完掘状況（北から）



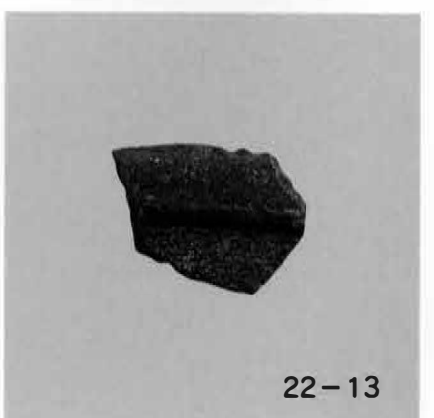
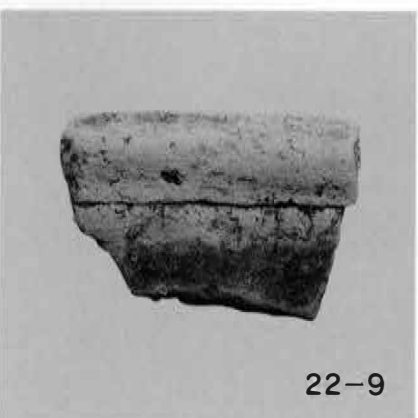
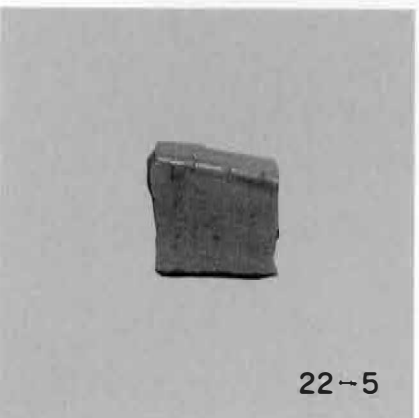
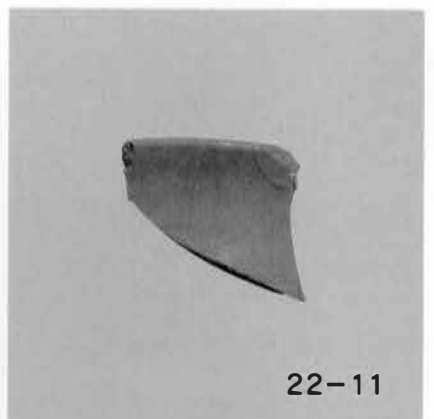
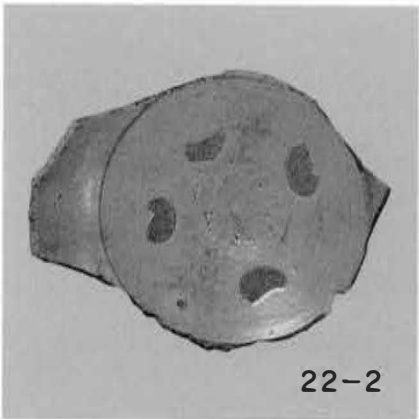
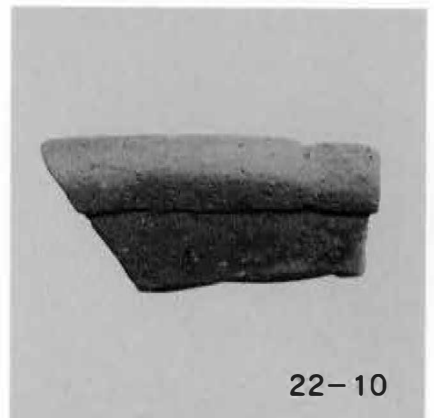
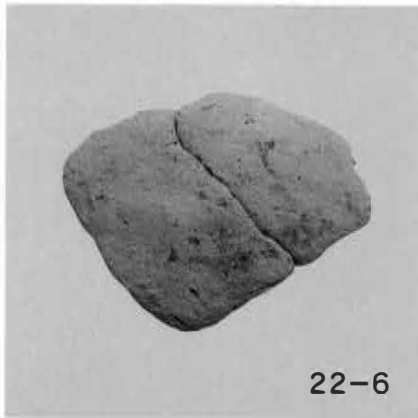
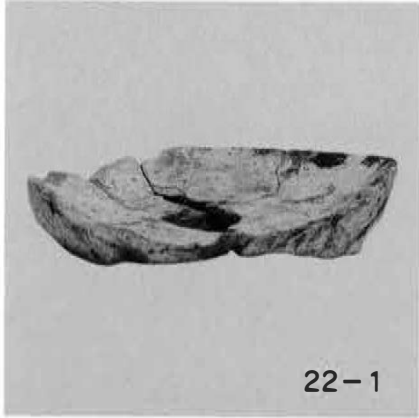
蔵数保古手第2次調査A区
2SX27検出状況（東から）

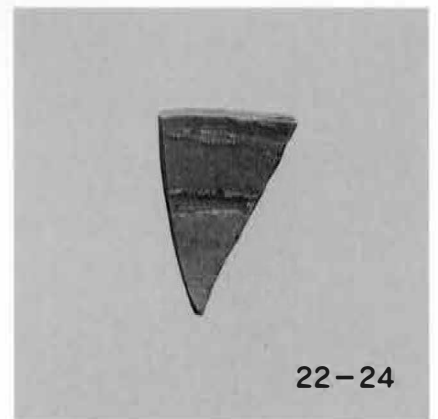
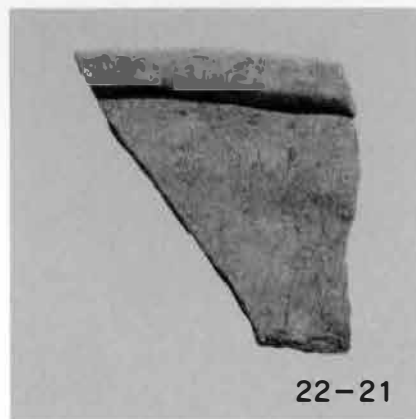
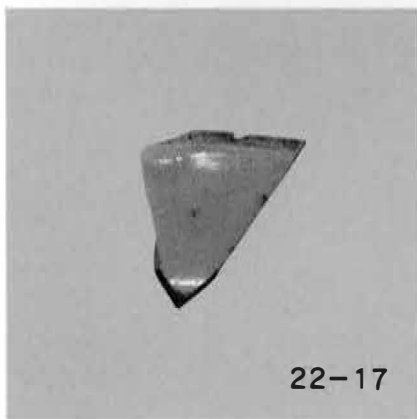
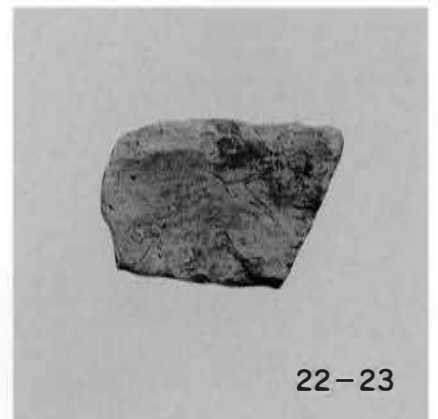
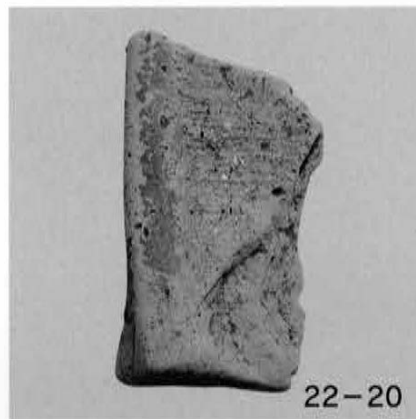
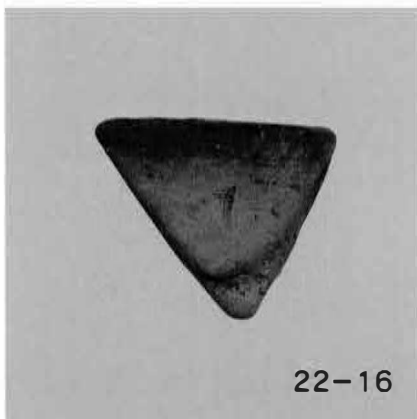
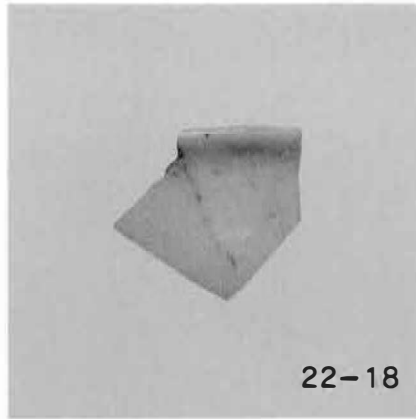
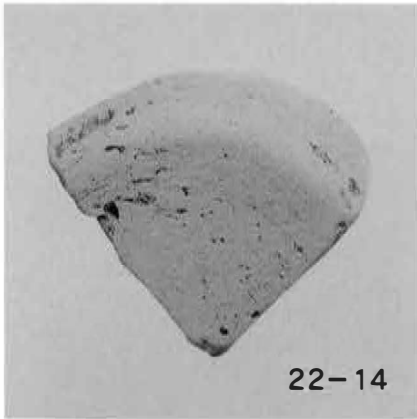


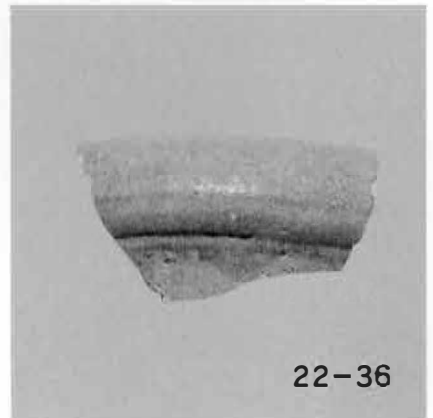
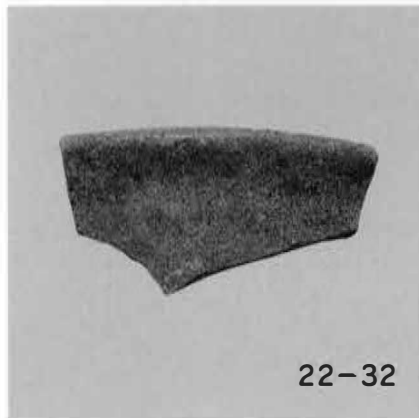
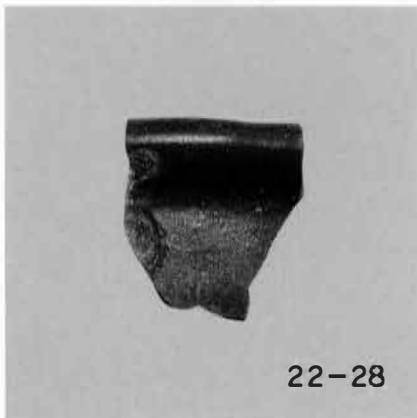
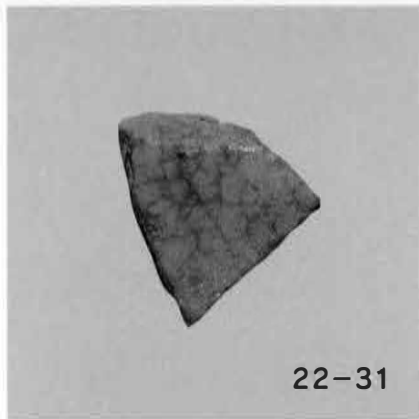
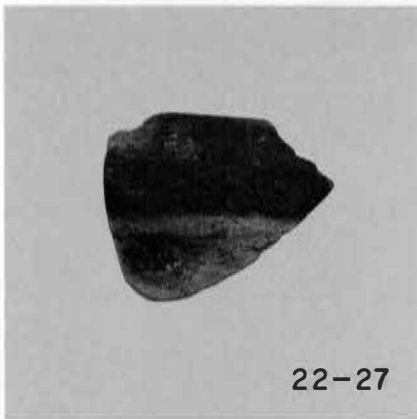
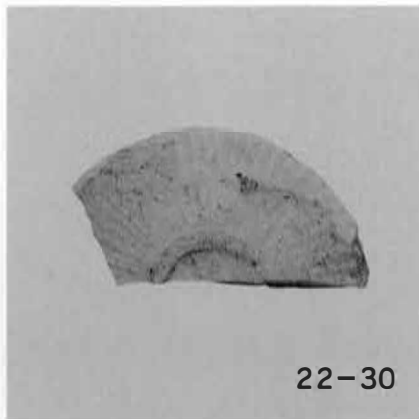
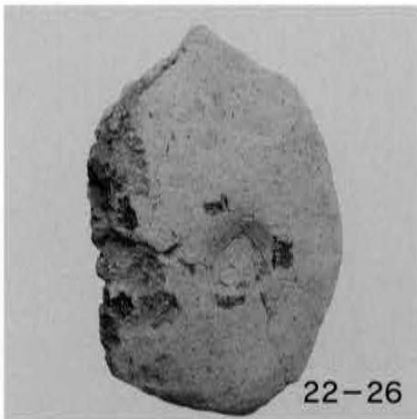
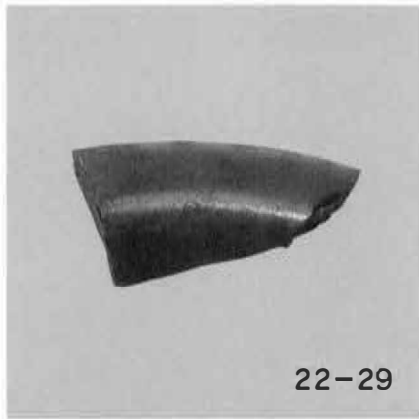
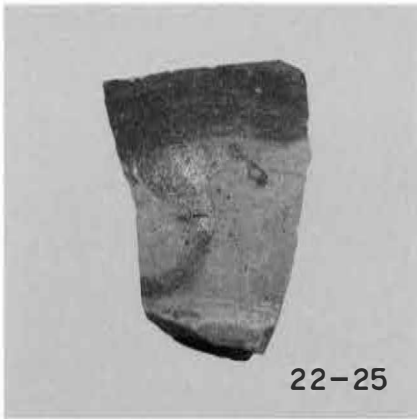
蔵数保古手第2次調査A区
2SX27完掘状況（北から）

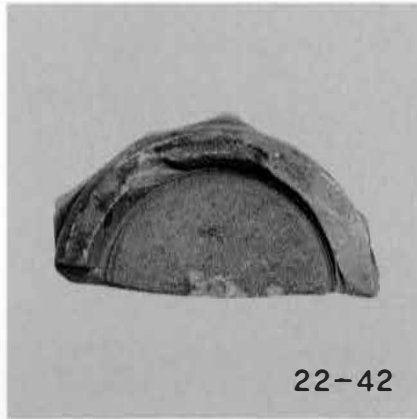
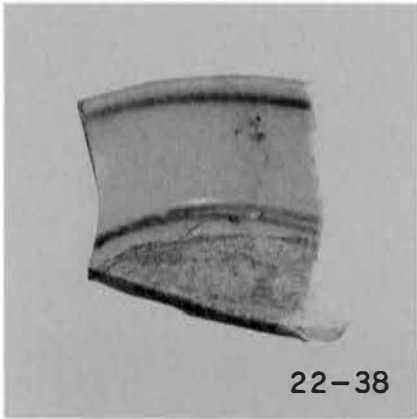
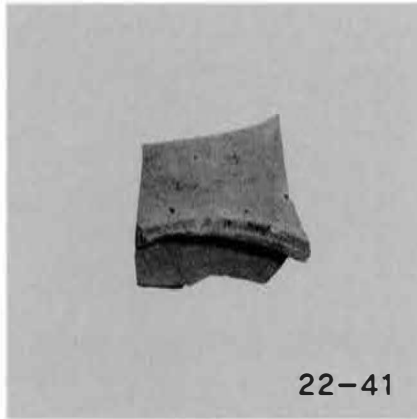
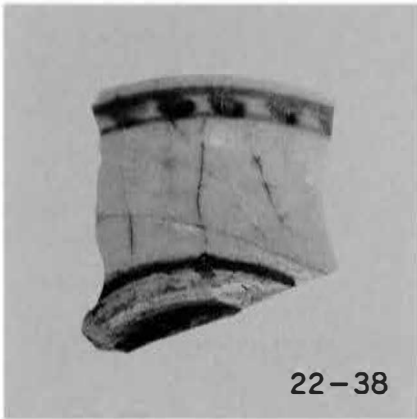
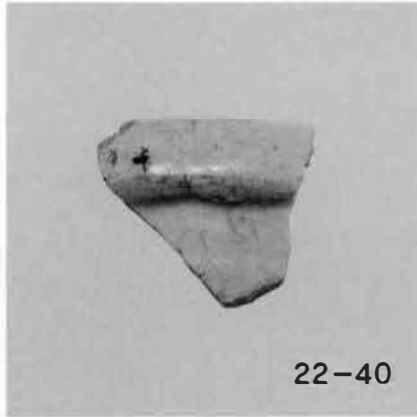
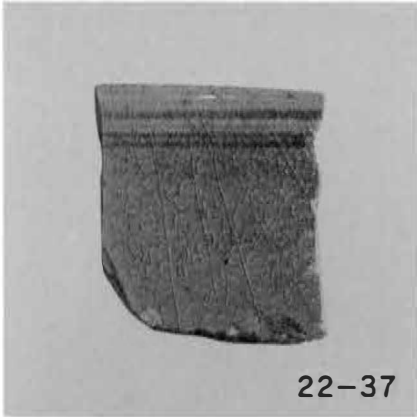


蔵数保古手第2次調査A区
2SX27検出状況（南から）







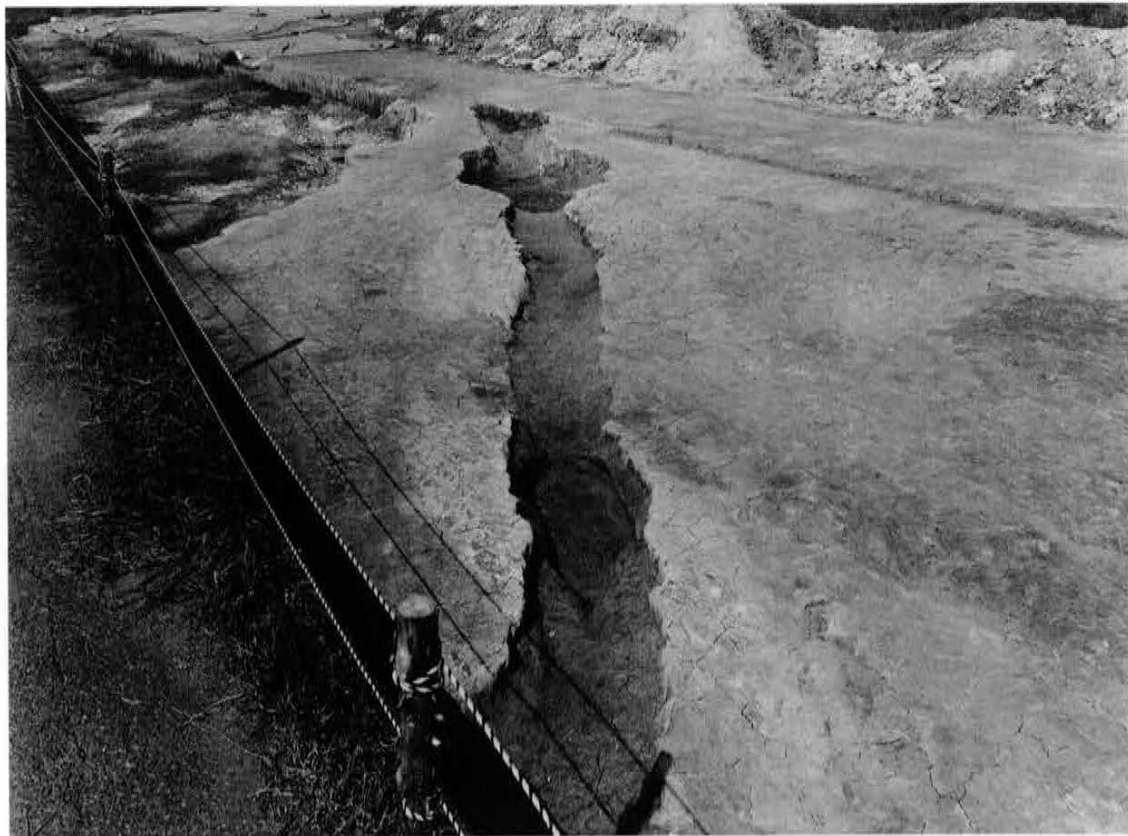




蔵数保古手遺跡
2次B区全景
(空中写真：北から)



蔵数保古手遺跡
2次B区全景
(空中写真：西から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SD1完掘状況（北から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SD1完掘状況（南から）



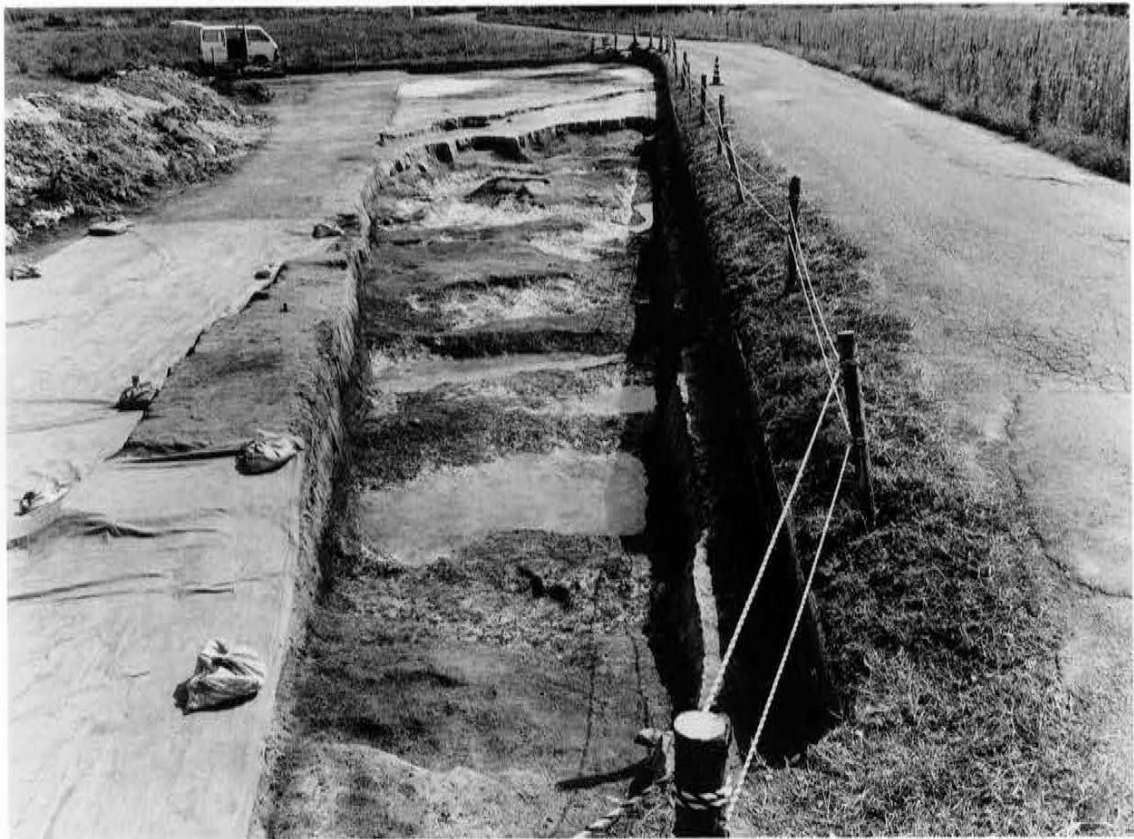
蔵数保古手遺跡2次B区
2SD1北ベルト土層観察状況（北から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SD1南ベルト土層観察状況（南から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX2・3完掘状況（北から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX2・3完掘状況（南から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX2完掘状況（西から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX2土層観察状況（北から）



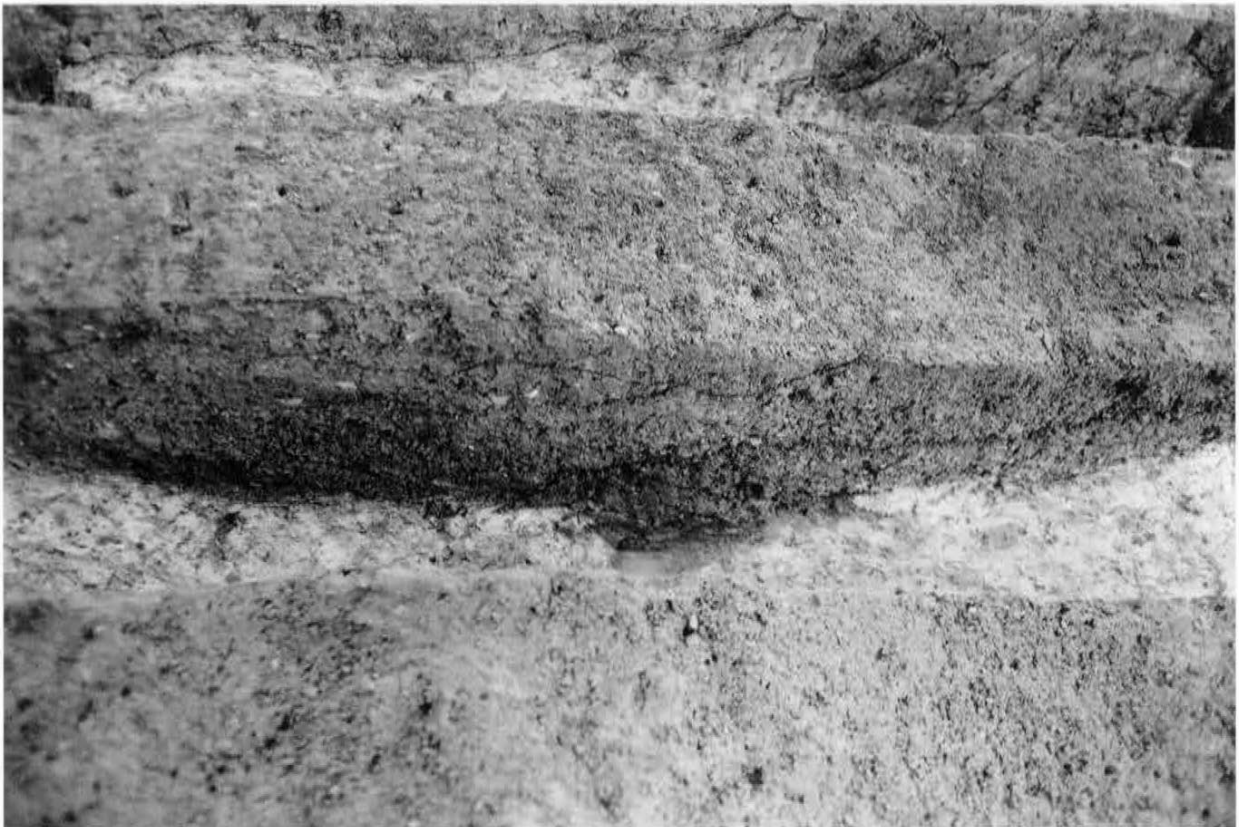
蔵数保古手遺跡
2次B区
2SX5完掘
(空中写真：真上から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S8) 上層観察状況 (西から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



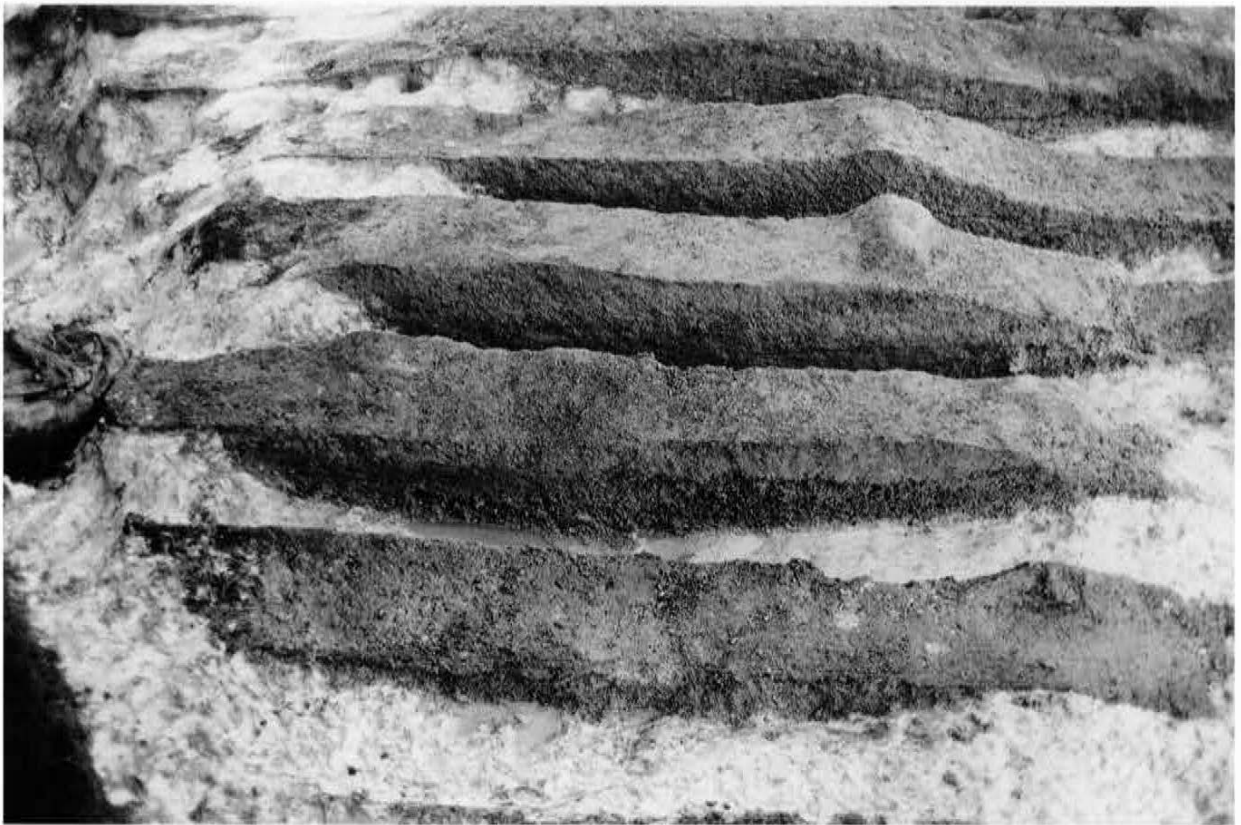
蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵敷保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



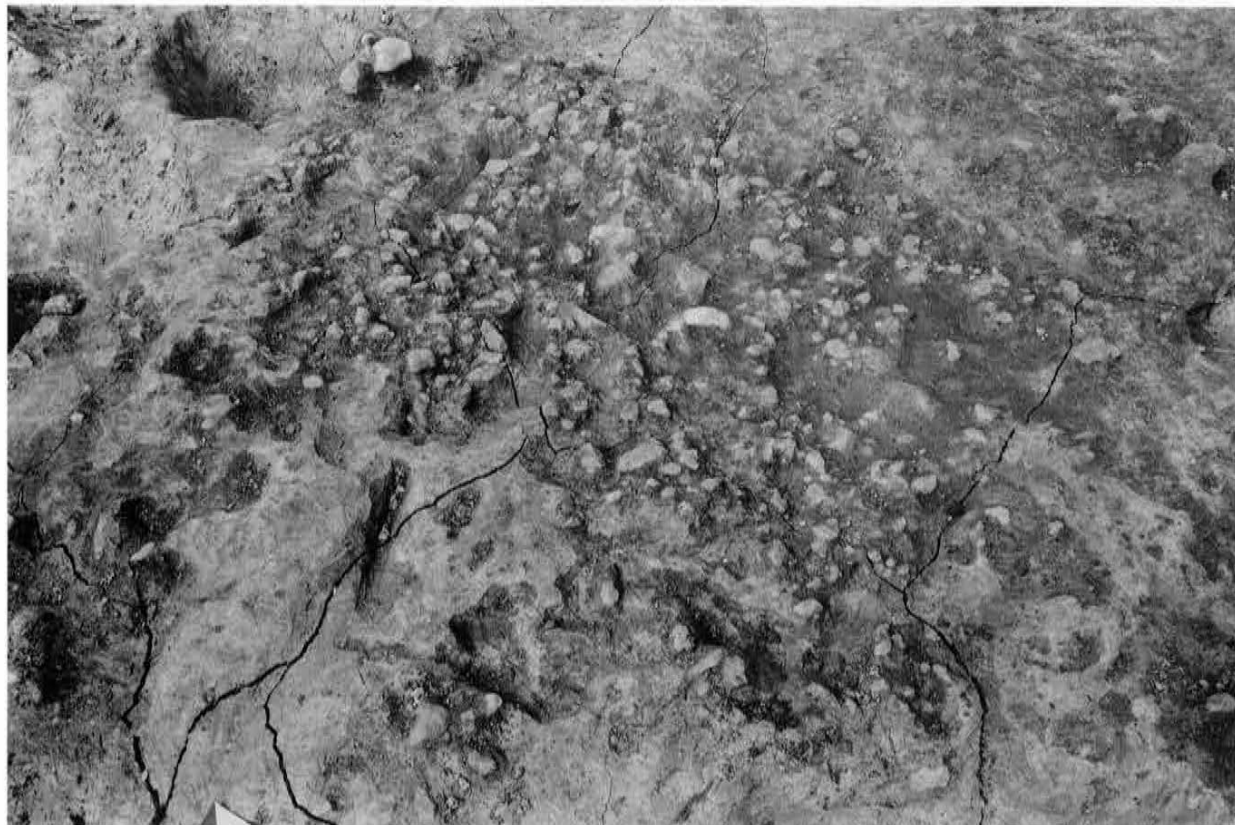
蔵敷保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



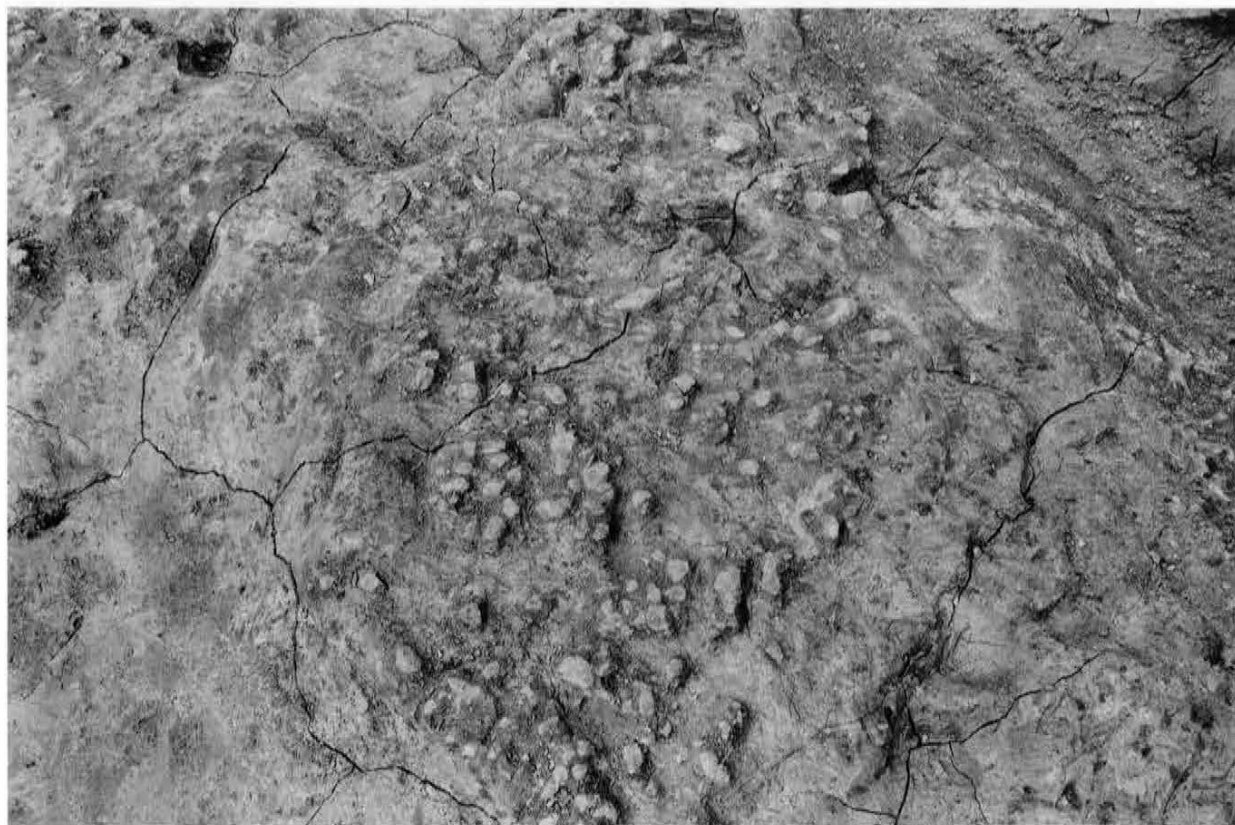
蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (西から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (東から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 小石検出状況 (北から)



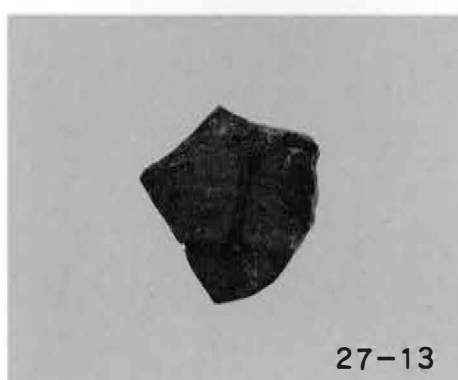
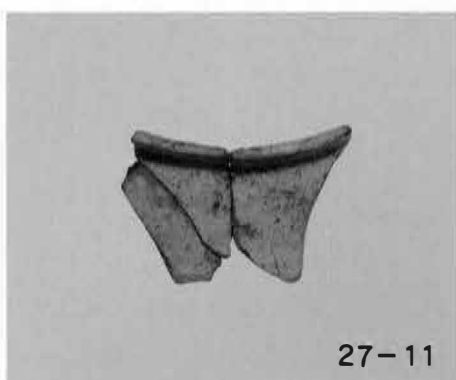
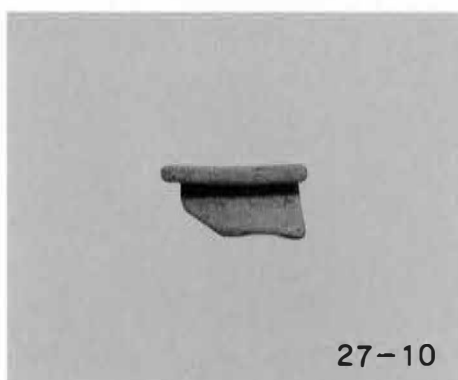
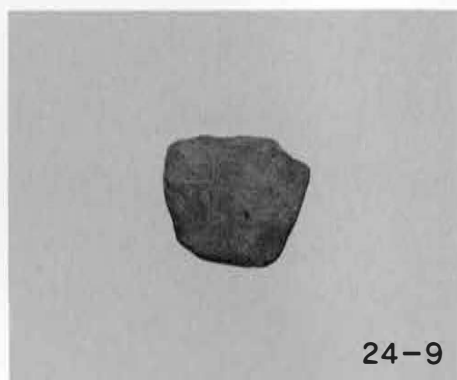
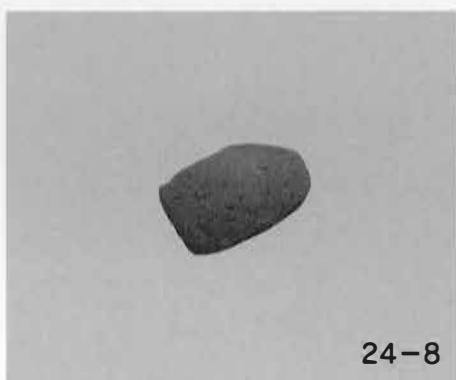
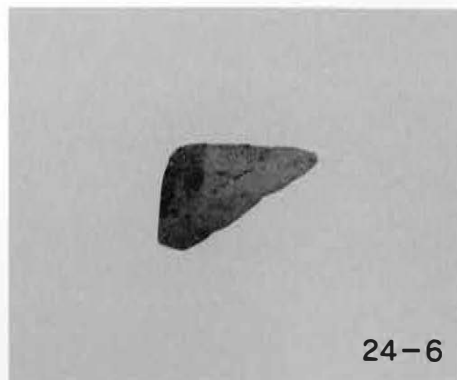
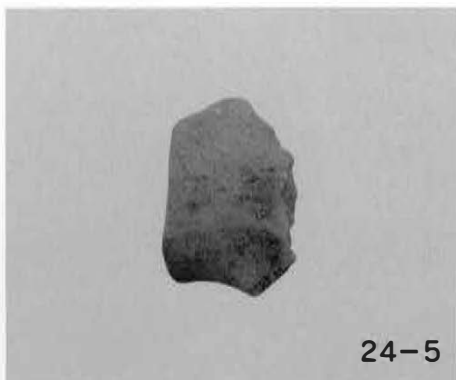
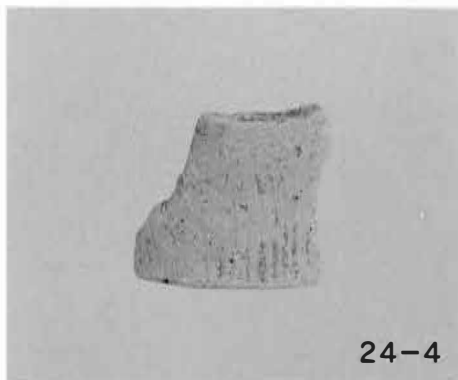
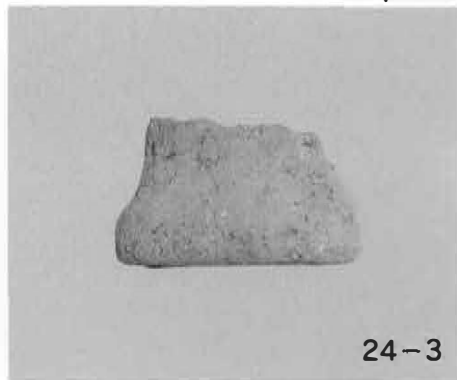
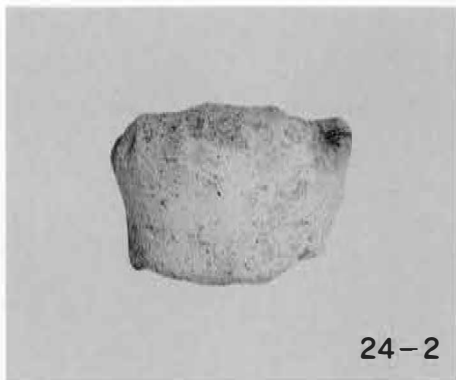
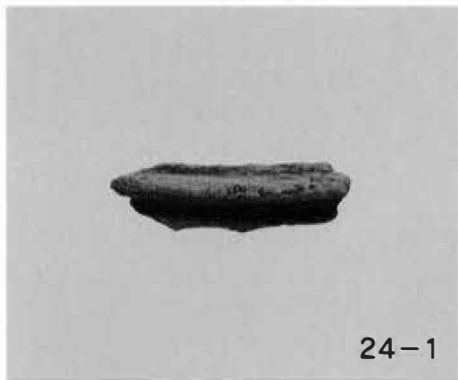
蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 小石検出状況 (南から)

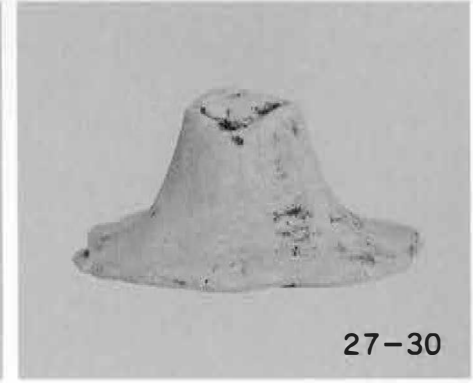
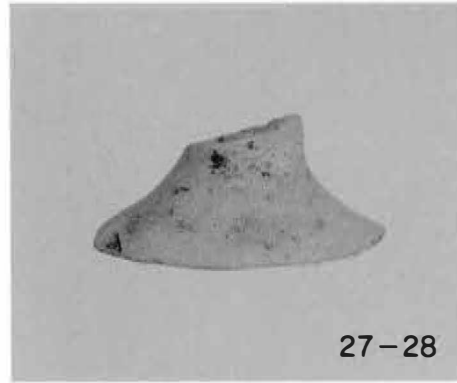
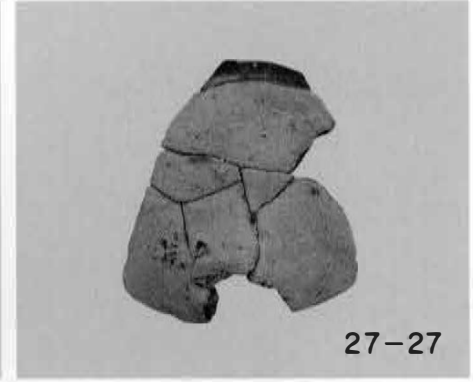
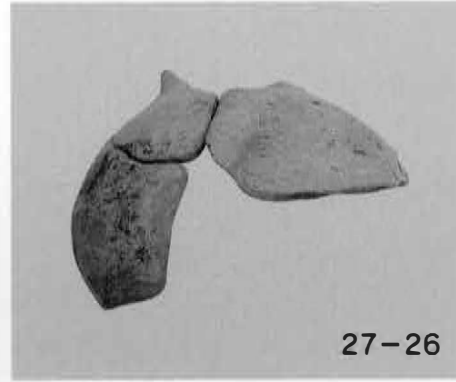
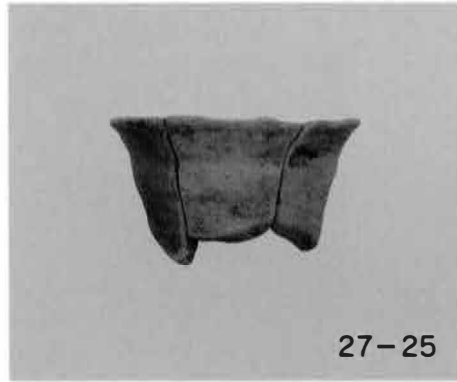
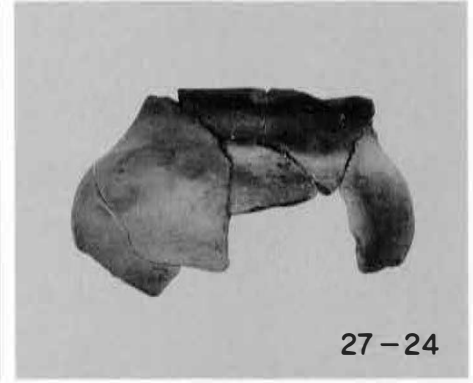
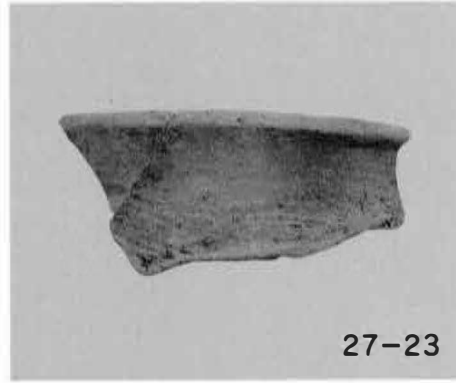
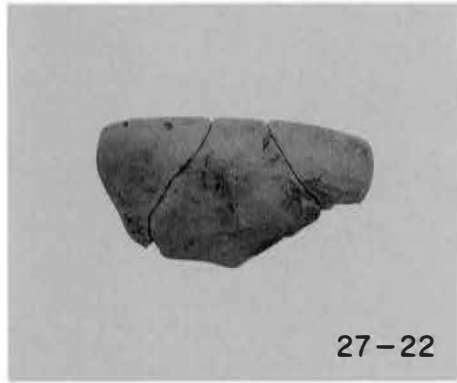
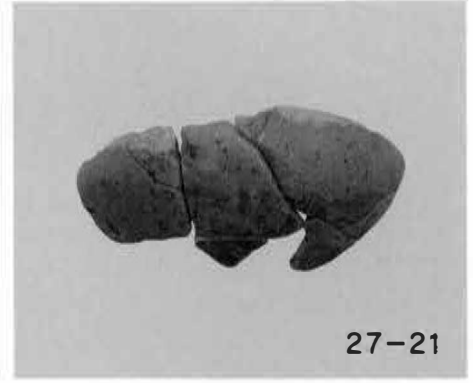
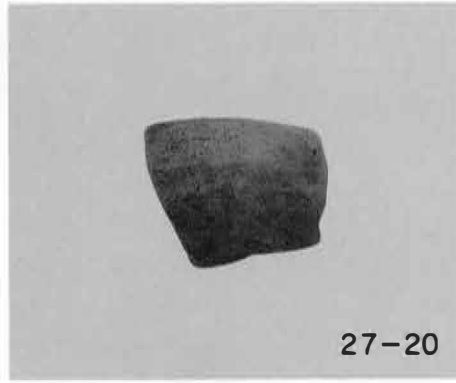
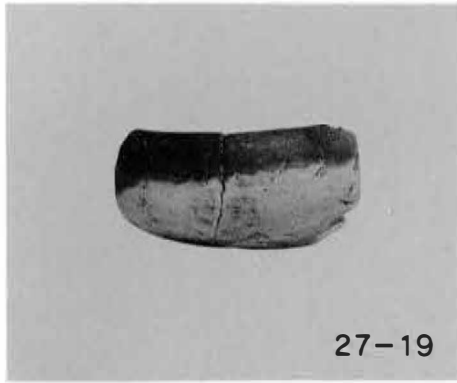
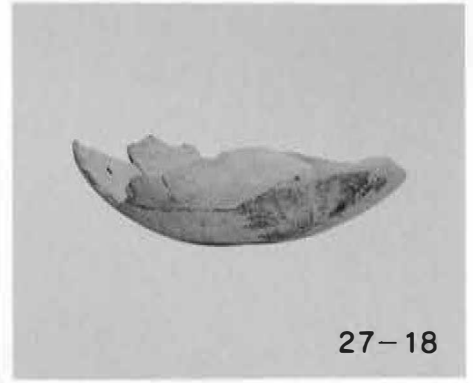
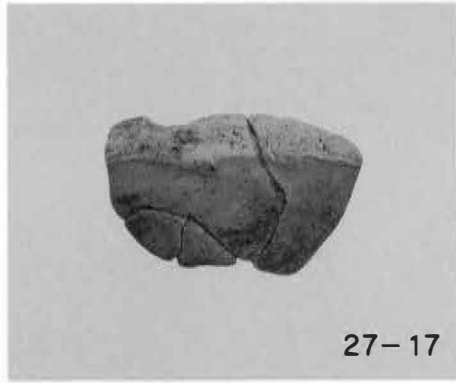
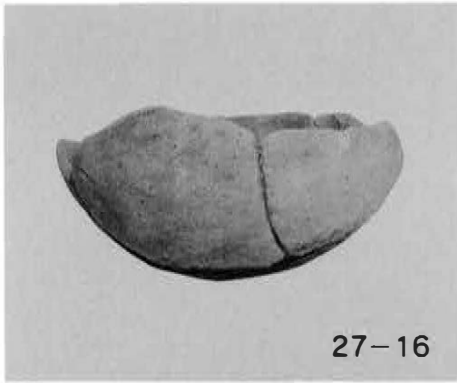


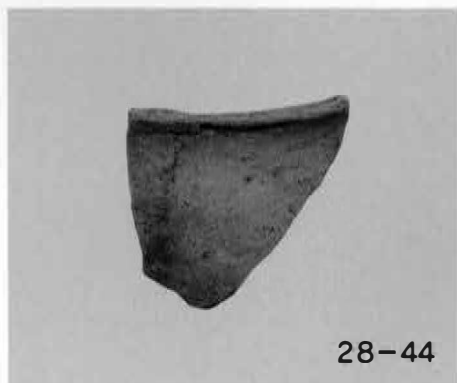
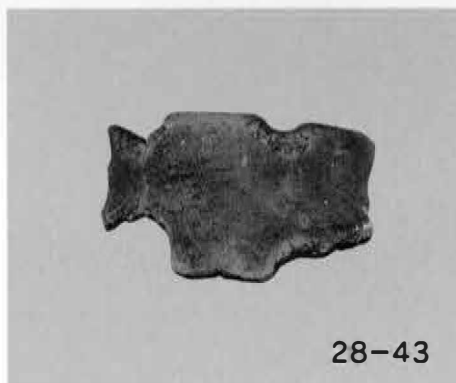
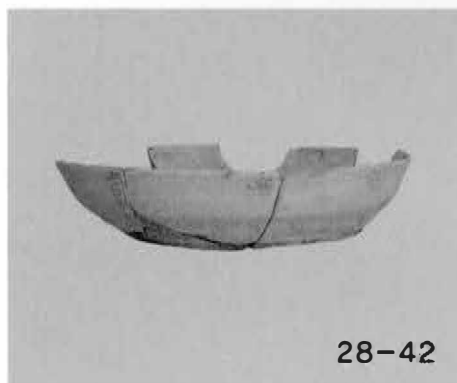
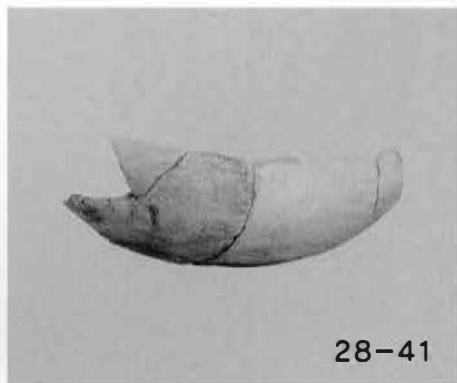
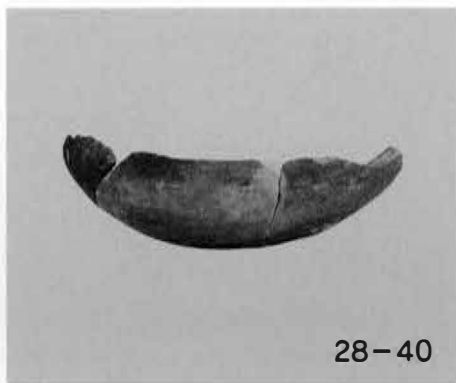
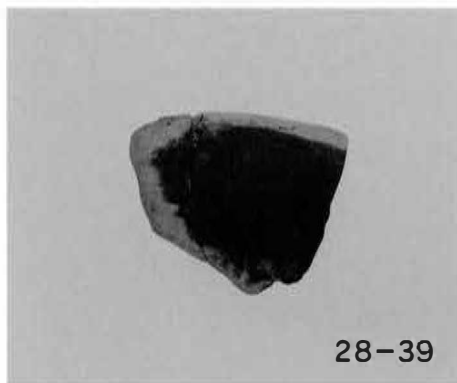
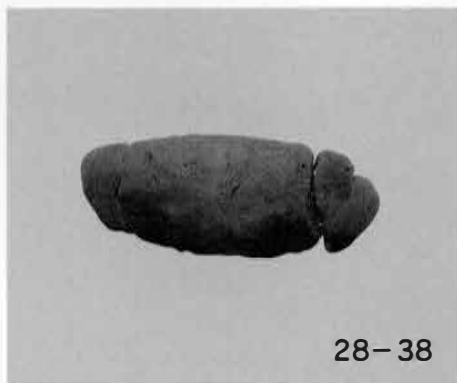
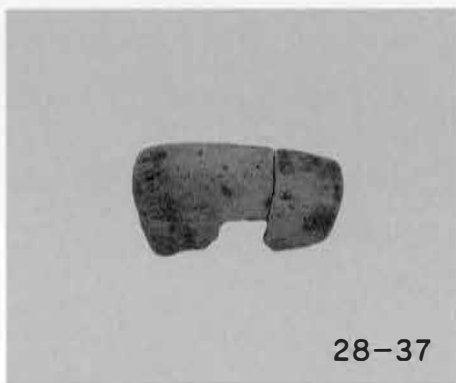
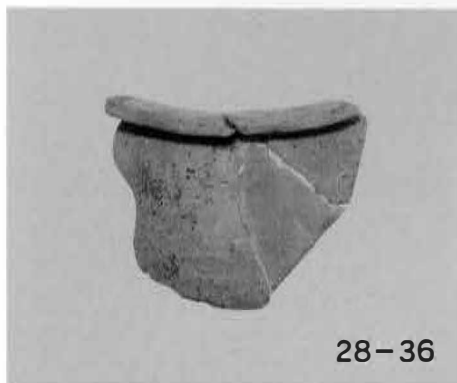
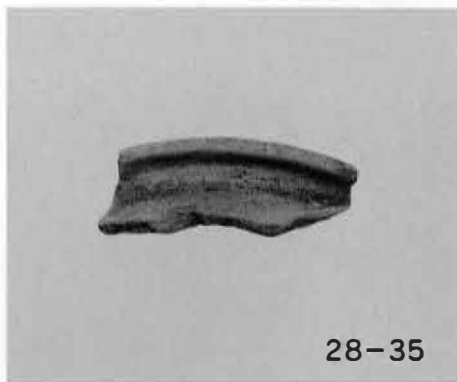
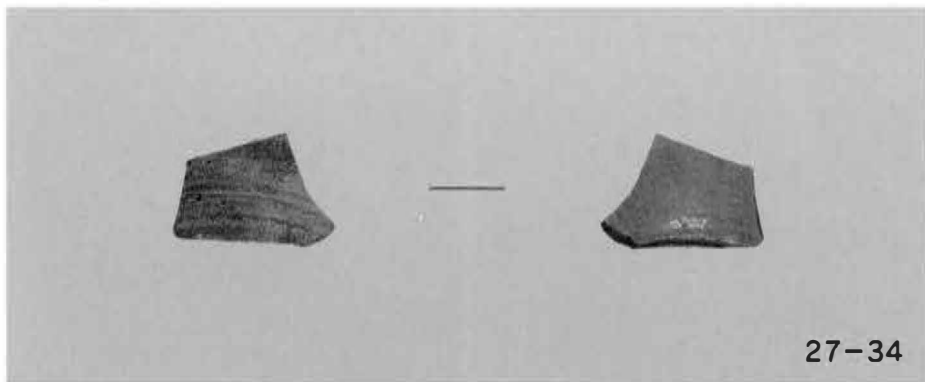
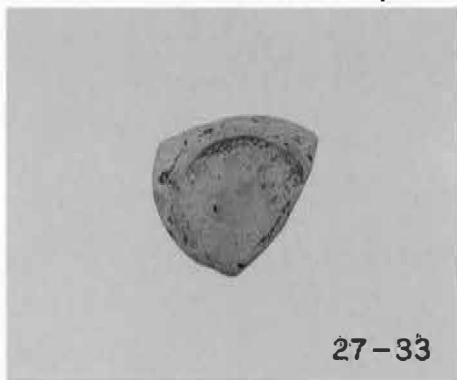
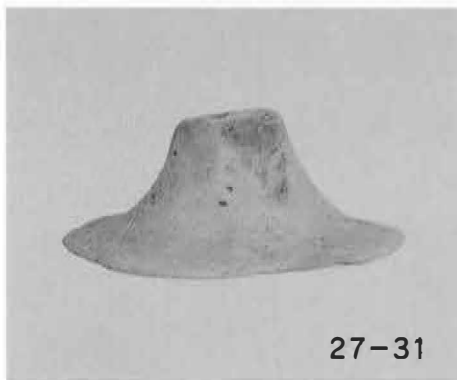
蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 完掘状況 (東から)

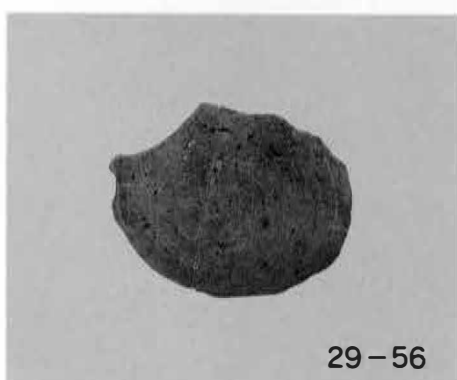
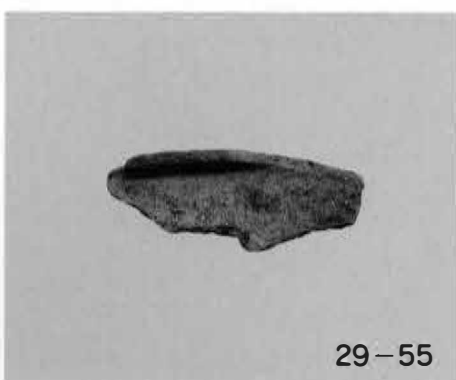
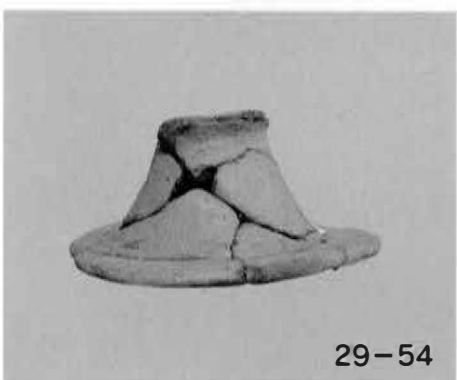
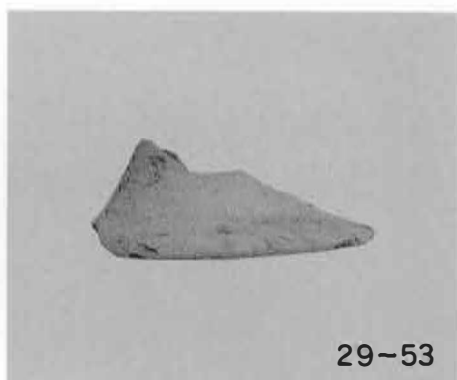
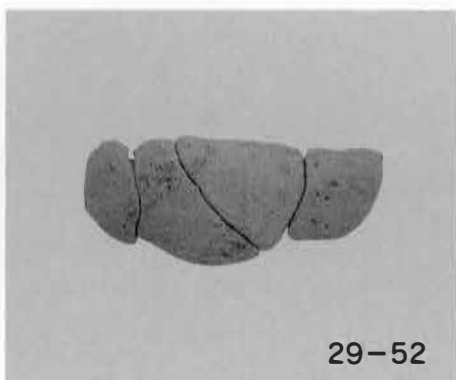
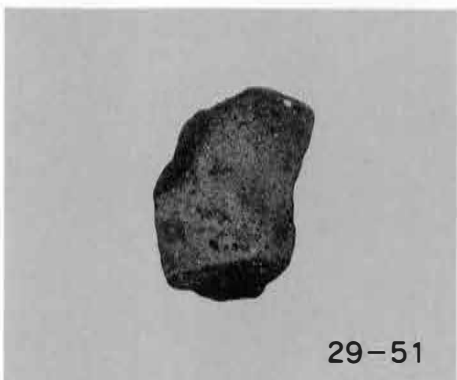
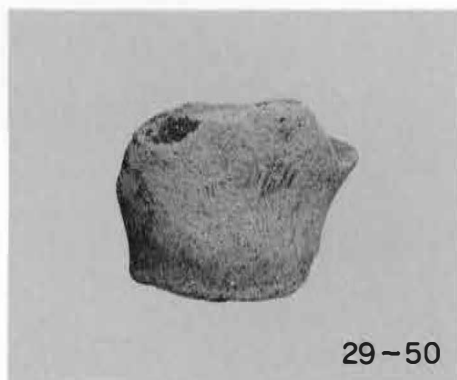
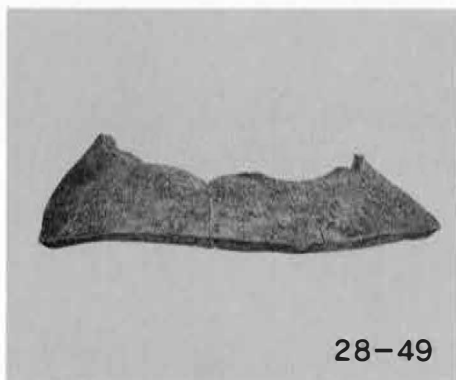
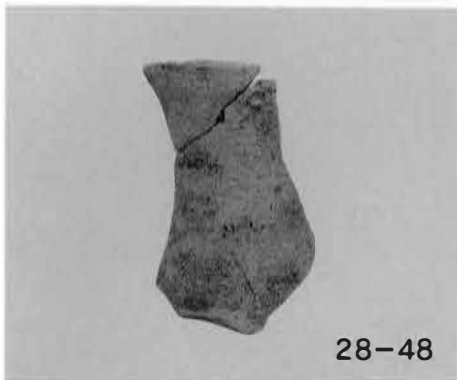
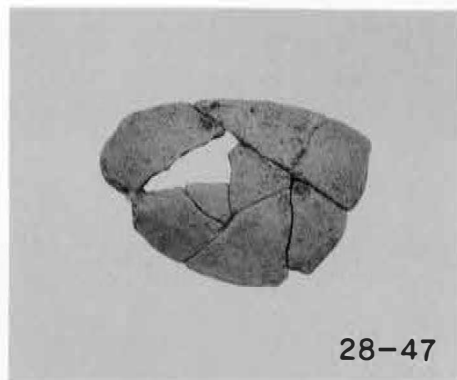
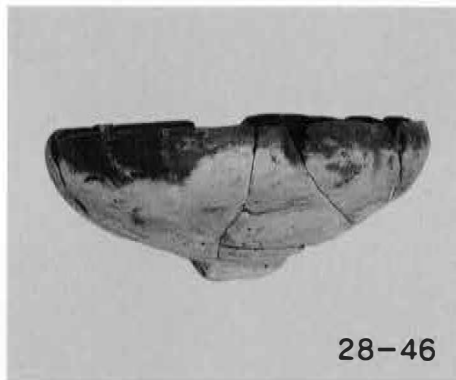
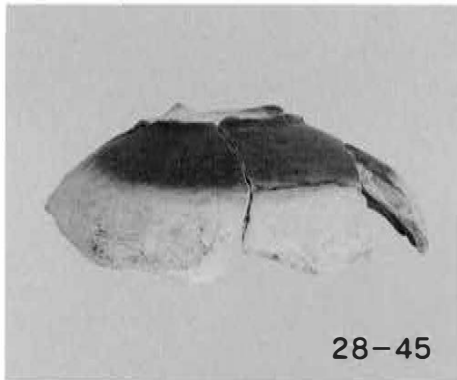


蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 完掘状況 (東から)











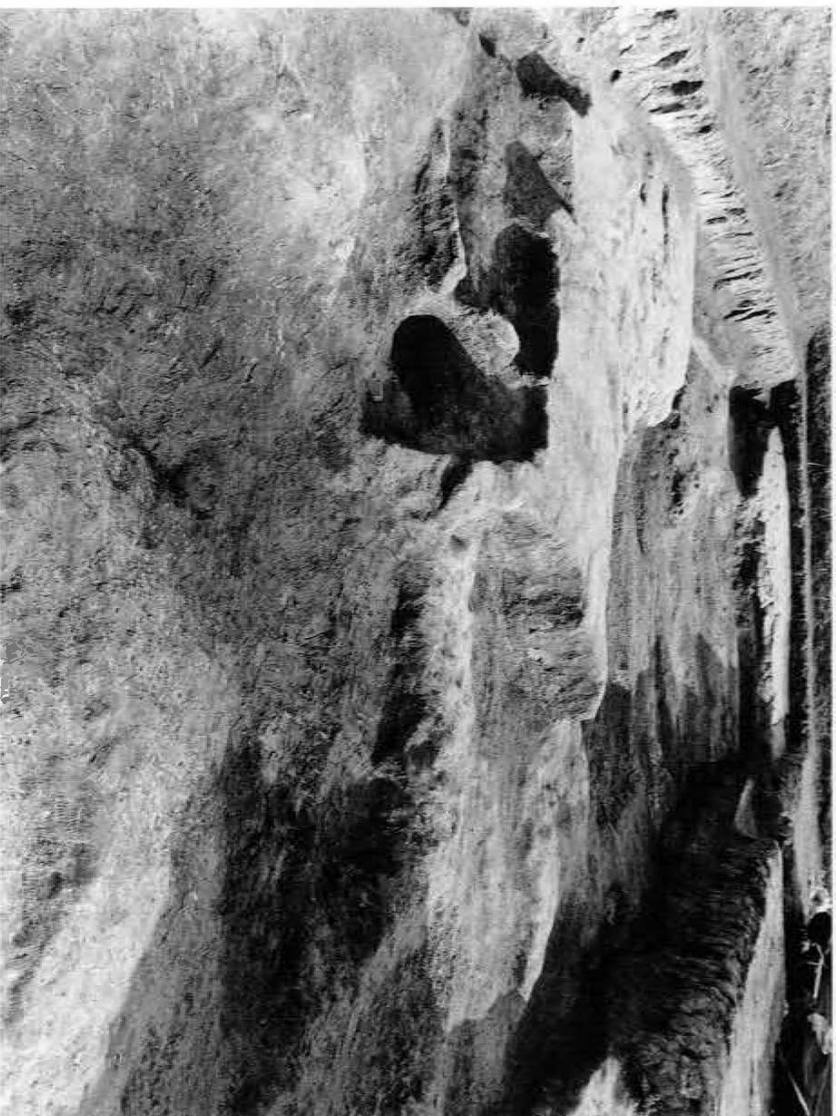
蔵数保古手遺跡2次C区
2SD01 (東から)



蔵数保古手遺跡2次C区
2SK03調査区東壁土層



藏教保古手遺跡2次C区
2SK04上層 (西カ・5)



藏教保古手遺跡2次C区
2SD05・2SD06 (北カ・5)



蔵数保古手遺跡2次C区
2SD05・2SD06 (南から)



蔵数保古手遺跡2次C区
2SD05・2SD06調査区西壁土層



蔵数保古手遺跡2次C区
2SK07・2SD08 (西から)



蔵数保古手遺跡2次C区
2SD08調査区東壁土層



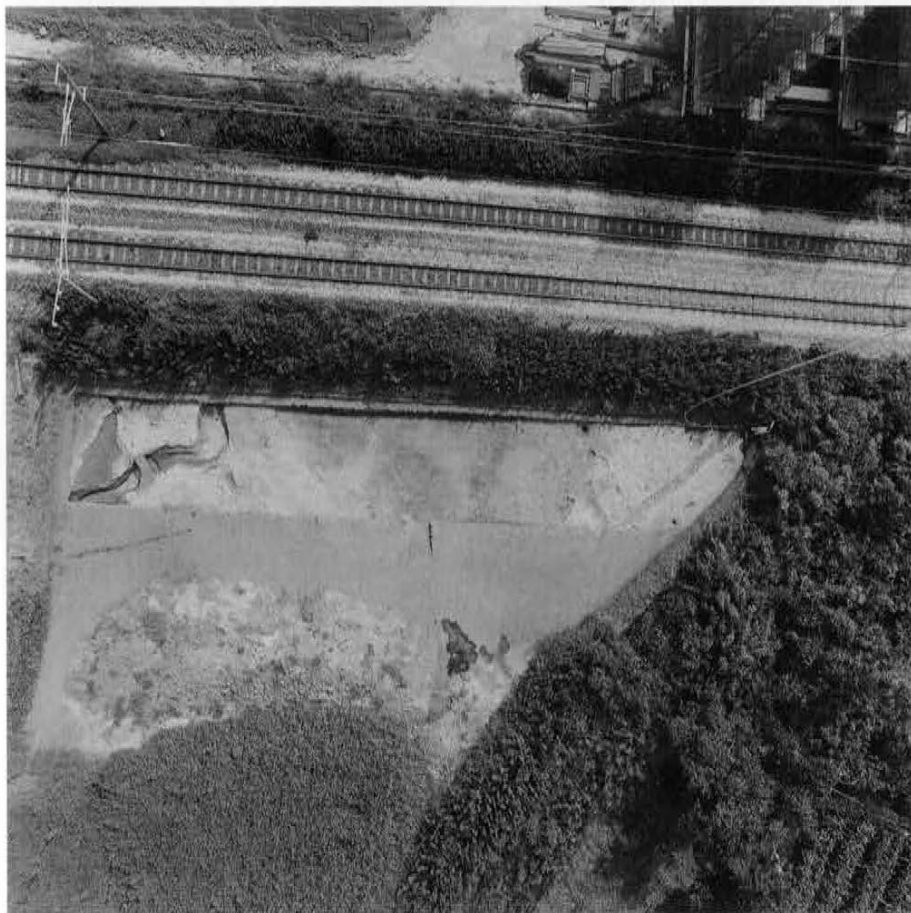
蔵敷保古手遺跡2次C区
2SD08ベルト南側上層



蔵敷保古手遺跡2次C区
2SP11 (東から)



祇数保古手遺跡2次C区
北側調査区 (真上)



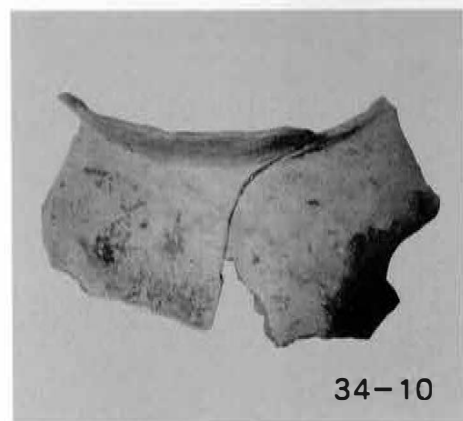
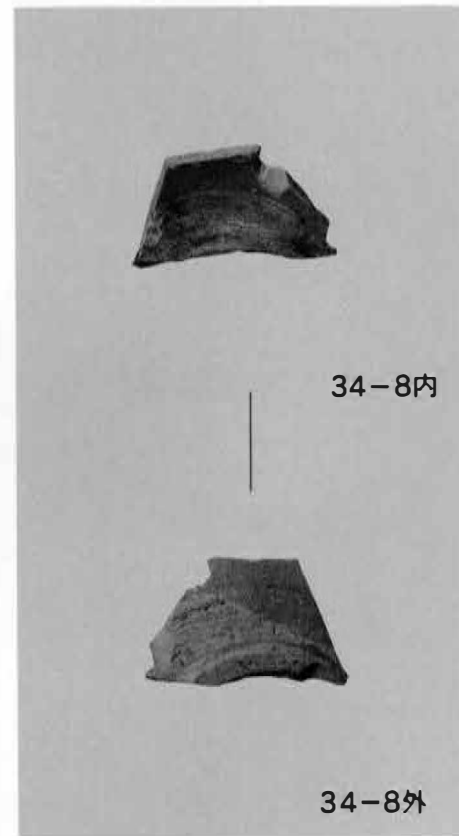
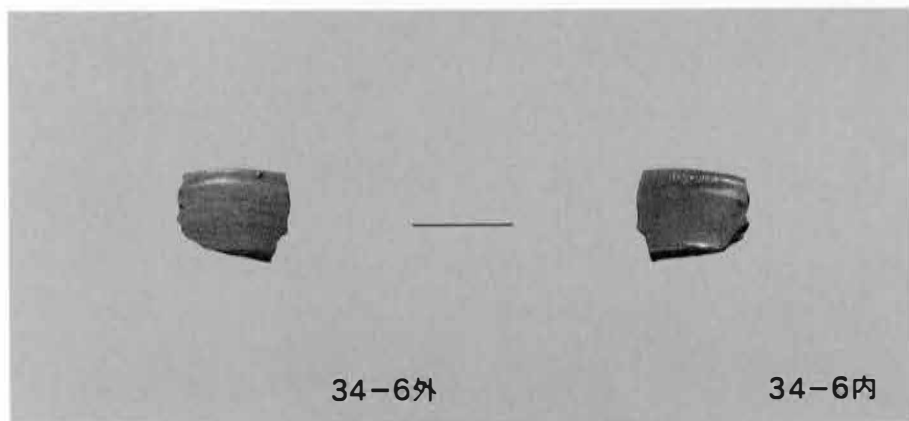
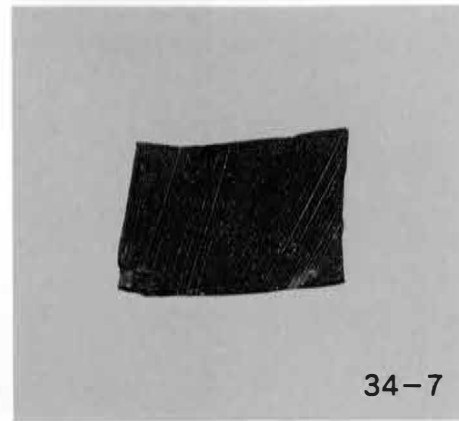
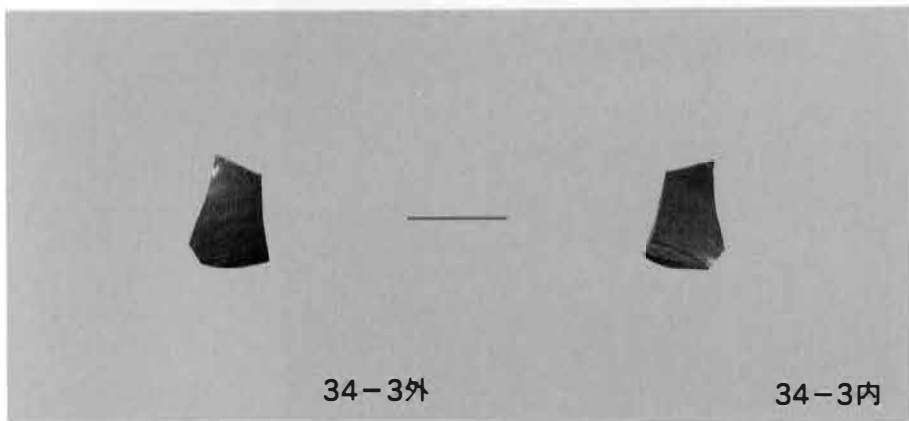
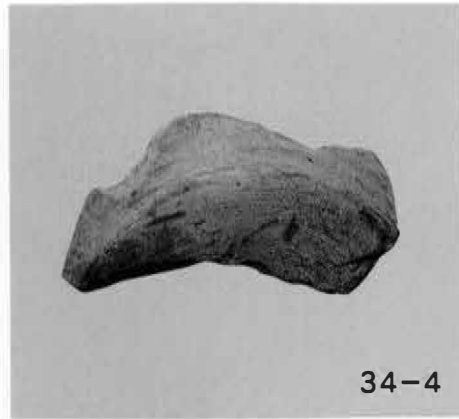
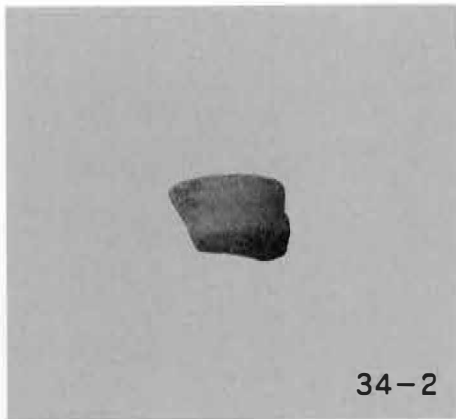
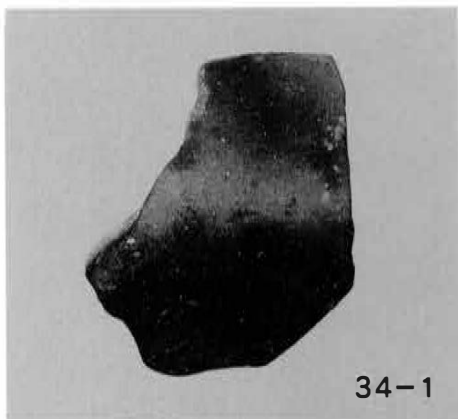
祇数保古手遺跡2次C区
南側調査区 (真上)

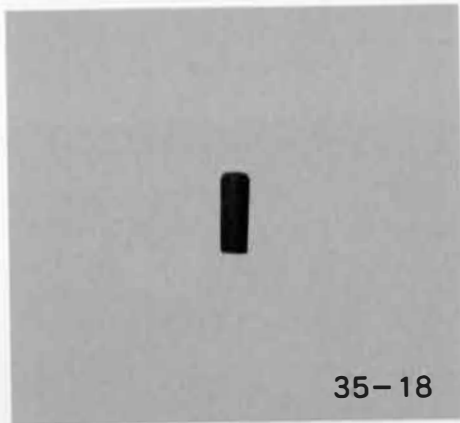
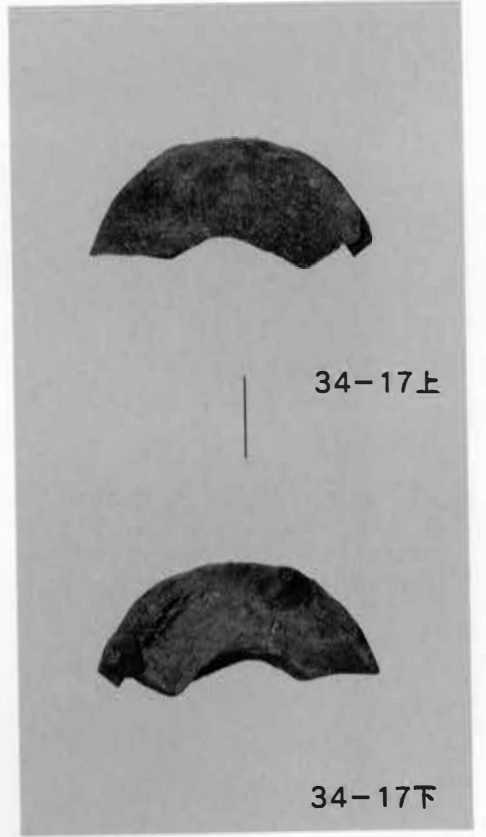
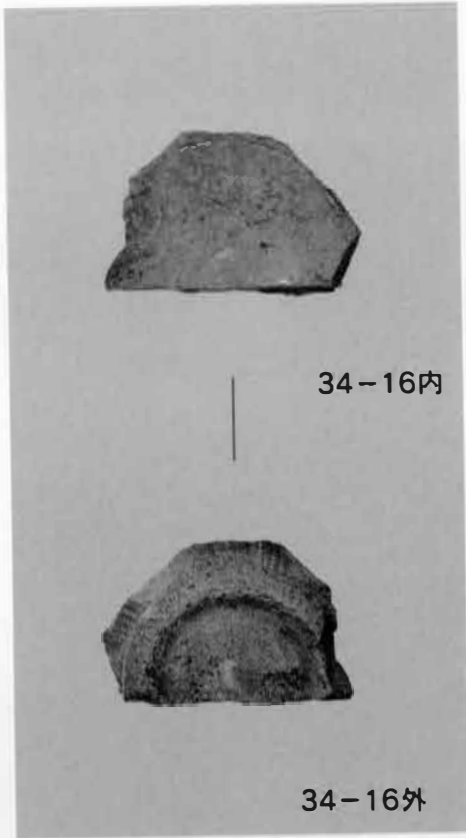
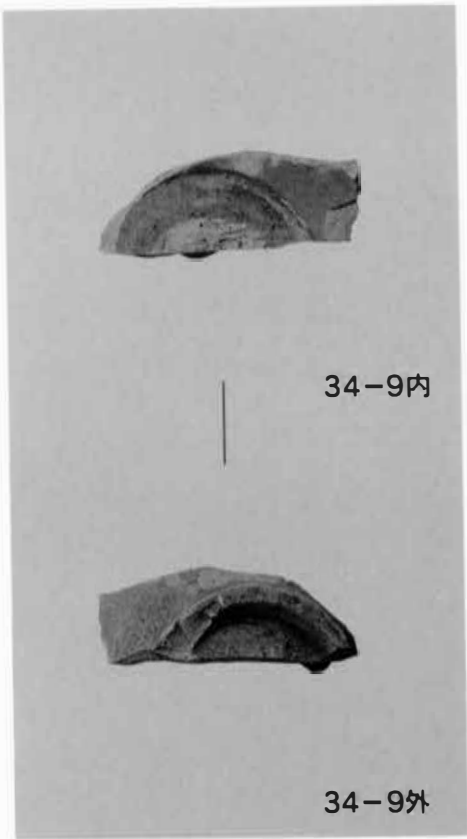


歳数保古手遺跡2次C区
調査区全景（西から）



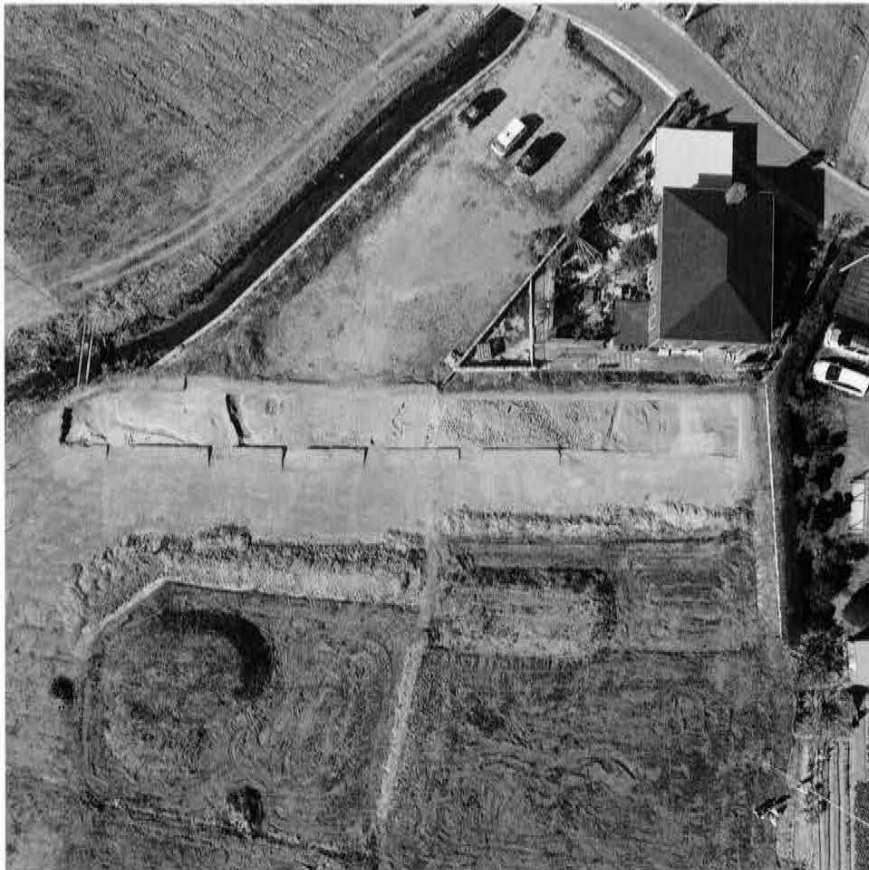
歳数保古手遺跡2次C区
調査区全景（東側を望む）







蔵数三郎丸遺跡
全景
(空中写真：南から)



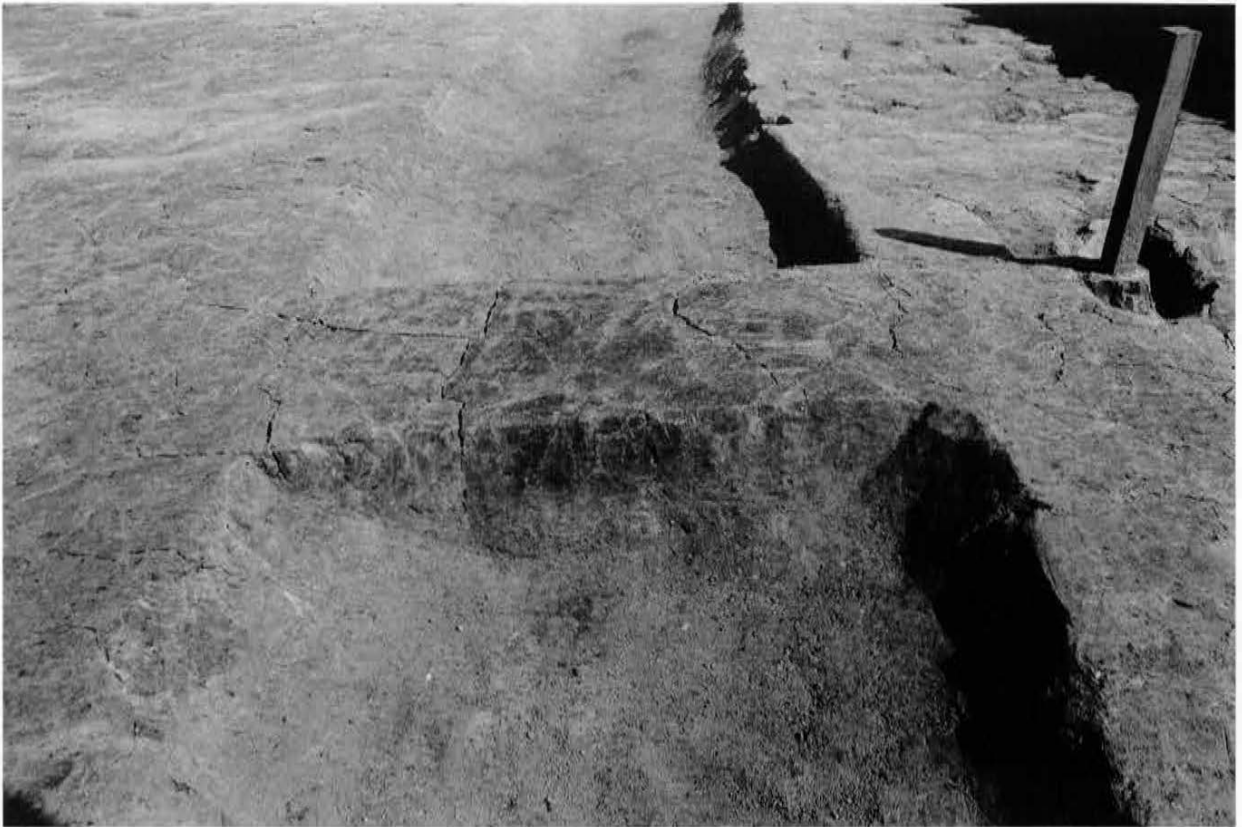
蔵数三郎丸遺跡
全景
(空中写真：真上から)



蔵数三郎丸遺跡
I SD1土層観察状況（西から）



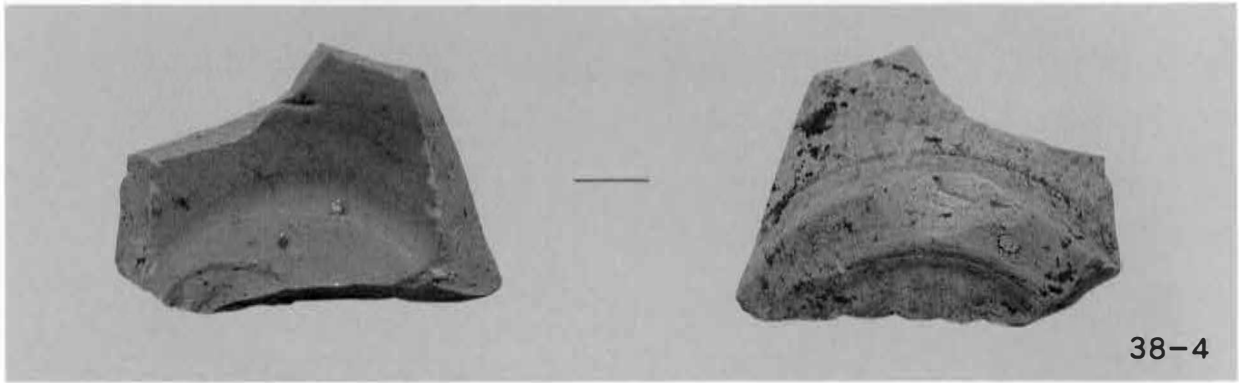
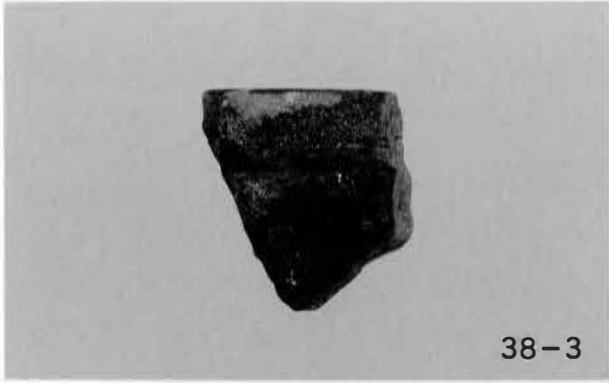
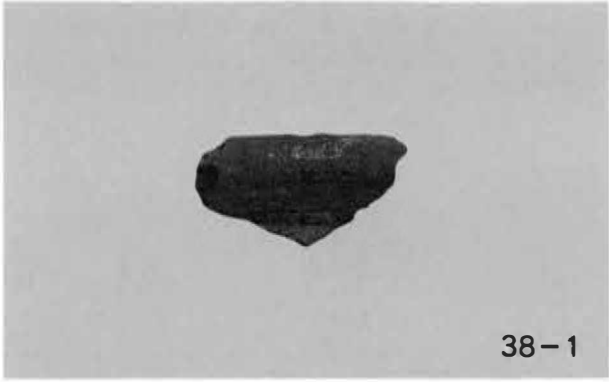
蔵数三郎丸遺跡
I SD2土層観察状況（東から）



蔵数三郎丸遺跡
ISD3土層観察状況（南から）



蔵数三郎丸遺跡
不明遺構
（空中写真：真上から）

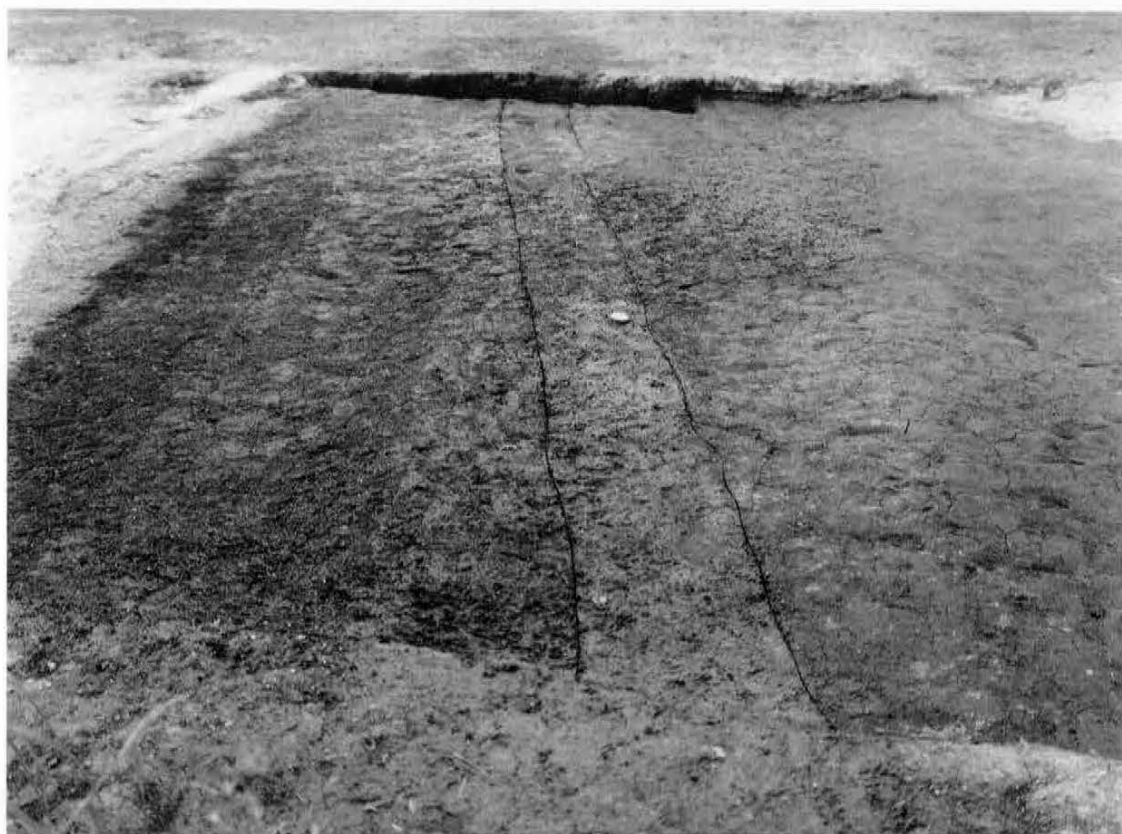




長政川A区
ISX01a (東カ・5)



長政川A区
ISX01a・b調査区西壁土層



長畝町A区
1SD02 竹製暗渠検出
(東から)



長畝町A区
1SD02 竹製暗渠
(東から)



長畝町A区
ISD02調査区西壁土層



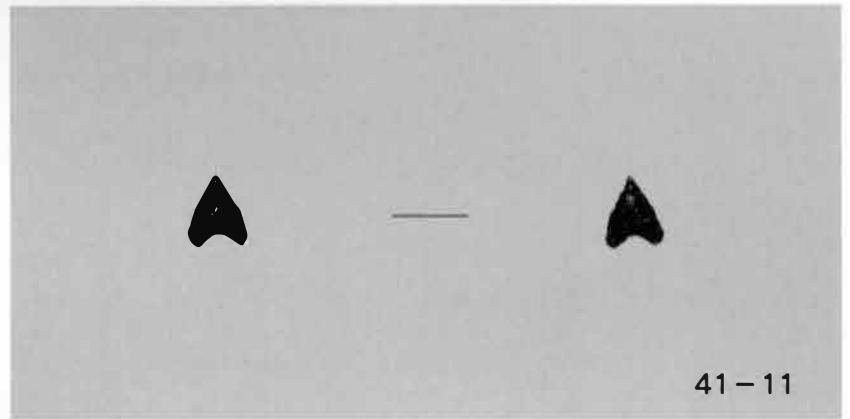
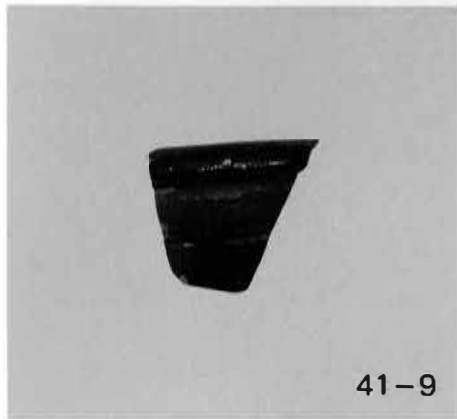
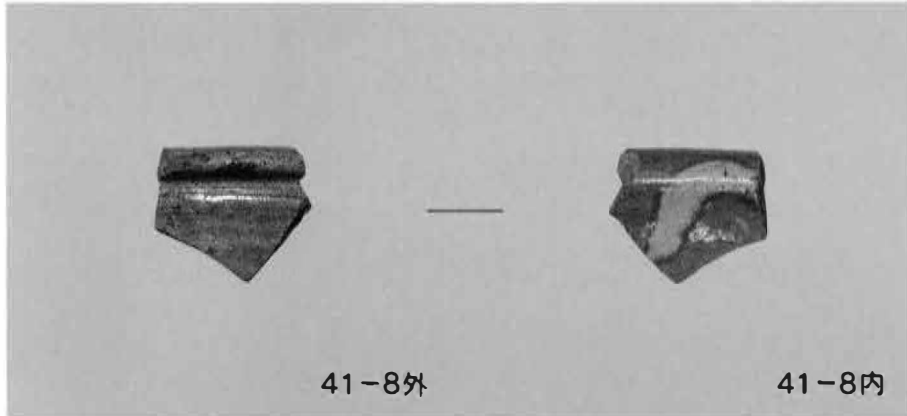
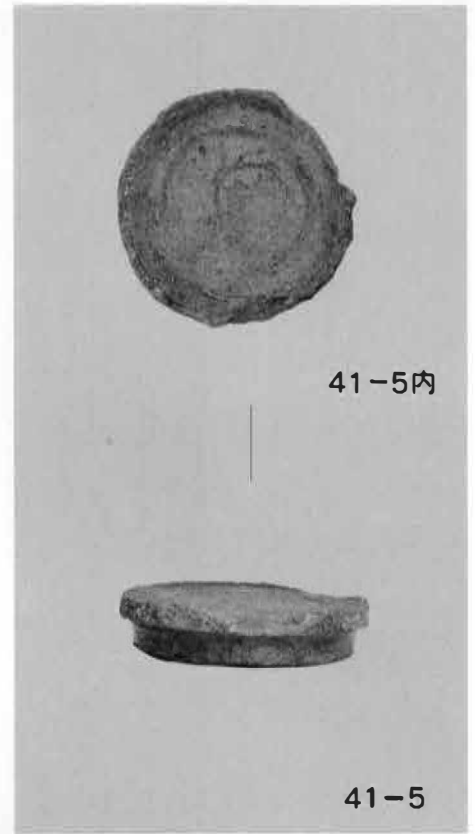
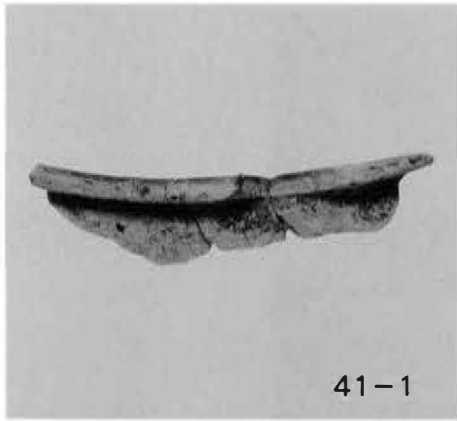
長畝町A区
東側調査区全景（真上）

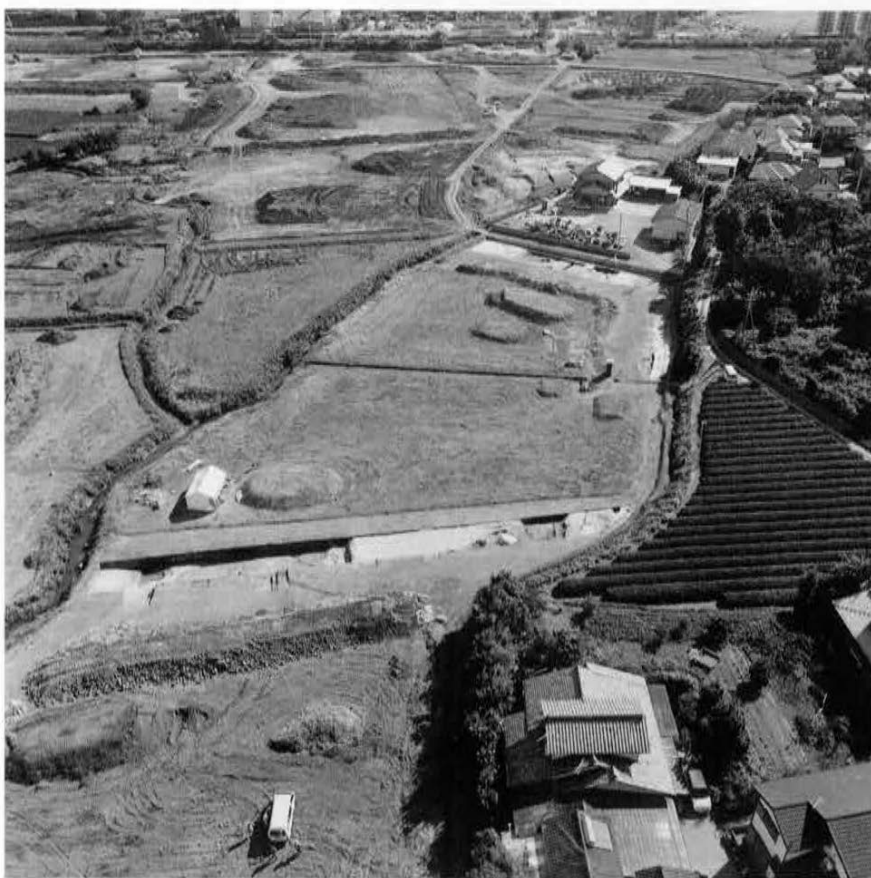


長政町A区
南側調査区（真上）



長政町A区
調査区全景（西から）





藏数長畝町遺跡
全景
(空中写真：西から)



藏数長畝町遺跡
B区全景
(空中写真：南から)



蔵数長畝町遺跡
B区全景
(空中写真：真上から)



蔵数長畝町遺跡B区
ISX1完掘状況(北から)



蔵数長畝町遺跡B区
ISX1 東壁北側土層観察状況 (西から)



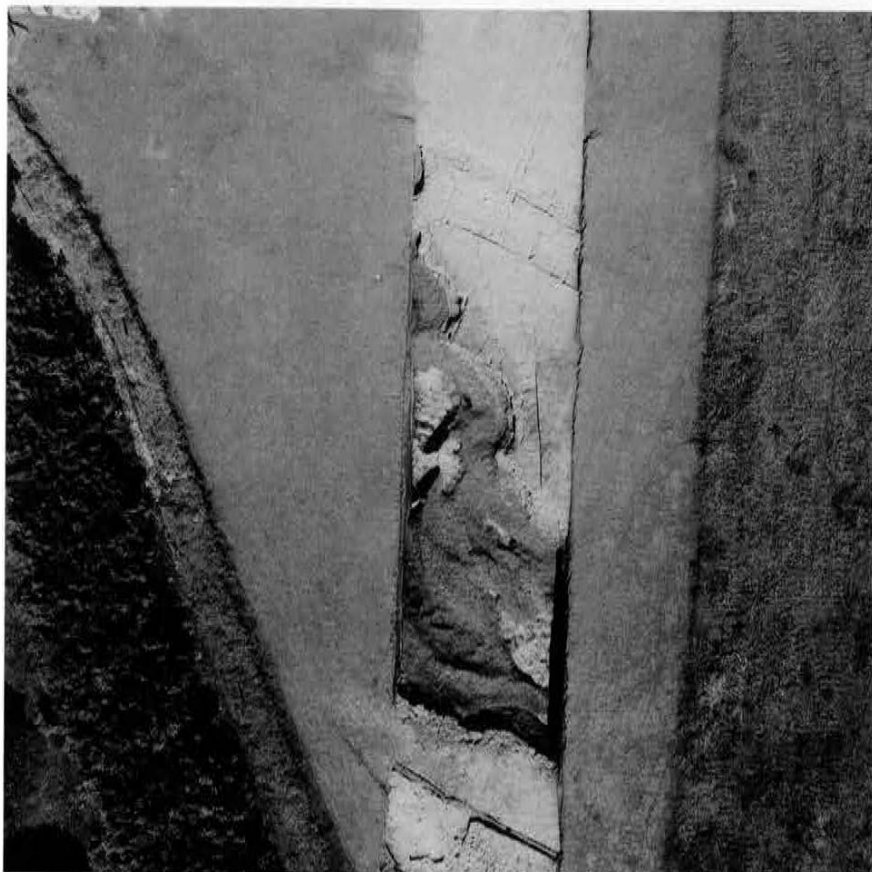
蔵数長畝町遺跡B区
ISX1 東壁北側中央土層観察状況 (西から)



蔵数長畝町遺跡B区
1SX1東壁南側中央土層観察状況（西から）



蔵数長畝町遺跡B区
1SX1東壁南側土層観察状況（西から）



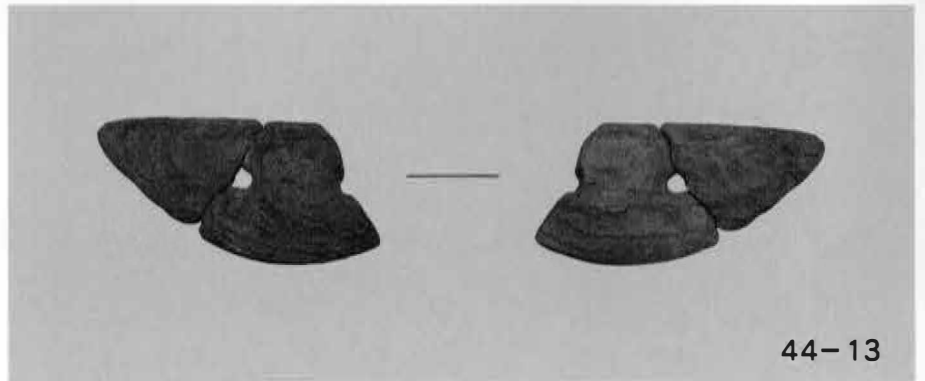
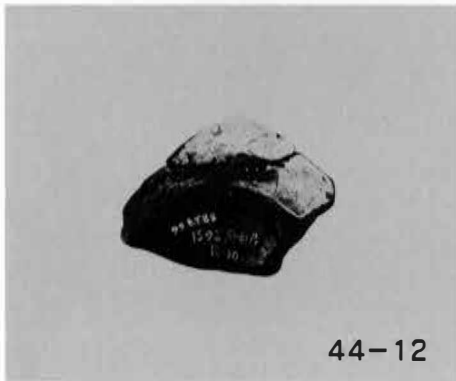
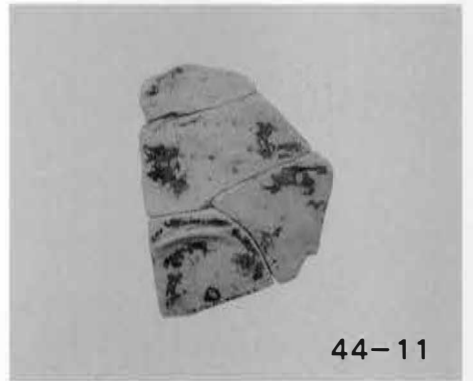
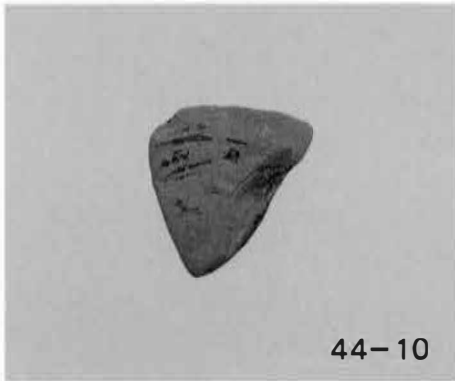
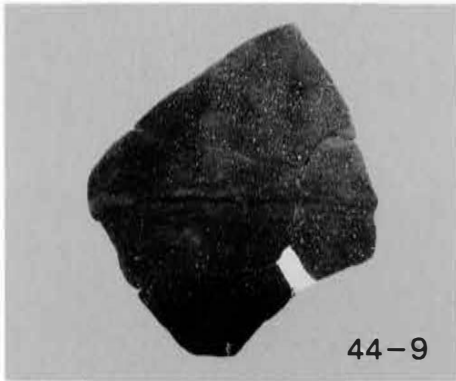
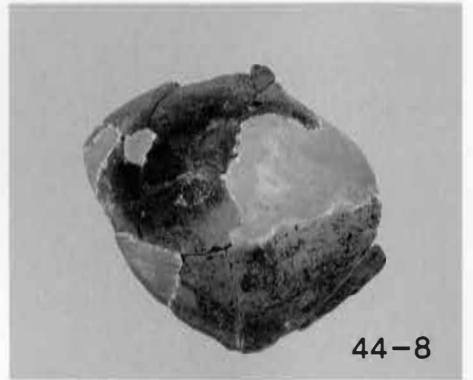
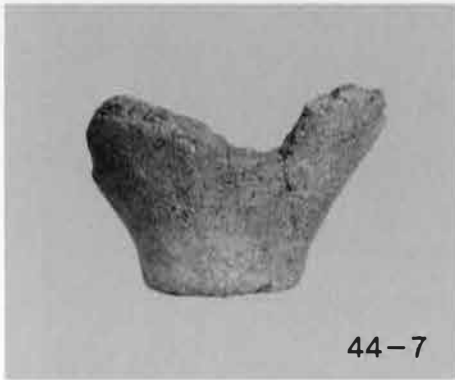
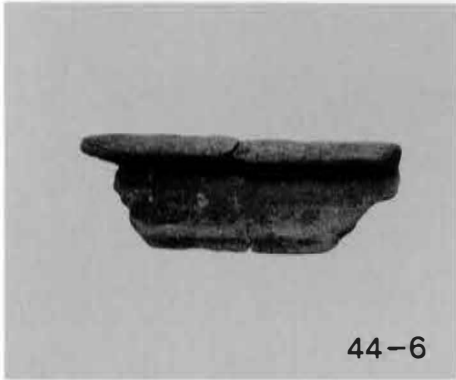
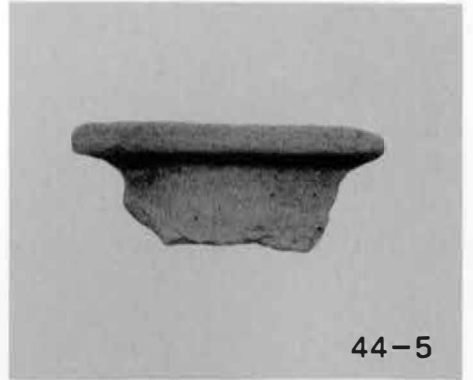
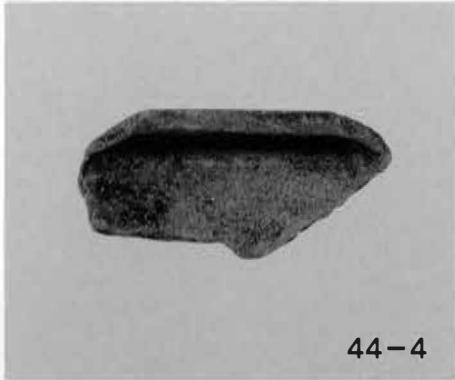
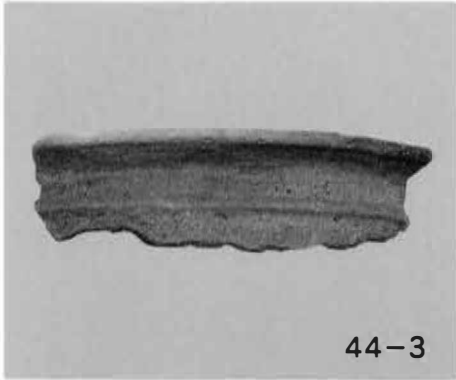
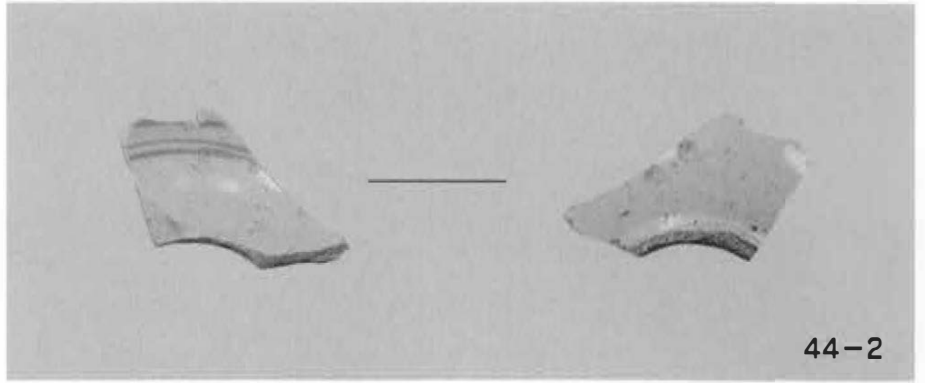
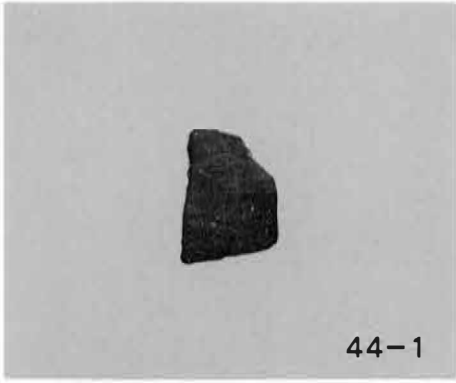
蔵数長畝町遺跡B区
2SD2完掘状況
(空中写真：真上から)

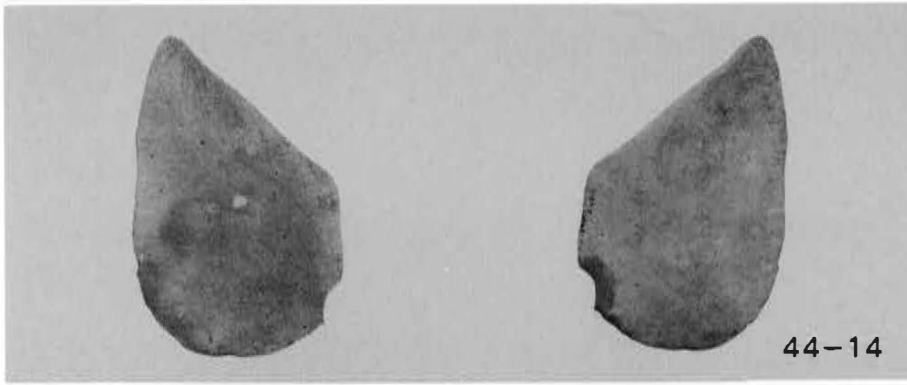


蔵数長畝町遺跡B区
2SD2完掘状況 (東から)

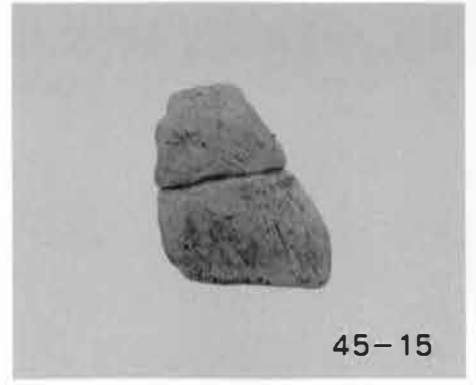


蔵数長畝町遺跡B区
2SD2東壁土層観察状況（西から）

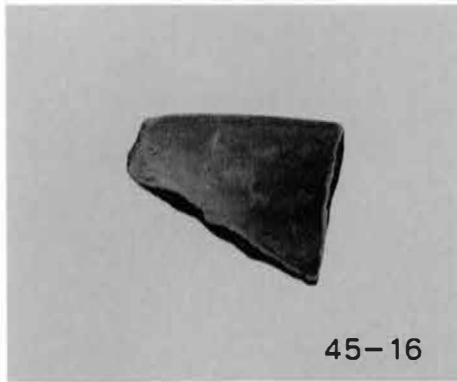




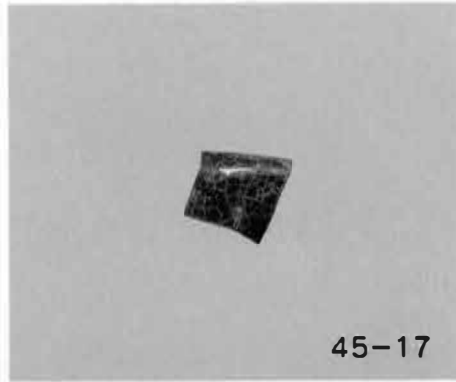
44-14



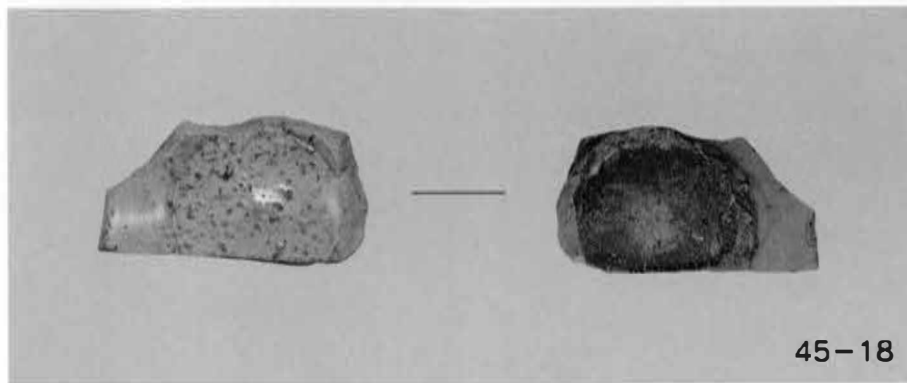
45-15



45-16



45-17



45-18

筑後市文化財調査報告書 第70集

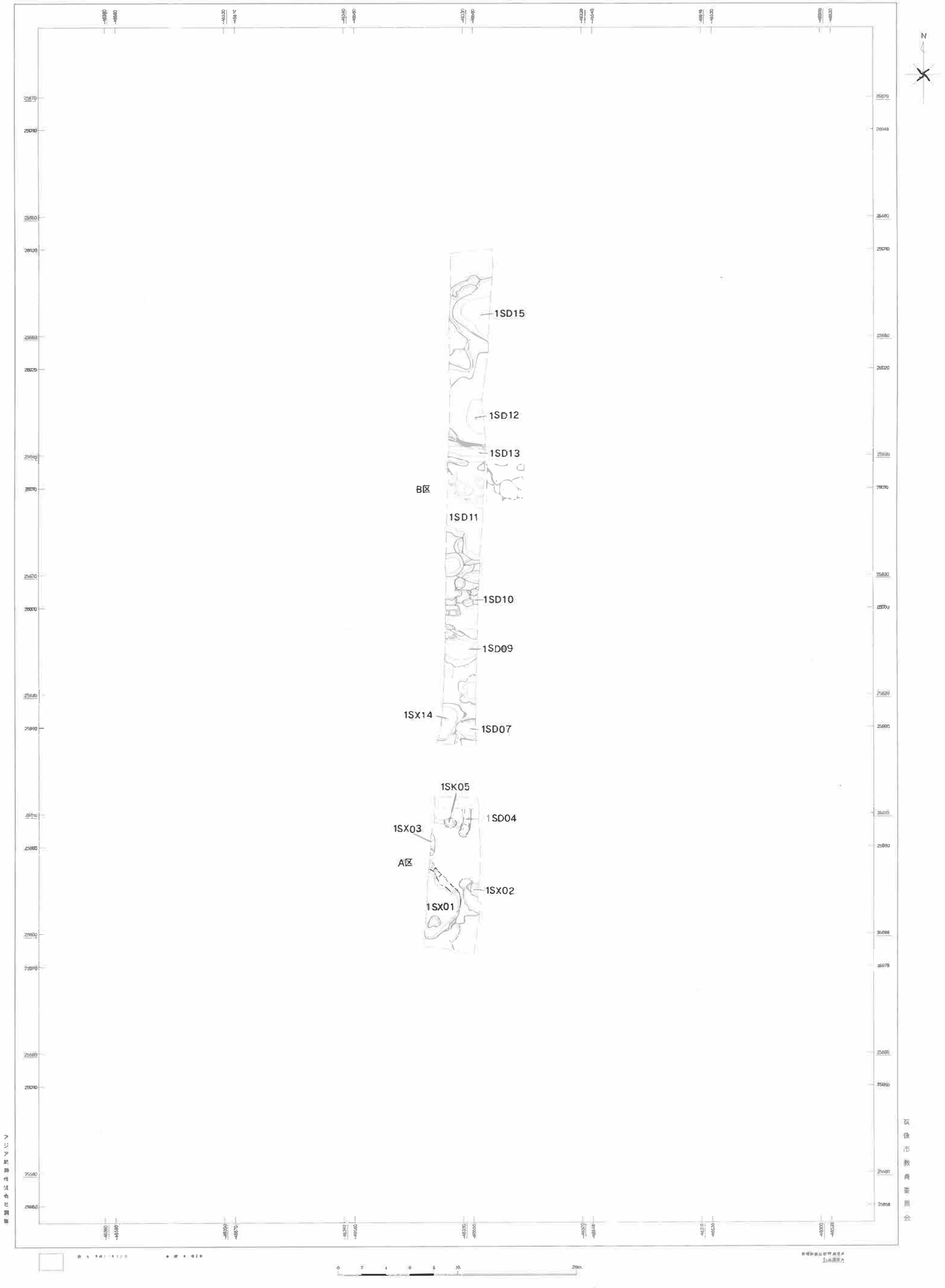
筑後北部地区遺跡群II

平成18年3月20日

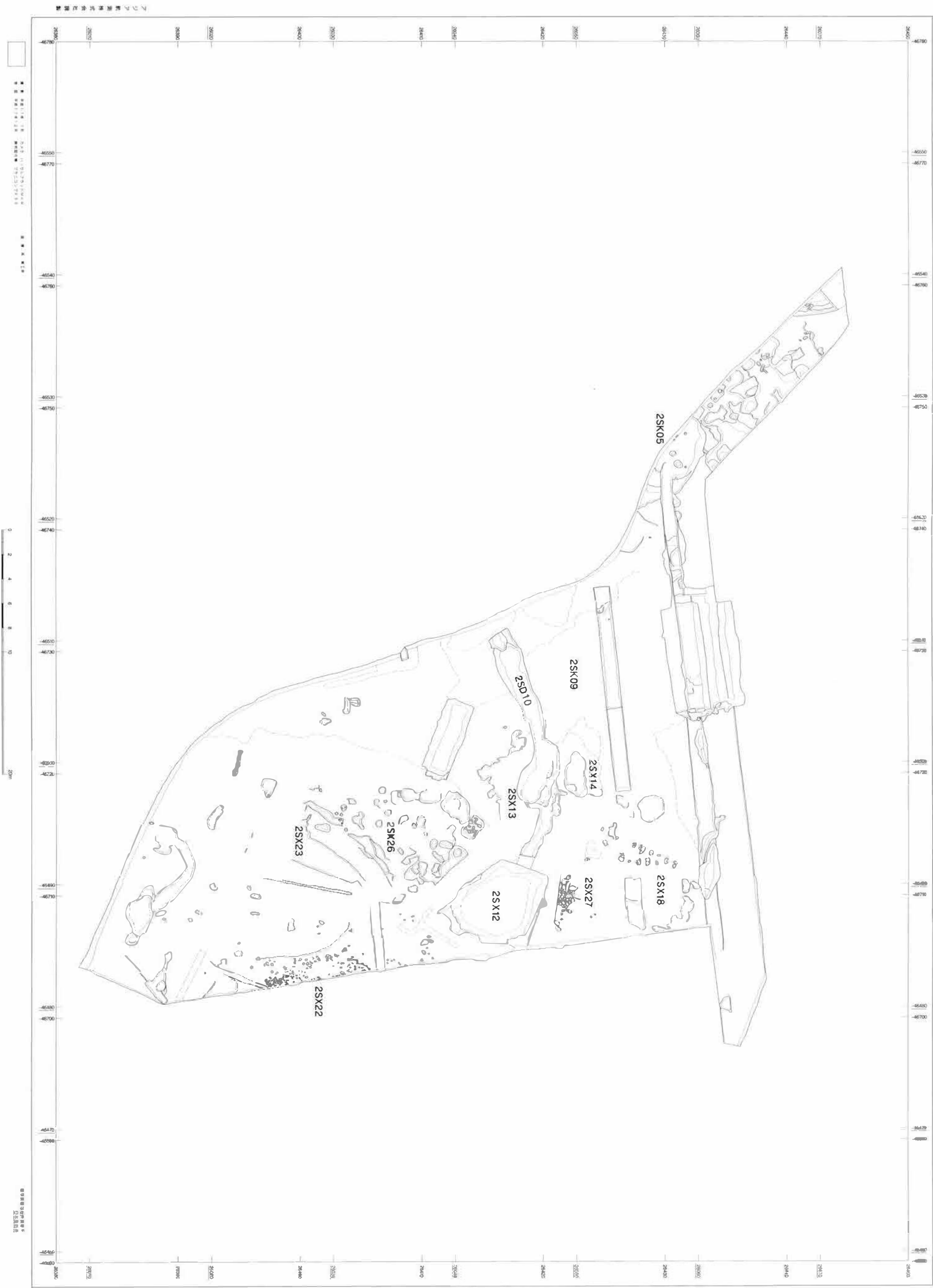
発行 筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
TEL 0942-53-4111

印刷 鶴四ヶ所印刷
福岡県朝倉市馬田336

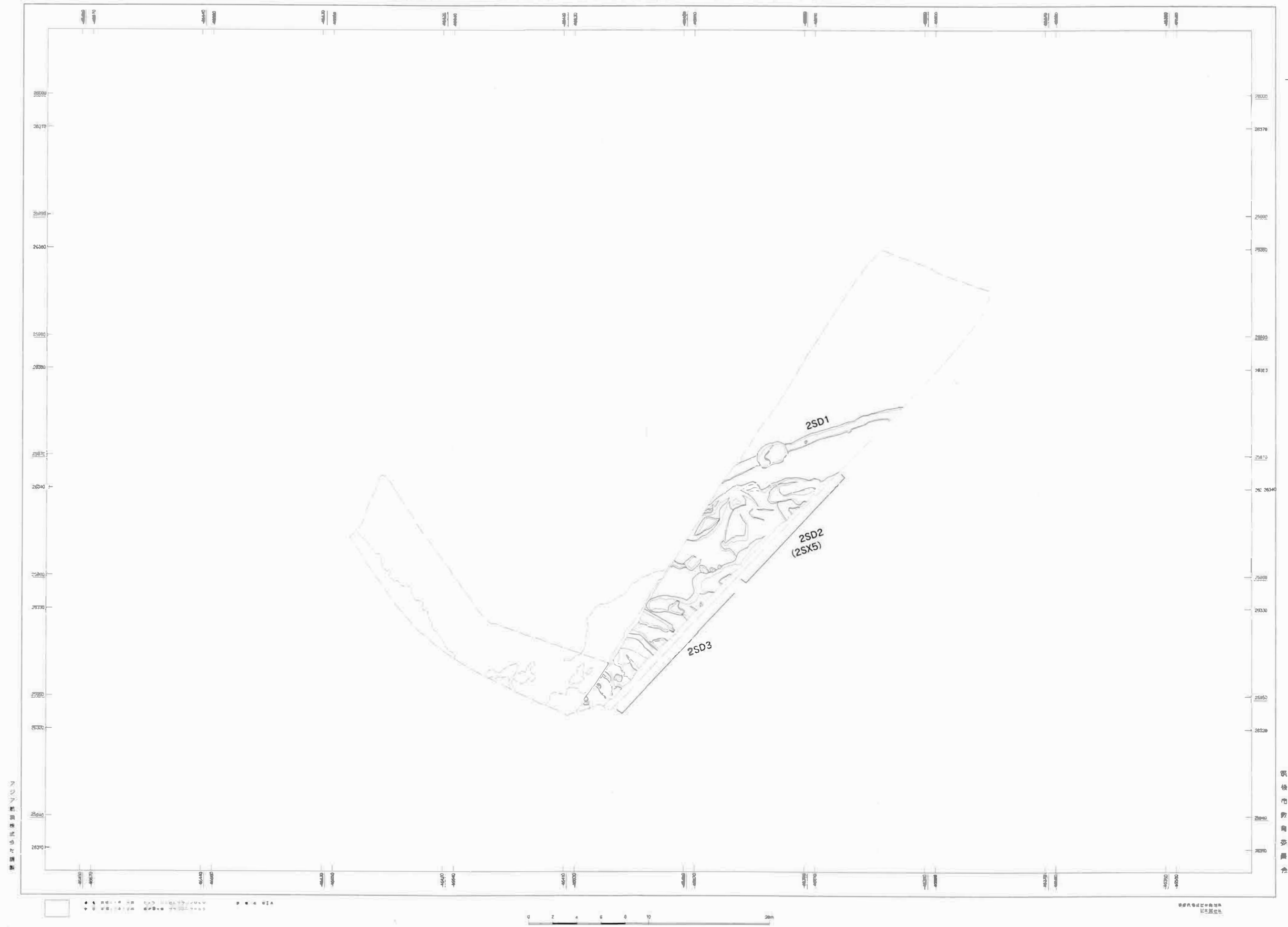
筑後北部地区遺跡群 平面図(熊野杵町遺跡) (1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数保古手第2次調査A区)(1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数保古手遺跡第2次調査B区) (1/300)

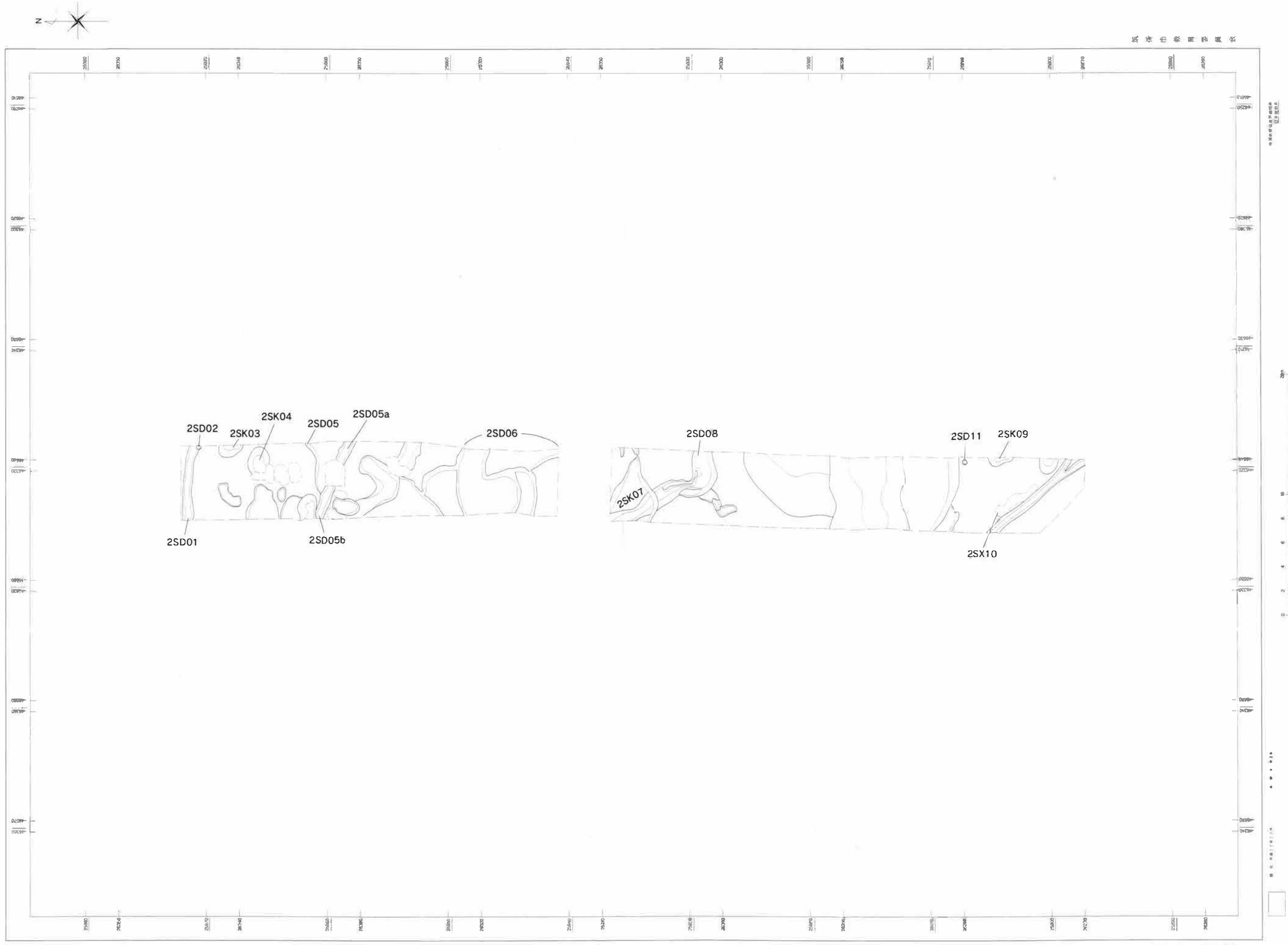


筑後北部地区遺跡群

蔵数保古手遺跡

0 2 4 6 8 10 20m

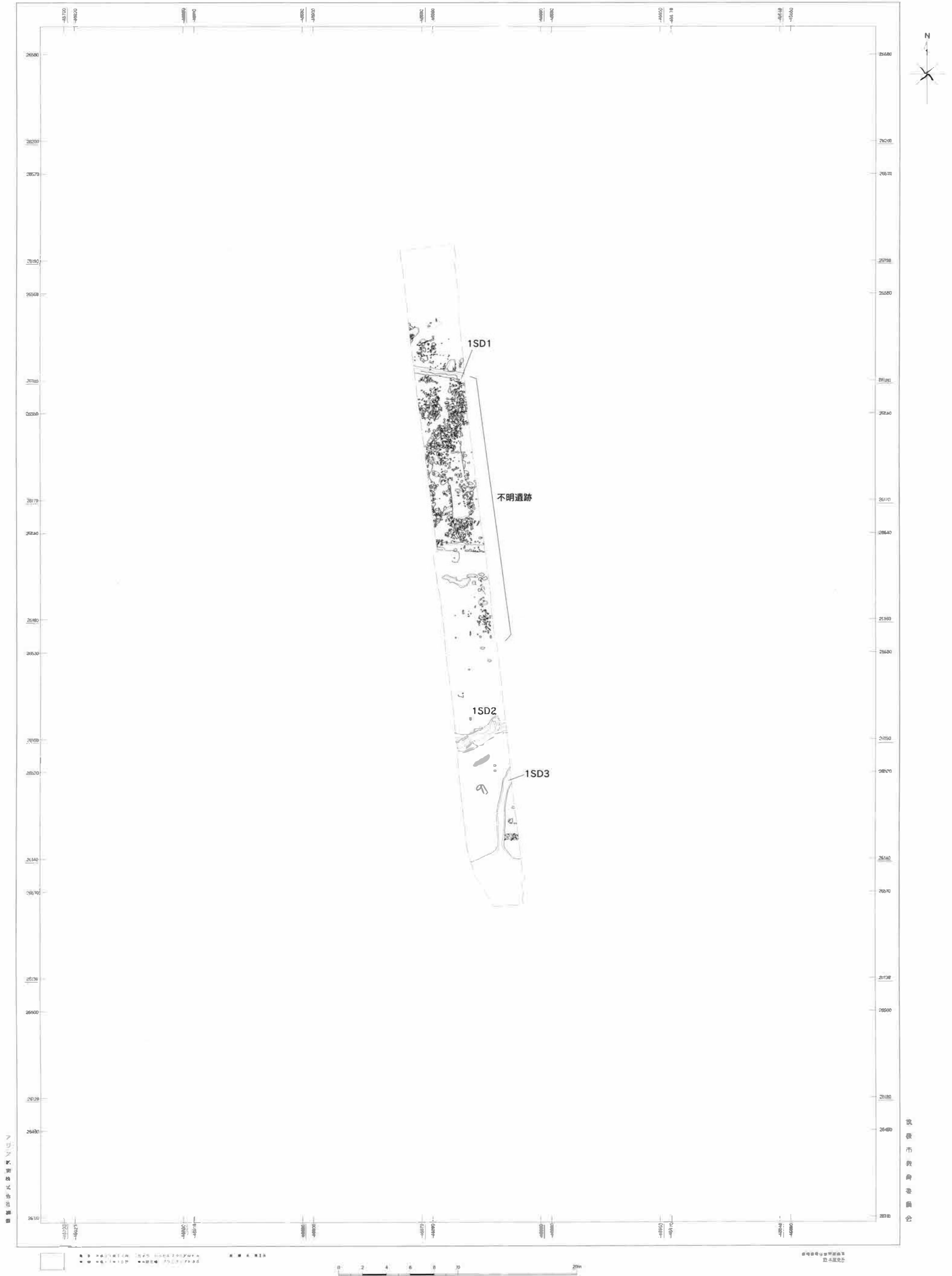
筑後北部地区遺跡群 平面図蔵数保古手第2次調査C区(1/300)



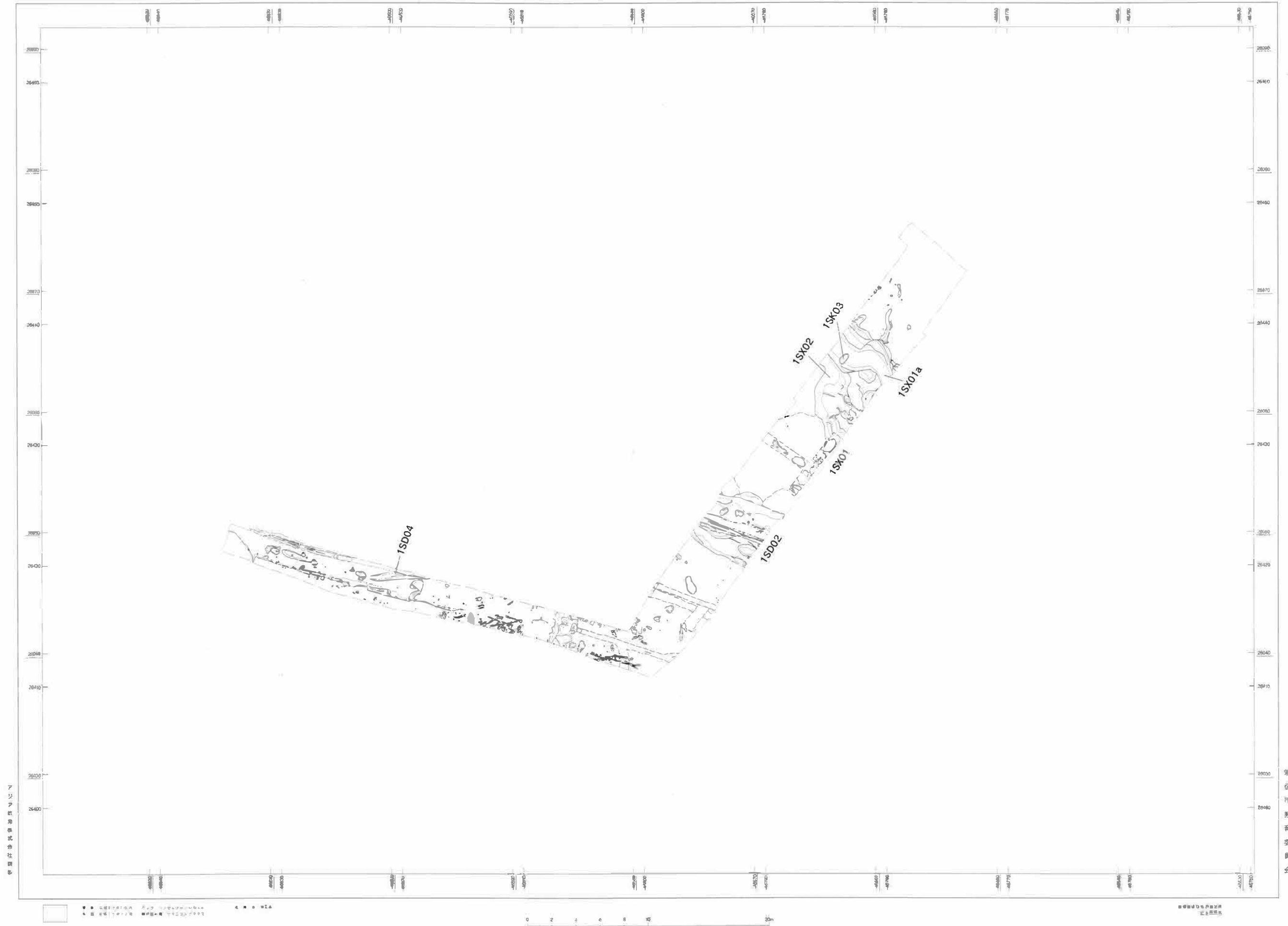
筑後北部地区遺跡群

平面図蔵数保古手第2次調査C区(1/300)

筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数三郎丸遺跡) (1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数長畝町遺跡調査A区)(1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数長畝町遺跡B区) (1/300)

